津城跡（第５次）発掘調査報告

～津市中央～

安東焼　ろくろ碗

２０２４（令和６）年３月

三重県埋蔵文化財センター

例　言

1　本書は、津地方・家庭・簡易裁判所庁舎新営工事に伴う津城跡（第５次）の発掘調査報告書である。
なお、本書では津地方・家庭・簡易裁判所を「津地家簡裁」と略記している。

2　調査地は、三重県津市中央３－１に位置する。

3　発掘調査は、三重県教育委員会が最高裁判所経理局から依頼を受け、受託契約を締結して実施した。
発掘調査及び整理作業の経費は、最高裁判所経理局が負担した。

4　発掘調査期間は令和４（2022）年５月 10 日～同８月 17 日である。この他、工事の進捗にあわせ工事立会を随時実施している。

5　発掘調査面積は、714 ㎡である。

6　調査および整理作業の体制は以下のとおりである。

調査主体　三重県教育委員会

［現地調査　令和４年度］

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター　調査研究１課

土橋明梨紗　長谷川市太郎

土工・補助委託　　橋本技術株式会社三重支店

［整理作業　令和５年度］

整理担当　三重県埋蔵文化財センター　調査研究１課

櫻井拓馬　長谷川市太郎　中野環

保存処理委託　　（株）吉田生物研究所

自然科学分析委託　　（株）パリノ・サーヴェイ

［工事立会　令和元～５年度］

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター　調査研究１課

原田恵理子　水谷侃司　土橋明梨紗　田中久生

7　本書の編集は櫻井があたり、文責は文末に記した。遺物の写真撮影は櫻井・田中・土橋が行った。

8　発掘調査および整理作業に際し、下記の機関に御指導・御協力を賜った。記して感謝したい。
津市教育委員会、三重県環境生活部文化振興課

9　調査図面・写真・出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　例

1　本書では、国土地理院発行の 1:25,000 数値地図（「津西部・津東部」相当（平成 20 年 10 月発行）、三重県共有デジタル地図の 1:2,500 地形図・空中写真（平成 29 年 060F712・714 番）を用いた。三重県共有デジタル地図は、三重県市町総合事務組合の使用承認を得た（令和５年４月６日付三総合地第１号）。

2　標高は東京湾平均海水面（T.P.）を基準とした。

3　本書で用いた座標は世界測地系に基づくものである。方位は第Ⅵ座標系の座標北で示した。

4　本書で用いる遺構略号は以下のとおりである。
ＳＫ：土坑　ＳＥ：井戸　ＳＤ：溝　ＳＺ：不定形遺構　Pit：柱穴・小穴

5　土色の標記は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』(日本色研事業株式会社、1967 年初版) に拠った。遺物観察表における土器の色調表記もこれに従う。

6　遺物実測図の縮尺は 1:4 を基本とし、その他の縮尺を適宜用いた。

7　註は各節の文末に付し、参考文献も註に記した。

8　遺構一覧表、遺物観察表は各章末に付した。

9　遺物観察表の凡例は以下のとおりである。

・実測番号は、当センター所蔵の遺物実測図番号である。

・色調は外面のみ、標準土色帖の色名（「黄橙色」など）を記す。マンセル記号の表記は省略した。

・土器の残存率は全周を 12 分割して示す（例：口縁部 3/12)。1/12 以下は「口縁部小片」など。

・胎土は、特徴的な事項（特定の鉱物など）のみ備考欄に記した。

・法量は完存ないし復元の値である。口径・底径は実測時の接地面ではなく、外周で計測した値とした。また、土師器皿の底径は記していない。

・出土砥石の粒度は、JIS 研磨剤の規格に準拠するサンドペーパーに対比して示す。粒度は # 40 以下、80（粗目)、120、180（中目)、320、600（細目)、1000、2000 以上（極細目）の 8 段階とした。

10　写真図版中の遺物に付した番号は、各遺物の報告番号と対応する。遺物写真は縮尺不同である。

11　中近世の土器・陶磁器の分類・編年と暦年代観は、註で特に断らない限り下記文献に従う。基本的に生産地の編年・分類により、補足的に消費地編年・分類を参照した。

・中北勢系土師器　伊藤裕偉「中北勢地域の中世土器」『三重県史』資料編考古２、三重県、2008 年

・南伊勢系土師器　伊藤裕偉「南伊勢・志摩地域の中世土器」『三重県史』資料編考古２、三重県、2008 年 / 伊藤裕偉「近世土師器の形態と編年」『高河原遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、2015 年。

・肥前系陶磁器　九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』2000 年 / 佐賀県教育委員会『内野山北窯』1996 年。

・京都・信楽系陶器　京焼：角谷江津子「同志社校地出土の京焼とその変遷」『同志社大学歴史資料館館報』第２号、同志社大学歴史資料館、1999 年 / 信楽焼：畑中英二『信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版、2003 年。なお、「京都・信楽系」の定義は東京大学埋蔵文化財調査室（1998）に従う。

・瀬戸・美濃系陶器　大窯期：藤澤良祐「瀬戸美濃大窯編年の再検討」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第 10 輯、2002 年 / 登窯以降：瀬戸市『瀬戸市史』陶磁史篇６、1998 年 / 美濃窯：櫛崎彰一「近世美濃窯の変遷」『尾呂』瀬戸市教育委員会、1990 年。

・常滑焼　愛知県『愛知県史』別編窯業３、2012 年 / 大甕：扇浦正義「常滑大甕の編年的考察」『自證院遺跡』新宿区教育委員会、1987 年 / 赤物：中野晴久「常滑窯の研究　近世赤物について」『知多古文化研究』10、1996 年。

・山茶碗　藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』３、三重県埋蔵文化財センター、1994 年。

・陶磁器全般　堀内秀樹「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』１、東京大学埋蔵文化財調査室、1997 年 / 東京大学埋蔵文化財調査室『東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（１)』1998 年。

12　図版に掲載した城絵図の出典は以下のとおりである。

・三重県特定歴史公文書等（絵図・地図等)：三重県環境生活部文化振興課の掲載許可を得た。

「陸軍省照会地実測図／伊勢国安濃郡津旧城郭」(M -189)

・津市所蔵絵図：津市教育委員会の掲載許可を得た。

「津城下図（寛永期写)」「津絵図（享保期津城下図)」「津城下図（嘉永期写)」

目　次

例言・凡例 …… i・ii
目　次 …… iii～vi

Ⅰ　前　言 …… 1
1．調査の経緯と経過 …… 1
2．調査の方法 …… 4

Ⅱ　位置と環境 …… 6
1．地形と地質 …… 6
2．津城築造まで …… 6
3．津城築城後 …… 8
4．近現代の津と津城 …… 10

Ⅲ　遺　構 …… 13
1．基本層序と埋没地形 …… 13
2．検出遺構の概要 …… 14
3．1区 …… 18
4．2区 …… 21
5．3区 …… 21
6．4区 …… 22
7．5区 …… 22
8．6・7区 …… 22
9．工事立会 …… 23
遺構一覧表 …… 34～36

Ⅳ　遺　物 …… 37
1．出土遺物の概要 …… 37
2．遺構出土遺物 …… 38
3．表土・包含層・その他出土遺物 …… 44
遺物観察表 …… 80～100

Ⅴ　自然科学分析 …… 101
1．分析の種類と対象 …… 101
2．分析結果報告 …… 101
3．貝同定結果（補遺） …… 128
4．木製品の樹種同定（補遺） …… 129

Ⅵ　総　括 …… 131
1．遺跡形成過程と古環境 …… 131
2．津城跡の遺構と変遷 …… 131
3．津城跡の遺物様相 …… 134
4．津城廃城後の土地利用 …… 136
5．調査のまとめと課題 …… 138

写真図版

挿図目次

第１図　遺跡位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
第２図　発掘調査位置図 ・・・・・・・・・・・・・・ 5
第３図　グリッド割付図 ・・・・・・・・・・・・・・ 5
第４図　遺跡分布図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
第５図　津城跡復元図・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
第６図　ボーリング位置図・層序 ・・・・・・・・ 15
第７図　ボーリング柱状図①・・・・・・・・・・・ 16
第８図　ボーリング柱状図②・・・・・・・・・・・ 17
第９図　ボーリング柱状図③・・・・・・・・・・・ 17
第 10 図　１区遺構全体図 ・・・・・・・・・・・・・・ 24
第 11 図　１区東壁・下層確認土層断面図 ・・・・ 25
第 12 図　２区遺構全体図、２区北壁土層断面図
　　３区遺構全体図、３区エレベーション図
　　３区北壁土層柱状図 ・・・・・・・・・・・ 26
第 13 図　４区遺構全体図、４区南壁土層断面図
　　５区遺構全体図、５区南壁土層断面図…27
第 14 図　６・７区遺構全体図、６区北・東・
　　西壁土層断面図、７区東壁土層断面図…28
第 15 図　ＳＤ 51004 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
第 16 図　ＳＫ 51001・51028・51029・51059・
　　51067、ＳＫ 51078、ＳＺ 51058 ・・・・ 30
第 17 図　ＳＫ 51002・51005・51006・51012・
　　51013・51015・51031・51032 ・・・・・ 31
第 18 図　ＳＫ 51040・51049・51050・51051・
　　51053・51071・51073・51074・53001… 32
第 19 図　工事立会①・⑥遺構略図
　　土層柱状図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33
第 20 図　軒桟瓦・軒平瓦分類図 ・・・・・・・・・ 37
第 21 図　出土遺物① ・・・・・・・・・・・・・・・・ 47
第 22 図　出土遺物② ・・・・・・・・・・・・・・・・ 48
第 23 図　出土遺物③ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 49
第 24 図　出土遺物④ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 50
第 25 図　出土遺物⑤ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 51
第 26 図　出土遺物⑥ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 52
第 27 図　出土遺物⑦ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 53
第 28 図　出土遺物⑧ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 54
第 29 図　出土遺物⑨ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 55
第 30 図　出土遺物⑩ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 56
第 31 図　出土遺物⑪ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 57
第 32 図　出土遺物⑫ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 58
第 33 図　出土遺物⑬ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 59
第 34 図　出土遺物⑭ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 60
第 35 図　出土遺物⑮ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 61
第 36 図　出土遺物⑯ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 62
第 37 図　出土遺物⑰ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 63
第 38 図　出土遺物⑱ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 64
第 39 図　出土遺物⑲ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 65
第 40 図　出土遺物⑳ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 66
第 41 図　出土遺物㉑ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 67
第 42 図　出土遺物㉒ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 68
第 43 図　出土遺物㉓ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 69
第 44 図　出土遺物㉔ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 70
第 45 図　出土遺物㉕ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 71
第 46 図　出土遺物㉖ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 72
第 47 図　出土遺物㉗ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 73
第 48 図　出土遺物㉘ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 74
第 49 図　出土遺物㉙ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 75
第 50 図　出土遺物㉚ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 76
第 51 図　出土遺物㉛ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 77
第 52 図　出土遺物㉜ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 78
第 53 図　出土遺物㉝ ・・・・・・・・・・・・・・・・ 79
第 54 図　二枚貝殻長分布 ・・・・・・・・・113 ～ 116
第 55 図　植物珪酸体含量 ・・・・・・・・・・・・・124
第 56 図　現存する土蔵との比較 ・・・・・・・・・132
第 57 図　遺構の変遷 ・・・・・・・・・・・・・・・・133
第 58 図　出土した安東焼と関連資料 ・・・・・・・135
第 59 図　土地利用の変遷 ・・・・・・・・・・・・・137

表目次

第１表　津城跡発掘調査一覧表 ・・・・・・・・・ 3
第２表　津城跡関連年表 ・・・・・・・・・・・・・ 11
第３表　基本層序対照表 ・・・・・・・・・・・・・ 13
第４表　遺構一覧表 ・・・・・・・・・・・・・・・34 ～ 36

第５表　ＳＤ 51004 捨杭計測表 ・・・・・・・・・ 39
第６表　近代の主要な遺物 ・・・・・・・・・・・・ 79
第７表　遺物観察表 ・・・・・・・・・・・・ 80 ～ 100
第８表　骨・貝同定対象試料一覧 ・・・・・・・・102
第９表　樹種同定対象試料一覧 ・・・・・・・・・102
第 10 表　微化石分析対象試料一覧 ・・・・・・・・102
第 11 表　検出動物分類群一覧 ・・・・・・・・・・・104
第 12 表　貝類同定結果 ・・・・・・・・・・・105 ～ 108
第 13 表　骨同定結果 ・・・・・・・・・・・・108 ～ 112
第 14 表　骨・貝同定結果（その他混入遺物）・・112
第 15 表　遺構・層位別貝類最小個体数 ・・・・・117
第 16 表　遺構・層位別貝類総重量 ・・・・・・・・117
第 17 表　二枚貝計測結果一覧 ・・・・・・・118 ～ 121
第 18 表　樹種同定結果 ・・・・・・・・・・・・・・122
第 19 表　花粉分析結果 ・・・・・・・・・・・・・・122
第 20 表　珪藻分析結果 ・・・・・・・・・・・・・・123
第 21 表　植物珪酸体含量 ・・・・・・・・・・・・・124
第 22 表　貝類同定結果（補遺）・・・・・・・・・・129
第 23 表　樹種同定結果（補遺）・・・・・・・・・・130

写真図版一覧

・写真図版１（絵図）
津絵図（享保期津城下図）
・写真図版２（絵図）
津城下図（寛永期写）、津城下図（嘉永期写）
伊勢国安濃郡津旧城郭
・写真図版３（空中写真）
空中写真
・写真図版４（調査前風景・作業風景）
調査前風景、１区　表土掘削状況
・写真図版５（１区）
１区全景
・写真図版６（１区）
１区東壁土層、ＳＫ 51003・51006・51083 付近
・写真図版７（１区）
ＳＤ 51004 検出状況、ＳＤ 51004 北辺土層断面
ＳＤ 51004 南辺土層断面
・写真図版８（１区）
ＳＤ 51004 完掘状況
・写真図版９（１区）
ＳＤ 51004 北辺完掘状況、ＳＤ 51004 南辺完掘状況
ＳＤ 51004 西辺完掘状況、ＳＤ 51004 北西隅土層断面
ＳＤ 51004 底面捨杭検出状況
・写真図版 10（１区）
ＳＤ 51004 北 P3 捨杭検出状況、同北 P4 捨杭検出状況
同南 P3 捨杭検出状況、同南 P4 捨杭検出状況
同西 P5 捨杭検出状況、同西 P7 捨杭検出状況
同西 P8 捨杭検出状況、同捨杭検出状況
・写真図版 11（１区）
ＳＫ 51029 土層断面、ＳＫ 51001、ＳＫ 51028 土層断面
ＳＫ 51067、ＳＫ 51059 土層断面
・写真図版 12（１区・下層確認）
ＳＺ 51058 土器出土状況、ＳＫ 51065 土層断面
ＳＫ 51006 遺物出土状況、下層確認１全景
ＳＥ 51070 井戸枠検出状況
下層確認２土壌サンプル採取位置
・写真図版 13（１区・下層確認）
下層確認３全景、下層確認３西壁土層
・写真図版 14（２区・３区）
２区全景、３区全景、ＳＫ 53001、ＳＤ 53002
・写真図版 15（４区）
４区全景、ＳＥ 54002 井戸枠検出状況
・写真図版 16（５区・６区）
５区全景、６区全景
・写真図版 17（４～７区）
ＳＤ 54003 土層断面、５区ピット根石検出状況
６区遺構検出状況、ＳＥ 56001 土層断面、７区全景
・写真図版 18（工事立会）
工事立会①２区遺構検出状況
同　１区南側遺構検出状況
同　３区東壁　落ち込み付近土層
同　３区遺構検出状況、同　４区遺構検出状況
・写真図版 19（工事立会）
工事立会⑥　No1 土層、同　No1 土層
同　No1 作業風景、同　No2 作業風景
・写真図版 20（出土遺物①）

・写真図版 21（出土遺物②）
・写真図版 22（出土遺物③）
・写真図版 23（出土遺物④）
・写真図版 24（出土遺物⑤）
・写真図版 25（出土遺物⑥）
・写真図版 26（出土遺物⑦）
・写真図版 27（出土遺物⑧）
・写真図版 28（出土遺物⑨）
・写真図版 29（出土遺物⑩）
・写真図版 30（出土遺物⑪）
・写真図版 31（出土遺物⑫）
・写真図版 32（出土遺物⑬）
・写真図版 33（出土遺物⑭）
・写真図版 34（出土遺物⑮）
・写真図版 35（出土遺物⑯）
・写真図版 36（出土遺物⑰）
・写真図版 37（出土貝・骨①）
・写真図版 38（出土貝・骨②）
・写真図版 39（出土貝・骨③）
・写真図版 40（出土貝・骨④）
・写真図版 41（花粉・植物珪酸体）
・写真図版 42（珪藻化石）
・写真図版 43（樹種同定①）
・写真図版 44（樹種同定②）
・写真図版 45（樹種同定③）
・写真図版 46（樹種同定④）

Ⅰ 前 言

1．調査の経緯と経過

（1）津城跡の文化財保護

津城は、藤堂藩（津藩）32 万石の藤堂氏の居城として築かれた、三重県を代表する近世の平城である。

明治から昭和 33 年にかけて堀は徐々に埋められ、城地は次第に狭まったため、現在は本丸、西之丸と内堀の一部が地上に残るのみとなっている。昭和 33 年には市民有志により本来存在しない三層模擬櫓が建設され、公園としての整備が進められるとともに、本丸・西之丸を中心とした区域が昭和 33 年に津市指定史跡に指定された。津城跡のうち、本丸・西之丸を中心とした区域は、石垣などに藤堂氏の津城修築の過程をよく留めることから、平成 17 年に三重県指定史跡に指定され、今日に至っている。

一方、津城跡は津市の中心部に位置し、城域は多くの官公庁や民間企業が集中する市街化エリアであったため、地下遺構の保護はやや遅れ、埋蔵文化財包蔵地として本格的に保護が図られるようになったのはごく最近のことである。

平成 8 年度以降、津城跡を対象とした試掘・範囲確認調査や工事立会が実施されていたが、平成 20 年度の調査で津城跡の内堀石垣が発見され、市街地にも津城の遺構が良好に残存していることが明らかになった。この成果を踏まえ、津市は平成 20 年度に県史跡津城跡の保存管理計画を策定し、旧城域を埋蔵文化財包蔵地、城下町を埋蔵文化財包蔵地の周辺地域として取り扱うこととしたのである[1]。

その後、津城跡では、4 次の本発掘調査が実施され、堀・石垣や堤の下部構造などが確認された。この他、津城下では、平成 24 年度の調査で、武家屋敷の礎石建物が検出されている（第 1 表、第 1 図）。

（2）調査に至る経緯

今回の発掘調査の原因となった津地家簡裁庁舎新営工事は、津城跡の北辺にある津地家簡裁庁舎の建替えに伴う仮庁舎建設、既存庁舎解体撤去、新庁舎建設からなる事業である。平成 30 年 2 月、津地方裁判所事務局、三重県教育委員会事務局社会教育・文化財保護課、埋蔵文化財センターの三者で保護協議がなされ、既存調査解体と並行して仮庁舎を建設し、その間に発掘調査を実施することとした。

当初、仮庁舎は掘削なしとしていたが、基礎部分の掘削が生じることとなったため、既存庁舎撤去時に工事立会を実施し、仮庁舎・新庁舎建設予定地の遺構の遺存状況を把握することとした（第 1 表）。

仮庁舎予定地の工事立会は令和元年 7 月 22 日に実施し、現地表下 90 ～ 120 ㎝で近世の遺構・遺物を確認した。その結果、仮庁舎は慎重工事対応、新庁舎は本発掘調査が必要と判断された。なお、新庁舎予定地のうち、既存庁舎部分は遺構が遺存していないと判断されたため、調査対象から除外している。令和 2 年度に仮庁舎工事が開始され、仮庁舎完成後、既存庁舎解体が令和 3 年度まで続いた。この間、既存庁舎解体や配管工事に伴い、必要に応じて工事立会を実施している（第 1 表）。

新庁舎建設に伴う本発掘調査は令和 4 年度上半期に実施し、同下半期に新庁舎建設を開始することとなった。なお、新庁舎建設時にも工事立会を実施しており、継続中である。

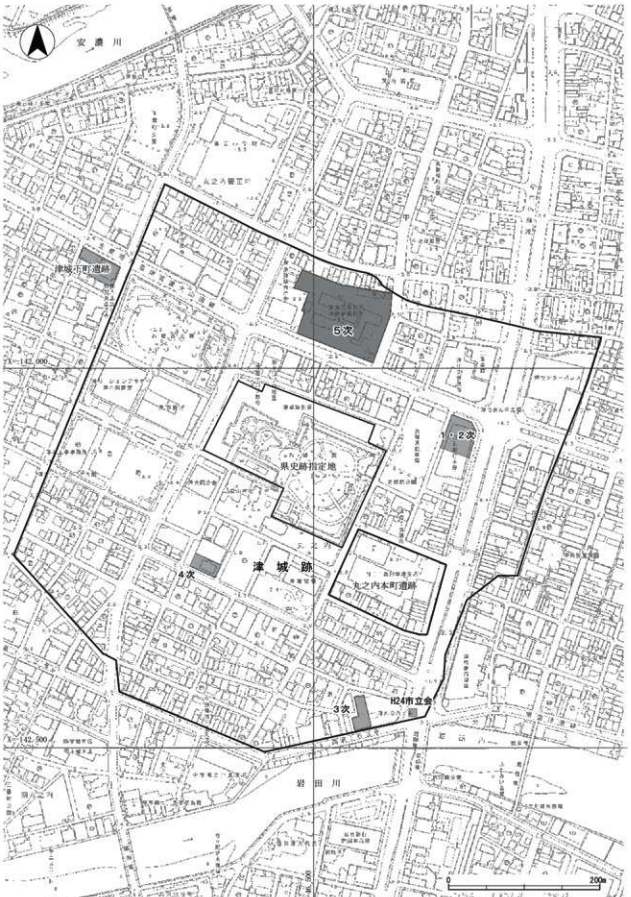
（3）調査の経過

発掘調査は新庁舎の基礎掘削箇所の他、自転車置場や車寄せ、渡り廊下等、掘削が深部に及ぶ地点で実施した。調査は令和 4（2022）年 5 月 10 日に開始し、同 8 月 17 日に終了した。

【調査日誌（抄）】

令和 4 年

5 月 25 日　2 区調査開始
5 月 26 日　3 区調査開始
5 月 31 日　7 区調査開始
6 月　2 日　1 区調査開始、2・3 区全景写真撮影、図化作業
6 月　3 日　7 区全景写真撮影、図化作業
　　2・3 区調査完了、埋め戻し作業
6 月　7 日　7 区調査完了、埋め戻し作業
　　6 区調査開始
6 月　8 日　6 区全景写真撮影、図化作業



第１図　遺跡位置図（1:5,000、三重県共有デジタル地図1:2,500に加筆）

第１表　津城跡発掘調査一覧表

本発掘調査一覧

調査次数	調査年度	調査地	調査原因	調査期間	調査面積(㎡)	主な成果	担当	報告書
1次	H20	津市丸之内	社屋建設	20080905～20090222	237	津城跡内堀石垣を検出。二之丸では内堀に繋がる暗渠を確認。土師器、山茶碗、陶磁器、瓦、土製品、木製品、鉄製品、石製品が出土。	市	1
2次	H25	津市丸之内	社屋建設	20130227～20130426	200	第１次調査で検出した石垣の解体調査により、天平は後世の改修を行けていることが判明。このほか、二之丸の暗渠の東端を確認。土師器、山茶碗、瓦、土管、木製品が出土。	市	2
3次	H26	津市丸之内	社屋建設	20140127～20140217	150	外堀の南東部、通称「鰹堀」と呼ばれる地点の調査。調査区の南に沿って、堀の下部構造が存在することが判明した。土師器・山茶碗、陶磁器、瓦が出土。	市	3
4次	H26	津市西丸之内	共同住宅建設	20140818～20140903	136	津城跡内堀の西西部にあたる場所で、内堀及び内堀の南辺の石垣を検出。土師器・陶器・磁器・瓦が出土。	市	4
5次	R4	津市中央	津地家簡裁庁舎新営	20221010～20221017	714	藤堂家上級家臣の屋敷地にあたる。建物の基礎地業や土坑など、17～19世紀の遺構を検出。土師器、陶器、瓦、木製品等が出土。	県	本書

その他津城跡関連調査

調査次数	調査年度	調査地	調査原因	調査期間	調査面積(㎡)	主な成果	担当	報告書
工事立会	H20	津市東丸之内	下水道工事	20080705～20080708	24	外堀南東隅の調査。地表下3.5mで堀底面に達した。	市	5
津城下町遺跡	H24	津市西丸之内	公共施設整備	20130207～20130313	272	外堀に面した武家屋敷地で礎石建物を検出。	市	6

津地家簡裁庁舎新営に伴う工事立会一覧

調査番号	調査年度	調査地	調査原因	調査期間	調査面積(㎡)	主な成果	担当	報告書
工事立会①	R1	津市中央	津地家簡裁(仮庁舎建設)	20190722	32	地表下90～120cmで近世の土坑・溝や溝の石組を確認。掘削深度内では近外堀と確定できない。近世の陶磁器、瓦、中世以前の銭貨などが出土。	県	本書
②	R2	津市中央	津地家簡裁(仮庁舎配管)	20200901	16	地表下25～85cmまで掘削。近代以降の攪乱を確認したが、近世の遺構面まで到達しなかった。	県	本書
③	R3	津市中央	津地家簡裁(配管・樹木伐根)	20210901～20211013	95	地表下100～115cmの暗褐色シルト～褐色粘質土上が近世の遺構面とみられる。外堀の埋土は確認できなかった。近代の阿漕焼などが出土。	県	本書
④	R3	津市中央	津地家簡裁(旧庁舎撤去)	20211203～20220112	95	旧庁舎の基礎等で攪乱を受けており、遺構は確認できず。土師器・陶器・磁器・瓦等が出土。	県	本書
⑤	R4	津市中央	津地家簡裁(新庁舎建設)	20221102	17	地表下100cmまで掘削したが、遺構面に達しなかった。	県	本書
⑥	R5	津市中央	津地家簡裁(新庁舎建設)	20231010～20231102	128	地表下70～80cmで近世の整地層に達し、ピット、木杭等を確認。地表下150cmで中近世の瓦、地表下170cmで摩滅した土師器片を含む自然堆積層となった。	県	本書

報告書

1　津市教育委員会『津城跡（第１次）発掘調査報告』2010年
2　津市教育委員会『津城跡（第２次）発掘調査報告』2015年
3　津市教育委員会『津城跡（第３次）発掘調査報告』2016年
4　津市教育委員会『津城跡（第４次）発掘調査報告』2017年
5　津市教育委員会『三重県指定史跡津城跡保存管理計画』2009年
6　津市教育委員会『津城下町遺跡調査報告』2015年

6月 9日　6区調査完了、埋め戻し作業
6月 3日　2区調査完了
6月17日　4・5区全景写真撮影、図化作業
6月21日　5区調査完了、埋め戻し作業
6月22日　SE 54002 井戸枠取り上げ
7月13日　1区全景写真撮影後、遺構掘削
7月25日　1区下層確認実施
7月28日　SD 51004 全景撮影
8月 1日　SD 51004 捨杭取り上げ
8月 2日　新たに井戸2基検出
8月 5日　1区調査完了、埋め戻し完了
8月12日　現地引き渡し

（4）文化財保護法にかかる諸手続

発掘調査に伴う法規上の手続きは以下のとおり。

①文化財保護法第94条に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項
（土木工事等のための発掘に関する通知）
・令和元年6月28日付、最高裁経営第1127号
（県教育長あて最高裁判所事務総局経理局長通知）
「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等発掘通知書」

②文化財保護法第99条第1項
（発掘調査の着手報告）
・令和4年5月10日付、教埋第25号
（県教育長あて県埋蔵文化財センター所長報告）
「埋蔵文化財発掘調査の報告について」

③文化財保護法第100条第2項
（文化財の発見・認定通知）
・令和4年11月25日付、教委第12－4409号
（津警察署長あて県教育長通知）
「埋蔵文化財の発見について（通知）」

2．調査の方法

（1）調査区の設定

調査区は便宜的に1～7区と名付けて管理した（第2図）。平面直角座標系は世界測地系を採用した。地区割は座標北に即し、X=-141,916、Y=46,536を原点とした100m四方の大地区を設定した。今回の調査区はすべて単一の大地区内に収まっていることから、大地区名は付与していない。

大地区内は南北をA～Y、東西を1～25に25分割した4m四方の小地区を設け、大・小地区とも、北西隅を基点とした地区名（例：A10）を付与した。遺物取り上げはこのグリッドを用いている（第3図）。

（2）遺構検出・掘削

表土から遺構面までの堆積土を重機（バックホー）で除去し、遺構検出・掘削は人力で行った。下層確認や一部の遺構掘削においては、重機を補助的に用いている。運土の都合上、2～7区の調査を先行し、最後に1区の調査にあたった。

（3）記録・図化

遺構実測は調査員による手測りである。遺構検出段階は小地区単位の1/40略測図（遺構カード）を作成し、これをもとに1/100の遺構配置図を作成した。遺構平面図・土層断面図については原則1/20で作成し、適宜その他の縮尺を適用した。これらの図面や現場の作業日誌は当センターで保管している。

遺構番号は調査区ごとの通し番号とし、次数（5）＋調査区（1～7）＋遺構番号（001～）を組み合わせた（例：SK 51001）。報告書作成にあたり、遺構番号の加除訂正を行ったが、原則として調査時の番号をそのまま用いている。ピットの遺構番号は、当センターの調査標準に従い、小地区ごとの通し番号としているが、建物の杭痕跡は、別に番号を付した（例：SD 51004-西P1）。

遺構・遺物写真は、デジタル1眼レフ（ニコンD 3300・D 800 E）で撮影した。

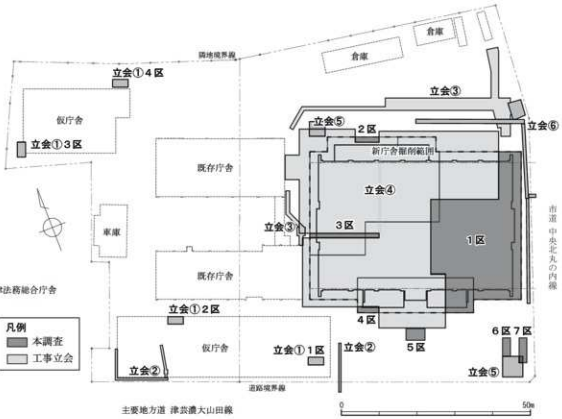
（4）出土遺物の整理

出土遺物は出土年月日と遺構・層位の区別を行い、小地区単位で取りあげている。整理作業終了後は報告書掲載遺物およびその参考資料（A遺物）と未掲載遺物（B遺物）に区分して保存した。

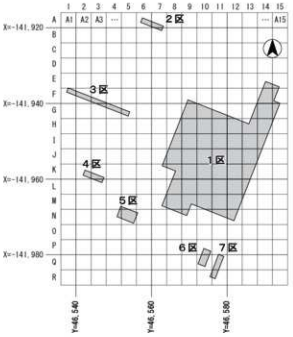
保存処理はA遺物の一部に限定した。金属製品はA遺物のすべて、木製品は機能が明確な一部の資料に限定し、井戸枠や杭は樹種同定や年輪数計測などの破壊分析に供した。（櫻井）

註

（1）津市教育委員会『三重県指定史跡津城跡保存管理計画』2009年。



第２図　発掘調査位置図（1:1,000）



第３図　グリッド割付図（1:1,000）

Ⅱ　位置と環境

1．地形と地質

（1）遺跡の位置

津市は南北に細長く伸びた三重県のほぼ中央に位置する。市町村合併前の津市は、東は伊勢湾に臨み、西は旧安芸郡安濃町・芸濃町・美里村、南は旧一志郡香良洲町・三雲町、旧久居市に接する。

津市の中心市街地は、現在の伊勢湾海岸線から約1㎞、標高約3ｍの低地部にあり、天正8年（1580）に築城された津城（1）とその城下町（2）を母体として発展してきた。

県庁所在地である津市の総人口は約27万人で三重県全体の15%を占め（令和2年国勢調査）、うち、市町村合併前の津市が人口約15万人である[1]。

（2）津城跡付近の地形（第4図）

津城跡付近の地形は、北の見当山丘陵、南の高塚丘陵、安濃川の氾濫原である安濃川低地、中勢海岸低地に大きく区分され[2]、津城跡は安濃川低地、と中勢海岸低地の境界に、津城下町は中勢海岸低地に立地する。津城跡西側の安濃川低地には自然堤防と後背湿地、東側の中勢海岸低地には4～5列の浜堤と堤間低地が並び、津城築城期には現在と概ね同じ地形であったとみられる。

なお、津城および城下町の西側における地形環境は、①縄文海進期に内湾化、②浜堤の形成（完成）に伴うラグーン（潟湖）化、③河川堆積物によるラグーンの埋積、④河川氾濫による自然堤防と後背湿地形成、⑤三角州の段丘化の順に変遷したと考えられている[3]。

安濃川・岩田川　安濃川は、中世には現岩田川河口近くへ流れており、津市乙部には、浜堤に斜行する自然堤防が旧河道の痕を留めている。

岩田川は、安濃川と異なり川幅が狭いため、川沿いに自然堤防を発達させていない。下流で浜堤を分断するほどの規模や流量がないことから、中世には津城跡西側の後背湿地付近を北流し、安濃川本流に合流していたとする河道復元案が提示されている[4]。浜堤を分断する現在の姿は戦国末期以降、人工的に開削したものであろう。

浜堤（砂堆・砂州）浜堤は、一般的に海汰の良い海成砂からなり、最も内陸側の浜堤は、縄文海進頂期に形成されたと推測されている[5]。海岸は、安濃の松原とよばれ、マツが並ぶ砂浜景観がみられた。

国土地理院の土地条件図では、津城跡および津城下町は浜堤上に立地するとしているが、浜堤と安濃川の自然堤防が複合して地形区分が不明瞭となっており、発掘調査で微地形を検証する必要がある。

2．津城築造まで

（1）弥生時代から古代まで

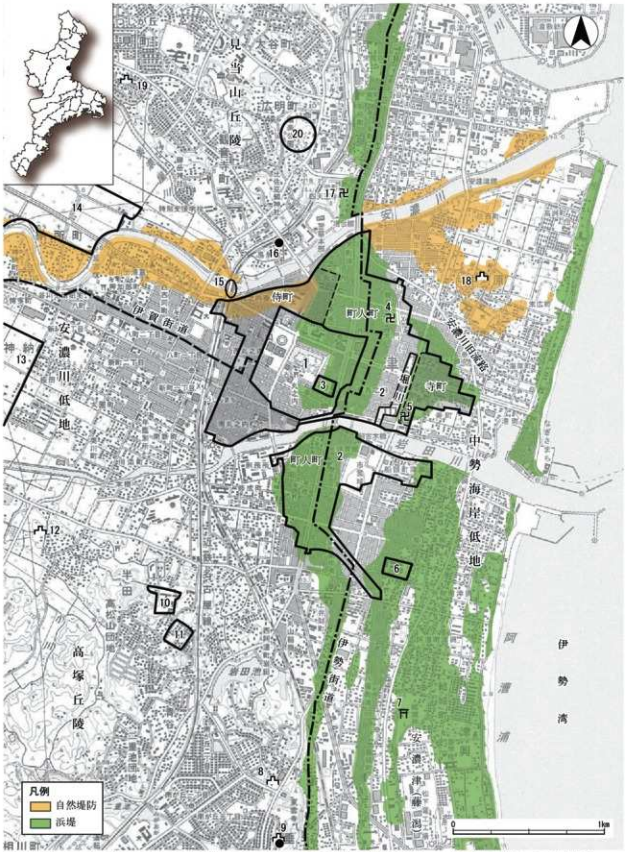
水稲耕作に適した安濃川低地には、納所遺跡（14）など弥生時代の集落が展開した。津城跡内にある丸之内本町遺跡（3）は弥生時代の遺物散布地で、浜堤上が弥生時代以降利用されてきたことを示す。

見当山丘陵、高塚丘陵上は多数の古墳が展開し、池ノ谷古墳（9）は潟湖（藤潟）を見下ろす位置にあり、海上交通を統括した首長の存在を想起させる。古墳時代の拠点的集落は、雲出川水系の雲出島貫遺跡や高茶屋大垣内遺跡であるが、津城跡で弥生時代終末期から古墳時代の土器がみられるほか、津八幡宮（7）では、明治時代に古墳時代の須恵器が出土し[6]、安濃津柳山遺跡（6）で古墳時代から飛鳥時代の遺物がみられるなど、藤潟の北側にも遺物散布地が確認でき、安濃川水系の玄関口として機能した海付きの古墳時代集落が、津城跡近辺に存在したことを示す。

古代には安濃郡に属し、和名抄には石田（岩田）郷、跡部郷の名が残る。安濃川低地には条里が施工され、四天王寺（17）の寺領が広く存在した[7]。

（2）中世伊勢街道とその周辺

伊勢平野の内陸側、主に段丘上を通過した規格直線道である古代伊勢道に対して、11世紀頃には「浜路」と呼ばれる、伊勢湾岸の浜堤帯や湊津を結ぶルート（中世伊勢街道）が史料上に現れる[8]。当地付近では、部田、乙部、藤方（安濃津）、垂水、雲出を



1．**津城跡**　2．津城下町　3．丸之内本町遺跡　4．観音寺　5．寒松院（藤堂家墓所）6．安濃津柳山遺跡　7．津八幡宮
8．垂水城跡　9．池ノ谷城跡・池ノ谷古墳　10．高松A遺跡　11．高松C遺跡　12．半田城跡　13．神戸遺跡　14．納所遺跡
15．安濃川鉄橋下遺跡　16．鳥居古墳　17．四天王寺（四天王寺廃寺・瓦窯）　18．乙部城跡　19．渋見城跡　20．偕楽園（御山荘）

第４図　遺跡分布図（1:25,000、国土地理院地図に土地条件図をトレースし合成）

経て、多気郡明和町（斎宮）、伊勢市山田（外宮）、宇治（内宮）へ至る。応永31年（1414）の足利義持伊勢参宮（「室町殿伊勢参宮記」）に「をとめのはし」とあり、乙部付近を通過している。

正長元年（1428）には岩田川合戦の舞台となり、丘陵には垂水城跡（8）、半田城跡（12）、乙部城跡（18）、渋見城跡（19）など、南北朝から戦国期の中世城館が周辺に点在している。

「神風鈔」によれば、安濃津、乙部、岩田（石田）、垂水、藤方などに神宮領の御厨があった。

（3）安濃津と藤潟

藤潟には、中世末に日本三津のひとつに挙げられ（「廻船式目」）、日本有数の津湊であった安濃津が所在し、大いに栄えた。安濃津および安濃津遺跡群については、既刊の報告書[9]に詳しいため、そちらを参照されたい。

明応地震（1498年）後は、大型船舶の停泊が困難になり、以後は津へと港は移っていった。藤潟は近世初頭まで潟湖が存在したが、その後の新田開発で消滅した。

3．津城築城後

（1）織田、富田氏の事績

永禄10年（1567）、織田信長の伊勢侵攻の際、安濃城は落ちず、信長は弟の信良（のち信包）を長野氏の養子とし和識を結んだ。信良はいったん上野城（津市河芸町）に入り、安濃津に築城を開始、天正8年にほぼ完成した（天正5年とする史料もある）。

安濃津城は大型の天守をもつ織豊系城郭であったと推測されるが、城の構造は不明な点が多い。江戸時代に作成されたとされる「天正期津城古図」では、本丸の東・南二ヶ所に「二ノ丸」、二ノ丸から続く二ヶ所の「三ノ丸」や「局丸」があったとする。

信良（信包）は観音寺（津観音）への大宝院（もと安芸郡）移転、無量寿寺（鈴鹿市国府）阿弥陀像の勧請など、後の津城下町の礎を築いたのち、文禄3年（1594）に近江へ移封された。

信包ののちは富田知信が入城し、慶長5年（1600）の関ヶ原合戦時は、三万の西軍方に包囲され、籠城戦となった。天守はこの時に焼失したとも伝えられるが、寛文大火で焼失した可能性もある。

（2）藤堂高虎の入城と津城修築

富田氏の改易後、藤堂高虎が入城し、大坂の豊臣包囲網の一環として、高虎は津城の修築を進めた。津城の構造は、寛永期から嘉永期の城絵図や明治期の測量図、文献史料によって知ることができる[10]。とりわけ、享保期の「津御城下分間絵図」（享保期津城下図、写真図版1）は詳細な測量図で、当図をもとにした樋田清砂氏の「津城跡復元図」（第5図）の正確さが、発掘調査で追証されてきている。

縄張り　津城は、城そのものは小規模で狭小であった。曲輪は本丸を中心に東丸と西丸を両翼に結び、広い内堀を隔てて周囲を二之丸（丸之内）、外堀が囲む輪郭式である。

本丸は高虎により北面と東面が拡張され、二つの三重櫓（丑寅・戌亥櫓）と三つの二重櫓（太鼓・月見・伊賀）、西丸に玉櫓が設けられた。

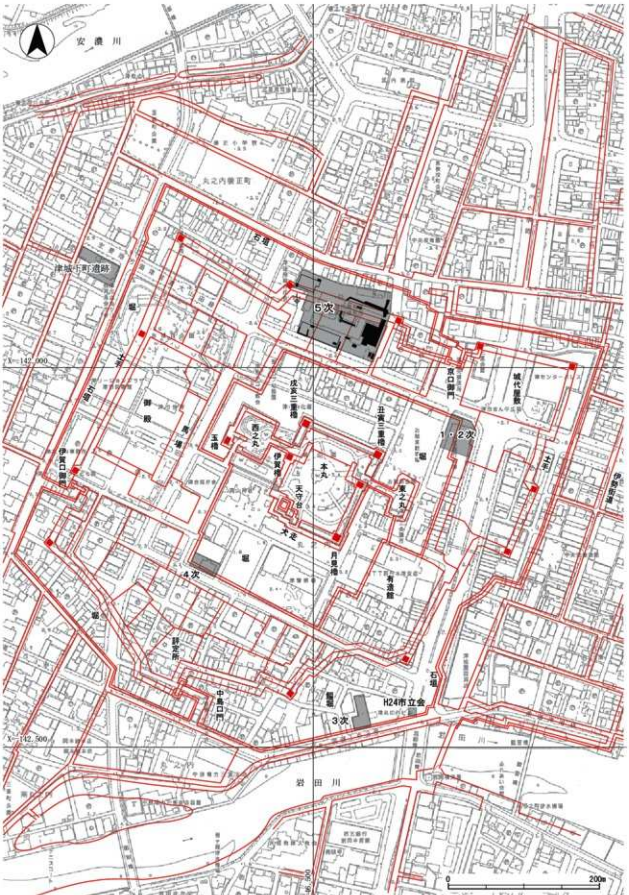
堀は沼沢や安濃川の支流・急流を取り入れ、あるいは改修したもので、外堀南側の鰡（ぼら）堀は、岩田川を引き込んで堤を設けた。また北外堀は安濃川（塔世川）の旧川筋を利用したと伝えられ[11]、今次調査地の地形環境を考える上で特に重要である。

内堀は最大で五十二間と近世城郭では破格の規模で、津城は高虎の築城技術の集大成であるとともに、伊予今治城に続く水城であったとされる[12]。

本丸　本丸は、広い堀と高石垣、全周する多門櫓で郭周囲の防備を徹底し、桝形と馬出で虎口を固める、高虎の築城手法がよく表れている。二之丸は塁線を不規則かつ非直角に屈曲させているが、この特徴は調査地付近の北外堀でも顕著である。

城門　南北に長さ21間の楼門を設け、北を京口（大手）、南を中島口とした。また、これまでの東西口を塞いで内堀を深く広くし、西には新たに長さ12間の伊賀口を設けた。伊賀口は伊賀街道の起点となり、伊賀上野と津が街道で結ばれた。

外堀　外堀は土塁と柵で囲まれ、寛永期絵図では石垣はみられない。嘉永期写しの城絵図では、土塁上に松が植えられていたようで、松は廃城後に売却されたという[13]。調査地付近では、京口門の付近のみ外堀の石垣、多門櫓を有し、その他は土塁（土羽）と平櫓で防御していた。土塁上には柵があった。調



第５図　津城跡復元図（1:5,000、三重県共有デジタル地図 1:2,500 に註 10、三重県教委 1984 をトレースし合成）

査地付近には「評定所北之櫓」（三間四方、南北棟）、「権之助北之櫓」（三間四方、東西棟）の二つの平櫓が存在した[14]。

二之丸　藩の中心機能は本丸と二之丸にあり、二之丸には重臣屋敷のほか、御対面屋敷（のち藩校）、評定所・勘定所などの諸役所、金蔵・武具蔵・米蔵、厩屋などが置かれた。

二之丸の家中屋敷は、寛永期に46戸あったが、幕末には16戸となり、諸役所の増加とともに、家臣の屋敷は次第に郭外へ移された。京口門の東側に藤堂仁右衛門（城代家老、安政6年5500石）、藤堂主膳（国家老、安政6年3500石）、藤堂采女（伊賀城代家老）などの重臣が居住した。

調査地は京口門の西側にあたり、貞享から嘉永期の城絵図では、東から藤堂伊織、中川蔵人、佐伯権之助の屋敷地と記される（写真図版1・2）。安政6年（1859）の津藩分限帳[15]では、藤堂伊織（1500石）、中川蔵人（老職、1500石）、佐伯権之助（600石）とあり、城代や番頭に次ぐ家格の屋敷地であった。寛永期の城絵図では、東から磯野半平・杢助、白井九兵衛、藤堂市正とあるが、寛永期の各家の詳しい事績は不明である。津城下町絵図（三重県蔵）や各家の事績から、貞享4（1687）～元禄16年（1703）にかけて当地の屋敷替えがなされたとみられる[16]。

なお、調査地付近の屋敷地そのものは、寛永から嘉永まで大きく変わっていない。

家中屋敷内の実態を知りうる史料は少ないが、「津八幡宮祭礼絵巻」（ニューヨークパブリックライブラリー蔵、景観年代1670～1680年代と推定）には、京口門とその付近の外堀、隅櫓、多門櫓のほか、藤堂仁右衛門の壮麗な屋敷が描かれている。同絵巻によると、仁右衛門屋敷は本瓦葺の門、檜皮葺唐破風の玄関、高塀などを含んでいた。他に、藤堂勘解由、長井彦兵衛屋敷（後の評定所）には、瓦葺の高塀が描かれている[17]。

この他、「中川蔵人政擧日記」が天保4年～慶応4年の家臣の生活を伝える[18]。

総構と城下町　総構は、伊勢街道東側の浜堤間低地に堀川、武家地西側に新堀を開削しようとしたが、大坂の陣が終了したため、普請は中止された。

津城下町は、塔世町（のち万町）に惣構門を備え、伊勢街道を城下に引き込み、宿駅、問屋場や本陣が置かれた。津城外堀の北・西・南は侍町とし、堀川の外側に寺院を集中させ寺町とした。

城下町北方の見当山丘陵は、偕楽園（御山荘）(20)や藤堂藩御庭焼の安東焼の窯（長岡窯、愛宕山西窯）がみられた。

近世の災害　津城および津城下は、関ヶ原合戦時に籠城戦となり、城下は大きな被害を受けたとされる。高虎入城後は、寛文2年（1662）大火で津城内は西之丸を除き全焼した。地震は宝永、安政の南海トラフ地震に加え、文政2年（1819）地震の被害が大きかったという。

4．近現代の津と津城

（1）津城の廃城と埋め立て[19]

明治2年（1869）に版籍奉還、明治4年に廃藩置県により津県（同11月に安濃津県）となり、明治5年（1872）には櫓・多門・藩校を残し旧城内の建物や城地一切を陸軍省が管轄した。外郭の櫓・多門等は取り払われ、売却される。明治22年（1889）には城地が藤堂家に払い下げられるとともに、この頃から堀の埋め立てが始まった。調査地付近では、明治41年（1908）までに北外堀の大部分、昭和4年（1929）までに裁判所前の内堀が埋め立てられた。

（2）戦災と戦後復興土地区画整理[20]

昭和20年（1945）7月24日には橋内西部空襲（爆撃）、同年7月28日大空襲（焼夷弾攻撃）で津市街地は焼亡、壊滅的な被害を受けた。

津市街地の本格的な復興は、昭和21年（1946）に始まった戦後復興土地区画整理によるもので、街路や土地の区画が大きく変化することになった。また、この過程で残っていた津城の内堀が大きく埋め立てられ、現在の姿となった。

（3）津地方裁判所の来歴[21]

明治26年（1893）、安濃津地方裁判所が丸之内殿町（現敷地）の新庁舎に移転する。庁舎は木造一部2階建で、安濃津区裁判所、検事局も同地に所在した。大正9年（1920）、昭和12年（1937）測図の1/25,000地形図では、敷地中央の庁舎と、周囲に官舎等の附属建物があったが(VI章)、昭和20年(1945)

第２表　津城跡関連年表

西暦	和暦	主な出来事
1567	永禄10	織田信長、北伊勢侵攻
1568	永禄11	織田信包、長野氏の養子となり上野城を築く
1571	元亀2	長野信良（織田信包）、安濃津に城を築きはじめる
1580	天正8	織田信包、五層天守の安濃津城を完成させる（諸説あり、天正5年ともいう）
1594	文禄3	信包、近江へ移封される
1595	文禄4	富田知信、安濃津城主となる
1600	慶長5	関ヶ原の戦い、津城籠城戦で津町が焼かれる
1604	慶長9	慶長東海・南海・西海地震
1608	慶長13	富田信高転封、藤堂高虎が津城主となる
1611	慶長16	津城の大修築始まる（慶長19年まで）
1615	元和元	大阪夏の陣、元和偃武
1630	寛永7	高虎没
1662	寛文2	津城下大火、二之丸より出火、本丸以下城内焼け落ち、中之番町など14か町738戸焼亡
	貞享4～元禄16	このころ、調査地付近の家中屋敷が再編される
1707	宝永4	宝永地震
1819	文政2	6月12日、伊勢・美濃・近江大地震、伊勢国内でも建物倒壊などの被害
	天保4～慶応4	中川藏人政華日記が記される
1855	嘉永7 安政元	伊賀上野地震、安政（嘉永）地震
1869	明治2	藩主高猷、版籍奉還し知藩事となる
1871	明治4	廃藩置県、県庁を二之丸（有造館）に置く
1872	明治5	安濃津県、四日市へ県庁を移し三重県と改称 櫓・多門・藩校を残し、旧城内の館舎・土蔵等の入札、城地一切を陸軍省が管轄する
1879	明治12	外郭の櫓・多聞等を売却し取り払う
1889	明治22	城地が陸軍省より藤堂家に１万円で払い下げ
1892	明治25	東外堀の埋め立て始まる
1893	明治26	安濃津地方裁判所が丸之内殿町（現敷地）の新庁舎に移転（木造一部２階建）
1895	明治28	丸之内本町通りが開通
1908	明治41	この年までに南・北外堀の大部分が埋め立てられる
1929	昭和4	裁判所前北内堀の埋め立て完了
1944	昭和19	東南海地震
1945	昭和20	7月24日橋内西部空襲（爆撃）、7月28日大空襲（焼夷弾攻撃） 裁判所庁舎は全焼、津市桜橋へ機能を移す
1946	昭和21	戦後復興土地区画整理始まる
1947	昭和22	津地方裁判所、津簡易裁判所が設置され、裁判所庁舎が丸之内の元地（現敷地）へ戻る 建物は旧軍用建物を移改築
1951	昭和26	裁判所庁舎が丸之内三重大学敷地へ移転
1952	昭和39	丸之内の元地（現敷地）に庁舎を建設し、津地方・家庭・簡易裁判所移転

7月28日の大空襲で裁判所庁舎は全焼し、津市桜橋の県立盲聾学校へ機能を移す。

昭和22年（1947）、津地方裁判所、津簡易裁判所が設置され、裁判所・検事局（同年、津地方検察庁と改称）が丸之内の元地（現敷地）へ戻る（写真図版3）。庁舎建物は旧軍用建物を移改築したものであった。昭和26年（1951）に裁判所庁舎が丸之内三重大学敷地へ移転し、昭和39年（1964）、丸之内の元地（現在の敷地）に庁舎が建設され、津地方・家庭・簡易裁判所が移転し現在に至る。

今回の発掘調査では、主に昭和初期(昭和10年代)の裁判所・検事局に関わる遺物が出土した。

（土橋・櫻井）

註

（1）三重県ＨＰ及び津市ＨＰによる。

（2）吉田史郎『津東部地域の地質』地質調査所、1987年。

（3）津市教育委員会『三重県指定史跡津城跡保存管理計画』2009年。

（4）伊藤裕偉「Ⅵ　安濃津に関する基礎検討」三重県埋蔵文化財センター『安濃津』1997年。

（5）註3前掲。

（6）本村豪章「古墳時代の基礎研究稿－資料編（Ⅰ）－」『東京国立博物館紀要』第16号、1981年。

（7）倉田康夫「安濃郡の条里制」『伊勢湾岸地域の古代条里制』東京堂出版、1979年。

（8）伊藤裕偉「海岸線の変動と交通環境」『環境の日本史』2、吉川弘文館、2013年。

（9）三重県埋蔵文化財センター『安濃津』1997年。

（10）津城の概要は、以下の文献を参照した。

三重県教育委員会『三重の近世城郭』1984年／松島悠「城郭論－津城－」『藤堂藩の研究　論考編』清文堂出版、2009年／藤田達生「城下町論－伊勢津を中心に－」『藤堂藩の研究　論考編』清文堂出版、2009年。

なお、樋田氏の復元図（三重県教育委員会1984）は、京口門と虎口が南へ若干ずれているようで、明治の測量図を戦後の字切図や土地区画整理事業の換地図に重ねると、より精度の高い復原図が得られる。5次調査地付近は大きなずれがなかったため、ここでは樋田氏の復元図をそのまま用いた。

（11）平松令三編『三重県の地名』平凡社、1983年。

（12）藤田達生編「藤堂高虎と初期藩政史研究」『藤堂藩の研究　論考編』清文堂出版、2009年。

（13）吉村利男「津城、廃城後の経緯に関する研究」『地域社会における「藩」の刻印』清文堂出版、2014年。

（14）「津城内外概況」（弘化2年、樋田文書）『三重県史』資料編近世2、三重県、2003年。

（15）「高畝代津藩分限帳」（樋田文書）『三重県史』資料編近世2、三重県、2003年。

（16）調査地内の各家の詳細は以下のとおりである。

・藤堂伊織：貞享4年（1687）に藤堂采女家から分家、津への転入時期は不明で、元禄9（1696）～宝永3（1706）年の勢州津城下町絵図（たつの市立龍野歴史資料館蔵）が所見である。津屋敷の他に土野に屋敷があり、伊賀城代職代行も努めた。

・中川蔵人：承応3年（1654）に登用され、老職であった。貞享4（1687）～元禄16年（1703）の津城下町絵図（三重県蔵）が初見。

・佐伯権之助：九州大友氏の旧臣で、大友改易後に高虎家臣となった。寛永絵図では二之丸南部に屋敷があり、慶安期は伊賀付、貞享4～元禄16年の津城下町絵図から二之丸北に屋敷がある。

（齋藤隼人「藤堂藩の武家屋敷配置と変遷」『地域社会における「藩」の刻印』清文堂出版、2014年）。

（17）まつり・祭・津まつり実行委員会『まつり・祭・津まつり　ニューヨークから里帰り「津八幡宮祭礼絵巻」』2004年／菅原洋一「「津八幡宮祭礼絵巻」の世界」『藤堂藩の研究　論考編』清文堂出版、2009年。

菅原氏は、城代家老の藤堂仁右衛門が当絵巻の発注者である可能性が高いと指摘している。

（18）藤堂藩史研究会『中川蔵人政事日記』（謄写版）。

（19）三重県教育委員会『三重の近世城郭』1984年／木敏雄「津城の堀の移り変わり」『市民文化』第27号、津市教育委員会、2000年／吉村利男「津城、廃城後の経緯に関する研究」『地域社会における「藩」の刻印』清文堂出版、2014年。

（20）津市役所『津市史』第4巻、1965年／三重県土木部都市計画課『津都市計画復興土地区画整理事業誌』1983年。

（21）津市役所『津市史』第5巻、1969年／三重県『三重県史　下編』1922年（昭和49年復刻版、名著出版）。

Ⅲ 遺 構

1．基本層序と埋没地形

（1）基本層序

当地の基本層序は以下のとおりである。地点間の層序の対比は、第３表に示した。

Ⅰ：現代整地層

裁判所敷地全体を覆う表土で、現庁舎ないし旧庁舎撤去後の整地層（砂・砕石等）である。

Ⅱ：近現代整地層

近現代（明治～昭和）の整地層や攪乱で、コンクリート等の瓦礫や礫を多く含む。過去の庁舎建設・撤去等により全体が攪乱されており、１区東壁付近を除くと、整地層の細分は困難であった。

なお、昭和20年７月の津空襲に関わる焼土層などは確認されていない。

Ⅲ：近世～近代整地層

砂質シルトや細砂からなる整地層で、上位は明治から昭和10年代の遺構（攪乱）、下位は近世遺構の基盤となる。１・６・７区で２～３枚の整地層が確認できるが、Ⅱ層形成時に相当削平されており、層の残りは悪い。このため、各整地層の細かな形成時期は把握できなかった。

第３表　基本層序対照表

基本層序	1区東壁	2区北壁	3区北壁	4区南壁	5区南壁	6区	7区	立会①	立会⑥
Ⅰ	1～4層	1層	1層	1層	1層	1～3層	1～4層	1層	1層
Ⅱ	5層	2層	2層	4層	2層	4層	5層	2～3層	2～6層
Ⅲ	6～8層	3～4層		5層		5～9層	6～8層	4～7層	
Ⅳ	9層	5～6層	3層	9層	4層	11層	13層	8層	7～8層
Ⅴ			1K下層						9～10層

Ⅳ：近世遺構基盤層（近世整地層）

標高2.0～1.6ｍ付近にみられる砂質堆積物で、非常に淘汰の悪い礫混じり粗砂～細砂である。層内に明瞭な層理や流理構造は認められない。

本調査中、層中に中近世遺物の包含は確認できなかったが、令和５年度の工事立会⑥－７・８層では、層中に灰色シルトの偽礫や磁器片を含むことを確認しており、基本層序Ⅳ層は津城築造ないし改修時の整地層である可能性が高い。

なお、基本層序Ⅲ・Ⅳ層を通じて、寛文２年（1662）の津城下大火に関わる焼土層などは確認できなかった。いずれの調査区でも、本層の上面で遺構検出を実施した。

Ⅴ：基盤層（自然堆積）

１区下層の標高1.4～1.0ｍ付近（下層確認２－６・７層）は、ラミナ・流理が顕著な自然堆積で、細砂や極細砂混じりの砂質シルトであるが、標高1.0ｍ以深は再び淘汰の悪い粗砂となる。標高1.0ｍ以深は常時帯水し、グライ化する。

下層確認１・２を対象とした土壌の分析では、本層が低地の好気的環境に堆積した一過性の氾濫堆積物である可能性が示唆された（Ⅴ章）。

一般的に、浜堤を構成する砂質堆積物は淘汰がよいとされ（Ⅱ章）、土層観察や土壌分析の結果から、本層は浜堤間低地や後背湿地付近の微高地に流入した安濃川由来の堆積物と推測される。こうした所見は、津城の北外堀が安濃川支流を改修したとする伝承とも調和的である。

調査地北側の工事立会⑥では、標高1.0ｍ付近で自然堆積のシルトや砂質シルトとなる。９層は炭化物や中近世の瓦片を含んでおり、９層を境に堆積環境が大きく変化したと推察される。10層は淘汰の良い砂質シルトである。層中に著しく摩滅した土師器片を含んでおり、安濃川由来の堆積物である可能性が高いが、海成層の可能性もあり、堆積物の成因は今後も検討を要する。

（2）調査地の微地形

①表層の地形

津城跡の一帯は、戦後の区画整理により地形が改変されているものの、地表高は旧地形の名残を留めている。調査地のある二之丸北側は標高約2.9ｍで、岩田川に近い二之丸南側は標高2.3ｍとなり、安濃川堤防から岩田川に向かって標高が低くなっている。

東西方向は、西側の安濃川堤防に近づくにつれて高く、調査地付近で一端低くなり、東丸之内の浜堤に向かって再び高くなる。

調査地内では大きな地形の差はない。

②表層付近の埋没地形

津城跡が所在する海岸低地（沖積層）の模式層序は、下位から沖積下部砂層、中部泥層、上部砂層、最上部陸成層に区分されている[1]。

裁判所新庁舎設計時に実施された地質ボーリングのデータ[2]によれば、標準貫入試験N値に応じて、下位から５段階程度の地形発達史ステージを設定することができ、大まかに沖積層の模式層序との対比が可能である（第６～９図）。貝などの動物遺存体や人為物は確認されていないため、各ステージの年代や細分、性格は現時点で確定できないが、津城跡付近の地質データは公開されているものが少ないため、基礎的な地質データとして提示しておきたい。

・ステージ１　標高 -27 ～ -22 m

N値 120 前後の固結したシルト、更新統。

・ステージ２　標高 -22 ～ -18 m

N値 20 ～ 40 の礫混じりシルトで、更新統ないし沖積下部砂層とみられる。

・ステージ３　標高 -18 ～ -10 m

N値 10 以下の軟弱なシルトや砂質シルトで、ヘドロ臭がする。海進頂期の内湾に堆積した中部泥層に対応する可能性があろう。

・ステージ４　標高 -10 ～ -2.0 m

N値 20 ～ 30 前後、均質で淘汰の良い砂からなり、１～３㎝大の礫も混じる。沖積上部砂層に対応するとみられる。

より詳細にみると、深度 -6 m付近でシルトを挟み、シルトより下位は均質な砂、上位は粒径が不揃いな礫混じり砂である。このシルトを境に、海成層から河成（陸成）層に変化するなど地形環境が大きく変化したことをうかがえ、将来的に地形発達史を細分できる可能性がある。

・ステージ５　標高 -2.0 ～ 2.0 m

N値３～ 15 の砂礫や礫混じり砂からなり、河川の強い営力を受けている。下位はややN値が高く、上位は調査区の基本層序Ⅳ・Ⅴ層が対応する。

以上から、本次調査に直接関連する事項を以下にまとめておくが、あくまでも１箇所のボーリングデータに基づく推定に過ぎず、今後の調査や地質データ収集によって検証していく必要がある。

ア：ステージ４・５の状況から、浜堤を構成する海成砂は地表に表出しておらず、河成層に被覆されている。当地は東丸之内付近の浜堤の後背低地に相当すると考えられ、その後、自然堤防に転じた可能性もある。

イ：ステージ５の状況から、地表付近は礫を運搬するような、河川の強い営力を受けた。

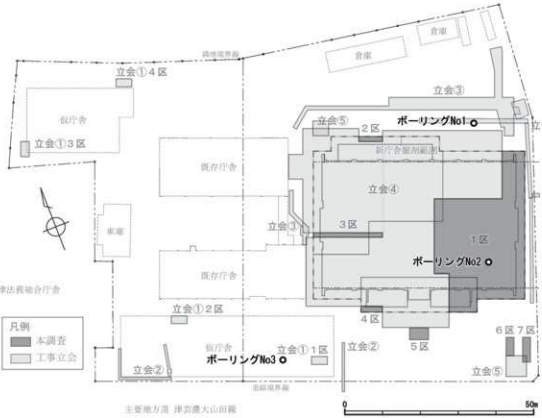
ウ：津城外堀の想定位置に最も近いボーリングNo1 地点では、津城外堀の埋土は確認されていない。

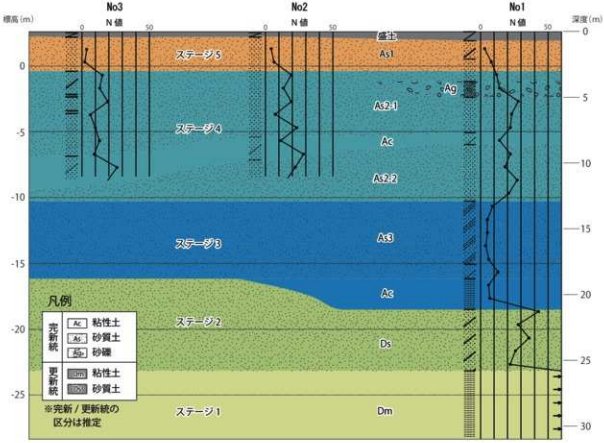
２．検出遺構の概要

今回の調査では、津城に関わる近世の遺構、安濃津地方裁判所に関わる近代の遺構を検出した。

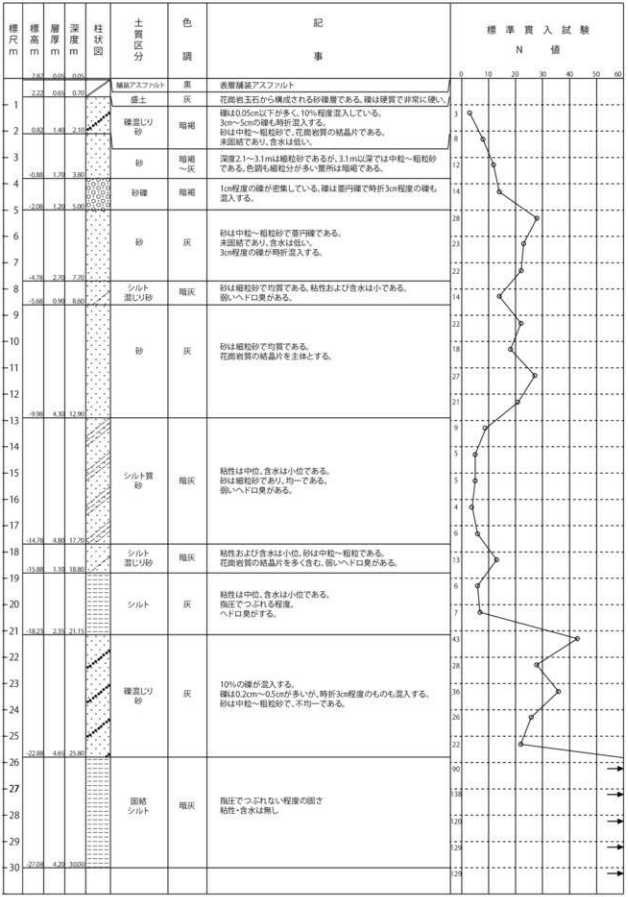
近世の遺構は、すべて基本層序Ⅳ層上面で検出したが、Ⅳ層と遺構埋土の識別は非常に難しく、遺構検出時の見落としが一定あったとみられる。近代の遺構は攪乱として処理したが、戦前・戦中（昭和10 年代）の遺物が大量に出土した土坑は、可能な限り新たに遺構名を付与した。また、調査時に「攪乱」とした近世遺構も、混入遺物の引き算や写真等の記録から再検討し、遺構名を付けたものがある。

なお、津城跡では、既往の調査で弥生時代から中世の遺物が出土しており、また織田・富田期の遺構や築城・改修時の地形改変に関するデータを得るため、１区南・西の３ヶ所で下層確認トレンチを設定し、下層遺構の有無や基盤層の堆積状況を確認した。結果、下層遺構は確認できなかったが、当初の遺構検出時に見落とした近世の井戸などを確認した。

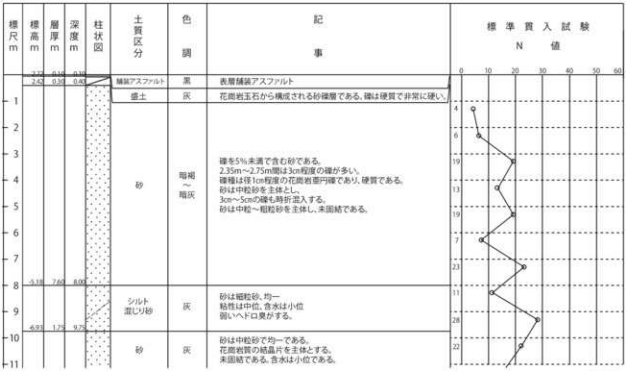




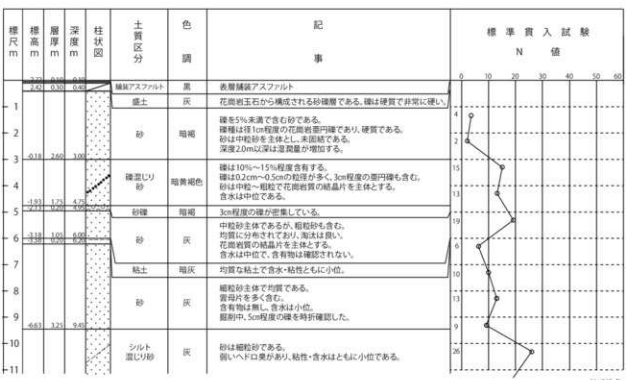
第６図　ボーリング位置図・層序



第７図　ボーリング柱状図①



第８図　ボーリング柱状図②



第９図　ボーリング柱状図③

以下、本文は調査区ごと、遺構番号順に記述する。遺構の大きさなどの詳細は、末尾の遺構一覧表（第４表）に記した。

建物の軸方向は、南北軸を便宜的に主軸とし、北からの東西偏角で示した（例：Ｎ５°Ｅ、Ｎ15°Ｗ）。棟方向は東西棟、南北棟などと呼称する。

３．１区

（１）概要

１区は、裁判所敷地の東端に位置する。貞享以降の城絵図では藤堂伊織屋敷地にあたり、調査区北端付近に、東西方向の道と土塁があったとされる。

層序（東壁）は、砕石を薄く敷いた４層を境に大別され、１～４層は現代の整地層（基本層序Ⅰ・Ⅱ層）である。４層下に近代の攪乱がみられる（第11図）。基本層序Ⅲ層の近世～近代整地層（７・８層）は大半が削平されており、近世遺構はすべて基本層序Ⅳ層（９層）上で検出した（第10図、写真図版５）。ただし、Ⅱ層や近現代遺構の影響で、平面プランを十分に確認できなかったものがある。

検出した遺構は土蔵の基礎地業（ＳＤ51004）や井戸、土坑、水琴窟などで、18世紀後葉から19世紀前葉の遺構が多い。寛永～嘉永の城絵図にある道や土塁に関わる遺構は確認できなかった。

下層確認では、当初の遺構検出時に見落とした近世の井戸（ＳＥ51070）などを確認した。

（２）遺構

ＳＫ51001（第16図、写真図版11） M10グリッドで検出した楕円形の土坑で、掘方は長さ80㎝、深さ10㎝を測るが、遺構上部は滅失している。

掘方中央に口径約40㎝、19世紀代の常滑赤物甕（２）を逆位に据えていた。甕の底部は穿孔されており、本遺構は水琴窟であった可能性が高いが、掘方底面には特に貼床などを構築していない。甕内埋土の状況は削平のため不明である。

19世紀代の瀬戸・美濃磁器の湯呑碗が出土した。

ＳＫ51002（第17図） H11グリッドで検出した隅丸方形の浅い土坑で、長さ0.９m、深さ15㎝を測る。埋土から貝・骨が大量に出土した。他に土師器皿や肥前磁器皿などが出土している。

ＳＫ51003（写真図版６） FG14・15付近では、遺構検出中に完形品を含む大量の土師器皿、陶磁器、貝・骨が出土した。この付近一帯をＳＫ51003として掘り下げたところ、下層でＳＫ51006を検出した。調査時は十分に遺構を識別できなかったが、写真等の記録類から、一辺約２mの方形土坑を中心に、複数の遺構が重複していたとみられる。

西側に接するＳＫ51085と検出の過程や遺物の様相がよく似ており、この付近は塵芥処理坑などの土坑が密集していた可能性が高い。

土師器皿はＳＫ51006上に集中していた。他に18～19世紀前半の陶磁器や焼塩壺などが出土している。

ＳＤ51004（第15図、写真図版７～10） F10他で検出した土蔵の基礎地業である。地業は、溝状の布地業と捨杭、人頭大の礫で構成される。

布地業は長辺の長さ11.５m、短辺6.０m、深さ40～70㎝の箱溝状を呈する。埋土は２～６㎝大の小礫を多く含むシルト質砂で、砂・礫を充填した後に突き固めたのであろう。溝の天端付近で拳大から人頭大の礫がみられるところもある。

捨杭は、残存長約2.０m、直径11～16㎝（年輪数22～47年、平均32年）の樹皮付きのマツ属を用い、先端を面取りして、４本一対で垂直に打ち込んでいる（第５表、39頁）。杭は、西辺に10ヶ所、南北辺に５ヶ所、東辺に９ヶ所（両隅は重複してカウント）配置される。西辺のみ杭４本の中心間が1.１～1.２mで、南北・東辺は1.１～1.５m間隔（平均1.35m）である。杭の上部約40㎝は腐食しており、本来は長さ2.４m程あったとみられる。西辺は杭が良く残るが、南北・東辺は非常に残りが悪い。従って、捨杭より上位に有機質の土木材があったとしても、好気的環境下ですべて腐食したとみられる。杭の取り上げは重機を用いたが、基盤層が軟弱で危険な状態だったため、詳細な出土状況は記録できていない。

捨杭の上には長さ30～50㎝の角礫や扁平な礫を置くが、礫がない、あるいは捨杭の位置と一致しないものがあり、有り合わせの材料を現場合わせで施工したと推測される。いわゆる蠟燭石のように、礫が溝底から天端まで積み上げられた形跡はない。また、礫は溝底から若干浮いているものがあり、捨杭と礫の間に木材（樽地業や算盤地業、捨土台など）

を架した可能性があろう。

県内に現存する土蔵との比較（VI章）から、桁行4間、梁行2間で、半間ごとに柱を配置した切妻造の土蔵と推定できる。主軸は屋敷地の地割に即した、N 21° Eの南北棟である。

ＳＤ 51004 はＳＥ 51076・51077 廃絶後の遺構であり、布地業埋土から瀬戸・美濃陶胎染付（広東碗）や植木鉢などが出土したことから、18 世紀後葉から 19 世紀前葉が土蔵建築年代の上限となろう。他に焼塩壷、犬形・猫形の土人形などが出土している。

なお、布地業より内側には、ＳＫ 51043 等の土坑が複数みられたが、土蔵建築前の遺構であろう。

ＳＫ 51005（第 17 図） I11 グリッド付近で検出した円形の土坑で、直径 1.2 m、深さ 40 ㎝を測る。埋土から貝・骨が大量に出土しており、廃棄土坑であろう。ＳＤ 51004、ＳＫ 51078 に先行する遺構である。他に、18 世紀の陶磁器や鉄釘などが出土した。

ＳＫ 51006（第 17 図、写真図版 12） G14 グリッドで検出したＳＫ 51003 下で検出した円形の浅い土坑で、直径 1.4 m、深さ 35 ㎝を測る。埋土は暗色の砂質シルトで、底面付近に瓦や板状の木片が多く見られた。木っ端等の廃棄土坑であろう。他に、京都・信楽系陶器、肥前磁器、「伊賀國」印銘の伊賀土瓶など、18 世紀後半から 19 世紀前葉の遺物が上層から出土したが、この付近はＳＫ 51003 を含め複数の土坑が重複しており、それらの遺物であった可能性が高い。

ＳＫ 51013（第 17 図） K11 グリッドで検出した不整形な土坑で、長さ 2.4 m、幅 1.9 m、深さ 60 ㎝を測る。ＳＫ 51012 に切られる。瀬戸・美濃系磁器端反碗など、18 世紀後半から 19 世紀前葉の陶磁器や瓦質焙烙などが出土した。また、軒桟瓦が多く出土しており、二次的に被熱したものが多い。この時期に小規模な火災が生じた可能性がある。

他に、軒丸瓦５点（301 ～ 305）が直立した状態で見つかっているが、柱の根固めなど別遺構の可能性があろう。

ＳＫ 51015（第 17 図） L10 グリッドで検出した不整方形の浅い土坑で、長さ 1.4 m、深さ 25 ㎝を測る。底部に墨書のある瀬戸・美濃水甕や常滑赤物の鉢などが出土した。

ＳＫ 51027 １区南東端、N12 グリッドで検出した不整形な土坑である。調査区内で長さ 1.5 m、深さ 60 ㎝を測る。瀬戸産磁器や肥前磁器、伊賀・信楽産陶器などが出土しており、19 世紀前半の遺構と推測される。

ＳＫ 51028（第 16 図、写真図版 11） M9 グリッドで検出した円形の土坑で、掘方は直径 40 ㎝、深さ 10 ㎝を測り、遺構上部は滅失している。掘方中央に口径約 36 ㎝の常滑赤物鉢（321）の口縁部が残り、鉢を逆位に据えたとみられる。水琴窟の可能性があるが、遺構底面は特に床などを構築していない。

ＳＫ 51029（第 16 図、写真図版 11） K9 グリッドで検出した円形の土坑で、掘方は直径約 60 ㎝、深さ 35 ㎝を測る。掘方底面に瓦を敷き詰め、その上に 19 世紀代の常滑赤物甕（322）を逆位に据えていた。甕の底部は失われていたため、遺構の上部構造は不明である。瓦敷きの床面をもつことから、水琴窟と考えられる。

ＳＫ 51031（第 17 図） N11・12 グリッドで検出した不整形な土坑で、長さ 2.4 m、幅 90 ㎝、深さ 40 ㎝を測る。平面形から、２基以上の土坑が重複している可能性が高い。被熱した軒桟瓦など、瓦が大量に出土しており、他に貝・骨、瀬戸・美濃系磁器、伊賀・信楽の土瓶や鍋、焼塩壷などがある。19 世紀前半までに廃絶した遺構とみられる。

ＳＫ 51032（第 17 図） H12 グリッドで検出した不整方形の土坑で、調査区内で長さ 2.2 m、幅 0.8 m、深さ 60 ㎝を測る。瓦が多く出土しており、他に 18 世紀の肥前磁器や常滑火鉢が出土した。

ＳＫ 51040（第 18 図） H11 グリッドで検出した不整形な土坑群で、３～４基の土坑が重複したものであろう。全体で長さ 2.7 m、幅 1.8 m、深さ 55 ㎝を測る。遺構の両端をＳＫ 51034・ＳＫ 51049 に切られる。

貝・骨が大量出土したほか、土師器皿、肥前陶器・磁器、瀬戸・美濃摺絵皿、軟質施釉陶器などがあり、17 世紀末から 18 世紀前半の遺物が多く、18 世紀後半のものが若干混じる。

ＳＫ 51049（第 18 図） H11 グリッドで検出した楕円形の土坑で、長さ 1.3 m、幅 80 ㎝、深さ 60 ㎝を測る。ＳＫ 51040 より後出の遺構である。19 世紀代の瀬戸・美濃、伊賀・信楽土瓶、18 世紀代の丹波甕、軒丸瓦などが出土した。

ＳＫ 51050（第 18 図） G10 グリッドで検出した不整形な土坑で、長さ 1.4 m、幅 1.0 m、深さ 30 ㎝を測る。17 世紀後半から 18 世紀前葉の陶磁器や貝などが出土した。

ＳＫ 51051（第 18 図） K9 グリッドで検出した不整形な土坑で、長さ 1.0 m、深さ 20 ㎝を測る。貝・骨がまとまって出土した。

ＳＫ 51053（第 18 図） L9 グリッドで検出した長さ 0.8 m、深さ 30㎝の楕円形小土坑である。

ＳＺ 51058（第 16 図、写真図版 12） L9 グリッドで検出した土師器皿の埋納遺構である。土師器皿は、３～４枚のセットを５ヶ所に置き、すべて外面を外に向け伏せられていた。油煙などの使用痕や墨書をもつものはなかった。

埋納時の掘方は識別できず、出土地点がＳＥ 51070 の掘方ないし井戸枠抜き取り後の埋土内にあたることから、ＳＥ 51070 構築ないし廃絶にあたって埋納された土器の可能性が高い。

ＳＫ 51059（第 16 図、写真図版 11） L9 グリッドで検出した直径 60 ㎝、深さ 10 ㎝の楕円形土坑で、土坑の中央に炭化物の塊がみられたが、性格は判然としない。内面に付着物がある常滑赤物甕（555）が出土しており、便槽や水琴窟の据付穴かもしれない。

ＳＫ 51067（第 16 図、写真図版 11） 18 グリッドで検出した土坑で、掘方は直径 60 ㎝、深さ 50 ㎝を測り、常滑赤物甕と筒形の鉢を積み上げている。上段は甕（578）で正位に据え、底部を穿孔する。下段は鉢（579）の底部を打ち欠き、逆さに据える。鐘踞の下部構造ないし浸透桝と考えられ、床面は特に構築していない。常滑甕、鉢の特徴から、18 世紀以降に構築されたとみられる。

ＳＥ 51070（第 11 図、写真図版 12） 下層確認中に K ～ M8・9 グリッドで検出した井戸で、掘方上面で直径約 6 m を測る。井戸枠は直径約 70 ㎝、ヒノキ製の結物（結筒）を二段積み上げていた。上段の結物は上部が腐食しており、残存高は約 40 ㎝である。下段は完存しており、高さ約 70 ㎝で、検出面から井戸底までの深さは約 2.5 m である。井戸枠抜き取り痕の有無は不明である。

下層確認中に遺物は出土しなかったが、掘方内にＳＺ 51058（土師器埋納遺構）があり、井戸構築ないし井戸廃絶に伴うものと考えられる。

ＳＫ 51071（第 18 図） I12・13 グリッドで検出した楕円形の土坑で、長さ 1.0 m、幅 70 ㎝、深さ 60 ㎝を測る。遺構の規模の割に遺物量が多く、肥前Ⅳ期後半の磁器、京都・信楽系陶器、土師器皿、瀬戸・美濃水甕、常滑植木鉢、土人形（天神）などが出土した。18 世紀後半から 19 世紀初めごろの遺構とみられる。

ＳＫ 51073・ＳＫ 51074（第 18 図） J12 グリッドで検出した２基の小土坑で、ＳＫ 51073 がより新しい。ＳＫ 51073 から瓦質焙烙、瀬戸・美濃磁器、陶器鍋、信楽鉢、ＳＫ 51074 から瀬戸・美濃筒形香炉、鍋が出土した。19 世紀前葉の遺構であろう。

ＳＥ 51076・ＳＥ 51077 J11 グリッドで検出した井戸で、ＳＤ 51004 捨杭取り上げ時の重機による断ち割りで確認した。いずれも結物積み上げの井戸であるが、井戸枠の取り上げに重機を用いており、井戸枠の個体識別が困難となったため、一括して取り扱う。

井戸枠は、いずれもヒノキ製で、２基とも直径約 60 ㎝前後の結筒を２段積み重ねる。上段は上部が腐食しているが、下段は高さ約 70 ㎝である。

井戸枠内から、把手付きの手桶（650）が出土しており、釣瓶に使用したものであろう。

ＳＫ 51078（第 16 図） I11 グリッド付近で検出した大型の方形土坑で、一辺 5.1 m、深さ 90 ㎝を測る。ＳＥ 51076・ＳＫ 51005 より後出の遺構で、当初は近代の攪乱として扱ったが、近代の遺物は少なく、I11 グリッド付近の「攪乱」から、近世の肥前磁器香炉や土師器皿が出土している。

土層などの詳細な記録を残していないため、遺構の性格は不明であるが、仮に近世の遺構とすれば、大きさや形状から穴蔵の可能性があり（Ⅵ章）、注意を喚起しておくことにしたい。

ＳＫ 51079 J13 グリッドで検出した近代の土坑で、長さ 1.3 m、幅 1.2 m、深さ 90 ㎝を測る。昭和初期（昭和 10 年代）のガラス瓶、瀬戸・美濃製品、機銃薬莢、歯ブラシなどが出土した。空き瓶など生活ごみの廃棄土坑とみられる。

ＳＫ 51080 I13 グリッドで検出した近代の方形土坑で、長さ 3.1 m、幅 2.3 m、深さ 80 ㎝を測る。

他の近代遺構に比べやや大型で、掘方の形状が整っている。埋土に焼土を多く含み、被熱した統制陶器、熱で変形したガラス瓶、硬質陶器の洋食器など、昭和初期（昭和10年代）の遺物が出土している。焼却ごみの廃棄土坑またはごみ焼却用の土坑か。

ＳＫ51081　H12・13グリッドで検出した不整円形の土坑で、直径1.5ｍ、深さ90㎝を測る。調査時は攪乱としていたが、京都・信楽系陶器や信楽の四耳壺（いわゆる献上茶壺）など、18世紀代の遺物が多く出土しており、近世の遺構と考えられる。

ＳＫ51082　I12グリッドで検出した長方形の土坑で、長さ2.3ｍ、幅1.0ｍ、深さ20㎝を測る。18世紀の肥前磁器が出土した。

ＳＫ51083　F14グリッド付近は、方形の「攪乱」から近世の陶磁器や瓦が多く出土しており、遺物の時期もよくまとまっている。付近は昭和初期の攪乱があり遺構の識別が困難であったが、単に遺物の混入にとどまらず、調査時に認識できなかった近世遺構が複数あった可能性が高い。調査の経過や遺物の様相はＳＫ51003とよく似ている。

遺物は大量の骨・貝があり、他に肥前、瀬戸・美濃の陶磁器など18世紀後葉から19世紀前葉の遺物を中心に、19世紀中葉から後半の遺物も混じる。

ＳＫ51084・ＳＫ51085　１区東壁付近、K13グリッドで検出した昭和初期の土坑である。ＳＫ51084が長さ約２ｍ、幅約１ｍ、深さ約60㎝で、ＳＫ51085が長さ約2.5ｍ、幅約２ｍ、深さ約30㎝を測る。昭和10年代のガラス瓶や陶磁器などの遺物が出土した。埋土はシルト質砂や細砂である。

１区東壁付近は昭和初期の遺構が非常に多い。ＳＫ51084・ＳＫ51085の北側にも黒色土で埋没し、ガラス瓶等を多数含む「攪乱」がみられた（第11図）。

（３）下層確認

各下層確認トレンチの概要は以下のとおりである。

下層確認１（第11図、写真図版12）　１区南壁に沿うように設定した東西方向のトレンチで、近世遺構検出面から約1.2ｍ掘り下げた。北壁柱状図３層までは礫混じりの粗砂（基本層序Ⅳ層）であるが、４層はシルトとなる。４層の堆積土を土壌分析に供した（土壌分析No.1）。下層に遺構・遺物はなかった。

下層確認２（第11図、写真図版12）　１区南側の西壁に沿うように設定した南北方向のトレンチで、近世遺構検出面から約1.4ｍ下で当初の遺構検出時に見落としたＳＥ51070を検出している。西壁１～３、５層は礫混じりの粗砂（基本層序Ⅳ層）であるが、ＳＥ51070南側の４層はシルト、北側の６・７層は流理の顕著な細砂やシルト質砂となる。７層の堆積土を土壌分析に供した（土壌分析No.2）。ＳＥ51070の他、下層に遺構・遺物はなかった。

下層確認３（第11図、写真図版13）　１区北側の西壁沿いに設定した南北方向のトレンチで、近世遺構検出面から約1.1ｍ掘り下げた。

西壁１層は有機物を多く含み著しく土壌化しており、遺構埋土の可能性もある。２・３層はシルト質砂ないし極細砂である。２層は礫混じりの細砂で、堆積構造が不明瞭なことから近世整地層であろう。４層は下層確認２－８層に対応する細砂である。下層に遺構・遺物はなかった。

４．２区

２区は、裁判所敷地北側に位置する幅約２ｍの小トレンチである。寛永以降の城絵図では、北外堀に接した土塁や道が存在したとされる。

地表下約1.4ｍまで重機で掘り下げたが、基本層序Ⅱ層（北壁２層）がまだ深く続くようであった。調査区が狭小なため、部分的な断ち割りによる層序の確認に留めた（第12図、写真図版14）。

その結果、基本層序Ⅲ層（北壁３・４層）が局所的にみられ、調査区北西側のみ標高1.3ｍ付近で基本層序Ⅳ層（北壁５・６層）に達した。４層にはわずかに遺物が包含されており、成層の時期は明確にできないものの、近世から近代の整地層と推測される。

津城跡に関わる土塁等の痕跡は確認できなかった。

５．３区

（１）概要

３区は、１区の西側で設定した幅約２ｍの細長いトレンチである。貞享以降の城絵図では、中川藏人屋敷地と藤堂伊織屋敷地の境界にあたる。調査区の

大半が攪乱され、近世の遺構は調査区の東半にのみ残存していた（第12図、写真図版14）。

標高1.8m付近でⅣ層に達し、ＳＫ53001、ＳＤ53002などの遺構を検出した。調査区が狭小なため、一部の遺構は完掘していない。

（２）遺構

ＳＫ53001（第18図、写真図版14） G5グリッドで検出した不整形な土坑で、直径1.6m、深さ60cmを測る。大量の瓦、陶磁器、貝・骨が廃棄されていた。瓦は細かく破砕した後に廃棄したようである。京都・信楽系陶器、肥前Ⅳ期後半の磁器、瀬戸・美濃第9小期の擂鉢や馬の目皿などが出土しており、18世紀後葉から19世紀前葉の遺構とみられる。

ＳＤ53002（写真図版14） G4グリッドで検出した幅70cm、深さ20cmの溝状遺構である。近世の常滑鉢、砥石などが出土した。

ＳＤ53004 FG3グリッドで検出した幅1.3m、深さ45cmの落ち込みであるが、調査区西半に広がる攪乱のため、詳細は不明である。土師器皿、肥前Ⅳ期の磁器、常滑赤物の甕などが出土した。

６．４区

（１）概要

４区は、１区南西側に設定した小トレンチで、貞享以降の城絵図では、中川蔵人・藤堂伊織屋敷地の境界付近に相当し、調査区の大半がＳＥ54002にあたる（第13図、写真図版15）。

層序は、基本層序Ⅱ層（南壁４層）下に瓦等の遺物を含む整地層（南壁５層）が良好に残り、近現代の整地や攪乱の影響が比較的少ない。標高約1.8mで基本層序Ⅳ層に達する。

（２）遺構

ＳＥ54002（第13図、写真図版15） ４区中央で検出した井戸で、掘方直径4.2m、深さ2.2mを測る。残存する井戸枠は長さ1.3m、直径約60cmの結物で、掘がわずかに広がることから、結物積み上げの井戸であったと推測される。井戸枠内の最下部に17世紀後半の常滑甕（773）を据え、水溜としていた。上層（南壁６層）は井戸枠を覆うような炭層があることから、井戸枠抜き取り後の埋戻し土とみられる。

上層出土遺物は、17世紀後半から18世紀前半を中心に、一部18世紀後半の遺物を含む。水溜の常滑甕が17世紀後半のものであることから、17世紀後半に構築され、18世紀後半に廃絶した井戸と考えられる。

ＳＤ54003（第13図、写真図版17） ４区西側で検出した溝で、幅1.0m、深さ1.0mを測る。下層にやや扁平な円礫を多数廃棄していた。南壁２層を基盤とする近現代の溝とみられ、礫を充填した暗渠かもしれない。遺物は出土していない。

４区は中川・藤堂屋敷の地境付近にあり、地境の溝が近代に踏襲されていた可能性はあるものの、本溝の詳細な時期や性格は不明である。

なお、ＳＤ54003の北側延長にある３区では、表層が攪乱されており、溝の続きは確認できなかった。

７．５区

５区は、１区南西側に設定した小トレンチで、貞享以降の城絵図では、藤堂伊織屋敷地にあたる。

Ⅱ層下で近代の常滑土管（暗渠）と溜枡を検出した。標高1.8m付近でⅣ層に達し、根石を有するピットがみられた（第13図、写真図版16・17）。

調査区北側はⅡ層がやや深く及んでいるためか、近世の遺構はみられなかった。

８．６・７区

（１）概要

６・７区は、１区の南東に位置する小トレンチで、貞享以降の城絵図では、藤堂伊織屋敷地にあたる。この付近は現代の植栽による盛土で、南側ほど地表面が高くなっていた。

層序は、基本層序Ⅱ層下にⅢ層がみられ、ＳＥ56001など一部の遺構はⅢ層上から掘り込まれている。標高1.6m付近で基本層序Ⅳ層に達し、この上面で遺構検出を実施した。７区は、大半が整地層ないし落ち込みであったことから、井戸などの大型遺構が存在した可能性がある（第14図、写真図版16・17）。

調査区が狭小なため、７区の遺構掘削は一部に留めた。

（2）遺構

ＳＥ 56001（第 14 図、写真図版 17） P10 グリッドで検出した遺構で、直径 2.1 m以上、深さ 60cm を測る。６区東壁土層に直径約 60cm の井戸枠状の痕跡がみられ、結物や水溜の甕が据えられていたとみられる。近世の土師器などが出土した。

ＳＦ 57001（第 14 図、写真図版 17） Q11 グリッドで検出した土坑で、直径 1.7 m以上、深さ 10cm を測る。土坑埋土は赤褐色細砂で、底面は黒色化していた。カマドなどの火処であったとみられる。遺物は出土していない。

９．工事立会

工事立会のうち、ある程度のまとまった成果が得られた工事立会①と工事立会⑥について記述する。他の工事立会の概要は第１表を参照されたい。

（1）工事立会①

裁判所敷地の北西・南西で計画された仮庁舎建設予定地を対象として、長さ約４m、幅約２mのトレンチを４ヶ所設け、遺構の遺存状況を事前に確認した。遺構は検出に留め、完掘はしていない。遺構検出後、遺構略図・土層柱状図を作成した（第 19 図、写真図版 18）。

層序は、地表下 1.0 ～ 1.2 mで基本層序Ⅳ層（８層）に達し、Ⅱ層（２層）とⅣ層間に整地層または遺構埋土（４～７層）がみられる。上位の整地層（５層）は近代遺構、下位（６層）は近世遺構の基盤である。

立会①－１区では土坑、２区では土坑・溝、３区では南側への落ち込みを検出した。特に２区は遺構が良好に残存していた。貞享以降の城絵図と照応すると、１区は中川蔵人、２区は佐伯権之助屋敷にあたる。３区付近には佐伯権之助櫓が所在したが、土塁や櫓に関わる遺構は確認できていない。

最も北側の４区は、津城跡復元図の北外堀内にあたる。地表下 1.0 ～ 1.2 mの９層上で溝状の落ち込みと護岸の石列を確認した。これらは堀埋め立て後（近代）の遺構とみられ、９層は堀内の堆積土ないし埋め立て土の可能性があるが、さらに下層の調査は実施していないため、詳細は不明である。また、石列が石垣か否かも不明である。

現状では、この石列が北外堀の南辺に相当する可能性も否定できず、その場合、津城跡復元図の北外堀南辺が南側へ 10 mほどずれていることになる。

外堀の位置や深さを明確にできなかったため、今後に大きな課題を残すことになった。痛恨の極みである。

出土遺物では、中世以前の開元通宝（873）や戦国末期の常滑甕（877）、瀬戸美濃大窯４期から登窯第１小期の擂鉢（878）など、高虎の津城修築以前の遺物が注目される。

（2）工事立会⑥

裁判所敷地北側の排水溝・集水桝設置工事に伴う工事立会であり、発掘調査１区の結果を踏まえて整地層や基盤層の堆積状況を再確認した（第 19 図、写真図版 19）。

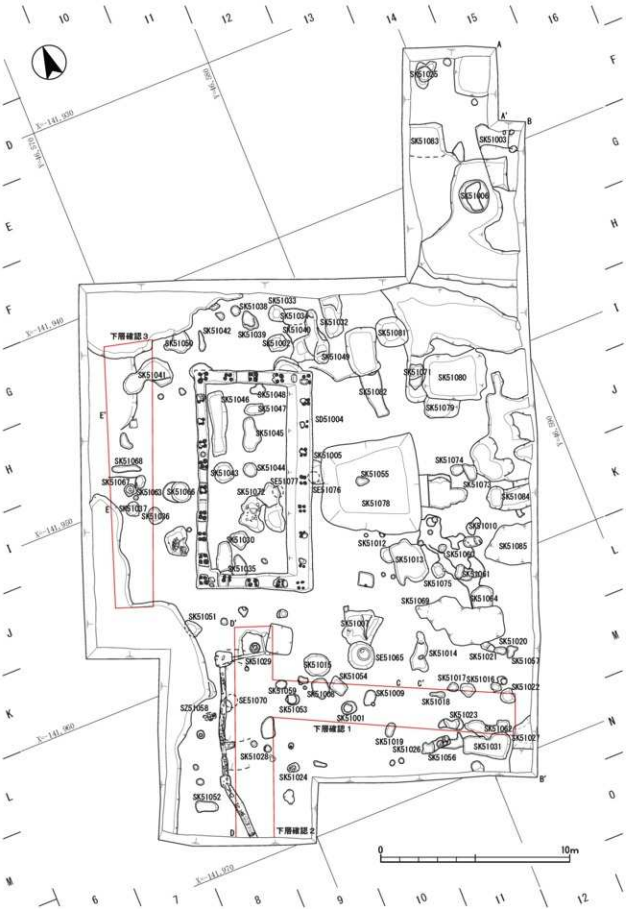
その結果、柱状図 No. 1 地点では標高 1.9 m付近で基本層序Ⅳ層（柱状図７層）に達し、層中に灰色シルトの偽礫や磁器片を含むことを確認した。柱状図 No. 2 地点では、標高 1.0 m付近で自然堆積のシルトや砂質シルトとなり、９層を境に堆積環境が大きく変化したと推察された。９層は炭化物や中近世の瓦片（874）を含んでおり、高虎修築前の安濃津城や津城籠城戦に関連する可能性がある。10 層は淘汰の良い砂質シルトである。層中に著しく摩滅した土師器片を含んでおり、安濃川由来の堆積物である可能性が高いが、海成層の可能性もあろう。

ただし、この層相観察所見は制約の多い工事立会下でのもので、今後の検討を要する。可能な限り、これらの層準まで何らかの形で調査を実施することが求められよう。（櫻井）

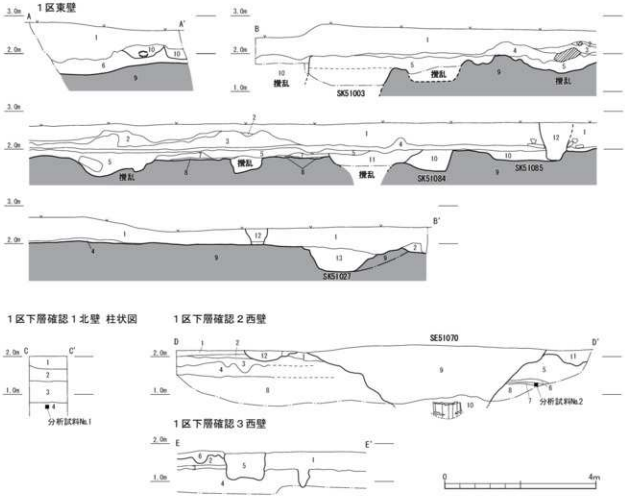
註

（1）川瀬久美子「三重県雲出川下流部における海岸低地の形成と堆積環境の変遷」『地理学評論』76-4、日本地理学会、2003 年。

（2）最高裁判所・株式会社日さく『令和元年度津地家簡裁庁舎敷地調査業務報告書（地盤調査編）』2019 年。



第10図　1区遺構全体図（1:200）



【1区東壁】A-A'・B-B'

1．2.5Y4/3オリーブ褐色シルト質砂（礫混）
2．10YR5/6黄褐色細砂（礫混）
3．2.5Y4/3オリーブ褐色粗砂（礫混）
4．砂石
［現代整地層］
5．10Y4/4褐色シルト質砂［近現代整地層・撹乱］
6．2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト質砂（瓦含む）
7．2.5Y5/4にぶい黄色粗砂
8．7.5YR4/6褐色シルト質細砂・焼土
9．2.5Y4/6オリーブ褐色細砂［近世遺構系盤層］
［近世～近代？整地層］
10．［近代（明治～昭和）撹乱］
11．5Y2/2オリーブ黒色細砂（ガラス製品等瓦礫多）［近代（昭和）撹乱］
12．［現代撹乱］
13．2.5Y4/3オリーブ褐色シルト質砂［SK51027］

【1区下層確認1北壁　柱状図】C-C'

1．2.5Y5/4黄褐色砂質シルト［近世遺構系盤層］
2．2.5Y6/6明黄褐色粗砂（礫混）
3．5YY7/2灰白色粗砂
4．5Y4/2灰オリーブ色シルト（Fe斑状）

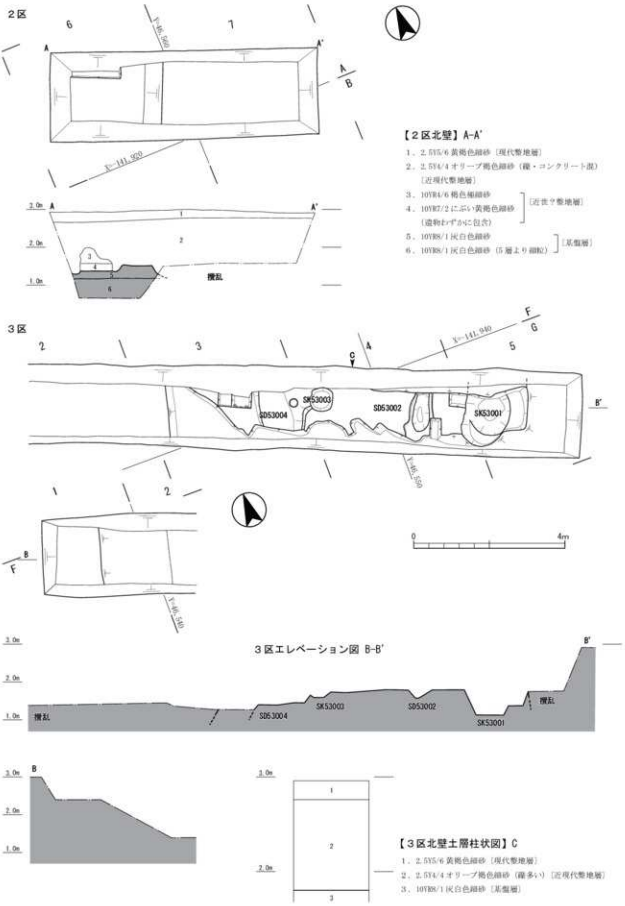
【1区下層確認2西壁】D-D'

1．2.5Y5/4黄褐色砂質シルト［近世遺構系盤層］
2．2.5Y6/6明黄褐色粗砂
3．5YY7/2灰白色粗砂
4．5Y4/2灰オリーブ色シルト（Fe斑状）
5．10YR5/6黄褐色細砂（礫混）
6．10YR5/6黄褐色細砂（ラミナ・流理顕著）
7．2.5Y4/4オリーブ褐色シルト質極細砂
8．10YR5/6黄褐色細砂
9．2.5Y5/4黄褐色シルト質砂［SE51070上層埋土］
10．2.5Y5/4 黄褐色細砂にシルトブロック含む［SE51070下層・掘方埋土］
11．2.5Y5/4黄褐色シルト質砂［遺構埋土または5層が土壌化］
12．［撹乱］

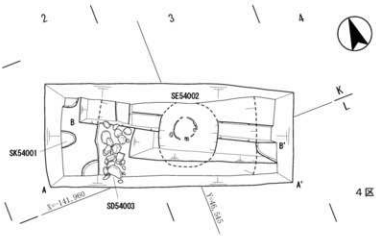
【1区下層確認3西壁】E-E'

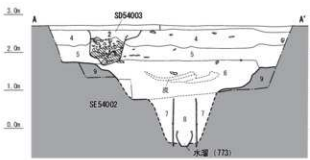
1．2.5Y4/3オリーブ褐色シルト質細砂（著しく土壌化）［近世遺構系盤層］
2．2.5Y6/6明黄褐色細砂（礫混）
3．10YR4/4褐色極細砂
4．2.5Y6/6明黄褐色細砂
5．2.5Y4/4オリーブ褐色砂質シルト（褐色粘土・三和土・瓦混）［遺構］
6．［撹乱］

第11図　1区東壁・下層確認土層断面図　（1:100）



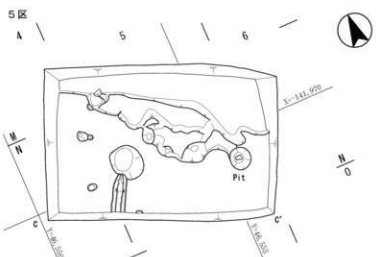
第 12 図　２区遺構全体図、２区北壁土層断面図（1:100）、３区遺構全体図、３区エレベーション図（1:100）
３区北壁土層柱状図（1:40）

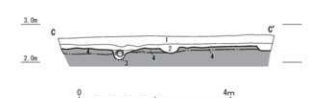




【４区南壁】A-A'　※下位（B-B'）は SE54002 断面と合成

1．2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂〔礫多量〕〔現代整地層〕
2．N4 灰色細砂〔礫多量、グライ化〕〔SD54003 埋土〕
3．10YR4/4 褐色細砂〔礫多量〕
4．5Y3/2 オリーブ黒色細砂〔礫・瓦混〕〔近現代ウ整地層〕
5．10YR4/3 にぶい黄褐色細砂〔瓦・赤褐色土ブロック混〕〔整地層〕
6．10YR4/3 にぶい黄褐色細砂〔焼土・炭層検む〕〔SE54002 上層〕
7．7.5Y3/2 オリーブ黒色細砂〔SE54002 裏込め〕
8．N5 灰色粘砂〔SE54002 井戸枠内埋土〕
9．2.5Y4/5 黄褐色粗砂〔基盤層〕

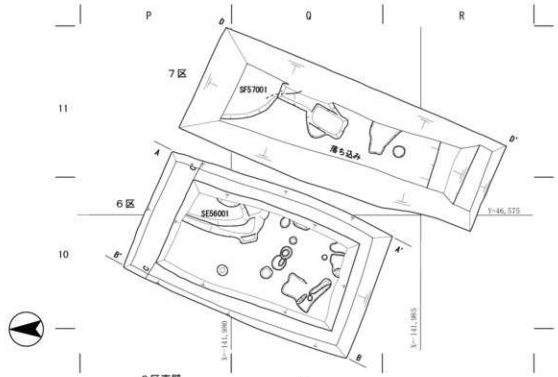


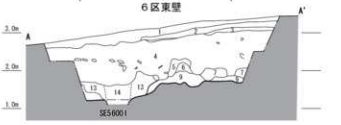


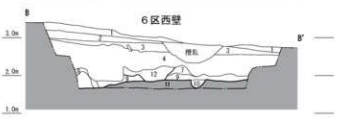
【５区南壁】C-C'

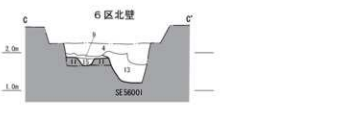
1．2.5Y3/3 暗オリーブ褐色中砂〔礫多量〕〔現代整地層〕
2．10YR3/4 暗褐色～2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂〔黄褐色土ブロック混〕〔近代ウ整地層〕
3．2.5Y4/6 オリーブ褐色粗砂〔近代瓦葺埋土〕
4．10YR4/4 褐色細砂〔基盤層〕

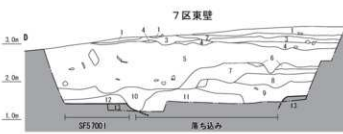
第 13 図　４区遺構全体図、４区南壁土層断面図（1:100）、５区遺構全体図、５区南壁土層断面図（1:100）

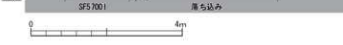












【6区北・東・西壁】

1. 2.5Y4/4 オリーブ褐色細砂
2. 10YR5/6 黄褐色細砂
3. 2.5Y4/6 オリーブ褐色細砂

［現代整地層］

4. 2.5Y5/6 黄褐色細砂（礫・瓦多量）［近現代整地層・攪乱］
5. 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂（中転砂混）
6. 2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂
7. 2.5Y6/4 にぶい黄色粗砂
8. 2.5Y6/4 にぶい黄色細砂
9. 2.5Y5/4 黄褐色粗砂［近世遺構基盤層］

［近代～近代？整地層］

10. 2.5Y5/4 黄褐色粗砂（焼化物微量）［ピット埋土］
11. 10YR6/6 黄褐色中砂［基盤層］
12. 5Y5/3 灰オリーブ色粗砂（下位に灰オリーブ色シルトブロック多）［遺構？］
13. 2.5Y5/4 黄褐色中砂［SE56001 裏込め］
14. 2.5Y5/1 黄灰色細砂（黄色土転混）［SE56001 井戸枠内埋土］
15. 2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト質細砂［ピット埋土］

【7区東壁】

1. 2.5Y4/4 オリーブ褐色細砂
2. 10YR5/6 黄褐色細砂
3. 2.5Y4/6 オリーブ褐色細砂
4. 2.5Y5/6 黄褐色細砂

［現代整地層］

5. 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色細砂（礫・瓦多量）［近現代整地層・攪乱］
6. 5Y 4/4 暗オリーブ色極細砂
7. 10YR2/3 黒褐色極細砂
8. 2.5Y3/2 黒褐色極細砂（局所的に炭・焼土集中する）

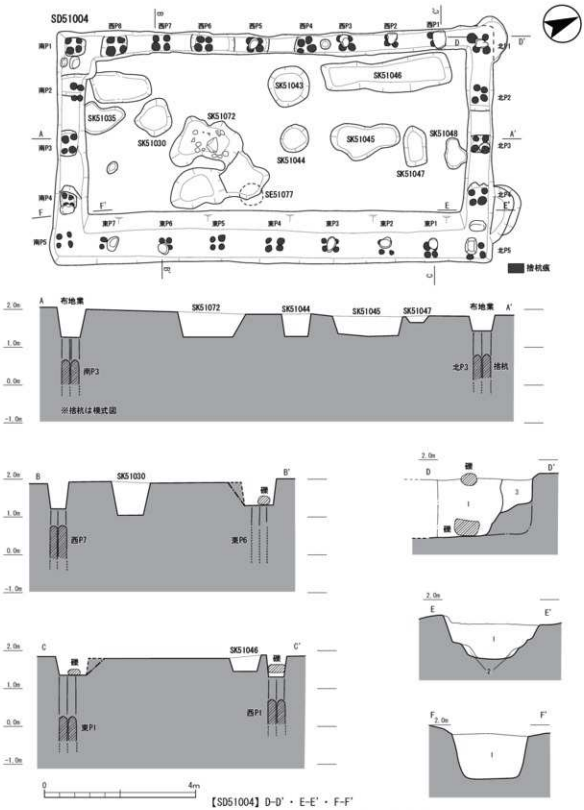
［近代？整地層］

9. 10YR3/4 暗褐色細砂（炭・焼土混）
10. 5Y5/4 オリーブ色細砂
11. 10YR5/6 黄褐色中砂

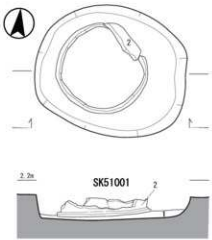
［整地層または遺構］

12. 2.5Y4/6 赤褐色細砂（下面は黒色化）［SF57001 埋土］
13. 10YR6/6 黄橙色中砂［基盤層］

第 14 図　6・7 区遺構全体図、6 区北・東・西壁土層断面図、7 区東壁土層断面図（1:100）

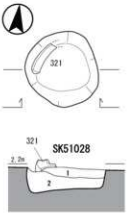


第 15 図　ＳＤ 51004（1:100、土層断面図は 1:40）



【SK51001】

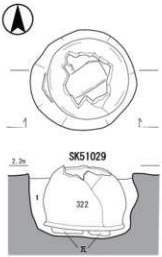
1．2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト質砂



【SK51028】

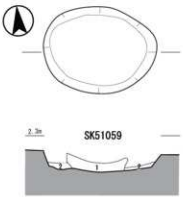
1．2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂

2．2.5Y4/4 オリーブ褐色細砂



【SK51029】

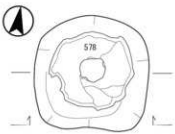
1．2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト質砂

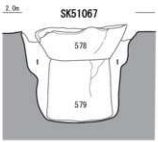


【SK51059】

1．2.5Y4/3 オリーブ褐色シルト質砂（炭多量）

2．2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト質砂

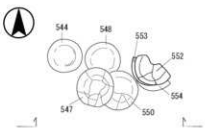


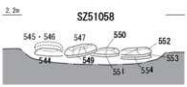


【SK51067】

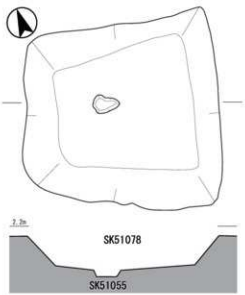
1．2.5Y4/4 オリーブ褐色シルト質砂

0　1m



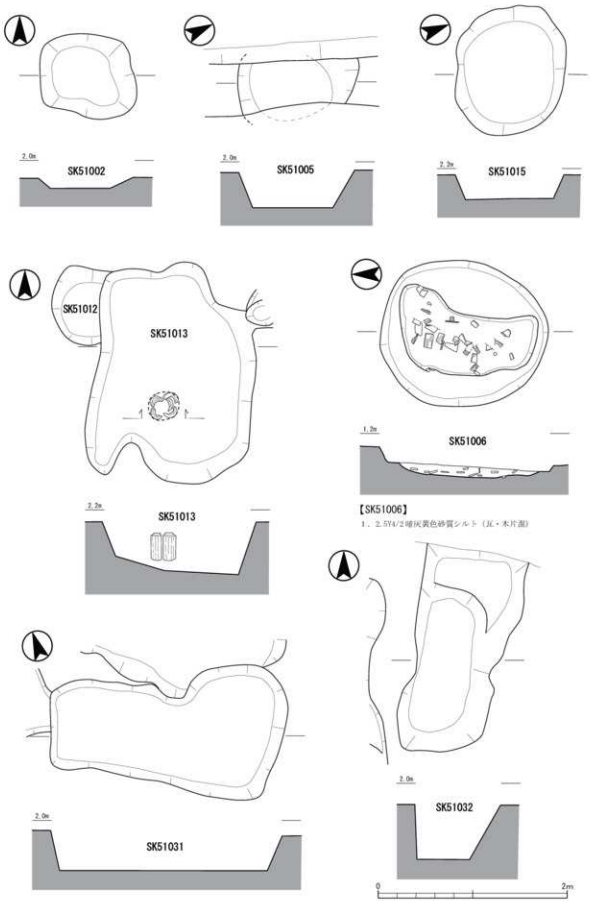


0　40 cm

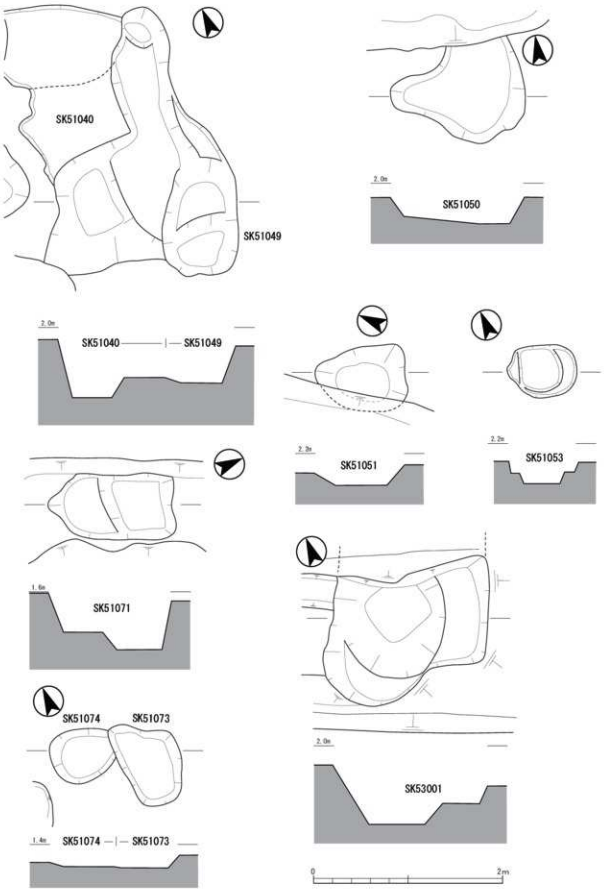


0　4m

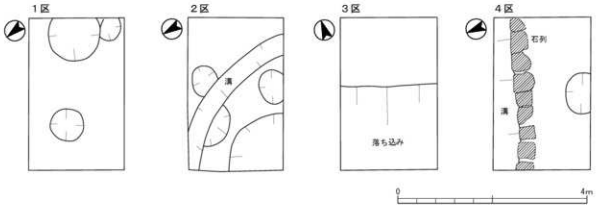
第 16 図　ＳＫ 51001・51028・51029・51059・51067（1:20）、ＳＫ 51078（1:100）、ＳＺ 51058（1:10）

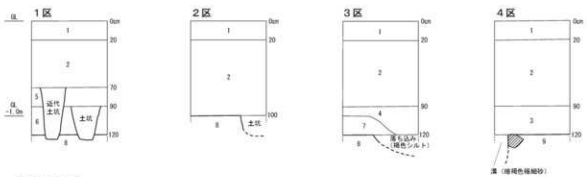


第 17 図　ＳＫ 51002・51005・51006・51012・51013・51015・51031・51032（1:40）



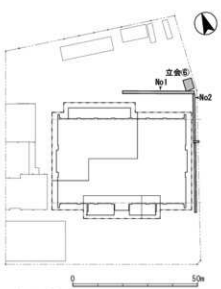
第18図　ＳＫ51040・51049・51050・51051・51053・51071・51073・51074・53001（1:40）



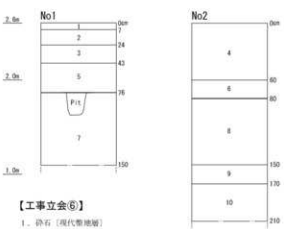


【工事立会①】

1．アスファルト・砂石［現代整地層］
2．［近現代整地層］
3．黒褐色シルト（混）［近現代整地層］
4．暗褐色シルト
5．オリーブ褐色シルト
6．褐色中砂
7．オリーブ褐色シルト
8．黄褐色細砂～中砂［基盤層］
9．黄褐色細砂～中砂［再堆積土か］



工事立会⑥



【工事立会⑥】

1．砂石［現代整地層］
2．黒褐色土（礫混）［近現代整地層］
3．灰黄褐色粗砂［近代ヲ整地層］
4．［近現代整地層］
5．褐色砂［近代ヲ整地層］
6．粗砂［近代ヲ整地層］
7．にぶい黄褐色粗砂（灰色シルトブロック混）［基盤層］
8．暗褐色砂［基盤層］
9．にぶい黄褐色シルト（明灰色砂・炭混、中近世瓦含）
10．暗オリーブ褐色砂質シルト（土師器片含）［自然堆積］

第 19 図　工事立会①・⑥遺構略図（1:80）、土層柱状図（1:40）

第４表　遺構一覧表

調査区	遺構番号	グリッド	時代	規模(m)　()は残存値			出土遺物	備考(前後関係、特徴等)
				長さ	幅	深さ		
1	SK51001	M10	19ｃ	0.8	0.7	0.1	常滑甕、瀬戸・美濃磁器	底部穿孔の常滑甕を逆位に据える。水琴窟か
1	SK51002	H11	近世	0.9	0.8	0.15	土師器皿、肥前磁器皿	隅丸方形、SK51002→SK51040 貝・骨大量
1	SK51003	G14	18～19ｃ前半	(1.0)	(2.0)	0.07	土師器皿大量、焙烙、焼塩壺、肥前磁器、陶器（瀬戸・美濃、京都・信楽、常滑）、寛永通宝、瓦	複数の土坑ないし不整形落ち込み 貝・骨大量
1	SD51004	F10他	18ｃ後葉～19ｃ前葉	11.5	6.0	0.4～0.7	瀬戸徳利、肥前磁器、焼塩壺、土人形（犬、猫）、瀬戸火鉢、油壺、植木鉢、瀬戸陶器染付広東碗、桟瓦、捨杭	布基礎と捨杭 SE51076・S1077→SD51004
1	SK51005	IJ11	18ｃ	1.2	0.8	0.4	初期伊万里皿、土師器皿、鉄釘、	貝・骨大量、SE51076の上層理土か SK51005→SD51004
1	SK51006	G14	18ｃ後葉～19ｃ前葉	1.4	-	0.35	京都・信楽、肥前磁器筒形碗、伊賀土瓶「伊賀國」「丸□□」、瀬戸・美濃磁器碗、肥前陶器、木片	BSX51006 円形、SK51003下で検出 木片等廃棄土坑
1	SK51007	L10・11	18ｃ中葉～後半	1.1	1.0	0.7	瀬戸瓶鉢、陶器（京都・信楽）、肥前磁器	不整形
1	SK51008	M10	近世	1.2	0.8	0.2		隅丸方形
1	SK51009	L10	近世	1.0	0.7	0.3	土師器、陶器（瀬戸・美濃）	不整円形
1	SK51010	K12・13	近世	0.9	0.8	0.05		不整形
1	SK51011	K12						欠番
1	SK51012	K11	近代	0.8	(0.5)	0.2	洋釘（近代）	円形
1	SK51013	K11	18ｃ後半～19ｃ前葉	2.4	1.9	0.6	丸瓦、軒桟瓦、磁器（肥前、瀬戸）、瀬戸・美濃陶器広東碗、植木鉢、常滑鉢	不整形、中央に丸瓦5本を立てる（別遺構の可能性もあり） SK51013→SK51012
1	SK51014	L11	近世	2.1	0.9	0.5	土師器、陶磁器	不整形
1	SK51015	L10	18ｃ後葉～19ｃ前葉	1.4	1.3	0.25	磁器（肥前）、陶器（瀬戸・美濃、常滑）	不整方形
1	SK51016	M12	近世	0.7	0.5	0.4	土師器	不整形
1	SK51017	M11	近世	0.4	0.5	0.25	土師器、陶器	小穴
1	SK51018	M11	近世	0.4	0.7	0.25	陶器	小穴
1	SK51019	M10	近世	0.9	0.5	0.15	土師器	小穴
1	SK51020	M12	近世	0.5	0.6	0.6	土師器	小穴
1	SK51021	M12	近世	(0.9)	0.4	0.2	磁器	小穴
1	SK51022	M12	近世	0.7	0.8	0.3	土師器、陶器	不整形
1	SK51023	M11	近世	0.5	1.5	0.3	土師器	不整形
1	SK51024	M9	近世	0.5	0.6	0.25	土師器、陶器	小穴、礎あり（根石か）
1	SK51025	E14	近世	0.8	0.8	0.4	磁器	近代攪乱と重複
1	SK51026	MN11	近世	1.0	2.0	0.25	土師器	不整形
1	SK51027	N12	19ｃ前半	(1.5)	(0.9)	0.6	磁器（瀬戸・美濃、肥前）、陶器（伊賀・信楽）	不整形
1	SK51028	M9	近世	0.4	0.4	0.1	常滑鉢	小穴 常滑鉢を逆位に据える
1	SK51029	K9	19ｃ	0.6	0.6	0.35	常滑甕	円形、小型の常滑甕を逆位に据え、底面瓦敷き、水琴窟
1	SK51030	J9・10	近世	0.9	0.9	0.9	土師器	不整形
1	SK51031	N11・12	19ｃ前半	2.4	0.9	0.4	丸瓦、軒桟瓦、常滑火消壺、瀬戸染付、肥前磁器、焼塩壺、瀬戸緑釉香炉、貝・骨	被熱した瓦多い
1	SK51032	H12	18ｃ	(2.2)	0.8	0.6	常滑火鉢、軒丸瓦	不整方形
1	SK51033	G11	18ｃ	0.9	0.8	0.8	土師器、丸瓦、貝・骨	円形 SK51034→SK51033
1	SK51034	H11	18ｃ	0.6	(1.4)	0.1	肥前磁器	楕円形 SK51034→SK51033
1	SK51035	J9	近世	1.1	0.9	0.2		不整形
1	SK51036	I9	近世	0.9	0.7	0.4		円形
1	SK51037	I8	近世	0.7	0.7	0.4		円形
1	SK51038	G11	近世	0.7	0.7	0.8	肥前磁器、常滑甕	不整形 SK51038→SK51039
1	SK51039	G11	近世	(0.6)	(0.8)	0.65	須恵器杯（混入）、瓦	不整形 SK51038→SK51039

調査区	遺構番号	グリッド	時代	規模(m) ()は残存値			出土遺物	備考(前後関係、特徴等)
				長さ	幅	深さ		
1	SK51040	H11	17ｃ末～18ｃ	2.7	1.8	0.55	土師器、瀬戸・美濃擂鉢皿 肥前磁器皿（6点揃い）、肥前陶器	不整形、複数遺構の重複か、貝・骨大量 SK51040→SK51049 SK51040→SK51034 SK51040→SK51002
1	SK51041	H9	17ｃ末～18ｃ前葉	(1.6)	(1.4)	0.3	土師器皿、肥前磁器、貝・骨	不整形
1	SK51042	H10	近世	1.1	0.4	0.4	土師器、陶磁器	不整形
1	SK51043	I10	近世	1.2	1.0	0.5		円形 埋土炭・植物根多い（根跡か）
1	SK51044	I10	近世	0.7	0.7	0.6	土師器、陶器、動物骨	円形
1	SK51045	I10	18ｃ	2.1	1.0	0.6	煙管、土師器、軒桟瓦	不整形
1	SK51046	I10	近世	3.6	0.8	0.4	磁器油壺、軒平瓦	長方形
1	SK51047	H10	近世	0.6	1.1	0.5		不整形
1	SK51048	H10	近世	0.7	1.0	0.2		不整形
1	SK51049	H11	19ｃ後半	1.3	0.8	0.6	伊賀・信楽土瓶、肥前磁器、軒丸瓦、軒平瓦、動物骨	楕円形 SK51040→SK51049
1	SK51050	G10	17ｃ後半～18ｃ前葉	1.4	1.0	0.3	肥前磁器、常滑甕、貝	不整形
1	SK51051	K9	近世	1.0	(0.6)	0.2	瀬戸・美濃皿、貝・骨大量	不整形
1	SK51052	M8	近世	0.6	1.4	0.4		楕円形
1	SK51053	L9	近世	0.8	0.5	0.3	土師器、瓦	骨
1	SK51054	L10	近世	1.1	0.7	0.4	土師器、瓦	不整方形
1	SK51055	J11	近世	0.5	0.7	0.15		不整形
1	SK51056	N11	近世	(0.5)	0.6	0.35	土師器	SK51026内後土
1	SK51057	M12	近世	1.3	0.9	0.25	瓦	不整形
1	SZ51058	L9	近世	－	－	－	土師器皿	土師器皿を伏せて埋納、SE51070に伴う遺物の可能性あり
1	SK51059	L9	近世	0.6	0.5	0.1	常滑甕（もと便槽か）	楕円形小穴 中央に炭化物の溜まり
1	SK51060	K12	近世	1.1	0.9	0.05	常滑甕、軒桟瓦、塀瓦	不整形落ち込み、複数遺構の重複か 精査後、SK51061・SK51064を識別分離
1	SK51061	KL12	近世	0.9	1.4	0.3	瓦	不整形
1	SK51062	N12	19ｃ前半	(0.6)	2.1	0.25	瀬戸・美濃陶器染付・磁器、常滑蚊帳し	不整形
1	SK51063	I9	近世	0.6	(0.5)	0.25	瓦	楕円形小穴
1	SK51064	L12	18ｃ	(1.1)	1.2	0.25	瓦	隅丸方形
1	SE51065	L10・11	近代	0.7	0.7	1.6	陶器	円形、コンクリート井戸枠
1	SK51066	I9	17ｃ末～18ｃ初頭	2.5	1.8	0.3	瀬戸・美濃鉄絵鉢	円形土坑2基の重複
1	SK51067	I8	18ｃ後半	0.6	0.6	0.5	常滑甕底部、鳥笛	常滑甕二段積み上げ、上段は底部穿孔、下段は筒状、蹲踞の下部ないし浸透桝か
1	SK51068	I8・9	近世	1.5	0.4	0.3	瓦、土師器	溝状
1	SK51069	L11	近世	1.0	1.0	(0.1以上)	陶器	不整形 下端不詳（完掘していない）
1	SE51070	KL9？	近世	(6.0)	－	(2.0以上)		下層確認にて検出、井戸枠は結物二段
1	SK51071	I12・13	18ｃ後半～19ｃ初頭	1.0	0.7	0.6	肥前磁器、京都・信楽半球碗、土師器皿、瀬戸・美濃半胴、陶器壺	攪乱下で検出、楕円形 規模の割に遺物が多い
1	SK51072	J10	17～18ｃ	2.7	2.0	0.5	土師器、瀬戸・美濃皿、信楽鉢	不整形、表層に礫多い SK51077上層埋土か
1	SK51073	J12	18ｃ後半～19ｃ前半	0.9	0.7	0.15	瓦質焙烙、瀬戸・美濃磁器・陶器鍋、信楽鉢	不整形 SK51074→SK51073
1	SK51074	J12	18ｃ後葉～19ｃ初頭	(0.5)	0.5	0.1	瀬戸・美濃筒形香炉・鍋	円形
1	SK51075	K12	近世	0.9	0.7	0.3		楕円形 SK51060→SK51075
1	SE51076	J11	近世	－	－	－	手桶（SE51077の可能性あり）	SE51076・51077→SD51004 井戸枠は結物二段 井戸枠は取り上げ・保管時にSE51076・51077が混ざり、識別できない

調査区	遺構番号	グリッド	時代	規模(m) ()は残存値			出土遺物	備考(前後関係、特徴等)
				長さ	幅	深さ		
1	SE51077	J11	近世	－	－	－		SE51076・51077→SD51004 井戸枠は結物二段 井戸枠は取り上げ・保管時にSE51076・51077が混ざり、識別できない
1	SK51078	I11～K12		5.1	5.3	0.9		「攪乱」、大型の方形土坑、SE51076・SK51005→SK51078
1	SK51079	J13	昭和初期	1.3	1.2	0.9	瀬戸・美濃製品、機銃薬莢、ガラス瓶、歯ブラシ	「後土攪乱の南の攪乱」、不整形
1	SK51080	I13	昭和初期	3.1	2.3	0.8	被熱した統制陶器、ガラス瓶、洋食器	「後土攪乱」、大型の方形土坑
1	SK51081	H12・13	18ｃ	1.5	1.5	0.9	磁器（肥前）、陶器（京都・信楽、信楽四耳壺）	「円形攪乱」、不整円形
1	SK51082	I12	18ｃ	2.3	1.0	0.2	肥前磁器	「方形攪乱」、長方形
1	SK51083	F14	18～ 19ｃ前半	1.5	－	0.5	肥前磁器など 骨・貝多量	「方形攪乱」 複数の土坑ないし不整形落ち込み
1	SK51084	K13	昭和初期	(2.0)	1.0	0.6	ガラス瓶、陶磁器	「方形攪乱」
1	SK51085	K13	昭和初期	(2.5)	2.0	0.3	ガラス瓶、陶磁器	「攪乱」
3	SK53001	G5	18ｃ後葉～ 19ｃ初頭	1.6	(1.4)	0.6	陶器（碗、土瓶、馬の目皿、常滑植木鉢・甕）、肥前磁器、丸瓦、平瓦、桟瓦、瓦質焙烙	瓦、貝・骨大量
3	SD53002	G4	近世	(1.1)	0.7	0.2	常滑鉢、砥石	
3	SK53003	G4	近世	0.6	0.5	0.1	瓦、陶器	小穴
3	SD53004	FG3	近世	1.2	1.3	0.45	瓦、陶器、土師器	
3	SK53005	F3		0.5	1.5	－	肥前磁器、堺・明石擂鉢	SD53004に統合、欠番
3	SK53006	F3		1.2	1.2	－	瓦、陶器	SD53004に統合、欠番
3	SD53007	G3					瓦、陶器	SD53004に統合、欠番
4	SK54001	K2	近世	(0.6)	0.5	0.1	土師器	
4	SE54002	K2他	17ｃ後半～ 18世紀	4.2	－	2.2	肥前磁器、瀬戸・美濃鉄絵鉢、常滑甕、軒丸瓦、軒平瓦、桟瓦	井戸枠：結物1段、水溜：常滑甕 旧SG54002
4	SD54003	KL2	近代	(2.0)	1.0	1.0		礫多い。溝または暗渠
6	SE56001	P10	近世	(2.1)	0.8	(0.5)	土師器	水溜か
7	SF57001	Q11	近世	(1.7)	(1.2)	0.1	焼土	

Ⅳ 遺 物

1．出土遺物の概要

今回の出土遺物は江戸時代の土器・陶磁器・瓦・木製品などで、総量はコンテナ換算で125箱（967.5㎏、木製品除く）である。

遺物は江戸時代の陶磁器や瓦が大半で、わずかに戦国時代以前のものがある。このほか、近代の遺物には、明治から昭和の安濃津地方裁判所にかかわる遺物など、土地の来歴を知る上で重要なものがあるが、整理期間の都合上、その大半を図化するには至らなかった。これらは概略を記すにとどめ、一部の遺物を図または写真で示した。

ここでは、遺構出土遺物（遺構番号順）、表土・包含層・その他出土遺物の順に説明する。その際、時期決定のしやすい陶磁器を中心に記述し、遺物の時期は生産地の年代観で示す。編年や分類の典拠は例言を参照されたい。各遺物の製作技術などの詳細は、遺物観察表（第7表）に記した。

軒平瓦・軒桟瓦の分類　出土した近世軒瓦のうち、軒丸瓦は点数が少なく分類は困難であるが、軒平瓦・軒桟瓦はある程度の文様分類や、産地・系統の推定が可能である。ここでは、金子智氏の分類案[1]をもとに分類し、記述を簡略化したい（第20図）。

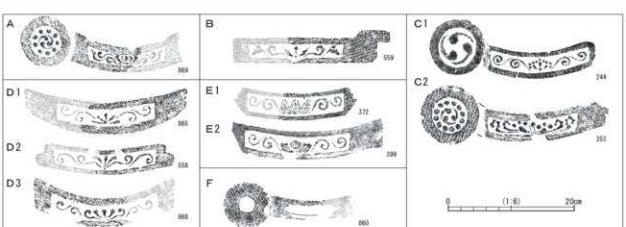
大きくは、唐草文に子葉のあるもの（江戸ないし大坂式）と、唐草文に子葉のないもの（東海系）、唐草文以外のものに三分され、さらにA～Fの6種類に細分する。

A類：中心飾りが孤線状で、子葉をもつもの。文様の構成は「江戸式」とされる金子分類のA類に類似する。

B類：中心飾りや唐草文が橋状で、子葉をもつもの。唐草は上向きである。金子分類のB類（大坂式）に類似する。今回出土したB類は、いずれも塀や土蔵窓桟に用いる塀瓦である。

C類：唐草は子葉がなく、中心飾りが花弁状のもの。金子分類のC類（東海式）に相当する。中心飾り・唐草が繊細な表現のものをC1、唐草や点文が重厚で、唐草にくびれのあるものをC2とする。金子氏の編年ではC1が18世紀代、C2が19世紀代に位置づけられている。唐草は、C1が内から下向き・上向きで、C2が内から上向き・下向きである。

D類：中心飾りが三弁ないし五弁の花弁状で、唐草の構成はC類と同じである。中心飾りが五弁となるものをD1、三弁で唐草が2連のものをD2、三弁で唐草が3連のものをD3とする。D類の中では、D1が比較的多く出土している。



第20図　軒桟瓦・軒平瓦分類図（1:6）

E類：中心飾りが三葉文のもの。唐草の構成はC類と同じである。中心飾りの高さがあるものをE１、高さのないものをE２とする。なお、津藩藤堂家の家紋は蔦文であるが、現時点でE類と蔦文との関係は不明である。

F類：瓦当の外縁が厚く、丸・平瓦それぞれを蛇の目（凹形）とするもの。

これらの系譜や類例については、後章で再論する。

２．遺構出土遺物

ＳＫ51001（第21図）　１は瀬戸・美濃系磁器の湯呑碗である。２は常滑赤物の甕で、底部を打ち欠き穿孔している。扇浦分類のＢ類にあたるが、胴部が砲弾形で口縁部外端が断面台形の鍔状となる。ともに19世紀代の遺物である。

ＳＫ51002（第21図）　３～５は口径９㎝前後の土師器皿である。６は輪花のある肥前系磁器皿で、見込みに圏線がみられる。

ＳＫ51003（第21図）　遺物の年代的下限は19世紀初頭から前半であるが、18世紀代の遺物が多く混じっている。７～50は南伊勢系ないし中北勢系土師器の土師器皿で、完形ないし完形に近いものが多い。土師器皿はＳＫ51006の直上に多かったことから、ＳＫ51006由来の遺物が混在している可能性がある。皿の口径は６㎝未満（７～14）、６㎝以上８㎝未満（15～24）、８㎝以上10㎝未満（25～41）、10㎝以上13㎝未満（42～50）に四大別でき、いずれにも油煙が付着することから、口径にかかわらず灯明皿に用いられたことがわかる。51～53は焼塩壺である。51は凹字形の蓋で、内面に布目が残る。52・53は板作り成形で外面に刻印をもたない。18世紀後半のものであろう。54・55は南伊勢系土師器の焙烙である。

56～62は肥前系磁器である。57は1680年代頃の碗で、口紅と外面を呉須で塗りつぶす丁寧なつくりの碗。高台内銘款は「大明年製」である。58は肥前Ⅳ期後半の碗で、見込みに昆虫文を配する。59は蓋付の筒形鉢である。61は段重蓋で草花文がみられる。63～69は施釉陶器である。京都・信楽系の碗（63）や切高台・渦巻兜巾・透明釉の茶碗（64）、19世紀代の鉄釉土瓶（68）、瀬戸・美濃系は登窯第９小期の染付皿（66）、型紙摺りの鬢盥（67）、燗鍋（69）などがある。70は常滑の土管、71・72は寛永通宝で、71は文銭である。

図示したものの他に、肥前磁器の大皿片や染付青磁、肥前京焼風陶器碗、京都・信楽系陶器の平碗などが出土している。

ＳＫ51003･51083（第22～23図）　両遺構周辺の「攪乱」として取上げられた遺物であるが、他の攪乱とは区別するため、ここで取り扱う。遺物の構成はＳＫ51003やＳＫ51006と概ね共通し、18世紀後葉から19世紀前葉の遺物が中心であるが、19世紀中葉から後半の遺物も混じる。

土器は土師器皿（73～93）、焙烙（95）、板作り成形の焼塩壺（94）のほか、瓦質の焙烙（96）がある。96は底部外面に型作り成形時の型圧痕が残る。97は土人形で依を持つ人である。128は平底で肩の張る土風炉で、窓（火口）は残存していない。外面は布状具のミガキ、内面はケズリ調整とする。

98～107・109・129・130・132・133は施釉陶器である。98・102～104は京都・信楽系で、蓋付鉢ないし合子（102～104）が目立つ。109は安東焼のろくろ碗である。胎土は鼠色で、内面を白泥で化粧し、外面ののち内面に透明釉を掛ける。釉の光沢は強く、内面は釉が分厚く、ガラス化して貫入を生じている。高台内には小判枠に楷書体で「安東」の印銘がある。105は薄手の台付皿であるが、産地は不明。瀬戸・美濃系陶器は登窯第９小期の染付皿（107）や擂鉢（129）、植木鉢（132）、鍋（133）、19世紀後半の擂鉢（130）などがある。108は焼締陶器の蓋付鉢で、信楽産か。131・134は常滑製品で、131は平底の鉢、134は球形の鉢で内面に白色の付着物がある。

110～123は磁器で、肥前系磁器はⅣ期後半のものが多いが、Ⅴ期初め（18世紀後葉～19世紀前葉）の広東碗112や蓋付碗113がある。120は三足の植木鉢、121は合子などの蓋で色絵のもの。122は外面瑠璃釉の鉢、123は段重である。114～116は瀬戸・美濃系磁器で、端反碗115・116は19世紀前半から中葉とやや時期が下るもの。

124～127は軒瓦で、いずれも桟瓦であろう。瓦当文様はＥ２類（126）、Ｃ１類（127）がある。

ＳＤ51004（第23～25図）　土器・陶磁器は18世

紀後葉から19世紀前葉が年代的下限となる。土師器（135～140）は皿、中北勢系の羽釜形鍋（138）、南伊勢系の焙烙（139・140）からなる。焙烙140は19世紀頃に出現する器高の低いもの。142・143は凹字形の焼塩壺蓋である。144・145は土人形で、144は褐色の胎土に赤く彩色した犬形、145は白色胎土の猫形である。146～156・166は磁器で、製作年代は幅があるが、肥前Ⅳ期後半からⅤ期の151・155などが下限となろう。他に肥前Ⅱ期の型打ち皿（154）、赤絵油壺（153）などがある。141・157～165・167～171は施釉陶器である。瀬戸・美濃系陶器は三足の鉄釉火鉢（141）のほか、広東碗（161）、植木鉢（170・171）、徳利（168・169）など18世紀後葉以降のものが主である。165は京都・信楽系陶器の合子。173・174は桟瓦で、173はＤ１類、174はＣ１類である。

201～205は布基礎下に打設された捨杭である。25か所の杭痕跡から計56本を回収したが、重機で掘り上げたことや腐朽・折損のため、厳密な個体識別は困難である。捨杭の残存度はＳＤ51004西・北辺が良好で、東・南辺は総じて悪い。このうち、特に残りの良いもの５点を図化し、それ以外は長さ、直径、年輪数の計測値を示す（第５表）。樹種同定は、先端が残存する個体から25点を抽出して実施した。

捨杭は、取り上げ直後は樹皮付きであった（写真図版32）。いずれも木の元口（根元側）を杭上端、末口を先端とし、末口はノコギリで横挽きしたあと、幅広のチョウナで先を削ぎ落とす。杭を焼くなどの特殊な加工はない。先端の形状は201・202・205のように鉛筆状に削り出すものと、203・204のように四方を面取りするものがあり、前者が大半で後者は直径が細いものに限られる。枝はナタ等で粗く払い落とすが、これは生育時の枝払い痕かもしれない。

残存長は残りの良いもので200㎝前後であり、杭検出高との関係から、長いもので全長210～240㎝（７～８尺）前後の杭であったと推測される。

杭の直径は、11.4～16.5㎝（平均14.1㎝、n=53）、年輪数は21～47年（平均32.6年、n=52）である。概ね直径５寸前後、30年生の中径木が選択されていたとみられる。樹種は、同定したものはすべてマツ属複維管束亜属であり（Ⅴ章）、水湿に強いアカマツやクロマツが用いられていた。

第５表　ＳＤ51004捨杭計測表

遺物番号	遺構名	位置	残存長 (cm)	直径 (cm)	年輪数	備考	樹種試料番号
	SD51004	西P1	75.7	14.0	32		30
	SD51004	西P2-1	120.0	13.8	32		
203	SD51004	西P2-2	194.5	14.5	30		24
	SD51004	西P2-2	23.0	13.8	－	先端欠、破片	
204	SD51004	西P3-1	211.4	14.2	25		25
	SD51004	西P4-1	169.5	14.2	30		
	SD51004	西P4-2	188.0	14.0	28		
205	SD51004	西P4-3	215.7	14.8	30		26
	SD51004	西P5-1	168.0	14.8	36		
	SD51004	西P5-2	164.5	16.0	36		45
	SD51004	西P5-3	195.0	15.2	33		
202	SD51004	西P6-1	197.2	16.5	37		202
	SD51004	西P6-2	161.5	15.3	30		
	SD51004	西P6-3	206.7	13.8	34		44
201	SD51004	西P7-1	186.3	16.3	38		23
	SD51004	西P7-2	165.5	14.4	32		
	SD51004	西P7-3	169.5	13.4	35		
	SD51004	西P7-4	101.1	16.3	36		33
	SD51004	西P8-1	71.0	16.5	47		42
	SD51004	東P1-1	64.0	13.7	42		
	SD51004	東P1-2	51.3	11.8	31		
	SD51004	東P1-3	60.0	12.3	25		27
	SD51004	東P1-4	61.0	12.9	25		
	SD51004	東P2-1	90.5	13.2	29		32
	SD51004	東P3-1	35.5	－	－	先端のみ	
	SD51004	東P3-2	71.2	13.7	34		43
	SD51004	東P3-3	71.5	13.9	34		
	SD51004	東P4-1	35.0	12.2	30		
	SD51004	東P4-2	64.3	13.3	32		38
	SD51004	東P4-3	44.0	13.5	27		
	SD51004	東P4-4	57.1	14.1	36		
	SD51004	東P4-5	82.0	12.5	23		
	SD51004	東P5-1	69.4	12.2	24		28
	SD51004	北P1-1	111.0	12.4	24	先端欠	
	SD51004	北P1-2	134.0	16.2	43		46
	SD51004	北P1-3	153.7	12.6	31	先端欠	
	SD51004	北P1-4	154.0	12.8	30	先端欠	
	SD51004	北P2-1	80.5	13.3	34		40
	SD51004	北P2-2	40.0	11.4	36		
	SD51004	北P3-1	148.5	13.7	27	先端欠	
	SD51004	北P3-2	70.0	14.2	30		29
	SD51004	北P4-1	111.0	13.0	26	先端欠	
	SD51004	北P4-2	70.0	12.1	26		41
	SD51004	北P4-3	39.5	－	－	芯のみ	
	SD51004	北P5-1	120.6	13.4	25	先端欠	
	SD51004	北P5-2	90.9	12.5	27		36
	SD51004	北P5-3	113.0	11.8	21	先端欠	
	SD51004	北P5-4	65.0	15.3	29		
	SD51004	南P1-1	41.0	13.9	26		34
	SD51004	南P2-1	80.0	12.2	28		37
	SD51004	南P2-2	85.5	13.6	34		
	SD51004	南P3-1	109.3	13.4	32		31
	SD51004	南P4-1	43.3	12.7	29		35
	SD51004	南P4-2	24.2	－	－	先端のみ	
	SD51004	南P5-1	63.2	14.4	33		39
	SD51004	南P5-2	67.0	15.3	29		

ＳＫ 51005（第 24 図） 土師器は皿（175 ～ 193）、茶釜形鍋（194）、焙烙（195・196）などがある。焙烙はやや深さがある 18 世紀までのものであろう。肥前系磁器はⅣ期の碗の他に、肥前Ⅱ期の稜皿(197）がある。200 は煙管の火袋である。なお、図示したものの他に、鉄釘片が 20 点ほど出土している。

ＳＫ 51006（第 26 図） ＳＫ 51003 と同様に、18 世紀後葉から 19 世紀前葉の遺物が多いが、19 世紀中葉までの遺物も混じる。大半が上層（木端等の検出位置より上位）からの出土であり、検出の経緯からＳＫ 51003 と一連の遺物とみられる。

土器は土師器皿（206 ～ 211）、焙烙（212）の他に、瓦質の焙烙（213）、鍋（214・215）を含む。肥前系磁器は梵字文の碗（221）、筒形碗（227）などⅣ期後半からⅤ期初めのものが多い。他に蓋付鉢（228・230 ～ 232）や段重（233）があり、京都・信楽系陶器の合子蓋（240・241）と合わせ、蓋物が目立つ。瀬戸・美濃系磁器の端反碗（224）、小丸碗（226）もみられる。239 は瀬戸・美濃系陶器の植木鉢で、ＳＫ 51006 付近の遺構には植木鉢が多くみられる。242 は伊賀土瓶で、短い三脚が付き、釉は白色で焼き上がりはやや軟質である。肩部に篆書で「伊賀國」の印銘がある。この印銘は、宝暦年間（1751-1763）、藩主藤堂高嶷が伊賀丸柱村の陶工初代弥助に「伊賀國」「丸柱制」の二つの印を授け、藩御用品に押印したもので、初代弥助は安永 4 年（1775）に没し、印はその後二代弥助、文化 13 年（1816）には同業の岡本定八が所蔵するようになった[2]。242 は初代、二代弥助あるいは定八作と特定できる遺物で、18 世紀後半から 19 世紀初頭のものであろう。「伊賀國」の反対側にも印銘があり、「丸」より下は欠失している（写真図版 23）。243 は混入遺物で古代の鍋類把手。244 は軒桟瓦でＣ１類、245 は巴文軒丸瓦である。

ＳＫ 51007（第 27 図） 土器は土師器皿（247・248）、焙烙（249）があり、瓦質焙烙は小片含め出土していない。251 は肥前Ⅱ期の皿で、高台に砂粒が付着する。252 は瀬戸・美濃系陶器の擂鉢で、口縁部内面に段をもつ 18 世紀中葉のもの。253 は鉄絵のある京都・信楽系の鉢蓋である。254 は 18 世紀代の丹波甕で固く焼き締まる。京都・信楽系陶器を含むことから、概ね 18 世紀中葉から後半を下限とする遺物群である。なお、図示したもの以外に桟瓦がある。

ＳＫ 51009（第 27 図） 土師器皿（255・256）、瀬戸・美濃系陶器の碗（257）が出土している。

ＳＫ 51013（第 27 ～ 29 図） 土器は土師器皿（262 ～ 267）、瓦質焙烙（258・259）、南伊勢系の焙烙（260・261）がある。瀬戸・美濃系陶器は、登窯第 9 小期以降の染付広東碗（268）、鉢（270）、有耳壺（271 ～ 273）、徳利（274）、植木鉢（276）などで、273 は墨書「玉松ヵ」。常滑製品はすべて赤物で、土管（278）、脚付きの鉢（277）、平底の鉢（279）、扇浦分類のＤ～Ｅ類（18 世紀後半から 19 世紀前半）の甕または井筒（280・281）がある。

269・285 ～ 298 は磁器で、瀬戸・美濃系の端反碗（291）を含む。肥前系磁器は、Ⅴ期の広東碗（286・289・290）、端反碗（285・292）が多く、Ⅳ期後半の碗（288）や筒形碗（294）もみられる。碗 293 は高台内銘欽「冨貴長春」。他に、蓋付鉢や合子（295・296）、仏飯器（297・298）がある。陶器・磁器ともに 18 世紀後半から 19 世紀前葉のものが主体である。

299 ～ 305 は瓦で、軒桟瓦 300 はＣ１類。丸瓦 301 ～ 305 は土坑内に直立した状態で検出したものである。いずれも凸面はケズリ後ナデ、凹面はコビキＢや棒状のタタキがみられ、布目を残すものが多い。

ＳＫ 51015（第 29 図） 318 は肥前系磁器の筒形鉢で蓋の付くもの。外面に「福」「寿」の吉祥字がある。319 は瀬戸・美濃登窯第８～９小期の水甕で、底部に墨書「代丁ヵ」。320 は常滑赤物の鉢である。

ＳＫ 51019（第 27 図） 油煙の付着した土師器皿（282）が出土している。

ＳＫ 51021（第 27 図） 284 は土師器焙烙で、頸部の屈曲が少なく、緩やかに外反するもの。

ＳＫ 51023（第 27 図） 油煙の付着した土師器皿（283）が出土している。

ＳＫ 51026（第 29 図） 土師器皿（316・317）が出土した。

ＳＫ 51027（第 29 図） 土師器皿（306 ～ 308）はいずれも器高の低いもの。309 ～ 312 は磁器で、肥前Ⅴ期の広東碗（312）のほか、合子蓋（309）がある。施釉陶器は伊賀・信楽の鍋（313）、瀬戸・美濃系陶器の鍋（314）などで、図示していないが他に伊賀・信楽の鍋小片が多く出土している。

ＳＫ 51028（第 29 図） 321 は常滑赤物の鉢で、内面に使用痕や付着物はない。

ＳＫ 51029（第 29 図） 322 は常滑赤物の甕で、体部が砲弾形となる 19 世紀のものであろう。

ＳＫ 51030（第 29 図） 土師器皿（315）が出土。

ＳＫ 51031（第 30 ～ 32 図） 陶磁器の様相から、19 世紀前半までに廃棄された遺物群と考えられる。323 ～ 327 は磁器で、製作年代には幅があるが、瀬戸・美濃系磁器（324）が廃棄年代の下限を示す。325 は肥前Ⅳ期後半の「八」字形碗の蓋、326 は葡萄文を内外にあしらう球形の鉢である。328 は焼塩壺の蓋で、口縁の段がごく小さいもの。329 ～ 334・336 ～ 340 は施釉陶器で、瀬戸・美濃系陶器は、碗（329）のほか、錆釉の皿（333）、植木鉢（338）、緑釉三足盤（339）、水甕（340）などがある。京都・信楽系陶器は、合子（331）や伊賀・信楽の土瓶（336）、片口付きの鍋（337）がみられ、他に図示していない鍋、土瓶、灯明皿片が多数ある。334 は三足の付く鉄釉筒形香炉で、胎土は精良で焼き上がりは軟質である。335 は土器の蓋付壺で、底部外面に「カナ清」の印銘がある（写真図版 24）。342 ～ 344 は常滑赤物で、火消壺等の蓋（342）、火鉢（343）、蚊燻し（344）など火に関わるものが目立つ。345 は角柱状のガラス製品で簪か。

346 ～ 393 は瓦で、図示したもの以外に 42kg の瓦片が出土した。軒丸瓦（346・347）もあるが、大半は桟瓦で、被熱したものが多い。軒桟瓦はＣ類が最も多く、Ｅ類がこれに次ぐ。377 はＡ類、383 はＢ類で塀瓦である。Ｃ類はＣ１類（365・375・376・379・381・382）が多く、Ｃ２類（353）は少ない。Ｅ類はすべてＥ１類（371 ～ 374）である。367 ～ 370・378 はＦ類である。384 ～ 390 は丸瓦で、凸面はケズリ後ナデ、凹面はコビキＢ、タタキ、布目がみられる。391・393 は平瓦で、393 は凸面に寛永通宝の圧痕がある。392 は袖瓦である。

ＳＫ 51032（第 33 図） 瓦が多く出土しており、図示したもの以外に 40kg 出土した。399 は軒桟瓦Ｅ２類で、三葉文がＳＫ 51031 出土のものに比べ寸詰まりのもの。他に、軒丸瓦（400）、平瓦・丸瓦（401 ～ 404）があり、403 は凹面にナデ、404 はコビキＢとタタキがみられる。土器・陶磁器は肥前Ⅳ期の碗（395）や瀬戸・美濃系陶器の碗（396）、尾呂徳利（397）、常滑赤物の火鉢（398）がある。398 は内面に煤が付着している。

ＳＫ 51033（第 34 図） 瀬戸・美濃系陶器皿（405）、土師器皿（406 ～ 408）、中北勢系の羽釜形鍋（409・410）、南伊勢系の焙烙（411）がある。424 は丸瓦で、凹面にコビキＢ、刺突状のタタキがみられる。

ＳＫ 51034（第 34 図） 土師器皿（412 ～ 414）、高台内に二重方形枠の磁器鉢（415）が出土した。図示したもののほかに、肥前Ⅳ期後半の磁器碗がある。

ＳＫ 51035（第 34 図） 土師器皿（422）、軒桟瓦Ｄ類（423）がある。

ＳＫ 51038・51039（第 34 図） 遺構が重複しており両遺構を一括して記述する。425・426 は肥前Ⅳ期の碗である。427・430 は常滑赤物甕で、427 は 18 世紀後半以降、430 は 18 世紀中葉から後半のもの。内面に付着物はない。431 は古墳時代後期の須恵器杯で混入遺物である。

ＳＫ 51040（第 35 図） 17 世紀末から 18 世紀前半の遺物が多く、18 世紀後半のものが若干混じる。

土師器は皿（435 ～ 444）、中北勢系の羽釜形鍋（448）、南伊勢系の茶釜形鍋（446）、焙烙（447・449・450）があり、他に土師器皿片が多数出土した。瓦質焙烙はみられない。445 は凹字形の焼塩壺蓋である。肥前系磁器は、型紙摺りの碗（451）や、「大明成化年製」の碗（452）、五弁花・鳧「福」の揃いの皿（455 ～ 459）、432「大明年製」と同型の皿（460）など、1680 年から 1720 年代のものが主体である。ただし、雲文・吉祥字の碗（454）は肥前Ⅳ期後半からⅤ期初めのもの。468 は白磁小杯である。

施釉陶器は肥前系陶器を含み、内野山北窯Ⅰ期（17 世紀前半）の皿（470）、Ⅲ期（17 世紀末から 18 世紀前半）の銅緑釉碗（463）や、図示していないが 18 世紀代の鉢・甕がある。瀬戸・美濃系陶器は、登窯第７小期前後の膠錆茶碗、第６～７小期の摺絵皿など 18 世紀前半のものが多い。一方で、京都・信楽系の平碗（469）などやや新しい様相のものがある。473 は軟質施釉陶器の線香立てで、内面のみ黄色釉を施釉する。474・475 は胎土が鼠色を呈し、内外を白泥で化粧したのち灰釉を厚く掛ける碗で、釉はガラス化し光沢と貫入が顕著である。色絵素地

の可能性もあろう。474は京焼風の杉形碗、475は端反の碗ないし鉢で、ともに高台内側を削り出さず、甘く仕上げている。この474・475は産地が不明で、Ⅵ章で後述するように、京焼風陶器のうち古萬古や安東焼（109）との関連を検討する必要がある。477は鉄製品で、数寄屋建築等に用いる頭巻釘である。

ＳＫ51041（第35図） 土器は土師器皿が多く、油煙が付着するものは口径10cm未満である（478～489）。焙烙（496・497）は南伊勢系。瓦質焙烙はない。磁器は肥前Ⅳ期前半で、500は型紙摺り。瀬戸・美濃系陶器は第１段階の鉄絵鉢（502）、削出高台の天目茶碗（503）、丸皿（505）のほか、図示していないが登窯第２段階第６小期の擂鉢がある。以上は17世紀末から18世紀前葉の遺物群とみられる。

ＳＫ51045（第34図） 416は煙管で、18世紀前半までに多い肩付のもの。肩部は断面八角形である。

ＳＫ51046（第34図） 肥前磁器の油壺（418）、土師器皿（419・420）、瀬戸・美濃の灰釉碗がある。

ＳＫ51048（第34図） 432は肥前系磁器の輪花皿で、高台内銘は欠失するが「大明年製」か。同型の皿がＳＫ51040にある。他に土師器皿（433）や瀬戸・美濃系陶器の擂鉢（434）がある。

ＳＫ51049（第36図） 本遺構はＳＫ51040と重複しており、肥前系磁器のうち455などと揃いの皿（512）、波佐見の輪禿皿（513）、二重方形枠に渦「福」の皿（514）はＳＫ51040に伴う17世紀末から18世紀前半の遺物であろう。517は瀬戸・美濃系陶器の鉄絵土瓶、518は伊賀・信楽の土瓶でいずれも青松を描く。19世紀のものであろう。甕519は鉄釉を垂下させ、胎土に長石を多く含む。丹波産か。

ＳＫ51050（第36図） 17世紀後半から18世紀前葉の遺物群である。瀬戸・美濃系陶器は登窯第１段階の折縁皿（524）や端反皿（525）、第２段階の丸碗（523）、擂鉢（526）などがある。527～530は肥前系磁器で、527は型打ち成形の輪花皿で高台に砂が付着する。529は鳥形の合子蓋、530は小型の油壺である。531は17世紀の常滑赤物甕で、内面下半に付着物が厚くみられる。土器は土師器皿（532～534）と南伊勢系の焙烙がある。

ＳＫ51051（第36図） 肥前系磁器は杯（539）、朝顔形碗（540）、瀬戸・美濃系陶器は平面六角形・輪花の折縁皿（541）がある。骨角製品542は薄い板状で、中央に円孔を穿つ。

ＳＺ51058（第36図） 同形同大の土師器皿（543～554）で、油煙など使用痕は確認できない。平底の底部にヨコナデで口縁部を立ち上げ、口縁端部を軽く摘み上げるなど、製作技術が共通しており、同じ製作地（者）の皿をセットで埋納した可能性が高い。

ＳＫ51059（第37図） 555は常滑赤物の甕で、内面に厚い付着物があり、便槽に用いられたものか。

ＳＫ51060（第37図） 556は常滑赤物の甕で、内面の付着物はない。557は瀬戸・美濃系陶器の水盤で、高台を削り出すもの。558は軒桟瓦でＤ２類、559は塀瓦でＢ類である。

ＳＫ51062（第38図） 18世紀代の遺物も混じるが、19世紀前半の遺物が主体である。571は瀬戸・美濃磁器端反碗蓋である。572は瀬戸・美濃系の陶胎染付で登窯第10小期以降のもの。他に鍋（576）、伊賀・信楽の土瓶（575）や薄手で焼成が非常に堅緻な鉄釉汁注（577）などがある。573は常滑赤物の蚊燻し、574は瀬戸・美濃系陶器の水甕である。

ＳＫ51064（第37図） 561は瀬戸・美濃系陶器の鉄釉丸碗で18世紀代のもの。他に土師器皿（562～564）がある。

ＳＥ51065（第37図） 565は渥美型第６型式の山茶碗。566は土師器焙烙で、いずれも混入遺物。

ＳＫ51066（第37図） 567は瀬戸・美濃系陶器の鉄絵鉢で登窯第５～６小期のもの。17世紀末から18世紀初頭に位置づけられる。

ＳＫ51067（第38図） 578・579は常滑赤物の甕で、遺構に据え付けられていたもの。578は胴部中央が最大径となる18世紀代の甕で、底部中央を穿孔している。579は底部全体を打ち欠いて筒状にしたもので、口縁部形態は扇浦分類のＤ類に相当し、18世紀後半のものとみられる。他に鳥笛（582）が出土した。583は混入遺物で、弥生時代終末期から古墳時代前期の土師器高杯である。

ＳＥ51070（第39図） 584～588は井戸枠（結物）の部材で、樹種は上段・下段ともヒノキである。側板の幅は上より下がわずかに広く、櫃が若干広い結筒だったとみられる。584・585は上段で、やや薄手の板を用いる。上部は腐食しており、外面下位に

タガの圧痕が１段残る。外面は銑状工具によるケズリ、側面は台カンナで調整し、内面下端は斜めのケズリで厚さを減じて下段との重ね代としている。木取りは中杢目または板目である。586～588は下段で、上段に比べ厚手の板材を用い、２段のタガと側面の木釘で部材を結合する。外面は銑状工具によるケズリ、側面は台カンナで調整し、下端は基盤層に打ち込むため、両面からチョウナ等で加工し尖らせている。上端外面は上段結物と重なっていたため、加工痕の残りが良い。上端内面は釣瓶などの当たりで摩耗する。木取りは板目で、木表を外側に向けている。

ＳＫ51071（第40図） 594など肥前Ⅳ期前半の磁器を含むが、主体となるのはⅣ期後半の碗（597）、小丸碗（599）、猪口（600）などである。601は色絵の合子蓋、604は袴腰形の青磁香炉である。611は青磁の鉢で、高台内を釉剥ぎする。

瀬戸・美濃系陶器は、緑釉筒形碗（602）、登窯第２段階の丸碗（605）や小碗（606・607）、第８～９小期の水甕などがある。京都・信楽系陶器は、鉢（603）、小碗（608）、絵付のある鉢等の蓋（609）などで、伊賀・信楽の鍋・土瓶などを含まない。615は常滑赤物の植木鉢、616は備前系の焼締陶器壺で、外面にカキメを施す。617は軒桟瓦Ｄ１類、618は土人形で天神である。619は瓦を転用した瓦砥で、筋状の刃研ぎ痕が残る。

磁器や施釉陶器の様相から、18世紀後半から19世紀初めごろの遺物群と考えられる。

ＳＫ51072（第40図） 瀬戸・美濃登窯第１段階の丸皿（620）、信楽の焼締陶器鉢（623）、南伊勢系土師器焙烙（624）などがある。

ＳＫ51073（第40図） 磁器は瀬戸・美濃の端反碗（627）を含み、陶器は瀬戸・美濃登窯第８～９小期の鎧茶碗、焼締陶器の鍋蓋（631）、胎土に長石を多く含む信楽鉢（630）などがある。他に、朝顔形の碗（625）や磁器碗または皿（636）、牛乗り人形（632）、瓦質焙烙（634）がみられる。18世紀後葉から19世紀前半の遺物である。

ＳＫ51074（第40図） 瀬戸・美濃登窯第８～９小期の筒形香炉（635）、伊賀・信楽の鍋（636）など、18世紀後葉から19世紀初めごろの遺物がみられる。

ＳＥ51076・51077（第41～43図） 637～648は井戸枠（結物）の部材である。重機で掘り上げたため遺構の識別ができないが、それぞれ上下２段の結物とみられ、上部が腐食するものを上段結物１・２、完存するものを下段結物１・２と呼称する。樹種はすべてヒノキである。

上段結物１（637～639）は、主面に割肌が残り、ごく一部をチョウナで整える。下端はチョウナで粗く削り、側面は台カンナをかける。木取りは板目または柾目で、柾目の639は柱などの角材を割り割いたとみられ、接合できないが同一母材に由来すると思われる部材が複数ある。上段結物２（640～642）は、割肌の一部を銑状工具で整え、下端はチョウナで粗く削り、側面は台カンナをかける。木取りは板目または追柾目である。上段結物１・２とも、粗いつくりの結物である。側板の幅は、上より下がわずかに広く、裾が若干広い結筒だったとみられる。

下段結物１・２（643～648）は、主面を銑状工具で整え、側面に台カンナをかける。上段に比べ加工痕の残りは良い。下端は特に加工をしておらず、上端内面は摩耗している。木取りは板目または追柾目で、木表を井戸の外側に向ける。下段結物２（646～648）には上下二段のタガの圧痕が残る。側板の幅は、下段結物１では上より下がわずかに広いが、下段結物２は上下で差がない。

649・650は井戸内出土の木製品で、649はモミ属の杭、650はスギ製の手桶で、把手に抉りをもつことから釣瓶に用いたものとみられる。側板の主面は銑状工具で縦・斜め方向に整え、側面に台カンナをかける。把手は木釘で側板と結合し、側面に墨書「宮ヵ」とある。底板は欠失しており、圧痕が残る。

ＳＫ51079（第43図） 昭和初期の遺構であり、近世軒桟瓦（651）は混入遺物。652は機銘薬莢で、底面に「No. 6」の刻印があり、内面に昭和７年（1932）の新聞紙が充填されていた。他の共伴遺物は３節で後述する。

ＳＫ51080（第43図） 昭和初期の遺構であり、653は混入遺物である。常滑真焼の広口壺で、口縁から頸部が「く」字状を呈し、口縁端部はナデで面取りされる。他の遺物は３節で後述する。

ＳＫ51081（第43図） 654・655は肥前Ⅳ期の磁器丸碗で、若松文などがみられる。656は京焼風陶器

の灰釉碗で、高台付近は錆釉がけとする。657は京都・信楽系陶器の合子蓋である。658は瀬戸・美濃系の筒形香炉で輪高台のもの。659は信楽の四耳壺で、いわゆる献上茶壺である。体部上半には錆釉を塗り、肩部に鉄釉を掛け流すもの。

ＳＫ53001（第44～47図） 肥前系磁器はⅣ期後半からⅤ期初めのものが中心で、梵字文の碗（672）、小丸碗（673）、四方襷文の碗蓋（671）、猪口（677）や鉢（676）などがあるが、広東碗や瀬戸・美濃の磁器を含まない。また、この時期に多い染付青磁やコンニャク印判のくらわんか手は小片も含め少ない。見込みに五弁花や高台内銘款のある679・691は1680年代から18世紀前半のものである。675は見込みにコンニャク印判五弁花・蛇の目釉剥ぎのある18世紀後半の波佐見製品である。碗以外では、口紅のある筒形鉢（678）、色絵鉢（683）、段重などの蓋物（684～690）、蛇の目凹形高台の皿（692）、小杯（693・694）、水滴（695）などがある。なかでも、蓋物の多さが特筆されよう。

瀬戸・美濃系陶器は、登窯第9小期の擂鉢（697）や合子（709）、馬の目皿（707）が年代の示標で、他に呉須絵の碗（698）や錆釉の徳利（702）、灰釉鍋（705）などがある。鉄絵十草文の茶碗（699）、700は信楽の四耳壺で、胎土に長石を多く含み拓器質である。708・710～712は京都・信楽系陶器で、708は見込みに3ヶ所の目跡が残る。710は水滴で上面に草花文を描く。711・712は合子である。713・714は板作り成形の焼塩壺と蓋である。常滑製品はすべて赤物で、火鉢（715）、植木鉢（716）、18世紀代の甕（717）がある。717は内面に付着物があり、便槽か。718～721は瓦質焙烙で、底部外面に外型の圧痕と離れ砂(雲母粉)が残る。南伊勢系の焙烙はない。

722～752は瓦で、図示したもの以外に146kg出土した。いずれも細かく破砕して廃棄したようである。722～731は丸瓦で、凹面に布目を残し、タタキやコビキＢがみられる。732～739は平瓦で、凸面は型の圧痕が残り、凹面は丁寧にナデで整える。740・741は桟瓦片である。742～748は軒桟瓦で、745・748はＣ１類、747はＢ類の塀瓦である。750・751も塀瓦、752は側面に目釘穴のある瓦である。

土器・陶磁器の様相から、18世紀後葉から19世紀初頭を年代の下限とする遺物群とみられる。

ＳＤ53002（第48図） 753は角柱形の砥石である。754は常滑赤物の鉢。

ＳＤ53004（第48図） 土師器皿（755～757）、肥前Ⅳ期の磁器（758・759）、常滑赤物の甕（760）がある。761は三葉文のある鬼瓦である。

ＳＫ53005（第48図） 肥前Ⅱ～Ⅲ期の折縁皿、18世紀代の堺・明石系擂鉢（763）がある。

ＳＥ54002（第48・49図） 765～769・771・772は井戸枠検出前の上層出土遺物で、1680～1730年代の磁器染付碗（765）、瀬戸・美濃登窯第4～5小期の折縁皿（767）や鉄絵鉢（769）、京都・信楽系の蓋付鉢（766）、軟質の無釉陶器壺（768）、軒平瓦（771）、17世紀後半代の常滑赤物甕（772）がある。他に図示していないが、桟瓦や塀瓦、瀬戸・美濃天目茶碗、肥前系陶器鉢などがみられ、上層出土遺物は17世紀後半から18世紀前半を中心に、一部18世紀後半の遺物を含むと考えられる。

770は井戸枠検出後の掘方から出土した軒平瓦で、唐草文が一連となるタイプは今回の調査では本例のみである。他遺構出土軒平（桟）瓦よりも古相のものか。773は井戸最下部の水溜に用いられた常滑赤物甕で17世紀後半のものである。

774～777は井戸枠（結物）の部材で、21点中4点を図化した。側板は長さ約130cmとやや長手の板材で、樹種はすべてヒノキである。側板の幅は、上より下がごくわずかに広く、裾が若干広い結筒だったとみられる。外面は製材時の縦挽きノコギリ痕が中央に残り、縁辺のみ銑状工具で削る。内面は銑状工具で削り、加工痕は外面よりも幅狭である。下端は基盤層に打ち込むため、チョウナで薄く尖らせる。側面は台カンナで整える。木取りは板目で、木表を外側に向ける。タガの圧痕は下半に2段分残る。

３．表土・包含層・その他出土遺物

包含層や表土掘削中に出土した遺物や、調査中に「攪乱」として処理した近世・近代の「遺構」出土遺物、工事立会出土遺物を扱う。出土グリッドは遺物観察表（第7表）を参照されたい。

近世の遺物（第50～53図） 778～798は土師器皿

で、口径に関係なく灯明皿の使用痕がみられる。805～807は焼塩壺で、807は板作り成形の無銘のもの。799～802は南伊勢系土師器の焙烙である。803は瓦質焙烙で紐孔を有する。804は土製品の鳥笛である。

808～819は肥前系磁器で、肥前Ⅳ期のものが多い。809は色絵の小碗で、赤絵の他に金泥もみられるが、装飾は抑え気味である。811は体部が直線的に開く碗で、焼継ぎされている。813～815は段重などの蓋付鉢である。816は肥前Ⅴ期の香炉で、短い脚が付き、染付文様が簡素なもの。818は口紅のある花菱形の小皿である。819は径約10寸の深手の大型皿。832は蛇の目凹形高台の青磁香炉である。820～831・833～850は陶器で、820は外面に楼閣山水文を描く肥前京焼風陶器。822は肥前の陶器茶碗か。瀬戸・美濃系陶器は登窯第2段階の丸碗(821・823)や19世紀代の片口鉢(824)、第8小期の梅文皿(830)、第1段階の反り皿(831)、型紙摺りの鬢盥(833)、輪禿皿(834)、第8～9小期の染付皿(835)、灯明皿・秉燭(837～839)がある。844は削出高台の灰釉輪花水盤で、内面に目跡が4ヶ所ある。846・847は登窯第8～9小期の水甕、848は登窯第9～10小期の擂鉢で、内面に「大」の押印文がある。825～829は京都・信楽系陶器の合子や平椀で、829は高台に墨書するが判読できない。840～843は伊賀・信楽または瀬戸・美濃の鍋類である。849は信楽の四耳壺で、いわゆる献上茶壺である。胎土に長石粒を多く含む。

853～869は軒瓦である。853～854は巴文軒丸瓦で、瓦当文様は界圏がなく、巴文と珠文のみである。軒平・軒桟瓦はA類(869)、C1類(866)、D1類(863～865)、D3類(868)、E2類(861・862)、F類(859・860)などがある。なお、861は隅瓦である。

870～872は銅製品である。870は短刀の鍔で、象嵌などの装飾はない。871は煙管吸口で18世紀後半以降のもの。872は寛永通宝である。

近代の遺物（第51図） 845・850～852は近代の遺物である。845は皿で、内面に吹絵の梅文、外面に鉄絵の線描がある。瀬戸・美濃で吹絵製品が現れる明治27年(1894)以降のものであろう。850は通い徳利であるが、屋号は判読できない。851・852は美濃統制陶器の磁器筒形容器で、底部にクロムで「岐902」「岐801」と記される。

その他（第6表、写真図版35・36） 図示したものの他に、1区のSK 51079・51080・51084・51085、その他の攪乱から昭和初期のガラス瓶や陶磁器などがまとまって出土しているが、遺構名を付与せず単に「攪乱」「方形攪乱」などとして取り上げたものは、出土遺構の検証と特定が困難であった。このため、「攪乱」出土遺物は資料の一括性・同時性を担保できないものが多い。しかしながら、これらの資料を通覧すると、概ね近似した時代に比定できる可能性が高いと判断されることから、取り上げグリッドごとの遺物の概要を示し、当該期の遺物組成を明らかにしたい。

昭和初期の遺物は、安濃津地方裁判所、検事局の什器や消耗品と、酒・飲料・食品・化粧品などの日常生活用品が多いが、小児用の医薬品や玩具、食器も含んでいる。ガラス瓶は酒類(ビール)、清涼飲料水(サイダー・ラムネ)、牛乳、食品(海苔佃煮など)、医薬品、文具(インク)、化粧品などである。瓶は完形品や蓋付きが大半で、インクなど内容物が付着するものがある。使用直後に土坑に廃棄されたと考えられ、製造年代と廃棄年代の差は少ないといえよう。

ガラス瓶のうち年代の参考になるものは、昭和5年(1930)発売「磯志"まん」[3]、昭和8年(1933)発売の「わかもと」[4]など、1930年代以降に登場する銘柄を含み、資生堂製品など化粧品クリームの瓶は昭和13年(1938)以降の陶器代用品に置き換わっていない時期のものがある。高橋東洋堂「アイデアル コールドクリーム」は昭和12年(1937)発行の雑誌広告に同型の容器がみられる[5]。

ガラス素地は、無色ガラスのほか、青・緑・ピンクなど色ガラスを多く含んでおり、昭和16年(1941)頃に物資不足から出回った黒い牛乳瓶を含まない。また、昭和18年(1943)にビール銘柄、商標が廃止されるが[6]、ビール瓶は「大日本麦酒」や「キリンビール」など商標のあるもののみが出土している。他に、昭和18年(1943)まで安濃郡塔世村に所在した「津市民病院」の薬品瓶がある[7]。なお、銘柄や商標は戦前から戦後に存続したものが多いが、戦後新たに登場した銘柄や商標の瓶は確認できない。

ガラス瓶と共伴する遺物には、墨書「檢事局」の急須、昭和５年以降の東洋陶器製硬質陶器皿[16]、昭和13年以降の陶器代用品容器、昭和15年８月（瀬戸）、昭和16年３月（美濃）以降の瀬戸・美濃統制陶器[18]が含まれる。他に洋食器や歯ブラシなどの生活用品、機銃薬莢（652）、碁石などが出土した。

小児用の食器には、戦闘機と日章旗を描く子ども茶碗や、漫画風の動物を描く豆皿、クロムでロ縁部下に太く２条の圏線を描く小皿（国民食器か）がある。玩具はビー玉やおはじきの他、陶製のままごと道具があり、冷蔵庫やティーカップ、擂鉢、海老や、珍しいものでは当時植民地だった台湾から大量に輸入され、安価で身近な果物だったバナナがある[19]。

以上のように、遺物の製造年代は数年程度の差があるが、昭和８年以降、特に昭和12年頃から17年までの間に廃棄された遺物群とみられ、遺物の構成からも、戦局の悪化が国民生活に深刻な影響を及ぼす前の段階のものと判断される。

工事立会出土遺物（第53図） 873は工事立会①－４区の溝から出土した開元通宝で、古代・中世に流通した輸入銭。874は工事立会⑥－９層（基本層序Ⅴ層）から出土した丸瓦で、高虎修築前の安濃津城に関わる瓦の可能性がある。焼成は軟質で、凸凹面とも摩滅する。凹面は布目痕がみられるが、コビキの有無や種類は判別できない。875は染付青磁の筒形碗で、見込みに五弁花がある。肥前Ⅳ期後半のもの。877は12型式の常滑赤物甕、878は瀬戸美濃大窯４～登窯第１小期の擂鉢で、戦国末から江戸時代初めのもの。879は阿漕焼の灰釉花入ないし灰落しでフラスコ形のもの。外面に鉄絵で草文を描く。底部は平底で小判枠に「阿漕」の印銘がある。（櫻井）

註

（1）金子智「江戸遺跡出土資料に見る近世軒平瓦・軒桟瓦の地方色」『古代』101号、早稲田大学考古学会。

（2）桂又三郎『伊賀焼通史』河出書房、1968年。

なお、「伊賀國」拝領印および関係文献について、水谷侃司氏の教示を得た。

（3）磯じまんは大正15年（1926）創業、昭和５年（1930）に海苔の佃煮「磯じまん」を発売したといい（磯じまん株式会社HP https://www.isojiman.co.jp/）、出土品と同型の瓶が「昭和10年頃」と紹介されている。

（4）わかもとは、創業昭和４年（1929）で、昭和８年に整腸剤「わかもと」の販売を開始している（わかもと製薬株式会社HP https://www.wakamoto-pharm.co.jp/）。

（5）高橋東洋堂「アイデアル コールドクリーム」は、昭和12年（1937）発行の雑誌広告に同型の容器がみられる（Webサイト「昭和モダン好き」http://showamodern.blog.fc2.com/ 2013年09月27日記事「広告「アイデアルコールドクリーム」（1937）」）。コールドクリームは大正12年から販売されている（註６、櫻井2006）。マスター尚美堂は大正14年創業で、東京小間物化粧品商報社『小間物化粧品年鑑 昭和９年』1934年／東京小間物化粧品商報社『小間物化粧品年鑑 昭和17年』に広告や会社情報が掲載されている。

（6）昭和13年以降のガラス製品の動向は以下のとおり。

・昭和13年（1938）：板ガラス以外のガラス製品が統制

・昭和16年（1941）：物資不足から黒い牛乳瓶が出回る

・昭和18年（1943）：ビールが配給制となり、銘柄、商標が廃止され、「麦酒」に統一

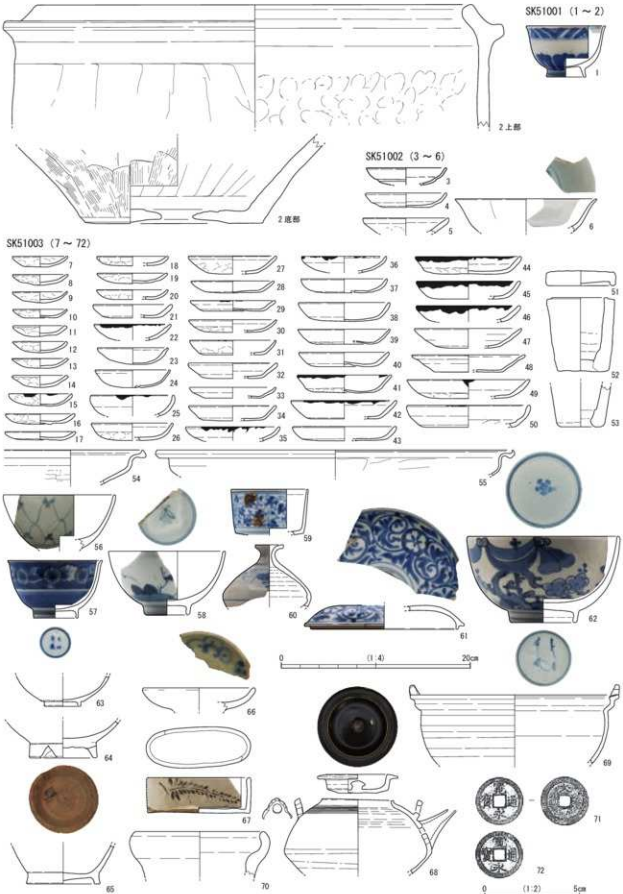
（櫻井準也『ガラス瓶の考古学』六一書房、2006年）

（7）津市立病院は明治43年（1910）から、安濃郡塔世村（津市栄町）に所在した。昭和18年（1943）に津市立病院が移管され、三重県立医学専門学校附属病院となる（三重大学医学部附属病院HP https://www.hosp.mie-u.ac.jp/）。

（8）東陶式トンネル窯（通称ＴＴＫ）による硬質陶器生産は、昭和５年（1932）以降という（ＴＯＴＯ株式会社『ＴＯＴＯ百年史』2018年）。

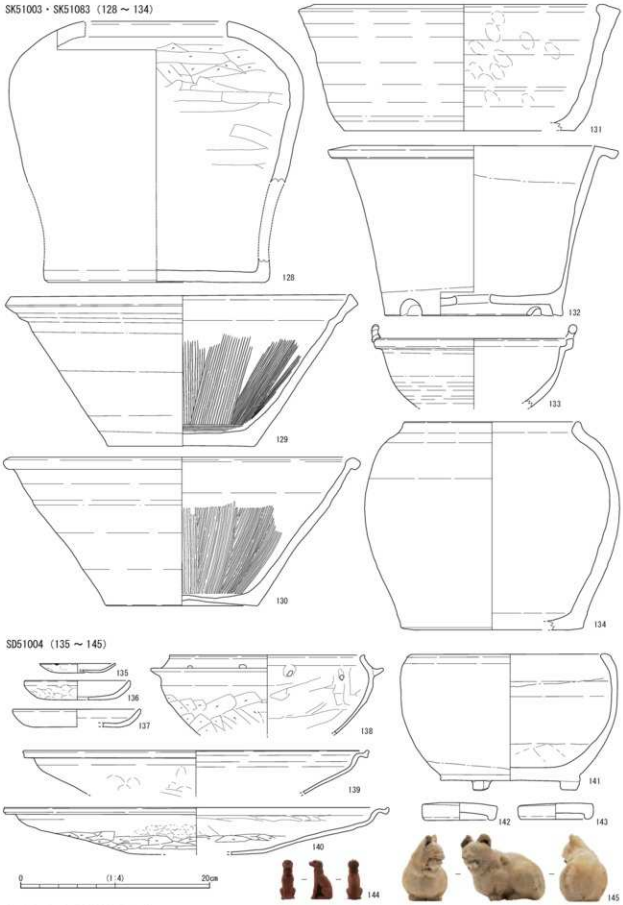
（9）瑞浪市陶磁資料館『番号の付されたやきもの 戦時下の瑞浪窯業生産』2012年。

（10）昭和７年（1932）東京神田の青果市場では450グラムが６～10銭、江東青果市場では375グラムが4.5～７銭ほどであった。その後、日本へのバナナ輸入は増加を続け、昭和12年（1937）には最多の約313万籠、太平洋戦争開戦直前の昭和16年（1941）にも約152万籠が輸入されていたが、戦局の悪化に伴いバナナの輸入は減少の一途を辿り、1945年８月の終戦時までにほぼ途絶した（国立公文書館アジア歴史資料センターHP「バナナが高級品だったってホント？」https://www.jacar.go.jp/glossary/tochikiko-henten/qa/qa12.html）

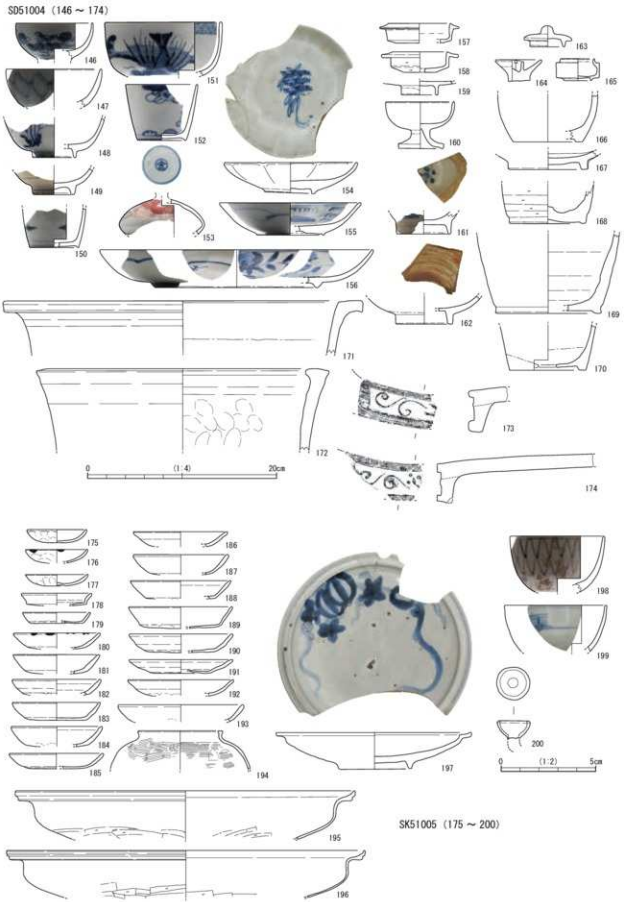


第21図　出土遺物①（1:4、71・72は1:2）

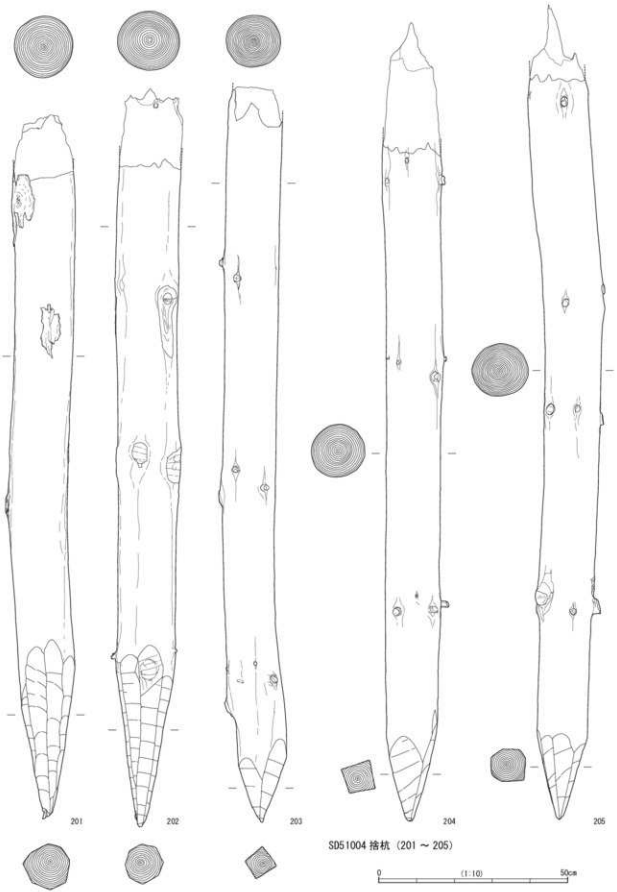
第 22 図　出土遺物② (1:4)



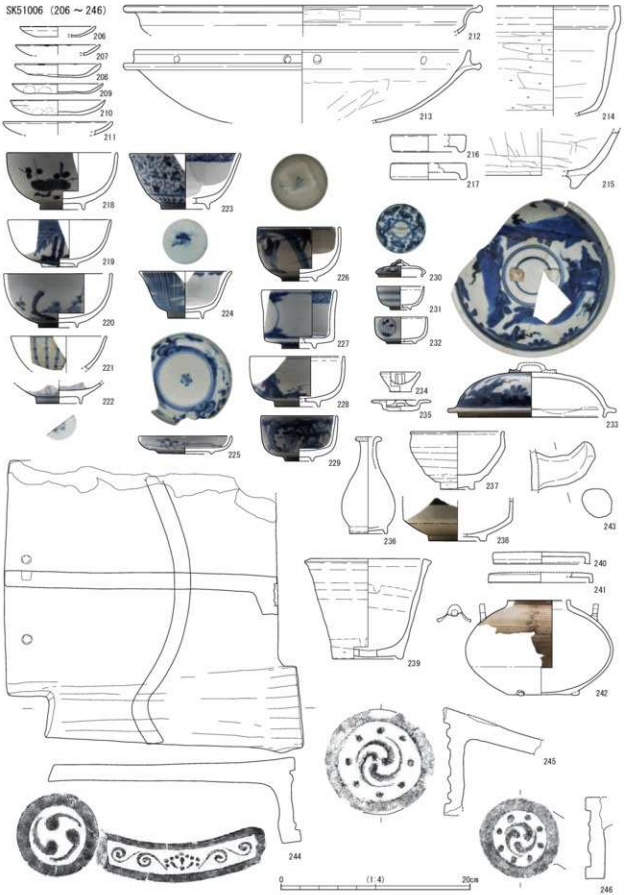
第 23 図　出土遺物③（1:4）



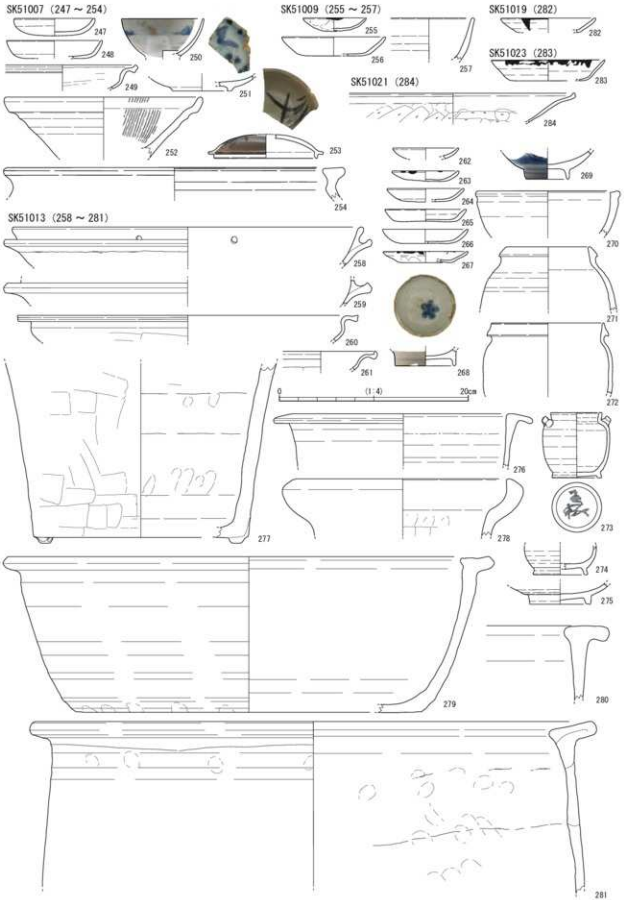
第 24 図　出土遺物④（1:4、200 は 1:2）



第 25 図　出土遺物⑤（1:10）



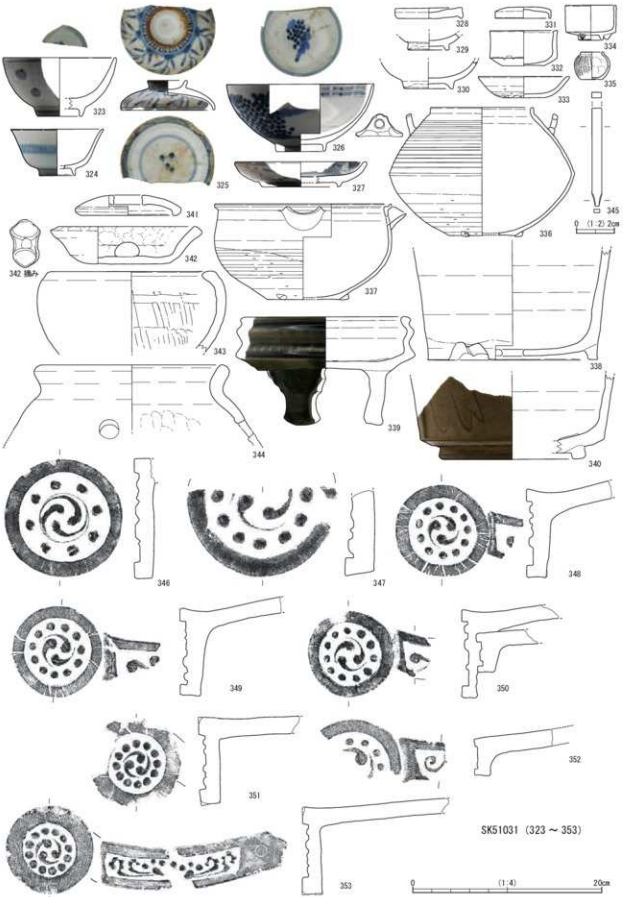
第 26 図　出土遺物⑥（1:4）



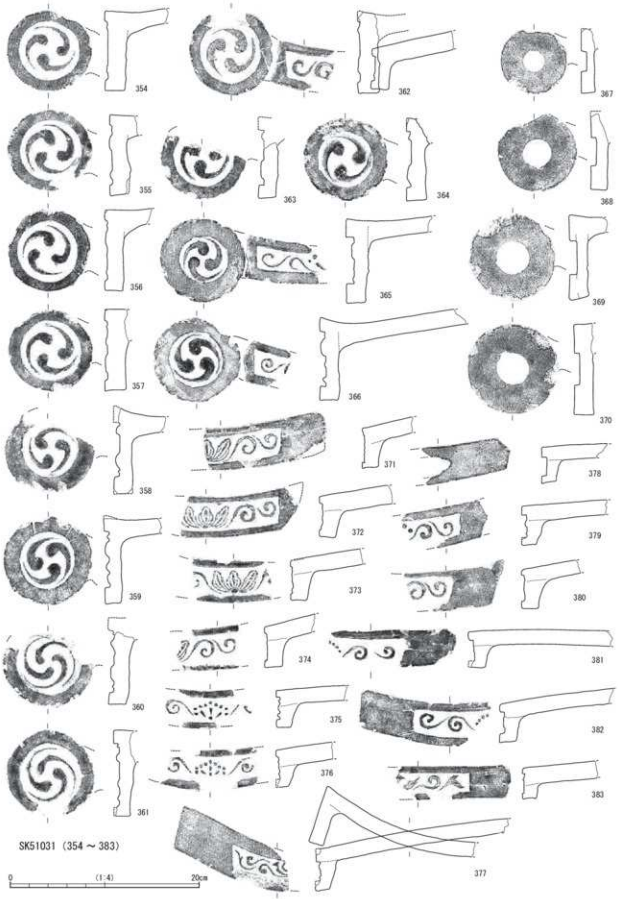
第 27 図　出土遺物⑦ (1:4)

第 28 図　出土遺物⑧（1:4）

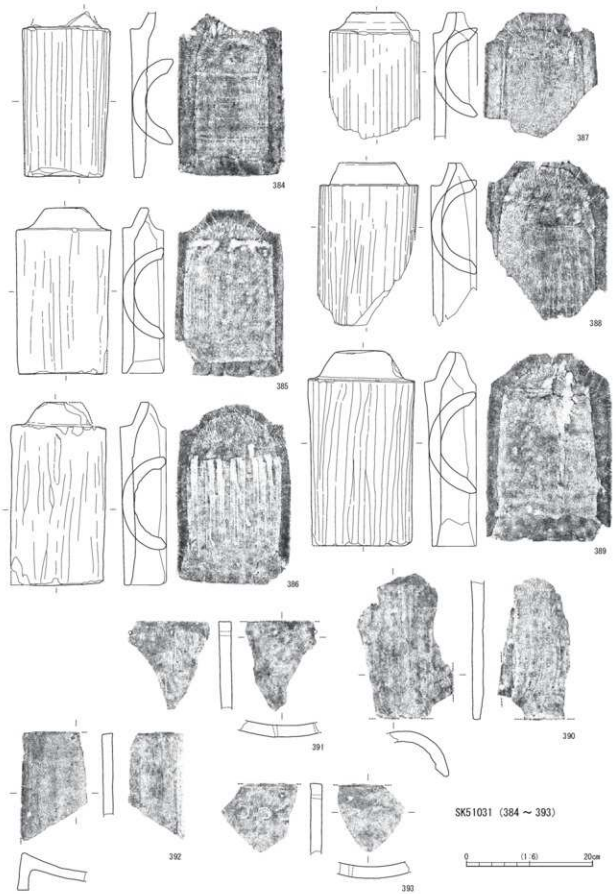
第29図　出土遺物⑨（1:4、322は1:6）



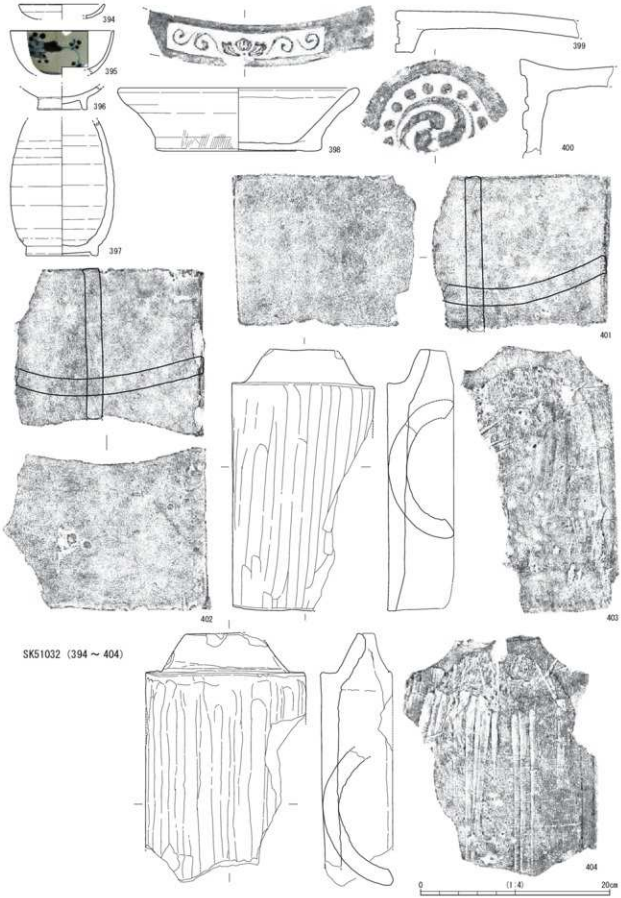
第 30 図　出土遺物⑩（1:4、345 は 1:2）



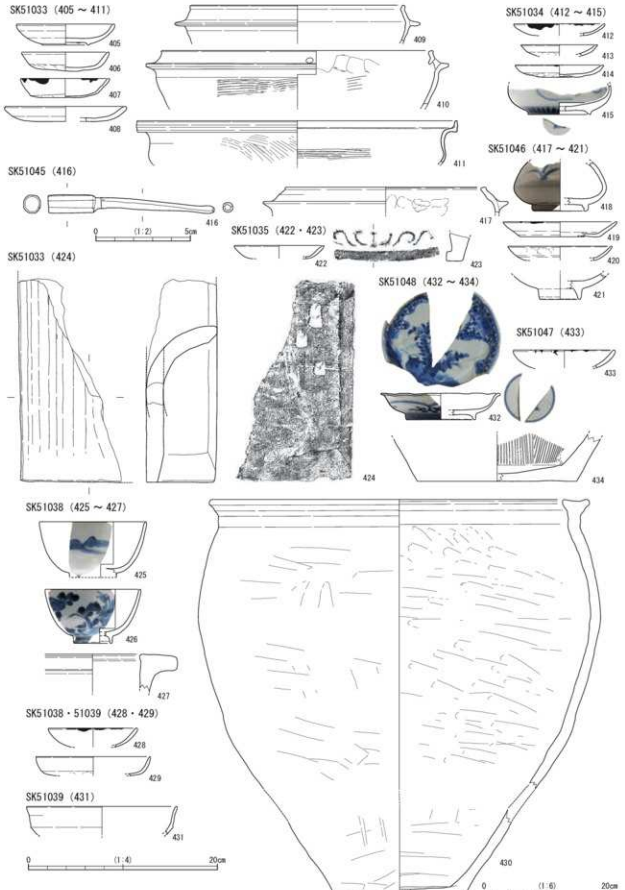
第31図　出土遺物⑪（1:4）



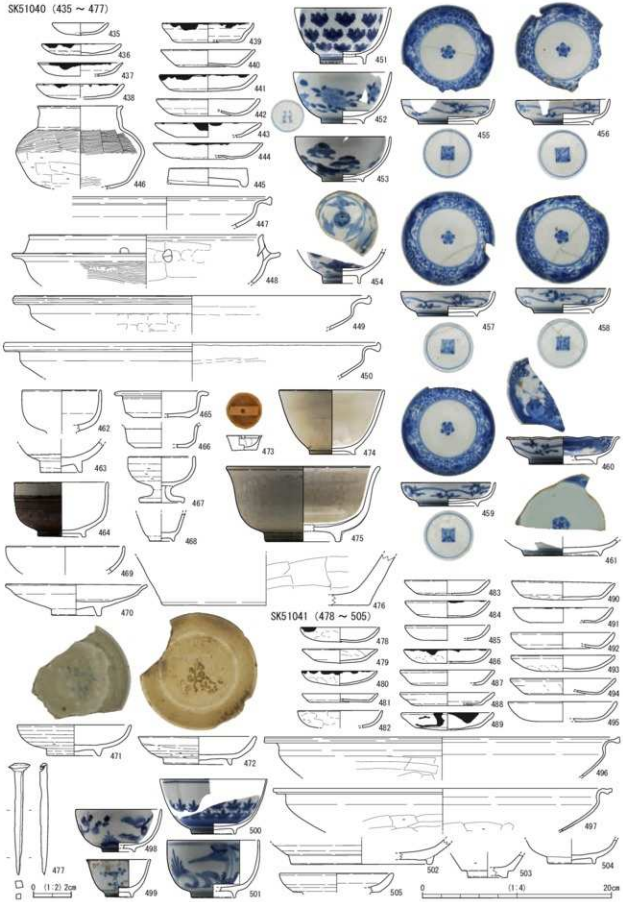
第 32 図　出土遺物⑫ (1:6)



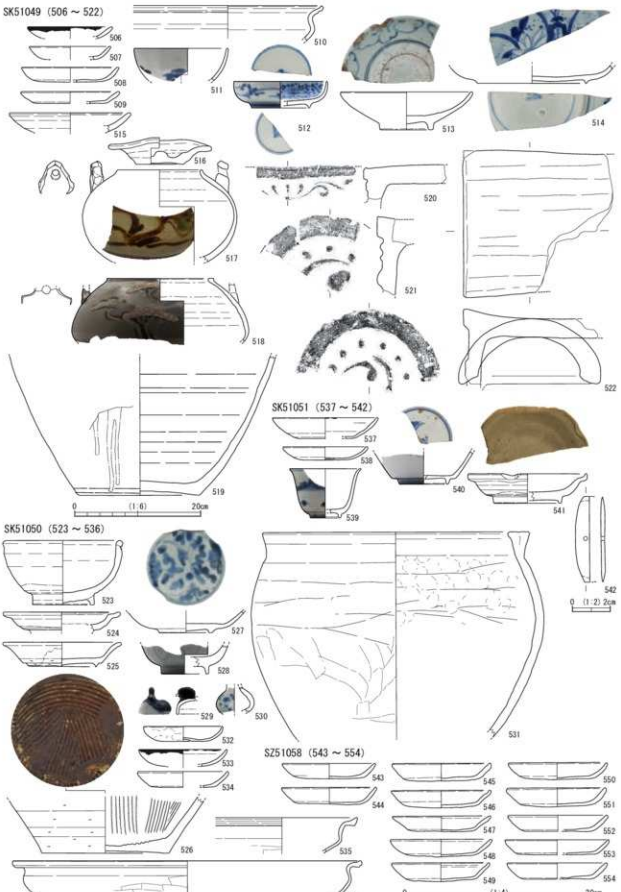
第 33 図　出土遺物⑬ (1:4)



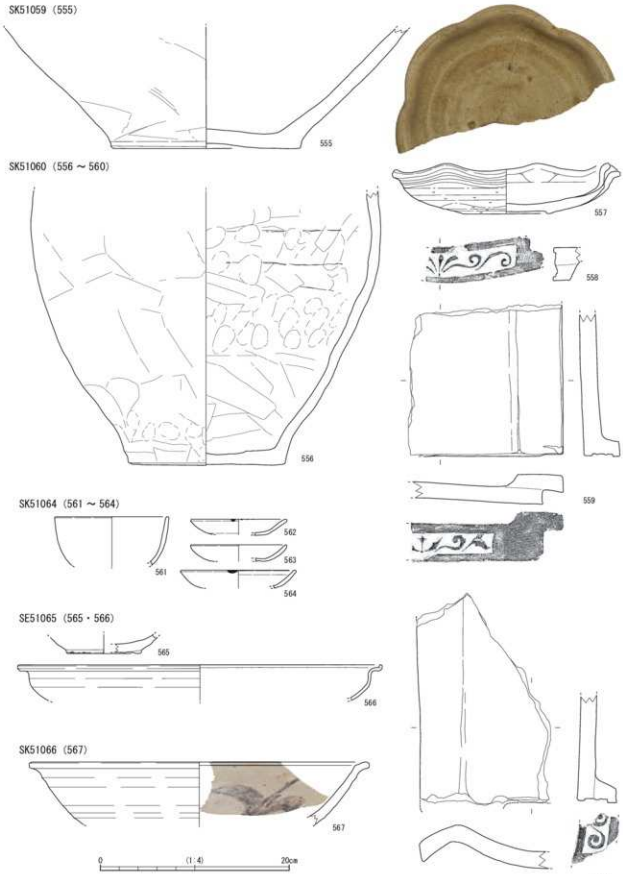
第 34 図　出土遺物⑭（1:4、416 は 1:2、430 は 1:6）



第 35 図　出土遺物⑤（1:4、477 は 1:2）

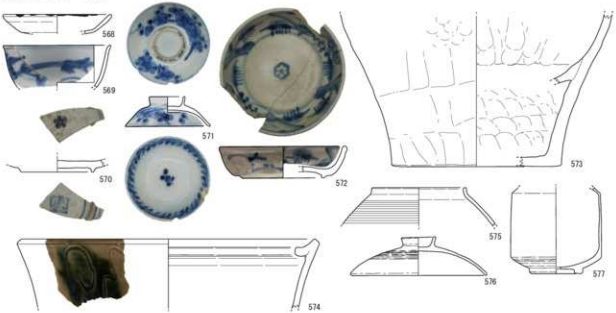


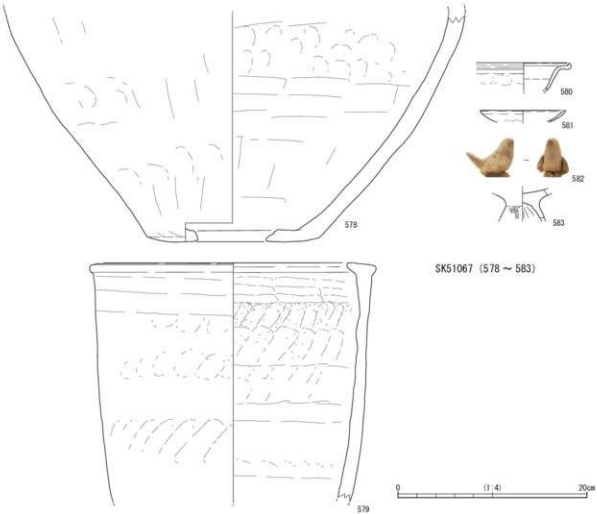
第 36 図　出土遺物⑯（1:4、519・531 は 1:6、542 は 1:2）



第 37 図　出土遺物⑰（1:4）

SK51062（568～577）

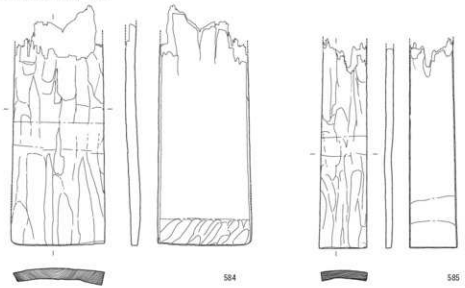




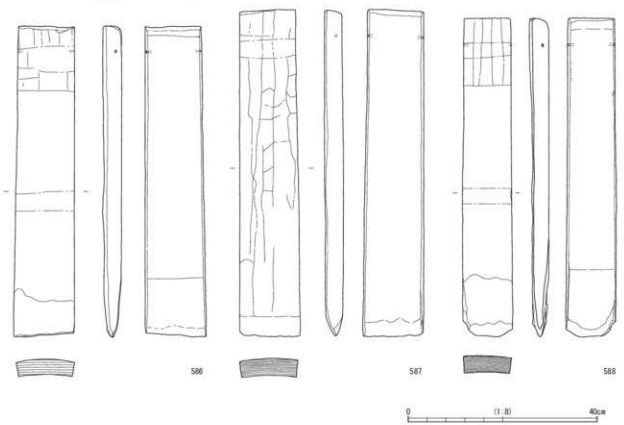
SK51067（578～583）

第38図　出土遺物⑱（1:4）

SE51070 上段結物（584・585）



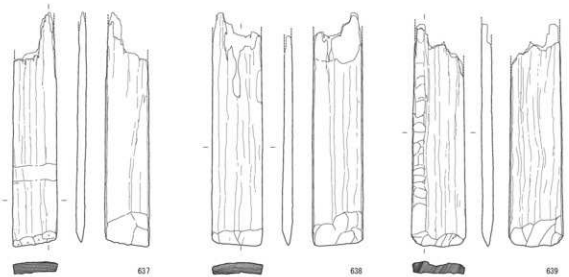
SE51070 下段結物（586 ～ 588）



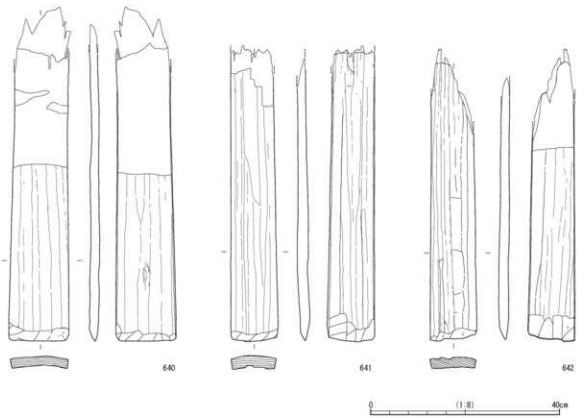
第 39 図　出土遺物⑬（1:8）

第 40 図　出土遺物⑩（1:4、618 は 1:2）

SE51076・51077 上段結物 1（637 ～ 639）

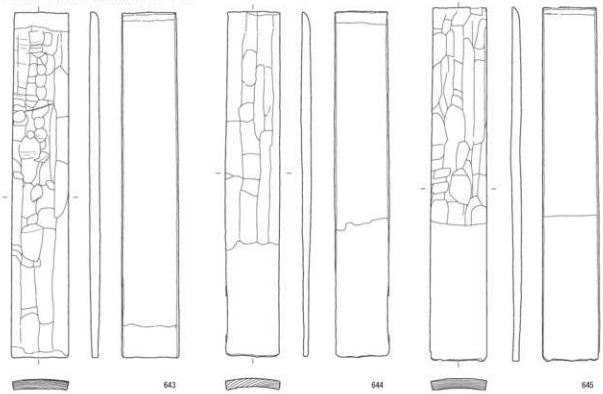


SE51076・51077 下段結物 2（640 ～ 642）

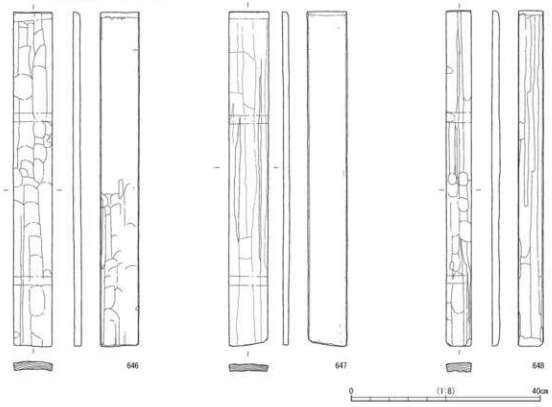


第 41 図　出土遺物㉑（1:8）

SE51076・51077 下段結物 1（643 ～ 645）

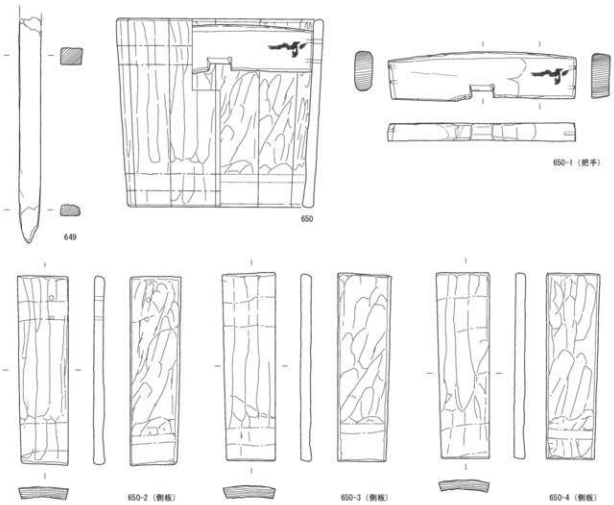


SE51076・51077 下段結物 2（646 ～ 648）



第 42 図　出土遺物㉗（1:8）

SE51076・51077（649・650）



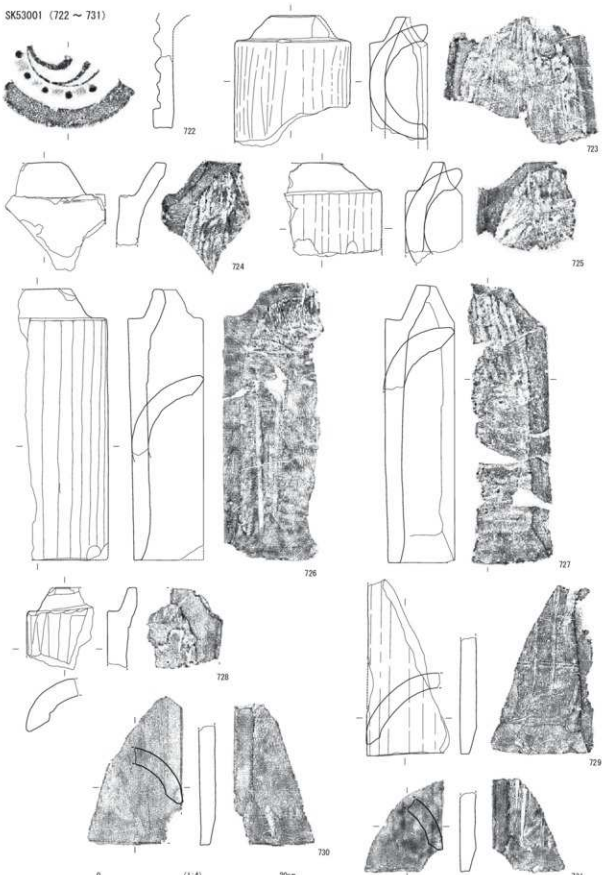
SK51079（651・652）

SK51081（654～659）

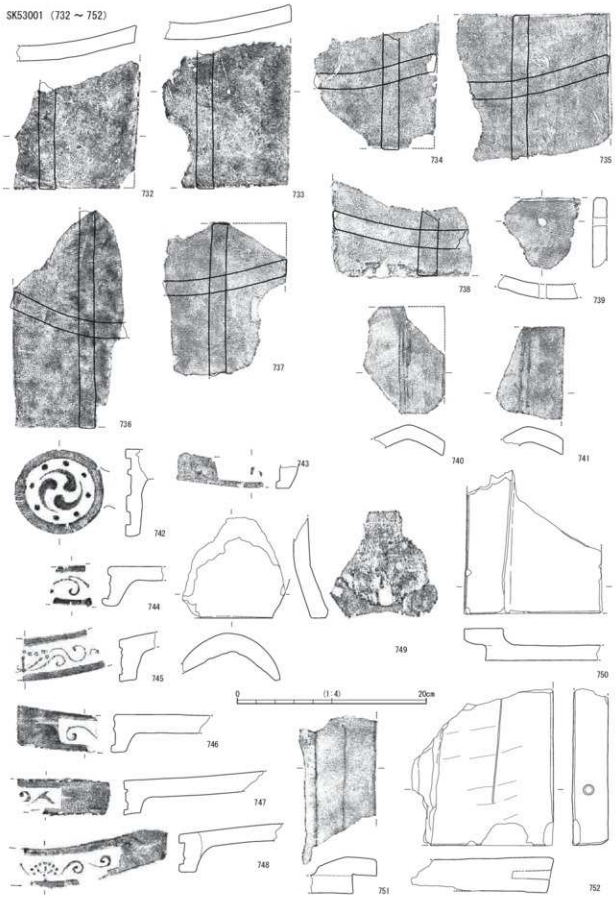
第43図　出土遺物㉓（1:4、652は1:2）

第 44 図　出土遺物㉔（1:4）

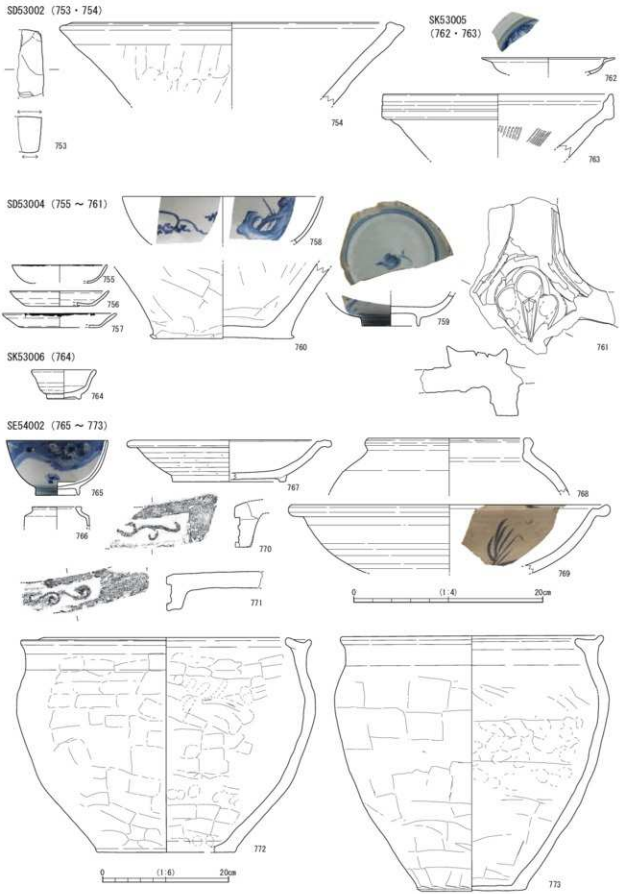
第 45 図　出土遺物⑤（1:4、717 は 1:6）



第 46 図　出土遺物㉕ (1:4)

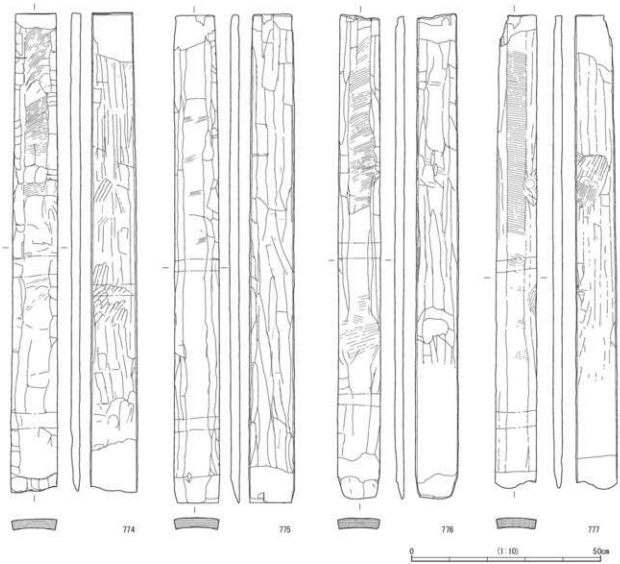


第 47 図　出土遺物㉗（1:4）



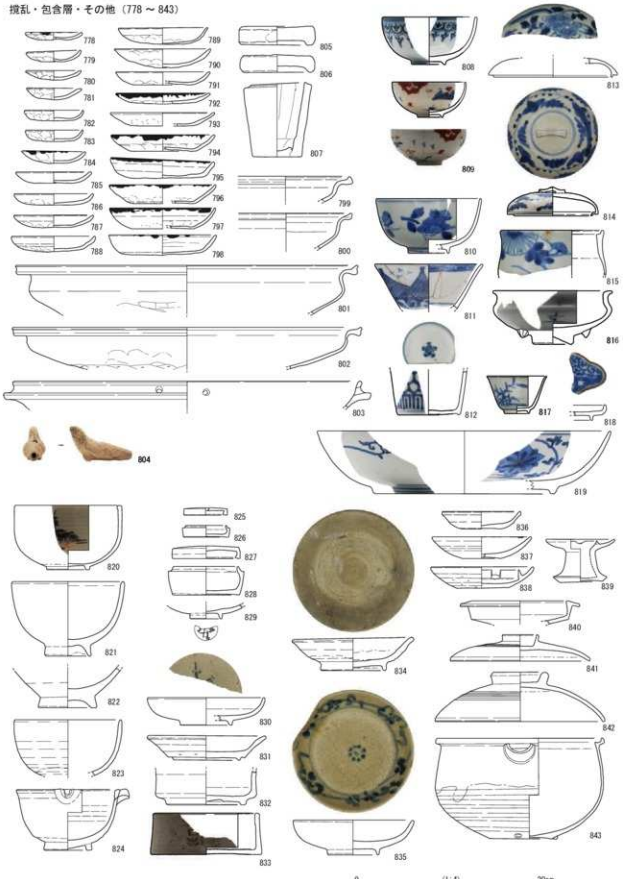
第 48 図　出土遺物㉘（1:4、772・773 は 1:6）

SE54002 結物（774 ～ 777）



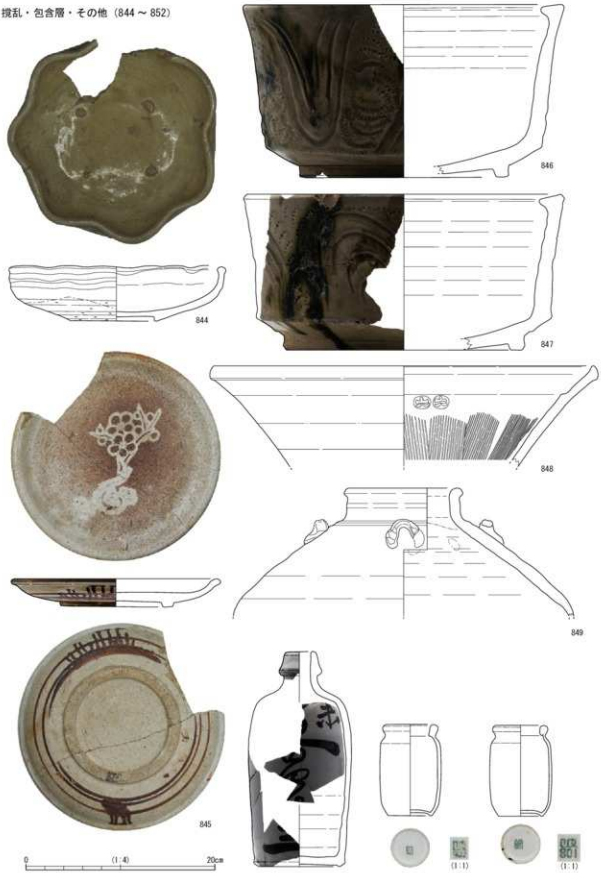
第 49 図　出土遺物㊸（1:10）

撹乱・包含層・その他（778 ～ 843）



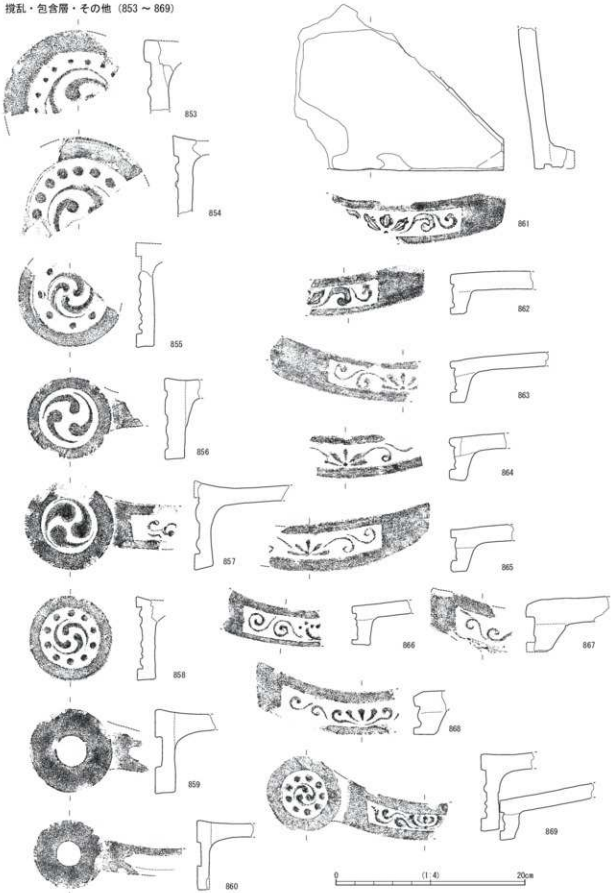
第 50 図　出土遺物⑩（1:4）

撹乱・包含層・その他（844～852）



第51図　出土遺物㉛（1:4）

撹乱・包含層・その他（853 ～ 869）

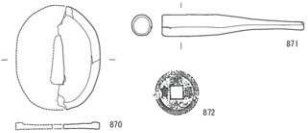


第 52 図　出土遺物㉜（1:4）

第６表　近代の主要な遺物

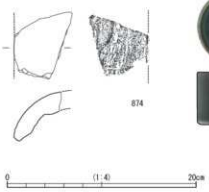
調査区	グリッド	遺構名	ガラス瓶	陶磁器・その他
1区	K12	方形攪乱	酒：大日本麦酒（ビール）、清涼飲料：大日本麦酒（サイダー）、牛乳：「津殺菌合名会社」、医薬品：「ネオ肝精」、日本薬局方「蜂蜜」、田口泰天堂「ロート目薬」、化粧品：資生堂（クリーム等、乳白色）	洋食器：東洋陶器株式会社 硬質陶器盃 裏印「TTK KOKURA」、硬質陶器盃 裏印王冠に「M.P.M.C」、代用品陶器（クリーム、鰊等容器）、碗、ままごと道具（擂鉢、冷蔵庫、海老、羽釜、ティーカップ）
1区	K12	攪乱		子ども用豆皿（動物）、美濃統制陶器「№902」
1区	K13	SK51084 方形攪乱	文具：インク、食品：雲丹、海苔「磯志"まん」、牛乳：「津市藤枝　田中牧場」、「信田牧場」、医薬品：「津市立病院」	急須（検事局）墨書、瀬戸統制陶器碗「瀬813」 国民食器？小皿
1区	K13	SK51085 攪乱	文具：インク、化粧品：高橋東洋堂「アイデアル コールドクリーム」、食品：海苔「磯志"まん」、清涼飲料：大日本麦酒（サイダー）、医薬品：「Wakamoto（わかもと）」、「イマヅ」、「倉矢小児科院」、「津市立病院」	玩具：ビー玉・おはじき
1区	J13	攪乱	食品：海苔「磯志"まん」、医薬品：武田長兵衛商店「Apetin」（アペチン錠：酵母剤）	
1区	I13	SK51080 撹土攪乱	文具：インク（熟で変形）	美濃統制陶器碗「岐1102」、灰皿、洋食器（ティーカップ）など（いずれも被熱）
1区	I13	SK51079 撹土攪乱 南の攪乱	酒類：キリンビール（ビール）、清涼飲料：ラムネ、医薬品：「岩田醫院」、「櫻木病院」、武田長兵衛商店「POLYTAMIN」（ポリタミン：栄養剤）、文具：インク「☆」、化粧品：資生堂（クリーム、乳液等の角瓶、いずれも乳白色）、マスター尚美堂「尚美堂 MASTER」、不明：「RITO-KAN」、その他青色・緑色瓶	碁石、歯ブラシ：「ライオン歯刷子」「リボン」 土器火鉢・炭炉、瀬戸・美濃陶磁器多数 機統美英（内部に昭和7年（1932）の新聞紙が充填される）
1区	I14	方形攪乱	清涼飲料：大日本麦酒（サイダー）	
1区	K12・13 J12	攪乱	清涼飲料：大日本麦酒（サイダー）、牛乳：「相川　飯田牧場」、文具：日本タイプライター株式会社「NIPPON TYPE WRITER CO」（スムースオイル）、不明「SOGOL」（茶色）	玩具：ままごと道具（バナナ）
1区	F13	攪乱	文具：インク、食品：海苔「磯志"まん」、不明「IMMALIN」、その他ピンク色瓶	急須（SK51084「検事局」と同形） 子ども茶碗（戦闘機・日章旗）
		その他	医薬品：田口泰天堂「大学目薬」「小児用」目薬 牛乳：「名賀煉乳組合」	美濃統制陶器「№801」

撹乱・包含層・その他（870～872）

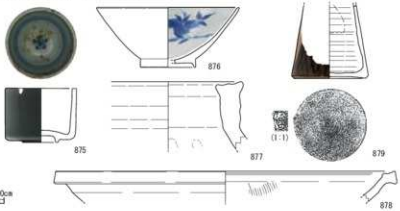


工事立会①４区　溝（873）

工事立会⑥　９層（874）



工事立会　表土等（875～879）



第 53 図　出土遺物③（1:4、870～873 は 1:2）

第７表　遺物観察表

①土器・瓦・土製品・石製品

遺物番号	実測番号	種類（産地・系統）	器種	調査区	グリッド	遺構間位	部位 残存度	法量（cm）			色調（外面）	特記事項
								口径	底径	器高		
1	146-01	須恵　染付（瀬戸・美濃）	碗	1区		SE10001	口縁部10/12 底部12/12	8.2	4.6	8.2	にぶい橙	口紅
2	070-01	陶器（常滑）	壺	1区	W10	SE10001	口縁部12/12 底部7/12	45.8	19.0	-	橙	底部焼成後穿孔
3	069-01	土師器	皿	1区		SE10002	11/12	9.0	-	-	灰褐	
4	069-02	土師器	皿	1区	H11	SE10002	4/12	8.4	-	1.5	にぶい橙	
5	069-06	土師器	皿	1区	H11	SE10002	2/12	9.0	-	-	にぶい橙	
6	069-07	須恵　染付（肥前）	皿	1区	H11	SE10002	口縁部1/12	15.0	-	-	明緑灰	輪花
7	069-04	土師器	皿	1区	G14	SE10003	完形	6.0	-	1.1	にぶい橙	
8	069-03	土師器	皿	1区	G14	SE10003	口径完形	6.0	-	1.2	にぶい橙	
9	069-05	土師器	皿	1区	G14	SE10003	完形	5.8	-	1.2	にぶい橙	
10	072-06	土師器	皿	1区	G14	SE10003	5/12	5.6	-	0.9	橙	
11	072-05	土師器	皿	1区	G14	SE10003	9/12	5.4	-	1.2	橙	
12	072-09	土師器	皿	1区	G14	SE10003	11/12	5.7	-	1.2	橙	
13	072-08	土師器	皿	1区	G14	SE10003	10/12	5.7	-	1.1	にぶい橙	
14	072-07	土師器	皿	1区	G14	SE10003	4/12	5.4	-	1.3	にぶい橙	
15	071-02	土師器	皿	1区	F15	SE10003上層	7/12	6.6	-	1.3	浅黄橙	油煙付着
16	072-10	土師器	皿	1区	G14	SE10003	5/12	7.2	-	1.1	橙	
17	072-03	土師器	皿	1区	G14	SE10003	7/12	7.2	-	0.9	にぶい橙	
18	072-11	土師器	皿	1区	G14	SE10003	3/12	7.4	-	1.0	橙	
19	072-04	土師器	皿	1区	G14	SE10003	9/12	7.3	-	1.1	橙	
20	153-08	土師器	皿	1区	F15	SE10003	3/12	7.4	-	1.0	にぶい橙	
21	153-04	土師器	皿	1区	F15	SE10003上層	3/12	8.2	-	1.5	にぶい橙	
22	152-08	土師器	皿	1区	F15	SE10003	2/12	8.0	-	-	にぶい橙	油煙付着
23	071-10	土師器	皿	1区	F15	SE10003	3/12	7.4	-	1.8	にぶい橙	
24	071-09	土師器	皿	1区	F15	SE10003	5/12	7.8	-	1.9	橙	
25	152-07	土師器	皿	1区	F15	SE10003	1/12	8.6	-	-	にぶい橙	油煙付着
26	153-03	土師器	皿	1区	F15	SE10003	3/12	8.4	-	1.8	にぶい橙	
27	154-03	土師器	皿	1区	F15	SE10003	2/12	9.2	-	1.9	にぶい橙	
28	072-02	土師器	皿	1区	G14	SE10003	11/12	8.7	-	1.3	橙	
29	071-06	土師器	皿	1区	F15	SE10003	3/12	8.9	-	1.1	にぶい橙	油煙付着
30	153-05	土師器	皿	1区	F15	SE10003	3/12	9.2	-	1.4	にぶい橙	
31	153-02	土師器	皿	1区	F15	SE10003	3/12	9.0	-	1.5	にぶい橙	
32	154-02	土師器	皿	1区	F15	SE10003	2/12	9.2	-	1.7	にぶい橙	
33	153-07	土師器	皿	1区	F15	SE10003	3/12	9.0	-	1.1	にぶい橙	
34	153-06	土師器	皿	1区	F15	SE10003	3/12	9.2	-	1.6	にぶい橙	
35	152-05	土師器	皿	1区	F15	SE10003	2/12	10.0	-	-	にぶい橙	油煙付着
36	152-06	土師器	皿	1区	F15	SE10003	2/12	9.0	-	-	にぶい橙	油煙付着
37	071-11	土師器	皿	1区	F15	SE10003	4/12	9.1	-	1.5	橙	
38	071-07	土師器	皿	1区	F15	SE10003	11/12	9.9	-	2.0	にぶい橙	
39	071-08	土師器	皿	1区	F15	SE10003	3/12	9.7	-	1.6	にぶい橙	
40	071-05	土師器	皿	1区	F15	SE10003	3/12	9.4	-	1.5	浅黄橙	
41	072-01	土師器	皿	1区	F15	SE10003上層	10/12	9.6	-	1.9	橙	油煙付着
42	152-04	土師器	皿	1区	F15	SE10003	1/12	11.0	-	2.0	にぶい橙	油煙付着

遺物番号	実測番号	種類（底地・系統）	器種	調査区	グリッド	遺構間位	部位残存度	法量（cm）			色調（外面）	特記事項
								口径	底径	器高		
43	071-04	土師器	皿	1区	F15	SK5003	3/12	16.8	－	1.5	浅黄橙	
44	073-08	土師器	皿	1区	F15	SK5003	口縁完形	11.0	3.8	1.9	にぶい橙	赤橙付着
45	152-02	土師器	皿	1区	F15	SK5003上層	3/12	16.8	－	1.9	にぶい橙	赤橙付着
46	152-03	土師器	皿	1区	F15	SK5003	3/12	16.8	－	－	にぶい橙	赤橙付着
47	154-01	土師器	皿	1区	F15	SK5003	3/12	11.2	－	2.1	にぶい橙	
48	071-01	土師器	皿	1区	F15	SK5003上層	4/12	11.8	－	1.8	浅黄橙	
49	071-03	土師器	皿	1区	F15	SK5003上層	2/12	12.8	－	2.0	にぶい黄橙	赤橙付着
50	153-01	土師器	皿	1区	F15	SK5003	3/12	12.9	－	2.4	にぶい橙	赤橙付着
51	074-05	土器	鍋塩壺（蓋）	1区	F15	SK5003	完形	6.8	－	1.6	橙	
52	074-06	土器	鍋塩壺	1区		SK5003	完形	5.7	5.3	7.8	橙	
53	074-07	土器	鍋塩壺	1区	F15	SK5003	底部4/12	－	－	4.2	橙	
54	103-04	土師器	焙烙	1区	G14	SK5003	小片	－	－	－	橙	
55	152-01	土師器	焙烙	1区	F15	SK5003	1/12	37.2	－	－	にぶい褐	
56	073-05	瓦器（堺産）	鍋	1区	G14	SK5003	口縁部3/12	11.7	－	－	灰白	網目文
57	081-01	瓦器（堺産）	鍋	1区	F15	SK5003	口縁部7/12 底部12/12	8.9	4.6	6.1	灰白	型紙摺り，「大明年製」，口紅
58	073-06	瓦器（堺産）	鍋	1区	F15	SK5003	9/12	12.1	4.4	6.8	白	長方文
59	080-05	瓦器（堺産）	鉢	1区	F15	SK5003	口縁～胴部4/12	8.0	－	－	灰白	櫛付
60	080-03	瓦器（堺産）	擂鉢	1区	F15	SK5003	口縁～胴部6/12	2.8	－	－	灰白	
61	073-02	瓦器（堺産）	鉢/段皿（蓋）	1区	F15	SK5003	3/12	16.9	－	－	白	
62	073-03	瓦器（堺産）	鍋	1区	F15	SK5003	口縁部11/12 底部6/12	17.8	6.6	9.1	白	コンニャク印刷，「大明年製」
63	080-04	陶器（京都・信楽）	鍋	1区	F15	SK5003	底部3/12	－	3.7	－	浅黄橙	鉄釉
64	073-07	陶器	鍋	1区	F15	SK5003	底部12/12	－	6.9	－	にぶい褐	切高台，調整荒，透明釉
65	080-02	陶器（瀬戸・美濃）	徳利	1区	F15	SK5003	底部6/12	－	7.6	－	灰白	灰釉
66	073-04	陶器（瀬戸・美濃）	皿	1区	F15	SK5003	口縁部3/12	11.7	－	－	灰白	染付
67	074-01	陶器（瀬戸・美濃）	智恵	1区	F15	SK5003上層	6/12	直10.7	幅4.6	3.8	灰白	型紙摺り，灰釉
68	080-01	陶器（京都・信楽）	土瓶	1区	F15	SK5003	口縁～胴部12/12	7.6	－	－	黒褐	亀裂有，鉄釉，カキノメ
69	073-01	陶器（京都・信楽）	鍋	1区	F15	SK5003	口縁～胴部5/12	26.0	－	－	灰褐	鉄釉
70	074-02	陶器（京焼）	土壁	1区	F15	SK5003	口縁部4/12	13.5	－	－	にぶい橙	
73	106-13	土師器	皿	1区	F14	SK5003・SK5083	完形	5.7	－	1.1	橙	赤橙付着 取り上げ時「方形優見」
74	106-03	土師器	皿	1区	F14	SK5003・SK5083	6/12	5.8	－	1.2	にぶい橙	取り上げ時「優見」
75	106-12	土師器	皿	1区	F14	SK5003・SK5083	5/12	6.9	－	1.0	橙	赤橙付着 取り上げ時「方形優見」
76	106-02	土師器	皿	1区	F14	SK5003・SK5083	3/12	7.3	－	－	にぶい橙	取り上げ時「優見」
77	106-08	土師器	皿	1区	F14	SK5003・SK5083	8/12	6.9	－	1.0	橙	赤橙付着 取り上げ時「方形優見」
78	106-09	土師器	皿	1区	F14	SK5003・SK5083	6/12	7.0	－	1.1	橙	赤橙付着 取り上げ時「方形優見」
79	106-10	土師器	皿	1区	F14	SK5003・SK5083	3/12	7.0	－	1.0	明赤褐	赤橙付着 取り上げ時「方形優見」
80	106-01	土師器	皿	1区	F14	SK5003・SK5083	7/12	7.2	－	1.1	橙	赤橙付着 取り上げ時「優見」
81	106-04	土師器	皿	1区	F14	SK5003・SK5083	9/12	7.4	－	1.3	橙	赤橙付着 取り上げ時「方形優見」
82	107-04	土師器	皿	1区	G14	SK5003・SK5083	完形	7.2	－	1.0	にぶい橙	取り上げ時「方形優見」
83	107-05	土師器	皿	1区	G14	SK5003・SK5083	5/12	7.4	－	1.0	橙	取り上げ時「方形優見」
84	179-01	土師器	皿	1区	G14	SK5003・SK5083	6/12	7.8	－	1.0	橙	赤橙付着 取り上げ時「優見」
85	179-02	土師器	皿	1区	G14	SK5003・SK5083	4/12	7.9	－	1.4	橙	取り上げ時「優見」
86	179-11	土師器	皿	1区	G14	SK5003・SK5083	10/12	8.3	－	1.2	橙	取り上げ時「優見」
87	107-02	土師器	皿	1区	G14	SK5003・SK5083	2/12	8.6	－	1.4	橙	赤橙付着 取り上げ時「方形優見」

遺物番号	実測番号	種類（素地・系統）	器種	調査区	グリッド	遺構・層位	部位・残存度	法量（cm）			色調（外面）	特記事項
								口径	底径	器高		
88	107-03	土師器	甕	1区	G14	SK1003・SK1002	3/12	9.0	－	1.4	橙	油煙付着 取り上げ時「方形優先」
89	106-05	土師器	甕	1区	F14	SK1003・SK1002	5/12	9.2	－	1.3	橙	油煙付着 取り上げ時「方形優先」
90	106-06	土師器	甕	1区	F14	SK1003・SK1002	6/12	8.8	－	1.2	橙	油煙付着 取り上げ時「方形優先」
91	106-07	土師器	甕	1区	F14	SK1003・SK1002	完形	9.0	－	1.5	橙	油煙付着 取り上げ時「方形優先」
92	106-11	土師器	甕	1区	F14	SK1003・SK1002	6/12	9.0	－	1.2	橙	油煙付着 取り上げ時「方形優先」
93	126-01	土師器	甕	1区	G14	SK1003・SK1002	1/12	9.2	－	0.8	橙	取り上げ時「方形優先」
94	107-02	土器	焙烙蓋	1区	F14	SK1003・SK1002	口縁完形	2.5	4.7	7.5	にぶい橙	取り上げ時「方形優先」 外面煤黛
95	102-01	土師器	焙烙	1区	F14	SK1003・SK1002	2/12	38.0	－	－	橙	取り上げ時「方形優先」
96	181-01	瓦質土器	焙烙	1区	F14	SK1003・SK1002	3/12	38.0	－	－	灰	煤付着、型痕残 取り上げ時「方形優先」
97	107-01	土人形	人形	1区	G14	SK1003・SK1002	頭部欠損	－	幅4.4	厚3.0	橙	取り上げ時「優先上層」 依存ちん、粘土に金属存含む
98	202-05	陶器（京都・信楽）	灯明皿	1区	G14	SK1003・SK1002	完形	6.6	2.8	1.8	灰白	灯芯、目跡3 取り上げ時「優先」
99	196-02	陶器（瀬戸・美濃）	灯明皿	1区	G14	SK1003・SK1002	完形	9.0	4.5	2.0	にぶい赤橙	鉄釉 取り上げ時「方形優先」
100	196-03	陶器（瀬戸・美濃）	灯明皿	1区	G14	SK1003・SK1002	10/12	9.7	4.6	1.8	にぶい赤橙	鉄釉 取り上げ時「方形優先」
101	179-10	陶器（瀬戸・美濃）	碗	1区	G14	SK1003・SK1002	口縁部9/12 底部12/12	9.3	4.5	2.7	橙	鉄釉、糸切痕 取り上げ時「方形優先」
102	145-05	陶器（京都・信楽）	小子（蓋）	1区	G14	SK1003・SK1002	6/12	11.2	－	1.8	灰白	灰釉 取り上げ時「方形優先」
103	203-07	陶器（京都・信楽）	小子（蓋）	1区	G14	SK1003・SK1002	完形	8.5	－	0.9	灰白	灰釉 取り上げ時「優先」
104	179-03	陶器（京都・信楽）	鉢	1区	G14	SK1003・SK1002	12/12	6.4	4.4	4.6	灰白	蓋付、灰釉 取り上げ時「方形優先」
105	107-06	陶器（尾東焼）	分付鉢	1区	G14	SK1003・SK1002	底部12/12	5.0	－	－	橙	軟質施釉陶器、上絵あり？ 取り上げ時「方形優先」
106	182-04	陶器（瀬戸・美濃）	天目茶碗	1区	F14	SK1003・SK1002	口縁部3/12 底部12/12	9.9	4.0	5.9	黒	鉄釉 取り上げ時「方形優先」
107	203-03	陶器（瀬戸・美濃）	皿	1区	G14	SK1003・SK1002	口縁部6/12 底部12/12	13.0	5.7	3.5	灰黄	染付 取り上げ時「優先」
108	181-02	陶器（信楽）	鉢	1区	G14	SK1003・SK1002	5/12	15.1	12.4	7.0	褐灰	蓋付、煤跡、粘土に石含む 取り上げ時「優先上層」
109	192-02	陶器（尾東焼）	碗	1区	F14	SK1003・SK1002	口縁部7/12 底部11/12	10.5	5.3	6.5	明緑灰	ろくろ痕、内面に化粧、内外透明釉 但馬産か、印刷は小判形に「宗東」 取り上げ時「方形優先」
110	203-01	磁器（肥前）	碗	1区	G14	SK1003・SK1002	口縁部6/12 底部12/12	9.9	3.8	5.3	白	見込みに圧痕骨文 取り上げ時「優先」
111	203-04	磁器（肥前）	碗	1区	G14	SK1003・SK1002	口縁部5/12 底部12/12	10.6	4.6	6.3	灰白	見込みに圧点文 取り上げ時「優先」
112	202-02	磁器（肥前）	碗	1区	G14	SK1003・SK1002	口縁部12/12 底部3/12	11.0	5.7	6.3	明緑灰	広東碗 取り上げ時「優先」
113	182-03	磁器（肥前）	碗（蓋）	1区	G14	SK1003・SK1002	6/12	10.8	4.0	2.5	白	取り上げ時「方形優先」
114	202-04	磁器（肥前・美濃）	碗	1区	G14	SK1003・SK1002	口縁部3/12 底部7/12	9.2	3.8	5.3	灰白	端反碗 取り上げ時「優先」
115	203-05	磁器（肥前・美濃）	碗	1区	G14	SK1003・SK1002	6/12	10.2	－	－	白	端反碗 取り上げ時「優先」
116	203-06	磁器（肥前・美濃）	碗	1区	G14	SK1003・SK1002	口縁部8/12 底部12/12	9.8	3.9	5.0	白	端反碗 取り上げ時「優先」
117	145-03	磁器（肥前）	碗	1区	G14	SK1003・SK1002	底部4/12	－	4.4	－	白	染付碗 取り上げ時「方形優先」
118	202-07	磁器（肥前）	碗	1区	G14	SK1003・SK1002	口縁部4/12 底部7/12	7.2	4.6	6.7	白	蓋付、染付碗 取り上げ時「優先」
119	182-01	磁器（肥前）	蓋口	1区	G14	SK1003・SK1002	3/12	8.6	6.0	6.5	白	蛇の目釉剥離痕、宮方雑文、輪花 取り上げ時「方形優先」
120	145-04	磁器（肥前）	猪口碗	1区	G14	SK1003・SK1002	底部12/12	－	7.4	－	白	取り上げ時「方形優先」
121	194-01	磁器（肥前）	小子（蓋）	1区	F14	SK1003・SK1002	完形	4.6	－	2.1	明緑灰	色絵 取り上げ時「方形優先」
122	193-05	磁器（肥前）	鉢	1区	F14	SK1003・SK1002	口縁部4/12 底部12/12	21.2	8.2	9.7	明緑灰	色絵陽刻鉢 取り上げ時「方形優先」
123	202-06	磁器（肥前）	段重	1区	G14	SK1003・SK1002	口縁部2/12 底部7/12	14.2	9.0	6.0	白	取り上げ時「優先」
124	142-02	瓦	軒桟瓦	1区	G14	SK1003・SK1002	瓦当小片	－	－	厚1.7	灰	取り上げ時「方形優先」
125	142-01	瓦	軒桟瓦	1区	G14	SK1003・SK1002	瓦当小片	－	－	厚1.6	灰	取り上げ時「優先」
126	141-02	瓦	軒桟瓦	1区	G14	SK1003・SK1002	1/3	－	－	厚2.1	灰	取り上げ時「優先」
127	138-01	瓦	軒桟瓦	1区	G14	SK1003・SK1002	瓦当小片	－	－	厚1.5	灰	取り上げ時「優先上層」
128	199-01	土器	風炉	1区	F13	SK1003・SK1002	4/12	15.4	24.8	－	橙	外面ミガキ、粘土に金属片含む 取り上げ時「優先」
129	196-01	陶器（瀬戸・美濃）	擂鉢	1区	G14	SK1003・SK1002	口縁部6/12 底部12/12	35.8	15.1	15.9	にぶい赤橙	鉄釉 取り上げ時「方形優先」

遺物番号	実測番号	種類（底地・長級）	器種	調査区	グリッド	遺構層位	部位残存度	法量（cm）			色調（外面）	特記事項
								口径	底径	器高		
130	190-01	陶器（瀬戸・美濃）	瓶鉢	1区	G14	SK5003・SK5083	口縁部1/12 底部1/12	36.2	16.0	15.7	暗赤褐	鉄釉 取り上げ時「便乱上層」
131	198-01	陶器（京焼）	鉢	1区	F14	SK5003・SK5083	口縁部5/12 底部2/12	31.6	25.2	13.4	にぶい橙	取り上げ時「方形攪乱」
132	204-01	陶器（瀬戸・美濃）	植木鉢	1区	F14	SK5003・SK5083	口縁部10/12 底部12/12	35.9	18.6	18.0	浅黄	灰釉 取り上げ時「攪乱」
133	203-01	陶器（瀬戸・美濃）	鍋	1区	F14	SK5003・SK5083	10/12	20.8	－	－	暗赤褐	鉄釉 取り上げ時「攪乱」
134	197-01	陶器（京焼）	鉢	1区	G14	SK5003・SK5083	3/12	36.2	19.0	22.0	褐灰	内面白色の付着物あり 取り上げ時「方形攪乱」
135	126-02	土師器	皿	1区	H11	SD5004 北東溝	3/12	8.0	－	1.0	にぶい橙	曲線付着
136	113-06	土師器	皿	1区	I11・J10	SD5004 東辺	3/12	10.1	－	1.0	浅黄橙	
137	127-01	土師器	皿	1区		SD5004 南辺	1/12	13.4	－	1.9	にぶい黄橙	
138	096-05	土師器	鍋（羽釜形）	1区		SD5004 東	口縁部2/12	20.4	－	－	にぶい橙	外面ケズリ、煤付着
139	128-01	土師器	焙烙	1区	H11	SD5004 北東溝	口縁部1/12	36.4	－	－	橙	煤付着
140	129-01	土師器	焙烙	1区		SD5004 北東溝	口縁部2/12	40.6	－	－	にぶい橙	煤付着
141	099-02	陶器（瀬戸・美濃）	火鉢	1区	F9、H11	SD5004 北東溝	5/12	20.5	－	14.4	黒褐	鉄釉、三足
142	098-04	土器	焙烙皿（蓋）	1区	F9	SD5004 北東溝	10/12	7.8	－	1.9	橙	布目、粘土に金雲母含む
143	098-03	土器	焙烙皿（蓋）	1区		SD5004 北東溝	9/12	7.8	－	1.7	橙	布目、粘土に金雲母含む
144	092-01	土人形	犬形	1区		SD5004 北東溝	完形	長5.5	幅1.6	高4.2	橙	赤彩または化粧土
145	092-02	土人形	猿形	1区		SD5004 北	頭部完形	長9.0	幅4.6	高7.0	灰白	
146	096-02	磁器　染付（肥前）	碗	1区		SD5004 北東溝	口縁～胴部4/12	8.0	－	－	白	
147	096-08	磁器　染付（肥前）	碗	1区	F10	SD5004	口縁～胴部2/12	10.0	－	－	灰白	二重網目文
148	094-06	磁器　染付（肥前）	碗	1区	F10	SD5004	底部1/12	－	4.4	－	灰白	
149	094-09	磁器　染付（肥前）	碗	1区	H10・11	SD5004 北	底部12/12	－	4.2	－	灰白	
150	097-02	磁器　染付（肥前）	徳利	1区	H11	SD5004 北東溝	底部4/12	－	5.0	－	灰白	
151	093-01	磁器　染付（肥前）	碗	1区		SD5004 北東溝	口縁部1/12	12.2	－	－	白	四方雅文
152	092-08	磁器　染付（肥前）	猪口	1区	H11	SD5004 北東溝	口縁部2/12 底部12/12	7.5	5.0	5.9	白	
153	094-07	磁器　染付（肥前）	湯呑	1区	F10	SD5004	胴部4/12	－	－	－	明緑灰	赤絵
154	097-01	磁器　染付（肥前）	皿	1区	H11	SD5004 北東	口縁部6/12 底部12/12	14.0	5.0	3.3	灰白	輪花
155	094-05	磁器　染付（肥前）	皿	1区	F10	SD5004	2/12	14.8	7.0	3.4	灰白	蛇の目凹形高台
156	095-01	磁器　染付（肥前）	皿	1区	H10・11	SD5004 北・北西溝	1/12	28.6	17.2	4.6	灰白	
157	113-05	陶器（京都・信楽）	土瓶（蓋）	1区		SD5004 北	3/12	6.6	－	2.1	黒	鉄釉
158	097-03	陶器（瀬戸・美濃）	土瓶（蓋）	1区	J9	SD5004	2/12	8.2	－	2.2	浅黄	灰釉
159	096-06	陶器（京都・信楽）	鉢/鍋	1区	F9	SD5004	底部5/12	－	3.8	－	灰白	灰釉、葉込みに目跡
160	096-04	陶器（瀬戸・美濃）	瓜坊器	1区		SD5004 北東溝	7/12	7.2	4.6	4.9	灰白	灰釉
161	095-03	陶器（瀬戸・美濃）	鍋	1区	I9	SD5004	底部4/12	－	5.8	－	灰白	染付、広東鍋
162	095-02	陶器	鍋	1区	J9・K10	SD5004 南	底部4/12	－	5.8	－	にぶい橙	細毛目鍋
163	096-03	陶器	盃	1区		SD5004 北東	完形	3.5	－	2.2	緑	緑釉
164	100-05	陶器（瀬戸・美濃）	瓶鉢	1区	H11	SD5004 北東	完形	4.7	2.2	2.3	灰白	灰釉
165	096-01	陶器（京都・信楽）	合子	1区		SD5004 北東溝	口縁部完形	3.5	2.9	2.3	灰白	灰釉
166	097-04	磁器　染付（肥前）	瓶/徳利	1区	I9	SD5004	底部2/12	－	7.2	－	灰白	
167	097-05	陶器（瀬戸・美濃）	鉢	1区	I9	SD5004	底部4/12	－	8.2	－	緑灰	鉄釉に上野釉掛け
168	096-07	陶器（瀬戸・美濃）	徳利	1区	F9	SD5004	底部7/12	－	8.0	－	明オリーブ灰	灰釉
169	093-05	陶器（瀬戸・美濃）	徳利	1区	H10・I・J9	SD5004 西辺	底部4/12	－	11.0	－	灰白	灰釉
170	094-08	陶器（瀬戸・美濃）	植木鉢	1区	H10・11	SD5004	底部6/12	－	8.0	－	暗赤褐	鉄釉
171	102-01	陶器（瀬戸・美濃）	植木鉢	1区	J9・K10	SD5004 南	口縁部1/12	36.0	－	－	緑	緑釉
172	111-01	陶器（京焼）	鉢	1区	H11	SD5004 北東溝	口縁部2/12	27.2	－	－	浅黄橙	

遺物番号	実測番号	種類（産地・系統）	器種	調査区	グリッド	遺構層位	部位 残存度	法量（cm）			色調（外面）	特記事項
								口径	底径	器高		
173	139-03	瓦	軒桟瓦	1区	F10	SB61004	瓦当小片	－	－	厚1.7	灰	
174	139-02	瓦	軒桟瓦	1区	I9	SB61004	1/3	－	－	厚1.4	灰	
175	149-05	土師器	皿	1区	J11	SK51005	6/12	6.9	－	1.4	にぶい橙	
176	076-05	土師器	皿	1区	J11	SK51005	7/12	6.4	－	－	浅黄橙	油煙付着
177	076-06	土師器	皿	1区	J11	SK51005	6/12	6.5	－	1.2	橙	
178	149-10	土師器	皿	1区	J11	SK51005	2/12	7.3	－	－	浅黄橙	
179	149-01	土師器	皿	1区	J11	SK51005	4/12	7.0	－	1.2	浅黄橙	
180	149-02	土師器	皿	1区	J11	SK51005	3/12	9.0	－	－	にぶい橙	油煙付着
181	149-08	土師器	皿	1区	J11	SK51005	3/12	9.0	－	－	にぶい橙	
182	149-06	土師器	皿	1区	J11	SK51005	3/12	9.3	－	－	浅黄橙	
183	075-06	土師器	皿	1区	J11	SK51005	8/12	9.2	－	1.9	浅黄橙	
184	149-04	土師器	皿	1区	J11	SK51005	2/12	9.4	－	－	にぶい橙	
185	075-05	土師器	皿	1区	J11	SK51005	3/12	9.8	－	1.6	にぶい橙	
186	076-04	土師器	皿	1区	J11	SK51005	4/12	9.8	－	－	にぶい橙	
187	149-09	土師器	皿	1区	J11	SK51005	3/12	9.8	－	－	にぶい橙	
188	149-07	土師器	皿	1区	J11	SK51005	4/12	10.5	－	－	にぶい橙	
189	075-04	土師器	皿	1区	J11	SK51005	2/12	10.9	－	2.3	にぶい橙	油煙付着
190	074-03	土師器	皿	1区	J11	SK51005	3/12	10.7	－	2.0	橙	
191	074-04	土師器	皿	1区	J11	SK51005	2/12	10.9	－	1.5	橙	
192	075-07	土師器	皿	1区	J11	SK51005	2/12	11.0	－	－	にぶい橙	油煙付着
193	149-03	土師器	皿	1区	J11	SK51005	2/12	13.2	－	－	にぶい橙	
194	075-03	土師器	鍋（笠間系）	1区	J11	SK51005	口縁～頸部2/12	8.8	－	－	褐灰	
195	075-02	土師器	甑	1区		SK51005	1/12	35.8	－	－	橙	煤付着
196	075-01	土師器	甑	1区		SK51005	2/12	29.8	－	－	にぶい橙	
197	076-01	磁器　染付（肥前）	皿	1区	J11	SK51005	9/12	10.5	7.3	3.9	灰白	高台畳付に砂付着
198	076-02	磁器　染付（肥前）	鉢	1区	J11	SK51005	口縁部3/12	9.8	－	－	灰白	網目文、幾成不良
199	076-03	磁器　染付（肥前）	鉢	1区	J11	SK51005	口縁部2/12	10.6	－	－	灰白	
200	126-05	土師器	皿	1区	G14	SK51006 上層	2/12	8.0	－	1.1	橙	
201	127-05	土師器	皿	1区	G14	SK51006 上層	2/12	9.0	－	－	橙	油煙付着
202	095-04	土師器	皿	1区	G14	SK51006 上層	完形	8.9	－	1.4	にぶい橙	油煙付着
203	126-04	土師器	皿	1区	G14	SK51006 上層	2/12	9.6	－	1.1	橙	
210	126-06	土師器	皿	1区	G14	SK51006 上層	1/12	10.0	－	1.6	にぶい橙	
211	126-08	土師器	皿	1区	G14	SK51006	1/12	11.6	－	－	橙	
212	128-03	土師器	甑	1区	G14	SK51006	口縁部1/12	37.4	－	－	橙	
213	100-01	瓦質土器	甑	1区	G14	SK51006 上層	2/12	35.4		－	灰黄褐	穿孔2、型区痕
214	100-02	瓦質土器	鍋	1区	G14	SK51006 上層	口縁～頸部小片	－	－	－	灰	煤付着、215と同一個体か
215	100-03	瓦質土器	鍋	1区	G14	SK51006 上層	底部小片	－	－	－	灰	鍔付き、煤付着
216	127-09	土器	焙烙鉢（蓋）	1区	G14	SK51006 北西	2/12	7.2	－	1.9	橙	
217	076-07	土器	焙烙鉢（蓋）	1区	G14	SK51006	4/12	7.6	7.0	1.8	にぶい橙	布目、粘土に金属母含む
218	086-02	磁器　染付（肥前）	鉢	1区	G14	SK51006 上層	口縁部6/12 底部12/12	11.6	4.6	6.0	白	
219	116-05	磁器　染付（肥前）	鉢	1区	G14	SK51006 上層	1/12	10.8	3.6	5.0	灰白	
220	101-04	磁器　染付（肥前）	鉢	1区	G14	SK51006 上層	口縁部5/12 底部12/12	11.4	4.2	5.7	白	蛸付か
221	100-04	磁器　染付（肥前）	鉢	1区	G14	SK51006	口縁部4/12	10.0	－	－	白	

遺物番号	実測番号	種類（底地・系統）	器種	調査区	グリッド	遺構層位	部位残存度	法量（cm）			色調（外面）	特記事項
								口径	底径	器高		
222	092-04	縄器　受付（貯蔵）	鉢	1区	G14	SK3006上層	底部4/12	－	4.8	－	白	「宗明平製」か
223	101-02	縄器　受付（貯蔵）	鉢	1区	G14	SK3006上層	4/12	11.6	5.0	5.9	白	沢方雑文
224	092-03	縄器　受付（搬入・土師）	鉢	1区	G14	SK3006上層	5/12	9.8	3.7	5.0	白	縄区鉢，十字文
225	101-01	縄器　受付（貯蔵）	瓶	1区	G14	SK3006	9/12	9.7	5.6	1.9	白	見込み五弁花
226	101-03	縄器　受付（搬入・土師）	鉢	1区	G14	SK3006上層	9/12	8.6	3.6	5.7	灰白	小丸鉢，太口平
227	092-06	縄器　受付（貯蔵）	鉢	1区	G14	SK3006上層	3/12	7.8	3.6	6.2	白	弥形鉢，色絵，沢方雑文
228	092-07	縄器　受付（貯蔵）	鉢	1区	G14	SK3006上層	6/12	9.9	4.7	5.3	白	蓋付
229	107-10	縄器　受付（搬入・土師）	鉢	1区	G14	SK3006上層	11/12	8.0	2.8	4.8	灰白	小丸鉢，太口平
230	101-07	縄器　受付（貯蔵）	鉢（蓋）	1区	G14	SK3006上層	完形	5.4	－	1.8	灰白	
231	101-06	縄器　受付（貯蔵）	鉢	1区	G14	SK3006上層	4/12	5.0	4.0	2.5	白	蓋付
232	095-07	縄器　受付（貯蔵）	鉢	1区	G14	SK3006上層	5/12	5.4	3.0	2.8	灰白	蓋付
233	086-03	縄器　受付（貯蔵）	段重（蓋）	1区	G14	SK3006上層	8/12	15.5	－	－	白	
234	095-05	陶器（搬入・土師）	瓶類	1区	G14	SK3006	完形	3.9	2.1	2.2	灰白	灰釉
235	095-06	陶器（搬入・土師）	壺	1区	G14	SK3006	5/12	3.3	－	4.2	灰白	灰釉
236	107-03	陶器（搬入・土師）	壺	1区	G14	SK3006上層	完形	2.4	4.0	7.2	灰白	
237	101-05	陶器（搬入・土師）	天目茶碗	1区	G14	SK3006上層	11/12	9.8	3.6	6.1	黒	鉄釉
238	113-04	陶器（京都・信楽）	鉢	1区	G13	SK3006	底部10/12	－	5.9	－	灰白	灰釉，見込みに目跡
239	191-04	陶器（搬入・土師）	城木鉢	1区	G14	SK3006	口縁部4/12 底部12/12	12.0	7.2	10.6	黒	鉄釉
240	086-01	陶器（京都・信楽）	合子（蓋）	1区	G14	SK3006上層	完形	10.2	－	1.3	白	灰釉
241	113-03	陶器（京都・信楽）	合子（蓋）	1区	G14	SK3006	口縁部4/12	10.9	－	－	灰白	灰釉
242	092-05	陶器（伊賀）	土瓶	1区	G14	SK3006上層	口縁部4/12 底部12/12	6.6	6.5	10.0	浅黄橙	灰釉，刻印に印銘 課題で「伊賀焼」「丸口口」
243	194-03	土師器	鍋	1区	G14	SK3006 廃棄	把手小片	－	－	－	にぶい橙	
244	137-01	瓦	軒丸瓦	1区	G14	SK3006上層	8/10	長26.7	幅30.6	厚1.8	灰	
245	140-02	瓦	軒丸瓦	1区	G14	SK3006	瓦当	－	－	厚1.9	暗灰	
246	140-05	瓦	軒桟瓦	1区	G14	SK3006	瓦当	－	－	厚1.9	灰	
247	001-06	土師器	皿	1区	L10	SK3007	口辺完形	8.4	－	1.8	灰白	
248	150-01	土師器	皿	1区	L10	SK3007	1/12	16.0	－	－	にぶい橙	
249	105-03	土師器	焙烙	1区	L10	SK3007	小片	－	－	－	にぶい橙	
250	123-01	縄器　受付（貯蔵）	鉢	1区	L10	SK3007	口縁部4/12	8.6	－	－	白	
251	105-03	縄器　受付（貯蔵）	皿	1区	L10	SK3007	底部3/12	6.2	－	－	明褐灰	高台畳付に砂付着
252	105-01	陶器（搬入・土師）	徳利	1区	L10	SK3007	1/12	10.6	－	－	黒褐	鉄釉
253	146-02	陶器（京都・信楽）	鉢（蓋）	1区	L10	SK3007	2/12	10.6	－	－	灰白	灰釉，鉄釉
254	105-02	陶器（丹波）	壺	1区	L10	SK3007	口縁部1/12	35.6	－	－	暗赤褐	粘土に長石含む
255	001-08	土師器	皿	1区	L10	SK3009	7/12	6.6	－	1.4	橙	高台畳付着
256	001-07	土師器	皿	1区	M10	SK3009	3/12	10.8	－	2.9	褐灰	
257	123-02	陶器（搬入・土師）	鉢	1区	M10	SK3009	口縁部小片	－	－	－	灰白	抹茶鉢，灰釉
258	102-01	瓦質土器	焙烙	1区	K11・12	SK3013	口縁部1/12	36.8	－	－	暗灰	脚付，型圧痕
259	102-02	瓦質土器	焙烙	1区	K11	SK3013	脚部小片	－	－	－	灰	型圧痕
260	102-03	土師器	焙烙	1区	K11	SK3013	1/12	36.0	－	－	黒褐	
261	102-04	土師器	焙烙	1区	K11	SK3013	小片	－	－	－	にぶい橙	
262	103-05	土師器	皿	1区	K11	SK3013	3/12	6.0	－	－	橙	
263	103-02	土師器	皿	1区	K11	SK3013	6/12	7.0	－	1.1	橙	高台畳付着
264	103-04	土師器	皿	1区	K11	SK3013	2/12	8.0	－	1.4	橙	

遺物番号	実測番号	種類（産地・系統）	器種	調査区	グリッド	遺構・層位	部位・残存度	法量（cm）			色調（外面）	特記事項
								口径	底径	器高		
265	056-01	土師器	甕	1区	K11・12	SK51013	7/12	8.6	－	1.2	橙	
266	163-03	土師器	甕	1区	K11	SK51013	1/12	9.0	－	1.5	にぶい橙	
267	146-04	土師器	甕	1区	K11・12	SK51013	2/12	8.8	－	1.2	橙	油煙付着
268	164-04	陶器（瀬戸・美濃）	碗	1区	K11	SK51013	底部12/12	－	6.2	－	灰白	染付、広東碗
269	146-03	磁器　染付（肥前）	碗	1区	K11・12	SK51013	底部6/12	－	4.4	－	白	見込みに圏線
270	146-05	陶器（瀬戸・美濃）	鉢	1区	K11・12	SK51013	口縁部3/12	14.7	－	－	灰白	灰釉
271	164-01	陶器（瀬戸・美濃）	香	1区	K11	SK51013	口縁部2/12	8.6	－	－	暗オリーブ	有耳香か、灰釉
272	164-05	陶器（瀬戸・美濃）	香	1区	K11・12	SK51013	口縁部2/12	11.8	－	－	オリーブ黒	有耳香か、灰釉
273	058-01	陶器（瀬戸・美濃）	有耳香	1区	K11・12	SK51013	口縁部4/12 底部12/12	5.3	5.2	6.9	灰白	灰釉、高台内に墨書
274	164-02	陶器（瀬戸・美濃）	擂鉢	1区	K11	SK51013	底部5/12	－	5.4	－	灰白	灰釉
275	164-03	陶器（瀬戸・美濃）	鉢	1区	K11	SK51013	底部12/12	－	6.4	－	明オリーブ灰	灰釉
276	059-01	陶器（瀬戸・美濃）	植木鉢	1区	K11・12	SK51013	口縁部2/12	22.2	－	－	灰白	灰釉
277	059-02	陶器（常滑）	鉢	1区	K11・12	SK51013	底部2/12	－	21.0	－	橙	植木鉢か
278	082-01	陶器（常滑）	土管	1区	K11・12	SK51013	口縁部1/12	22.4	－	－	にぶい橙	
279	060-01	陶器（常滑）	鉢	1区	K11・12	SK51013	3/12	51.2	36.6	16.5	橙	
280	163-01	陶器（常滑）	甕	1区	K11	SK51013	口縁部小片	－	－	－	橙	
281	061-01	陶器（常滑）	甕	1区	K11・12	SK51013	口縁部2/12	58.6	－	－	橙	壺または片口
282	159-02	土師器	甕	1区	M10	SK51019	1/12	9.8	－	－	にぶい黄橙	油煙付着
283	127-02	土師器	甕	1区	M11	SK51025	2/12	12.0	－	2.2	橙	油煙付着
284	129-03	土師器	焙烙	1区	M12	SK51021	小片	－	－	－	にぶい黄橙	
285	057-03	磁器　染付（肥前）	碗（皿）	1区	K11・12	SK51013	8/12	9.4	－	2.4	白	端反碗の蓋
286	057-04	磁器　染付（肥前）	碗（皿）	1区	K11・12	SK51013	5/12	10.4	－	2.7	白	広東碗の蓋
287	062-05	磁器　染付（肥前）	碗	1区	K11	SK51013	5/12	9.2	4.7	4.6	灰白	見込み に銘木文
288	062-02	磁器　染付（肥前）	碗	1区	K11・12	SK51013	9/12	10.0	3.5	5.2	灰白	瑞氏香文
289	058-02	磁器　染付（肥前）	碗	1区	K11・12	SK51013	11/12	10.6	5.9	5.6	白	広東碗
290	058-03	磁器　染付（肥前）	碗	1区	K11・12	SK51013	5/12	10.8	6.4	6.6	白	広東碗
291	084-04	磁器（瀬戸・美濃）	碗	1区	K11	SK51013	5/12	11.0	4.6	6.1	灰白	端反碗
292	059-04	磁器　染付（肥前）	碗	1区	K11・12	SK51013	6/12	10.4	4.0	5.8	白	
293	056-03	磁器　染付（肥前）	碗	1区	K11・12	SK51013	底部5/12	－	4.0	－	白	「富貴長」
294	056-04	磁器　染付（肥前）	碗	1区	K11・12	SK51013	口縁部5/12	7.8	－	－	白	筒形碗、四方輪文
295	056-02	磁器　染付（肥前）	鉢	1区	K11・12	SK51013	11/12	7.0	4.0	4.2	灰白	蓋付
296	056-05	磁器　染付（肥前）	合子（蓋）	1区	K11・12	SK51013	ほぼ完形	4.4	－	－	白	摘み欠損
297	057-02	磁器　染付（肥前）	広東碗	1区	K11	SK51013	口縁部2/12 底部12/12	6.8	4.1	5.7	白	
298	057-01	磁器　染付（肥前）	広東碗	1区	K11・12	SK51013	底部12/12	－	4.0	－	灰白	
299	173-01	瓦	軒桟瓦	1区	K11・12	SK51013	瓦当小片	－	－	厚2.1	灰	
300	173-02	瓦	軒桟瓦	1区	K11	SK51013	瓦当小片	－	－	厚1.7	黄灰	
301	051-01	瓦	丸瓦	1区	K11・12	SK51013 No5	完形	長27.0	幅14.9	厚2.1	灰	凸面ケズリ後ナデ 凹面コビキB、布目
302	050-01	瓦	丸瓦	1区	K11・12	SK51013 No3	完形	長29.7	幅15.0	厚2.2	灰	凸面ケズリ後ナデ 凹面コビキB、布目
303	053-01	瓦	丸瓦	1区	K11・12	SK51013 No2	ほぼ完形	長27.6	幅14.0	厚1.8	灰	凸面ケズリ後ナデ 凹面コビキB、布目
304	054-01	瓦	丸瓦	1区	K11・12	SK51013 No4	完形	長27.6	幅14.0	厚1.8	灰	凸面ケズリ後ナデ 凹面コビキB、布目
305	055-01	瓦	丸瓦	1区	K11・12	SK51013 No1	完形	長27.8	幅14.0	厚2.0	黄灰	凸面ケズリ後ナデ 凹面布目
306	126-03	土師器	甕	1区	N12	SK51027	口縁部5/12	7.0	－	0.8	橙	
307	127-04	土師器	甕	1区	N12	SK51027	口縁部5/12	7.0	－	0.8	橙	油煙付着

遺物番号	実測番号	種類（素地・系統）	器種	調査区	グリッド	遺構	部位 残存度	法量（cm） 口径	底径	器高	色調（外面）	特記事項
308	127-07	土師器	皿	1区	512	SK5027	口縁部6/12	7.6	－	0.9	橙	油煙付着
309	093-06	磁器　染付（肥前）	合子（蓋）	1区	512	SK5027	完形	3.8	－	1.0	白	
310	093-07	磁器　染付（肥前）	碗	1区	512	SK5027	口縁部4/12 底部1/12	8.0	3.0	4.1	白	
311	083-03	磁器（瀬戸・美濃）	碗	1区	512	SK5027	口縁部5/12	11.0	－	－	白	端反碗
312	083-02	磁器　染付（肥前）	碗（蓋）	1区	512	SK5027	10/12	10.0	－	3.0	明緑灰	広東碗の蓋
313	098-02	陶器（京都・信楽）	鍋（蓋）	1区	512	SK5027	11/12	13.3	－	2.4	灰白	灰釉
314	123-03	陶器（瀬戸・美濃）	鍋	1区	512	SK5027	8/12	16.0	－	－	にぶい赤褐	鉄釉
315	150-02	土師器	皿	1区	39＋10	SK5030	2/12	10.2	－	－	灰白	
316	123-05	土師器	皿	1区	511	SK5026	3/12	8.4	－	1.5	にぶい黄橙	油煙付着
317	123-04	土師器	皿	1区	511	SK5026	11/12	8.6	－	－	にぶい橙	
318	091-04	磁器　染付（肥前）	鉢	1区	L10	SK5015	口縁部5/12	10.0	－	－	灰白	蛸付
319	098-01	陶器（瀬戸・美濃）	水壺	1区	L10	SK5015	8/12	26.2	14.2	17.1	淡黄	灰釉・緑釉、見込みに目跡 墨書あり
320	159-01	陶器（京焼）	鉢	1区	L10	SK5015	口縁部1/12	23.0	－	－	褐灰	
321	108-01	陶器（京焼）	鉢	1区	99	SK5028	口縁部5/12	32.2	－	－	橙	
322	199-01	陶器（京焼）	壺	1区	89	SK5029	口縁～胴部12/12	40.0	－	－	橙	
323	044-02	磁器　染付（肥前）	碗	1区		SK5024	1/12	11.8	4.4	6.2	白	見込みにコンニャク印刑五弁花
324	114-04	磁器　染付（瀬戸・美濃）	碗	1区	512	SK5031	5/12	9.8	3.6	4.9	灰白	端反碗
325	037-02	磁器　染付（肥前）	碗（蓋）	1区	512	SK5031	7/12	8.8	4.1	3.1	明緑灰	向方雅文
326	087-04	磁器　染付（肥前）	鉢	1区	512	SK5031	5/12	15.5	5.0	7.1	灰白	
327	036-06	磁器　染付（肥前）	皿	1区	512	SK5031	1/12	13.8	8.0	2.6	灰白	
328	035-03	土器	焙烙皿（蓋）	1区	512	SK5031	10/12	7.2	－	1.2	にぶい橙	布目、粘土に金雲母含む
329	036-03	陶器（瀬戸・美濃）	碗	1区		SK5031	底部6/12	－	4.3	－	灰白	灰釉
330	036-04	陶器	碗	1区		SK5031	底部12/12	－	5.0	－	緑灰	灰釉薬くびれ、ガラス化し貫入著しい
331	036-05	陶器（京都・信楽）	合子（蓋）	1区	512	SK5031	完形	5.8	－	1.2	浅黄橙	灰釉
332	114-04	陶器（京都・信楽）	合子	1区	512	SK5031	10/12	7.0	4.3	3.7	灰白	灰釉
333	036-01	陶器（瀬戸・美濃）	灯明皿	1区	512	SK5031	6/12	9.6	4.5	2.3	にぶい赤褐	鉄釉
334	114-02	陶器	香炉	1区	512	SK5031	6/12	5.2	2.2	3.7	黒褐	鉄釉、脚付
335	114-03	土器	壺	1区	512	SK5024	口縁部1/12 底部12/12	2.0	2.2	2.9	灰白	底部外面に回転「ケケ潰」
336	035-01	陶器（京都・信楽）	土瓶	1区	512	SK5031	口縁部1/12 底部4/12	10.8	7.0	13.6	にぶい黄橙	灰釉
337	035-04	陶器（京都・信楽）	行平鍋	1区	512	SK5031	口縁部1/12 底部7/12	16.5	7.8	10.1	灰白	灰釉
338	040-02	陶器（瀬戸・美濃）	硯水滴	1区		SK5031	底部4/12	－	17.8	－	灰白	灰釉
339	099-01	陶器（瀬戸・美濃）	三足鍋	1区	512	SK5031	4/12	16.6	－	11.4	緑	緑釉、見込みにトチン痕
340	040-03	陶器（瀬戸・美濃）	水壺	1区		SK5031	底部3/12	－	13.6	－	灰白	灰釉、緑釉
341	036-02	土器	盃	1区	512	SK5031	8/12	10.1	－	2.1	にぶい黄橙	型除等の盃
342	035-02	陶器（京焼）	火消壺（蓋）	1区	512	SK5031	ほぼ完形	14.3	－	4.0	橙	外面煤付着
343	040-01	陶器（京焼）	鉢	1区		SK5031	口縁部2/12	17.0	－	－	灰	
344	064-02	陶器（京焼）	灯燈L	1区		SK5031	口縁部3/12	19.0	－	－	橙	煤付着
345	100-12	ガラス製品	瓶？	1区	512	SK5031	先端部片	長5.3	幅0.5	厚0.3	透明	断面長方形
346	040-02	瓦	軒丸瓦	1区		SK5031	瓦当片	－	－	厚1.8	灰	
347	040-01	瓦	軒丸瓦	1区	512	SK5031	瓦当小片	－	－	厚3.0	灰	
348	034-01	瓦	軒桟瓦	1区		SK5031	瓦当小片	－	－	厚1.7	灰	
349	033-01	瓦	軒桟瓦	1区		SK5031	瓦当小片	－	－	厚1.2	灰	
350	040-04	瓦	軒桟瓦	1区	512	SK5031	瓦当小片	－	－	厚1.7	灰	

遺物番号	実測番号	種類（素地・系統）	器種	調査区	グリッド	遺構層位	部位 残存度	法量（cm）			色調（外面）	特記事項
								口径	底径	器高		
351	174-02	瓦	軒桟瓦	1区	X11・12	SK10031	瓦当小片	－	－	厚1.7	暗灰	
352	032-01	瓦	軒桟瓦	1区	X12	SK10031	瓦当小片	－	－	厚1.8	灰	
353	166-02	瓦	軒桟瓦	1区	X11・12	SK10031	1/4	－	－	厚1.8	灰	
354	168-01	瓦	軒桟瓦	1区	X11・12	SK10031	瓦当小片	－	－	厚2.0	橙	被熱
355	168-03	瓦	軒桟瓦	1区	X11・12	SK10031	瓦当小片	－	－	厚2.0	橙	被熱
356	168-04	瓦	軒桟瓦	1区	X11・12	SK10031	瓦当小片	－	－	厚1.8	橙	被熱
357	168-05	瓦	軒桟瓦	1区	X11・12	SK10031	瓦当小片	－	－	厚2.0	橙	被熱
358	169-01	瓦	軒桟瓦	1区	X11・12	SK10031	瓦当小片	－	－	厚1.8	橙	被熱
359	174-01	瓦	軒桟瓦	1区	X11・12	SK10031	瓦当小片	－	－	厚1.7	にぶい橙	被熱
360	169-03	瓦	軒桟瓦	1区	X11・12	SK10031	瓦当小片	－	－	厚1.8	橙	被熱
361	169-02	瓦	軒桟瓦	1区	X11・12	SK10031	瓦当小片	－	－	厚1.7	橙	被熱
362	173-03	瓦	軒桟瓦	1区	X11・12	SK10031	瓦当小片	－	－	厚2.1	橙	被熱
363	169-04	瓦	軒桟瓦	1区	X11・12	SK10031	瓦当小片	－	－	厚1.9	橙	被熱
364	168-02	瓦	軒桟瓦	1区	X11・12	SK10031	瓦当小片	－	－	厚2.0	橙	被熱
365	166-01	瓦	軒桟瓦	1区	X11・12	SK10031	瓦当小片	－	－	厚2.0	橙	被熱
366	165-02	瓦	軒桟瓦	1区	X11・12	SK10031	瓦当小片	－	－	厚2.0	橙	被熱
367	169-05	瓦	軒桟瓦	1区	X11・12	SK10031	瓦当小片	－	－	厚1.5	灰	被熱
368	170-03	瓦	軒桟瓦	1区	X11・12	SK10031	瓦当小片	－	－	厚1.8	灰	被熱
369	170-02	瓦	軒桟瓦	1区	X11・12	SK10031	瓦当小片	－	－	厚2.6	灰	被熱
370	170-01	瓦	軒桟瓦	1区	X11・12	SK10031	瓦当小片	－	－	厚2.0	灰	
371	167-01	瓦	軒桟瓦	1区	X11・12	SK10031	瓦当小片	－	－	厚1.8	橙	被熱
372	171-03	瓦	軒桟瓦	1区	X11・12	SK10031	瓦当小片	－	－	厚1.7	灰	
373	171-04	瓦	軒桟瓦	1区	X11・12	SK10031	瓦当小片	－	－	厚1.7	橙	被熱
374	171-02	瓦	軒桟瓦	1区	X11・12	SK10031	瓦当小片	－	－	厚1.9	橙	被熱
375	170-04	瓦	軒桟瓦	1区	X11・12	SK10031	瓦当小片	－	－	厚1.6	灰	
376	170-05	瓦	軒桟瓦	1区	X11・12	SK10031	瓦当小片	－	－	厚1.5	橙	被熱
377	165-01	瓦	軒桟瓦	1区	X11・12	SK10031	1/2	－	－	厚1.5	橙	角桟瓦，被熱
378	167-03	瓦	軒桟瓦	1区	X11・12	SK10031	瓦当小片	－	－	厚1.6	灰	
379	167-02	瓦	軒桟瓦	1区	X11・12	SK10031	瓦当小片	－	－	厚1.6	橙	被熱
380	171-01	瓦	軒桟瓦	1区	X11・12	SK10031	瓦当小片	－	－	厚1.9	橙	被熱
381	030-01	瓦	軒桟瓦	1区	X12	SK10031	1/4	－	－	厚1.6	灰	
382	030-02	瓦	軒桟瓦	1区	X12	SK10031	1/4	－	－	厚1.8	灰	角桟瓦
383	174-03	瓦	軒桟瓦	1区	X11・12	SK10031	瓦当小片	－	－	厚1.5	灰	瓦
384	039-01	瓦	丸瓦	1区		SK10031	1は完形	－	幅14.0	厚2.1	灰	凸面ケズリ後ナデ 凹面コビキB，布目
385	041-01	瓦	丸瓦	1区		SK10031	1は完形	長26.2	幅14.9	厚1.8	灰	凸面ケズリ後ナデ 凹面コビキB，布目
386	043-01	瓦	丸瓦	1区		SK10031	1は完形	長29.0	幅15.0	厚2.0	灰	凸面ケズリ後ナデ 凹面コビキB，布目，タタキ
387	031-01	瓦	丸瓦	1区	X12	SK10031	1/2	－	幅14.3	厚1.8	灰	凸面ケズリ後ナデ 凹面コビキB，布目
388	038-01	瓦	丸瓦	1区		SK10031	2/3	－	幅15.5	厚1.7	灰	凸面ケズリ後ナデ 凹面布目
389	042-01	瓦	丸瓦	1区		SK10031	1は完形	長30.9	幅16.8	厚2.0	灰	凸面ケズリ後ナデ 凹面布目
390	045-01	瓦	丸瓦	1区		SK10031	1/4	－	－	厚2.0	灰	凸面ケズリ後ナデ 凹面コビキB，布目
391	047-01	瓦	平瓦	1区	X12	SK10031	1/6	－	－	厚2.0	灰	釘穴2
392	047-02	瓦	桟瓦	1区	X12	SK10031	1/6	－	－	厚1.4	灰	桟瓦
393	044-01	瓦	平瓦	1区		SK10031	小片	－	－	厚1.8	灰	凸面に黒水道管を押印，釘穴1

遺物番号	実測番号	種類（産地・系統）	器種	調査区	グリッド	遺構	部位 残存度	法量（cm） 口径	底径	器高	色調（外面）	特記事項
394	122-06	土師器	皿	1区	B12	SK5032	2/12	8.0	－	－	橙	
395	064-01	須恵 染付（肥前）	碗	1区	B12	SK5032	口縁部3/12	16.8	－	－	明緑灰	
396	114-05	陶器（瀬戸・美濃）	碗	1区	B12	SK5032	底部11/12	－	5.0	－	オリーブ黄	灰釉
397	062-04	陶器（瀬戸・美濃）	擂利	1区	B12	SK5032	底部12/12	－	7.4	－	浅黄	鉄釉に鉄釉掛け
398	052-01	陶器（京焼）	鉢	1区	B12	SK5032	5/12	25.0	17.0	6.7	にぶい橙	火鉢，内面煤付着
399	062-03	瓦	軒桟瓦	1区	B12	SK5032	1/2	－	－	厚2.0	暗灰	
400	062-02	瓦	軒丸瓦	1区	B12	SK5032	瓦当小片	－	－	厚2.0	灰	
401	067-01	瓦	平瓦	1区	B12	SK5032	1/4	－	－	厚1.8	灰	凸面台圧痕
402	060-01	瓦	平瓦	1区	B12	SK5032	1/4	－	－	厚1.8	灰	凸面台圧痕
403	065-01	瓦	丸瓦	1区		SK5032	2/3	長27.6	幅15.0	厚2.0	灰	凸面ケズリ後ナデ 凹面コビキB，布目，ナデ
404	063-01	瓦	丸瓦	1区	B12	SK5032	約1/2	－	幅17.1	厚1.7	灰	凸面ケズリ後ナデ 凹面コビキB，布目，タタキ
405	002-02	陶器（瀬戸・美濃）	皿	1区	G11	SK5033	2/12	10.2	4.9	2.2	灰白	灰釉，高台内に輪トチン痕
406	001-03	土師器	皿	1区	G11	SK5033	9/12	9.0	－	2.0	浅黄橙	赤彩付着
407	001-04	土師器	皿	1区	G11	SK5033	5/12	9.4	－	2.0	にぶい橙	赤彩付着
408	001-05	土師器	皿	1区	G11	SK5033	1/12	12.6	－	1.6	浅黄橙	
409	150-03	土師器	鍋（羽釜形）	1区	G11	SK5033	口縁～胴部 1/12	22.4	－	－	にぶい橙	
410	001-02	土師器	鍋（羽釜形）	1区	G11	SK5033	口縁～胴部 1/12	28.4	－	－	にぶい橙	穿孔あり
411	001-01	土師器	焙烙	1区	G11	SK5033	口縁～胴部 1/12	33.8	－	－	明褐灰	煤付着
412	150-04	土師器	皿	1区	H11	SK5034	5/12	9.6	－	－	にぶい橙	赤彩付着
413	150-05	土師器	皿	1区	H11	SK5034	5/12	8.0	－	－	にぶい橙	
414	150-06	土師器	皿	1区	H11	SK5034	2/12	9.3	－	1.3	橙	赤彩付着
415	164-07	須恵 染付（肥前）	碗/鉢	1区	H11	SK5034	底部5/12	－	6.6	－	灰白	高台内に二重方形枠
417	156-02	土師器	鍋（羽釜形）	1区	H10	SK5046	口縁部1/12	21.0	－	－	橙	
418	115-01	須恵 染付（肥前）	湯呑	1区	H10	SK5046	底部1/12	－	5.5	－	灰白	
419	155-03	土師器	皿	1区	H10	SK5046	2/12	12.0	－	1.6	浅黄橙	
420	155-04	土師器	皿	1区	H10	SK5046	2/12	11.0	－	－	橙	赤彩付着
421	155-09	陶器（瀬戸・美濃）	碗	1区	H10	SK5046	底部1/12	－	4.2	－	灰白	灰釉
422	150-07	土師器	皿	1区	J9	SK5035	1/12	9.4	－	－	にぶい橙	
423	151-01	瓦	軒平瓦	1区	J9	SK5035	瓦当小片	－	－	厚1.6	灰	
424	003-01	瓦	丸瓦	1区	G11	SK5053	1/3	－	－	厚1.7	褐灰	凸面ケズリ後ナデ 凹面コビキB，刺突状のタタキ
425	002-03	須恵 染付（肥前）	碗	1区	G11	SK5038	1/12	11.2	－	－	灰白	
426	002-04	須恵 染付（肥前）	碗	1区	G11	SK5038	2/12	10.0	3.8	5.7	灰白	
427	151-02	陶器（京焼）	壺	1区	I8	SK5028	口縁部小片	－	－	－	褐灰	
428	151-04	土師器	皿	1区	G11	SK5038・5039	2/12	9.3	－	－	にぶい橙	赤彩付着
429	151-03	土師器	皿	1区	G11	SK5038・5039	1/12	12.0	－	－	浅黄橙	
430	068-01	陶器（京焼）	壺	1区	G11	SK5038・5039	口縁部6/12 底部4/12	66.2	21.0	－	橙	
431	194-02	須恵器	杯	1区	G11	SK5039	口縁部小片	15.8	－	－	灰	
432	115-02	須恵 染付（肥前）	皿	1区	H10	SK5048	口縁部4/12 底部8/12	12.4	7.2	2.8	灰白	高台内銹あり，輪花
433	155-05	土師器	皿	1区	I10	SK5047	2/12	16.6	－	－	橙	赤彩付着
434	158-02	陶器（瀬戸・美濃）	徳利	1区	H10・11	SK5046	底部6/12	－	16.0	－	赤黒	鉄釉
435	130-05	土師器	皿	1区	H11	SK5040	3/12	5.0	－	1.3	橙	
436	124-01	土師器	皿	1区	H11	SK5040	11/12	8.3	－	1.2	橙	赤彩付着
437	153-01	土師器	皿	1区	H11	SK5040	1/12	8.0	－	1.4	橙	赤彩付着

遺物番号	実測番号	種類（素地・器種）	器種	調査区	グリッド	遺構・層位	部位・残存度	法量（cm）			色調（外面）	特記事項
								口径	底径	器高		
438	124-03	土師器	甕	1区	H11	SK1040	6/12	9.0	－	1.6	にぶい橙	油煙付着
439	127-06	土師器	甕	1区	H11	SK1040	4/12	9.6	－	2.1	にぶい黄橙	油煙付着
440	130-03	土師器	甕	1区	H11	SK1040	4/12	9.9	－	1.8	橙	
441	124-02	土師器	甕	1区	H11	SK1040	2/12	10.2	－	1.8	橙	油煙付着
442	130-04	土師器	甕	1区	H11	SK1040	2/12	10.6	－	1.9	にぶい橙	油煙付着
443	130-07	土師器	甕	1区	H11	SK1040	3/12	11.0	－	1.5	にぶい橙	油煙付着
444	130-08	土師器	甕	1区	H11	SK1040	2/12	11.4	－	1.7	にぶい橙	油煙付着
445	131-04	土器	焙烙皿（鍋）	1区	H11	SK1040	完形	8.6	－	2.0	橙	和H，粘土に金属存含む
446	131-05	土師器	鍋（羽釜形）	1区	H11	SK1040	口縁部5/12	8.8	－	－	浅黄橙	
447	137-03	土師器	甑体	1区	H11	SK1040	小片	－	－	－	橙	
448	129-01	土師器	鍋（羽釜形）	1区	H11	SK1040	口縁部1/12	24.6	－	－	橙	穿孔J，煤付着
449	130-02	土師器	甑体	1区	H11	SK1040	口縁部1/12	37.4	－	－	にぶい橙	煤付着
450	130-01	土師器	甑体	1区	H11	SK1040	口縁部1/12	38.4	－	－	にぶい橙	煤付着
451	077-02	磁器　染付（肥前）	碗	1区	H11	SK1040	4/12	10.9	4.6	5.9	白	型紙摺り
452	078-02	磁器　染付（肥前）	碗	1区	H11	SK1040	7/12	10.3	4.5	5.4	白	「大明成化年製」
453	078-03	磁器　染付（肥前）	碗	1区	H11	SK1040	口縁部6/12 底部6/12	10.0	4.2	4.8	白	
454	077-03	磁器　染付（肥前）	碗	1区	H11	SK1040	底部12/12	－	－	3.9	灰白	
455	112-07	磁器　染付（肥前）	皿	1区	H11	SK1040	10/12	9.8	6.0	2.6	白	見込みに五弁花 二重方形枠に唐「福」
456	112-05	磁器　染付（肥前）	皿	1区	H11	SK1040	10/12	9.9	6.1	2.7	白	見込みに五弁花 二重方形枠に唐「福」
457	112-08	磁器　染付（肥前）	皿	1区	H11	SK1040	11/12	9.9	6.1	2.6	白	見込みに五弁花 二重方形枠に唐「福」
458	112-09	磁器　染付（肥前）	皿	1区	H11	SK1040	10/12	9.8	6.1	2.6	白	見込みに五弁花 二重方形枠に唐「福」
459	112-08	磁器　染付（肥前）	皿	1区	H11	SK1040	11/12	9.8	6.0	2.5	白	見込みに五弁花 二重方形枠に唐「福」
460	114-06	磁器　染付（肥前）	皿	1区	H11	SK1040	4/12	11.6	7.0	2.9	灰白	輪花
461	131-01	磁器　染付（肥前）	皿	1区	H11	SK1040	底部5/12	－	8.0	－	灰白	見込みに五弁花
462	155-07	陶器（瀬戸・美濃）	碗	1区	H11	SK1040	口縁部3/12	8.2	－	－	灰白	灰釉
463	131-02	陶器（肥前）	碗	1区	H11	SK1040	底部4/12	－	4.2	－	緑灰	内面透明釉，外面鉄絵釉 内野山北窯製品
464	087-02	陶器（瀬戸・美濃）	碗	1区	H11	SK1040	口縁部6/12 底部12/12	9.8	4.9	5.8	オリーブ灰色	磨跡不鮮，鉄釉・灰釉掛け分け
465	104-03	陶器（瀬戸・美濃）	壺	1区	H11	SK1040	底部4/12	8.7	－	2.8	明赤褐	鉄釉 土師または付近の壺
466	131-03	陶器（瀬戸・美濃）	壺	1区	H11	SK1040	底部3/12	－	－	－	明赤褐	鉄釉，46Lと同一個体か
467	077-01	陶器（瀬戸・美濃）	仏飯器	1区	H11	SK1040	6/12	6.9	4.6	4.9	灰白	灰釉
468	077-04	磁器（肥前）	小杯	1区	H11	SK1040	底部12/12	－	－	2.6	白	高台畳付に砂付着，白磁か
469	155-08	陶器（京都・信楽）	碗	1区	H11	SK1040	1/12	12.4	－	－	灰白	平碗
470	087-01	陶器（肥前）	皿	1区	H11	SK1040	6/12	14.8	5.2	3.3	灰白	灰釉，見込みに砂目 内野山北窯製品
471	077-06	陶器（瀬戸・美濃）	皿	1区	H11	SK1040	6/12	12.0	5.5	3.3	灰白	印刷絵
472	078-01	陶器（瀬戸・美濃）	皿	1区	H11	SK1040	11/12	12.3	7.0	3.0	淡黄	摺絵
473	194-04	陶器	線香立て	1区	H11	SK1040	完形	3.7	2.5	2.1	にぶい黄橙	軟質施釉陶器（土師質） 内面に黄色釉
474	113-01	陶器	碗	1区	H11	SK1040	6/12	11.0	4.8	6.8	灰白	内外面に白泥，灰釉 色絵表釉の可能性もあり
475	077-05	陶器	碗	1区	H11	SK1040	5/12	10.0	7.8	8.0	灰白	内外面に白泥，灰釉 色絵表釉の可能性もあり
476	158-01	陶器（交趾）	壺	1区	H11	SK1040	底部3/12	－	21.6	－	浅黄橙	
478	102-05	土師器	甕	1区	H9	SK1041	完形	8.3	－	1.6	浅黄橙	油煙付着
479	103-07	土師器	甕	1区	H9	SK1041 Sx2	4/12	7.9	－	1.5	にぶい橙	油煙付着
480	104-02	土師器	甕	1区	H9	SK1041 Sx6	6/12	8.0	－	1.5	淡橙	油煙付着
481	132-05	土師器	甕	1区	H9	SK1041	2/12	8.0	－	0.9	橙	

遺物番号	実測番号	種類（素地・系統）	器種	調査区	グリッド	遺構 層位	部位 残存度	法量（cm） 口径	底径	器高	色調（外面）	特記事項
482	132-08	土師器	皿	1区	89	SK5041	2/12	8.8	－	－	浅黄橙	
483	131-07	土師器	皿	1区	89	SK5041	3/12	8.8	－	1.6	にぶい橙	
484	103-06	土師器	皿	1区	89	SK5041 No4	11/12	8.9	－	1.8	橙	油煙付着
485	103-08	土師器	皿	1区	89	SK5041 No5	2/12	8.8	－	1.6	橙	
486	104-01	土師器	皿	1区	89	SK5041 No6	5/12	8.8	－	1.5	にぶい橙	油煙付着
487	132-04	土師器	皿	1区	89	SK5041	3/12	9.6	－	1.6	にぶい橙	
488	132-06	土師器	皿	1区	89	SK5041	2/12	9.9	－	1.4	にぶい橙	
489	132-03	土師器	皿	1区	89	SK5041	4/12	9.6	－	1.9	にぶい橙	油煙付着
490	112-04	土師器	皿	1区	89	SK5041	5/12	10.8	－	2.0	褐灰	
491	155-02	土師器	皿	1区	89	SK5041	3/12	10.6	－	1.6	橙	
492	132-07	土師器	皿	1区	89	SK5041	1/12	10.8	－	1.7	にぶい黄橙	
493	132-01	土師器	皿	1区	89	SK5041	1/12	10.9	－	1.7	にぶい黄橙	
494	132-02	土師器	皿	1区	89	SK5041	3/12	11.0	－	1.7	にぶい橙	
495	131-06	土師器	皿	1区	89	SK5041	3/12	11.4	－	2.1	橙	
496	157-01	土師器	焙烙	1区	89	SK5041	2/12	37.4	－	－	橙	
497	157-02	土師器	焙烙	1区	89	SK5041	1/12	35.8	－	－	浅黄橙	
498	003-04	磁器　染付（肥前）	碗	1区	811	SK5041	4/12	9.0	3.4	4.5	白	
499	114-07	磁器　染付（肥前）	小杯	1区	89	SK5041	8/12	6.6	2.7	4.0	灰白	
500	094-01	磁器　染付（肥前）	碗	1区	89	SK5041	口縁部3/12 底部12/12	11.2	4.5	5.8	灰白	型紙摺り
501	094-02	磁器　染付（肥前）	碗	1区	89	SK5041	5/12	9.6	4.4	6.1	灰白	
502	114-08	陶器（瀬戸・美濃）	鉢	1区	89	SK5041	底部1/12	－	14.6	－	灰	灰釉、鉄絵
503	132-09	陶器（瀬戸・美濃）	天目系碗	1区	89	SK5041	底部4/12	－	4.0	－	褐	鉄釉
504	094-04	陶器	碗	1区		SK5041 No3	底部12/12	－	4.9	－	にぶい橙	透明釉、肥前系か
505	156-03	陶器（瀬戸・美濃）	皿	1区	89	SK5041	1/12	12.0	－	－	灰白	灰釉
506	154-08	土師器	皿	1区	812	SK5049	2/12	8.9	－	－	にぶい橙	油煙付着
507	155-06	土師器	皿	1区	811・12	SK5049	1/12	8.6	－	－	橙	
508	154-06	土師器	皿	1区	812	SK5049	3/12	10.1	－	1.6	にぶい橙	
509	154-07	土師器	皿	1区	812	SK5049	3/12	10.2	－	1.3	にぶい橙	
510	157-04	土師器	焙烙	1区	811・12	SK5049	小片	－	－	－	橙	
511	124-05	磁器　染付（肥前）	碗	1区	811・12	SK5049	口縁部3/12	9.8	－	－	白	
512	112-10	磁器　染付（肥前）	皿	1区	811・12	SK5049	4/12	9.8	5.9	2.8	白	見込みに玉取花二重方形枠
513	094-03	磁器　染付（肥前）	皿	1区	812	SK5049	4/12	13.6	5.4	4.0	明緑灰	蛇の目釉剥ぎ
514	124-06	磁器　染付（肥前）	皿	1区	812	SK5049	底部1/12	－	11.4	－	明緑灰	高台内に圏線二重方形枠に蝶「福」
515	156-04	陶器（瀬戸・美濃）	皿	1区	811・12	SK5049	1/12	12.8	－	－	灰白	灰釉
516	111-03	陶器（瀬戸・美濃）	皿	1区	811・12	SK5049	完形	10.5	5.0	2.6	にぶい黄	鉄釉に灰釉掛け
517	156-01	陶器（瀬戸・美濃？）	土瓶	1区	811・12	SK5049	2/12	8.8	－	－	灰白	灰釉、青白
518	087-03	陶器（京都・信楽）	土瓶	1区	811 811・12	SK5040 SK5049	口縁部4/12	11.2	－	－	明オリーブ灰	灰釉、青白
519	118-01	陶器（丹波）	甕	1区	811・12	SK5049	底部12/12	－	19.0	－	暗赤褐	鉄釉掛け流し 信楽の可能性もあり
520	172-02	瓦	軒平瓦	1区	811・12	SK5049	瓦当小片	－	－	厚1.5	灰	
521	172-03	瓦	軒丸瓦	1区	811・12	SK5049	瓦当小片	－	－	厚2.1	灰黄	
522	109-01	瓦	軒丸瓦	1区	811・12	SK5049	1/4	－	幅15.2	厚1.8	灰	凸面ケズリ後ナデ 凹面コビキB
523	112-01	陶器（瀬戸・美濃）	碗	1区	G10	SK5050	2/12	12.0	6.4	6.8	灰白	
524	125-01	陶器（瀬戸・美濃）	皿	1区	G10	SK5050	口縁部2/12	12.0	－	－	灰黄	折縁皿、灰釉

遺物番号	実測番号	種類（素地・系統）	器種	調査区	グリッド	遺構層位	部位 残存度	法量（cm）			色調（外面）	特記事項
								口径	底径	器高		
525	125-02	陶器（瀬戸・美濃）	皿	1区	G10	SK1050	5/12	12.2	7.1	2.0	灰黄	端反皿、灰釉
526	125-03	陶器（瀬戸・美濃）	瓶類	1区	G10	SK1050	底部12/12	－	13.6	－	にぶい赤褐	鉄釉
527	112-02	磁器　染付（肥前）	皿	1区	G10	SK1050	底部12/12	－	5.5	－	明緑灰	輪花、高台畳付に砂付着
528	096-09	磁器　染付（肥前）	碗	1区	G10	SK1050	底部3/12	－	4.8	－	明緑灰	網目文、高台畳付に砂付着
529	115-03	磁器（肥前）	小子（瓶）	1区	G10	SK1050	胴小片	－	－	－	青黒	瓶形
530	125-04	磁器　染付（肥前）	湯呑	1区	G10	SK1050	胴部小片	－	－	－	明緑灰	
531	083-01	陶器（常滑）	甕	1区	G10	SK1050	口縁～胴部 8/12	42.0	－	－	橙	
532	103-03	土師器	皿	1区	G10	SK1050	5/12	8.2	－	1.6	淡橙	
533	154-05	土師器	皿	1区	G10	SK1050	4/12	9.2	－	－	橙	油煙付着
534	154-04	土師器	皿	1区	G10	SK1050	5/12	9.6	－	1.6	橙	
535	103-02	土師器	焙烙	1区	G10	SK1050	小片	－	－	－	にぶい橙	煤付着
536	103-01	土師器	焙烙	1区	G10	SK1050	1/12	36.8	－	－	灰白	煤付着
537	104-07	土師器	皿	1区	K9	SK1051	6/12	11.0	－	2.2	にぶい橙	油煙付着
538	104-08	土師器	皿	1区	K9	SK1051	2/12	8.6	－	1.4	橙	
539	115-04	磁器　染付（肥前）	杯	1区	K9	SK1051	4/12	7.4	3.0	5.2	灰白	朝顔形
540	115-05	磁器（肥前）	碗	1区	K9	SK1051	底部3/12	－	5.0	－	灰白	朝顔形
541	115-06	陶器（瀬戸・美濃）	皿	1区	K9	SK1051	5/12	12.4	7.0	3.1	灰白	輪花、灰釉
542	1001-13	骨製品	不明	1区	K9	SK1051	2/3	長4.5	幅0.8	厚0.2	－	板状 中央に孔
543	105-04	土師器	皿	1区	L8	SZ51058	7/12	9.7	－	1.6	浅黄橙	
544	084-04	土師器	皿	1区	L8	SZ51058 No2	口縁完形	9.9	－	1.9	にぶい橙	
545	084-01	土師器	皿	1区	L8	SZ51058	完形	10.3	－	1.9	橙	
546	084-02	土師器	皿	1区	L8	SZ51058	口縁完形	10.4	－	1.9	橙	
547	084-03	土師器	皿	1区	L8	SZ51058 No1	口縁完形	10.4	－	1.7	橙	
548	084-05	土師器	皿	1区	L8	SZ51058 No4	完形	10.6	－	1.9	橙	
549	084-06	土師器	皿	1区	L8	SZ51058 No5	口縁完形	10.2	－	2.0	橙	
550	084-07	土師器	皿	1区	L8	SZ51058 No7	口縁完形	10.3	－	1.8	浅黄橙	
551	084-08	土師器	皿	1区	L8	SZ51058 No8	完形	10.3	－	2.0	橙	
552	105-05	土師器	皿	1区	L8	SZ51058 No3	5/12	10.2	－	1.7	浅黄橙	
553	105-06	土師器	皿	1区	L8	SZ51058 No6	2/12	10.8	－	1.6	にぶい橙	
554	105-07	土師器	皿	1区	L8	SZ51058 No9	5/12	10.4	－	1.7	橙	
555	117-01	陶器（常滑）	甕	1区	L9	SK1059	底部7/12	－	20.0	－	にぶい橙	
556	133-01	陶器（常滑）	甕	1区	K12	SK1060	胴～底部 12/12	－	16.5	－	にぶい橙	
557	085-04	陶器（瀬戸・美濃）	水鉢	1区	K12	SK1060	5/12	24.0	9.4	5.3	淡黄	輪花、灰釉 削出高台、見込み二目跡
558	134-01	瓦	軒丸瓦	1区	K12	SK1060	瓦当小片	－	－	厚1.8	灰	
559	134-03	瓦	丸瓦	1区	K12	SK1060	1/4	－	－	厚1.5	灰	
560	134-02	瓦	軒丸瓦	1区	K12	SK1060	1/4	－	－	厚1.8	灰	
561	159-06	陶器（瀬戸・美濃）	碗	1区	L12	SK1064	1/12	11.8	－	－	明オリーブ	
562	160-02	土師器	皿	1区	L12	SK1064	4/12	10.0	－	－	にぶい橙	油煙付着
563	160-03	土師器	皿	1区	L12	SK1064	2/12	10.0	－	－	にぶい橙	
564	160-04	土師器	皿	1区	L12	SK1064	2/12	12.0	－	－	にぶい橙	
565	124-04	山茶碗	碗	1区	L10・11	SK1065	底部4/12	－	7.4	－	灰白	糸切痕
566	128-02	土師器	焙烙	1区	L10・11	SK1065	1/12	38.4	－	－	にぶい黄橙	
567	147-01	陶器（瀬戸・美濃）	鉢	1区	I9	SK1066	口縁部1/12	35.2	－	－	灰白	灰釉、鉄絵

遺物番号	実測番号	種類（底地・素縁）	器種	調査区	グリッド	遺構	部位 残存度	法量（cm） 口径	底径	器高	色調（外面）	特記事項
568	159-03	土師器	皿	1区	512	SK5062	2/12	11.2	－	－	にぶい橙	赤彩付着
569	079-02	磁器　染付（肥前）	碗	1区	512	SK5062	口縁部A/12	11.3	－	－	白	
570	159-04	磁器　染付（肥前）	皿	1区	512	SK5062	底部2/12	－	7.6	－	灰白	見込みにコンニャク印判五弁花 方形枠に吉祥字
571	079-03	磁器　染付（瀬戸・美濃）	碗（蓋）	1区	512	SK5062	11/12	9.0	3.6	3.2	白	梅花瓣の蓋
572	079-04	陶器（瀬戸・美濃）	皿	1区	512	SK5062	5/12	13.2	8.6	3.4	灰白	染付
573	155-02	陶器（信楽）	蓋壺L	1区	512	SK5062	底部3/12	－	15.8	－	橙	内面環付蓋
574	160-01	陶器（瀬戸・美濃）	水壺	1区	512	SK5062	口縁部1/12	31.0	－	－	浅黄	灰釉、鉄釉
575	159-05	陶器（京都・信楽）	土瓶	1区	512	SK5062	口縁部3/12	9.8	－	－	浅黄	灰釉
576	091-05	陶器（瀬戸・美濃）	蓋	1区	512	SK5062	11/12	14.1	3.4	4.1	灰白	灰釉 鎬型の蓋
577	116-01	陶器（京都・信楽）	什器	1区	512	SK5062	底部5/12	－	5.2	－	暗赤褐	鉄釉 縁に焼き締まる
578	188-01	陶器（信楽）	壺	1区	18	SK5067	底部12/12	－	16.2	－	橙	底部焼成痕穿孔
579	136-01	陶器（信楽）	壺	1区	18	SK5067	口縁～胴部 12/12	25.9	－	－	褐	
580	135-01	土師器	焙烙	1区	18	SK5067	小片	－	－	－	橙	
581	146-07	土師器	皿	1区	18	SK5067	2/12	8.8	－	－	にぶい橙	赤彩付着
582	190-03	土製品	角笛	1区	18	SK5067	口部完形	長5.0	幅3.6	高4.1	灰白	
583	192-03	土師器	高杯	1区	18	SK5067	脚部小片	－	－	－	にぶい黄橙	
589	161-01	土師器	皿	1区	112・13	SK5071	11/12	6.6	－	1.6	にぶい黄橙	
590	104-05	土師器	皿	1区	112・13	SK5071	11/12	7.5	－	1.2	にぶい橙	赤彩付着
591	160-06	土師器	皿	1区	112・13	SK5071	1/12	8.4	－	－	橙	赤彩付着
592	104-04	土師器	皿	1区	112・13	SK5071	完形		－	1.5	橙	赤彩付着
593	104-06	土師器	皿	1区	112・13	SK5071	2/12	9.4	－	1.4	にぶい橙	
594	090-04	磁器　染付（肥前）	碗	1区	112・13	SK5071	5/12	12.4	6.8	5.4	灰白	見込みに五弁花 「大明年製」か
595	116-03	磁器　染付（肥前）	碗	1区	112・13	SK5071	11/12	9.5	5.2	4.7	灰白	
596	090-03	磁器　染付（肥前）	碗	1区	112・13	SK5071	5/12	11.0	4.2	5.9	灰白	
597	160-05	磁器　染付（肥前）	碗	1区	112・13	SK5071	4/12	13.8	4.5	6.6	灰白	四方雁文
598	090-05	磁器　染付（肥前）	小碗	1区	112・13	SK5071	完形	7.4	3.9	4.1	灰白	
599	090-02	磁器　染付（肥前）	碗	1区	112・13	SK5071	5/12	8.8	3.6	5.9	灰白	小丸紋、見込みに五弁花 四方雁文
600	090-01	磁器　染付（肥前）	猪口	1区	112・13	SK5071	口縁部11/12 底部5/12	8.6	4.3	6.7	灰白	輪花、四方雁文
601	089-05	磁器　染付（肥前）	合子（蓋）	1区	112・13	SK5071	6/12	8.3	－	3.3	灰白	色絵
602	116-02	陶器（瀬戸・美濃）	碗	1区	112・13	SK5071	底部11/12	－	4.2	－	オリーブ黒	鉄釉碗 灰釉に鉄釉掛け
603	089-01	陶器（京都・信楽）	鉢	1区	112・13	SK5071	完形	8.9	5.0	4.3	明オリーブ灰	灰釉
604	146-08	磁器　青磁（肥前）	香炉	1区	112・13	SK5071	口縁部2/12	9.4	－	－	明オリーブ灰	沓型形
605	081-02	陶器（瀬戸・美濃）	碗	1区	112・13	SK5071	口縁部5/12 底部12/12	12.0	5.9	7.7	浅黄	灰釉
606	161-02	陶器（瀬戸・美濃）	小碗	1区	112・13	SK5071	4/12	6.9	2.9	4.2	灰白	灰釉
607	089-02	陶器（瀬戸・美濃）	小碗	1区	112・13	SK5071	完形	6.6	2.9	4.0	灰白	灰釉
608	089-03	陶器（京都・信楽）	小碗	1区	112・13	SK5071	6/12	7.0	2.2	4.1	灰白	灰釉
609	089-04	陶器（京都・信楽）	鉢（蓋）	1区	112・13	SK5071	7/12	8.4	－	3.4	灰白	灰釉、色絵
610	091-01	陶器（瀬戸・美濃）	燈明	1区	112・13	SK5071	脚～底部 12/12	－	6.0	－	明オリーブ灰	灰釉
611	112-03	磁器　青磁（肥前）	鉢	1区	112・13	SK5071	底部4/12	－	8.6	－	明緑灰	
612	091-02	陶器（瀬戸・美濃）	灯明皿	1区	112・13	SK5071	11/12	10.2	5.0	1.9	暗赤褐	鉄釉
613	081-03	陶器（瀬戸・美濃）	水壺	1区	112・13	SK5071	口縁部1/12	29.6	－	－	浅黄	灰釉、鉄釉
614	147-02	陶器（瀬戸・美濃）	擂鉢	1区	112・13	SK5071	底部3/12	－	13.2	－	にぶい赤橙	鉄釉
615	192-01	陶器（信楽）	鍋木鉢	1区	112・13	SK5071	11/12	16.2	12.2	14.0	橙	

遺物番号	実測番号	種類（素地・系統）	器種	調査区	グリッド	遺構・層位	部位・残存度	法量（cm）			色調（外面）	特記事項
								口径	底径	器高		
616	172-01	陶器	壺	1区	112・13	SK51071	胴～底部 12/12	－	10.8	－	明赤褐	瀬戸系か タキメ
617	147-03	瓦	軒桟瓦	1区	112・13	SK51071	瓦当小片	－	－	厚1.7	灰黄	
618	078-04	土人形	天神	1区	112・13	SK51071	完形	長5.1	幅1.6	高3.4	にぶい橙	底部にれあり
619	194-06	土製品	瓦碗	1区	112・13	SK51071	完形	長5.6	幅5.5	厚1.4	灰白	転用マ320（紐付）両面に指状痕有
620	078-05	陶器（瀬戸・美濃）	皿	1区	J10	SK51072	10/12	11.4	7.2	2.3	灰白	灰釉
621	161-04	土師器	皿	1区	J10	SK51072	1/12	10.0	－	－	にぶい橙	
622	161-03	土師器	皿	1区	J10	SK51072	1/12	12.0	－	－	橙	油煙付着
623	161-05	陶器（信楽）	鉢	1区	J10	SK51072	2/12	32.8	－	－	暗赤灰	鉄釉
624	161-06	土師器	焙烙	1区	J10	SK51072	1/12	36.7	－	－	にぶい橙	
625	116-04	磁器　染付（瀬戸・美濃）	碗	1区	J12	SK51073	5/12	9.8	4.0	5.1	灰白	端反碗（朝顔形）
626	148-02	磁器　染付（肥前）	碗	1区	J12	SK51073	4/12	5.4	3.0	4.3	白	
627	148-03	磁器　染付（瀬戸・美濃）	碗	1区	J12	SK51073	1/12	8.4	2.8	4.7	白	端反碗
628	148-05	磁器　染付（肥前）	碗/皿	1区	J12	SK51073	小片	－	－	－	白	平面形は正円でない
629	148-01	陶器（瀬戸・美濃）	碗	1区	J12	SK51073	口縁部2/12	10.2	－	－	にぶい黄橙	鉄茶碗 飛び跳
630	148-04	陶器（信楽）	鉢	1区	J12	SK51073	口縁部2/12	14.6	－	－	浅黄橙	胎土に長石含む
631	091-03	陶器	鍋（蓋）	1区	J12	SK51073	完形	15.9	4.9	3.1	暗赤褐	鉄釉 鍋形の蓋
632	190-04	土人形	人形	1区	J12	SK51073	1/4	－	幅2.2	高4.6	浅黄	牛乗り人
634	088-01	瓦質土器	焙烙	1区	J12	SK51073	口縁部5/12	36.8	－	－	灰	底部外面に型圧痕、雲母粉（離型材）付着
635	078-06	陶器（瀬戸・美濃）	香炉	1区	J12	SK51074	口圧完形	10.3	7.2	6.6	淡黄	灰釉
636	108-02	陶器（京都・信楽）	鍋	1区	J12	SK51074	口縁部3/12	16.8	－	－	灰白	灰釉
651	142-04	瓦	軒桟瓦	1区	113	SK51079	瓦当小片	－	－	厚1.6	灰	取り上げ時「幾土瓦の痕欠」
653	201-04	陶器（信楽）	皿	1区	113	SK51080	口縁部4/12	14.4	－	－	灰オリーブ	黄瀬 取り上げ時「幾土瓦」
654	145-01	磁器　染付（肥前）	碗	1区	H12	SK51081	口縁部2/12	10.6	－	－	白	取り上げ時「近代井戸 瓦」
655	148-06	磁器　染付（肥前）	碗	1区	H12	SK51081	口縁部5/12 底部6/12	10.4	4.0	5.3	白	取り上げ時「近代井戸 瓦」
656	201-03	陶器	碗	1区	H12	SK51081	4/12	11.0	4.4	4.6	黄	口縁、下半に鉄釉、上半に鉄釉 取り上げ時「近代井戸 瓦」
657	175-04	陶器（京都・信楽）	合子（蓋）	1区	H12	SK51081	完形	7.6	－	2.0	灰白	灰釉、鉄釉 取り上げ時「円形瓦」
658	145-02	陶器（瀬戸・美濃）	香炉	1区	H12	SK51081	10/12	11.3	6.2	7.2	灰白	灰釉、鉄釉 取り上げ時「近代井戸 瓦」
659	205-02	陶器（信楽）	四耳壺	1区	H12	SK51081	胴～底部 6/12	－	8.8	－	黒	胴部鉄釉、河原鉄釉、胎土に長石含む、取り上げ時「近代井戸 瓦」
660	011-05	土師器	皿	3区	G5	SK53001	4/12	8.0	－	1.4	にぶい橙	
661	011-04	土師器	皿	3区	G4	SK53001	3/12	8.0	－	1.5	にぶい黄橙	
662	011-06	土師器	皿	3区	G5	SK53001	3/12	8.3	－	1.2	にぶい橙	油煙付着
663	113-02	土師器	皿	3区	G4	SK53001	4/12	8.7	－	－	橙	
664	111-04	土師器	皿	3区	G4	SK53001	3/12	9.2	－	1.1	にぶい橙	
665	011-07	土師器	皿	3区	G5	SK53001	3/12	9.0	－	1.4	にぶい橙	油煙付着
666	011-02	土師器	皿	3区	G4	SK53001	3/12	9.4	－	1.3	橙	油煙付着
667	011-03	土師器	皿	3区	G4	SK53001	3/12	12.0	－	1.6	橙	
668	007-05	磁器　染付（肥前）	碗	3区	G4	SK53001	口縁部3/12 底部6/12	9.6	3.9	4.6	白	
669	013-02	磁器　染付（肥前）	碗	3区	G4	SK53001	底部1/12	－	3.6	－	灰白	高台内に砂等あり
670	008-04	磁器　染付（肥前）	碗（蓋）	3区	G4	SK53001	7/12	10.1	4.1	2.8	白	四方雁文
671	005-08	磁器　染付（肥前）	碗（蓋）	3区	G4	SK53001	5/12	10.2	4.0	2.8	灰白	四方雁文
672	007-01	磁器　染付（肥前）	碗	3区	G4	SK53001	口縁部2/12 底部12/12	9.0	3.5	5.2	白	梵字文、四方雁文
673	007-06	磁器　染付（肥前）	碗	3区	G4	SK53001	5/12	8.8	3.2	5.6	白	小丸紋、四方雁文
674	005-02	磁器　染付（肥前）	碗	3区	G4	SK53001	10/12	11.0	5.3	5.7	明緑灰	高台内に方形格子体

遺物番号	実測番号	種類（産地・系統）	器種	調査区	グリッド	遺構層位	部位残存度	法量（cm）			色調（外面）	特記事項
								口径	底径	器高		
675	004-04	磁器　染付（肥前）	碗	3区	G5	SK3001	6/12	12.2	4.9	5.4	灰白	蛇の目釉剥ぎ 見込みにコンニャク印刑五弁花
676	004-03	磁器　染付（肥前）	鉢	3区	G4	SK3001	4/12	14.6	5.0	7.3	明緑灰	四方雕文
677	008-01	磁器　染付（肥前）	猪口	3区	G4	SK3001	5/12	8.2	5.9	6.9	白	四方雕文
678	010-03	磁器　染付（肥前）	鉢	3区	G4	SK3001	5/12	8.0	6.0	4.0	明緑灰	型打ち（八角形），口紅
679	006-04	磁器　染付（肥前）	碗	3区	G5	SK3001	底部3/12	－	6.0	－	白	見込みに五弁花 「大明年製」
680	006-05	磁器　染付（肥前）	碗	3区	G4	SK3001	底部9/12	－	7.3	－	白	
681	003-01	磁器　染付（肥前）	鉢	3区	G4	SK3001	6/12	16.8	8.2	－	白	蓋付の鉢
682	007-03	磁器　染付（肥前）	皿	3区	G4	SK3001	6/12	14.6	－	－	白	輪花
683	008-03	磁器　染付（肥前）	鉢	3区	G4	SK3001	底部3/12	－	7.7	－	白	色絵
684	009-04	磁器　染付（肥前）	鉢（蓋）	3区	G4	SK3001	6/12	16.2	－	－	灰白	
685	008-02	磁器　染付（肥前）	鉢（蓋）	3区	G4	SK3001	4/12	14.4	－	－	白	
686	004-02	磁器　染付（肥前）	皿蓋	3区	G4	SK3001	4/12	16.0	11.4	6.6	灰白	
687	004-01	磁器　染付（肥前）	鉢	3区	G4	SK3001	4/12	23.0	14.4	11.8	明緑灰	蓋付の鉢，蜀葵花
688	002-03	磁器　染付（肥前）	鉢（蓋）	3区	G4	SK3001	1/12	23.2	－	－	灰白	
689	195-04	磁器　染付（肥前）	合子（蓋）	3区	G4	SK3001	9/12	7.4	－	6.8	白	菊花文，朱圏文
690	008-05	磁器　染付（肥前）	鉢	3区	G4	SK3001	9/12	7.5	3.8	4.2	白	蓋付の鉢
691	007-04	磁器　染付（肥前）	皿	3区	G4	SK3001	6/12	9.8	3.2	2.5	白	見込みに五弁花 二重方形枠に蘭「福」
692	009-02	磁器　染付（肥前）	皿	3区	G4	SK3001	6/12	12.0	8.8	2.6	灰白	蛇の目凹形高台
693	007-02	磁器　染付（肥前）	小杯	3区	G4	SK3001	2/12	5.2	2.1	3.3	白	
694	095-09	磁器（肥前）	杯	3区	G4	SK3001	6/12	8.0	2.9	4.8	灰白	光沢強く，あるいは瀬戸・美濃か
695	095-10	磁器　染付（肥前）	水滴	3区	G4	SK3001	3/4	長5.4	幅3.9	高2.2	灰白	方形
696	010-01	陶器（京都・信楽）	鍋	3区	G4	SK3001	2/12	30.2	－	－	灰褐	鉄釉，硬く焼き締まる
697	015-01	陶器（瀬戸・美濃）	擂鉢	3区	G5	SK3001	5/12	31.0	14.0	13.7	褐灰	鉄釉
698	006-02	陶器（瀬戸・美濃）	碗	3区	G4・5	SK3001	口縁部2/12 底部2/12	12.4	4.2	6.0	灰白	灰釉，長石釉
699	201-04	陶器	碗	3区	G4	SK3001	口縁部3/12	16.8	－	－	灰	灰釉，鉄絵
700	197-03	陶器（信楽）	四耳壺	3区	G4	SK3001	口縁部3/12	12.0	－	－	にぶい黄	粘土に長石含む
701	006-03	陶器（瀬戸・美濃）	碗	3区	G5	SK3001	5/12	11.6	－	－	灰白	灰釉，鉄絵
702	197-02	陶器（瀬戸・美濃）	徳利	3区	G4	SK3001	口縁～頸部2/12	2.1	－	－	にぶい赤褐	鉄釉
703	009-03	陶器	壺	3区	G4	SK3001	底部1/12	－	10.8	－	白 灰褐・橙	軟質施釉陶器 白泥に鉄絵流し掛け
704	009-01	陶器（瀬戸・美濃）	灯明皿	3区	G4	SK3001	7/12	11.4	4.6	2.2	褐	鉄釉
705	198-03	陶器（瀬戸・美濃）	鍋	3区	G4	SK3001	5/12	21.4	9.2	10.7	灰白	灰釉
706	013-02	陶器（瀬戸・美濃）	徳利	3区	G4	SK3001	底部3/12	－	10.2	－	オリーブ	灰釉
707	014-01	陶器（瀬戸・美濃）	皿	3区	G5	SK3001	5/12	26.0	14.0	5.9	灰白	蛇の目底 灰釉，鉄絵
708	010-02	陶器（京都・信楽）	鉢	3区	G4	SK3001	底部12/12	－	5.8	－	灰白	灰釉，鉄絵
709	006-01	陶器（瀬戸・美濃）	合子	3区	G4	SK3001	口縁部2/12 底部7/12	8.0	5.8	6.0	灰白	灰釉 削出高台
710	111-02	陶器（京都・信楽）	水滴	3区	G5	SK3001	7/12	7.2	3.5	3.8	灰白	灰釉
711	111-05	陶器（京都・信楽）	合子（蓋）	3区	G4	SK3001	完形	3.8	－	0.7	明オリーブ灰	灰釉
712	190-01	陶器（京都・信楽）	合子	3区	G4	SK3001	口縁部4/12 底部6/12	4.6	4.6	1.9	淡黄	灰釉，黒釉
713	011-01	土器	焼塩壺（蓋）	3区	G4	SK3001	3/12	7.9	－	1.9	橙	布目
714	012-02	土器	焼塩壺	3区	G4	SK3001	6/12	5.6	5.2	7.5	橙	
715	013-01	陶器（信楽）	鉢	3区	G5	SK3001	口縁部1/12 底部6/12	20.0	13.6	6.5	橙	三足，火鉢
716	012-01	陶器（信楽）	植木鉢	3区	G4	SK3001	口縁～頸部5/12	22.4	－	－	にぶい黄橙	
717	049-01	陶器（信楽）	甕	3区	G4	SK3001	7/12	52.0	－	－	橙	

遺物番号	実測番号	種類（素地・系統）	器種	調査区	グリッド	遺構層位	部位 残存度	法量（cm）			色調（外面）	特記事項
								口径	底径	器高		
718	110-01	瓦質土器	焙烙	3区	G4	SK53001	2/12	32.8	－	－	灰	底部外面に型圧痕、面存粉（雌型 4f）付着
719	110-02	瓦質土器	焙烙	3区	G4	SK53001	2/12	36.0	－	－	灰	底部外面に型圧痕、面存粉（雌型 4f）付着
720	110-03	瓦質土器	焙烙	3区	G4	SK53001	2/12	36.8	－	－	灰	底部外面に型圧痕、面存粉（雌型 4f）付着
721	110-04	瓦質土器	焙烙	3区	G5	SK53001	2/12	37.6	－	－	灰	底部外面に型圧痕、面存粉（雌型 4f）付着
722	026-02	瓦	軒丸瓦	3区	G4	SK53001	小片	－	－	厚2.0	灰	
723	027-01	瓦	丸瓦	3区	G4	SK53001	1/2	－	幅11.7	厚1.6	灰	凸面ケズリ後ナデ 凹面コビキB
724	028-02	瓦	丸瓦	3区	G4	SK53001	1/6	－	－	厚2.6	灰	凸面ケズリ後ナデ 凹面布目
725	016-01	瓦	丸瓦	3区	G5	SK53001	1/6	－	－	厚2.0	灰	凸面ケズリ後ナデ 凹面布目
726	023-01	瓦	丸瓦	3区	G4	SK53001	1/2	長28.6	－	厚1.7	灰	凸面ケズリ後ナデ 凹面コビキB
727	018-01	瓦	丸瓦	3区	G3	SK53001	1/2	長29.4	－	厚2.0	灰	凸面ケズリ後ナデ 凹面コビキB
728	022-03	瓦	丸瓦	3区	G5	SK53001	小片	－	－	厚2.6	灰	凸面ケズリ後ナデ 凹面布目，タタキ
729	026-04	瓦	丸瓦	3区	G5	SK53001	1/4	－	－	厚1.6	灰	凸面ケズリ後ナデ 凹面コビキB，ナデ
730	021-03	瓦	丸瓦	3区	G5	SK53001	1/4	－	－	厚1.7	暗灰	凸面ケズリ後ナデ 凹面コビキB
731	025-03	瓦	丸瓦	3区	G4	SK53001	小片	－	－	厚1.6	灰	凸面ケズリ後ナデ 凹面タタキ
732	029-01	瓦	平瓦	3区	G4	SK53001	1/6	－	－	厚1.6	灰	
733	029-02	瓦	平瓦	3区	G5	SK53001	1/4	－	－	厚1.7	灰	
734	020-01	瓦	平瓦	3区	G4	SK53001	1/6	－	－	厚1.7	灰	
735	019-01	瓦	平瓦	3区	G4	SK53001	1/4	－	－	厚1.7	灰	
736	024-02	瓦	平瓦	3区	G4	SK53001	1/3	－	－	厚1.6	灰	
737	019-02	瓦	平瓦	3区	G5	SK53001	1/6	－	－	厚1.7	灰白	
738	022-01	瓦	平瓦	3区	G5	SK53001	1/6	－	－	厚1.9	灰	
739	020-02	瓦	平瓦	3区	G4	SK53001	小片	－	－	厚1.5	黄灰	釘穴1
740	022-02	瓦	桟瓦	3区	G5	SK53001	小片	－	－	厚1.4	灰	
741	021-02	瓦	桟瓦	3区	G5	SK53001	小片	－	－	厚1.6	灰	
742	027-03	瓦	軒桟瓦	3区	G4	SK53001	瓦当小片	－	－	厚1.5	灰	
743	027-03	瓦	軒桟瓦	3区	G4	SK53001	小片	－	－	厚1.5	灰	
744	027-04	瓦	軒桟瓦	3区	G4	SK53001	小片	幅4.1	－	厚1.5	灰	
745	025-02	瓦	軒桟瓦	3区	G4	SK53001	小片	－	－	厚1.5	灰	
746	025-01	瓦	軒桟瓦	3区	G4	SK53001	小片	－	－	厚2.0	灰	
747	017-01	瓦	軒桟瓦	3区	G5	SK53001	1/6	－	－	厚1.9	暗灰	
748	015-02	瓦	軒桟瓦	3区	G5	SK53001	1/6	－	－	厚1.6	黄灰	
749	016-02	瓦	丸瓦	3区	G5	SK53001	1/6	－	－	厚1.7	灰	下瓦か，凸面ケズリ後ナデ 凹面コビキB
750	028-01	瓦	桟瓦	3区	G4	SK53001	1/4	－	－	厚1.6	灰	暗瓦
751	021-01	瓦	桟瓦	3区	G3	SK53001	小片	－	－	厚1.8	灰	暗瓦
752	024-01	瓦	道具瓦	3区	G4	SK53001	1/4	－	－	厚3.2	黄灰	側面に孔1
753	102-03	石製品	砥石	3区	G4	SD53002	1/4	7.2	3.8	2.5	－	砥沢質，粘度#600（細目）
754	097-06	陶器（常滑）	鉢	3区	G4	SD53002	口縁部2/12	33.6	－	－	橙	内面煤付着
755	127-08	土師器	皿	3区	F3	SD53004	2/12	10.0	－	－	橙	油煙付着
756	128-07	土師器	皿	3区	F3	SD53004	2/12	10.4	－	1.6	橙	
757	127-03	土師器	皿	3区	F3	SD53004	1/12	12.0	－	1.5	橙	油煙付着
758	093-05	瓦器　染付（肥前）	皿	3区	F3	SD53004	口縁部1/12	21.0	－	－	白	口紅
759	092-03	瓦器　染付（肥前）	碗/鉢	3区	F3	SD53004	口縁部6/12	－	6.0	－	明緑灰	
760	120-02	陶器（常滑）	壺	3区	F3	SD53004	底部7/12	－	14.4	－	橙	

遺物番号	実測番号	種類（産地・系統）	器種	調査区	グリッド	遺構間位	部位残存度	法量（cm）			色調（外面）	特記事項
								口径	底径	器高		
261	093-01	瓦	鬼瓦	3区		SE3004	小片	－	－	－	暗灰	
262	151-05	磁器 染付（肥前）	皿	3区	F3	SE3005	1/12	14.0	－	－	明緑灰	
263	002-01	陶器（唐・明・石）	碗鉢	3区	F3	SE3005	口縁～胴部1/12	8.4	4.2	4.5	にぶい橙	
264	151-06	陶器（瀬戸・美濃）	小椀	3区	F3	SE3006	口縁部1/12 底部6/12	6.6	3.4	3.1	浅黄	灰釉
265	082-04	磁器 染付（肥前）	椀	4区		SE4002	10/12	10.6	4.5	5.8	灰白	
266	095-11	陶器（京都・信楽）	鉢	4区		SE4002	口縁部2/12	5.0	－	－	灰白	畳付か
267	102-02	陶器（瀬戸・美濃）	皿	4区		SE4002	口縁部4/12 底部3/12	21.4	11.8	4.4	にぶい黄	灰釉
268	129-02	陶器	壺	4区		SE4002	口縁部2/12	17.0	－	－	暗緑灰	軟質
269	093-02	陶器（瀬戸・美濃）	鉢	4区		SE4002 断割	口縁部2/12	33.4	－	－	白	灰釉，緑釉，鉄絵
270	185-02	瓦	軒平瓦	4区		SE4002 廃土	瓦当小片	－	－	厚1.7	暗灰	
271	140-02	瓦	軒平瓦	4区		SE4002 断割	瓦当小片	－	－	厚1.7	暗灰	
272	123-01	陶器（京焼）	碗	4区		SE4002 断割	口縁部4/12 底部1/12	38.6	23.6	36.0	橙	
273	122-01	陶器（京焼）	碗	4区		SE4002 井戸枠内	口縁部1/12 底部6/12	41.2	19.0	40.5	橙	
278	176-02	土師器	皿	1区	K12	包含層	3/12	6.0	－	0.8	にぶい橙	油煙付着
279	184-01	土師器	皿	1区	H12	攪乱	完形	5.6	－	1.2	橙	
280	176-06	土師器	皿	1区	G14	包含層	完形	5.7	－	1.0	橙	
281	176-07	土師器	皿	1区	G14	包含層	10/12	5.7	－	1.2	にぶい橙	
282	177-01	土師器	皿	5区	N5	整地土	10/12	6.0	－	1.1	にぶい橙	
283	177-02	土師器	皿	5区	N5	整地土	3/12	6.0	－	1.2	にぶい橙	
284	184-04	土師器	皿	1区	I13	攪乱	10/12	6.5	－	1.3	橙	油煙付着
285	176-05	土師器	皿	1区	K13	包含層	1/12	7.9	－	1.2	橙	
286	176-04	土師器	皿	1区	K13	包含層	3/12	8.2	－	1.2	橙	
287	176-08	土師器	皿	1区	G14	包含層	完形	8.4	－	1.3	橙	
288	176-09	土師器	皿	1区	G14	包含層	完形		－	1.7	にぶい黄橙	
289	184-07	土師器	皿	1区	KL11	段下げ	11/12	9.3	－	1.7	浅黄橙	
290	184-02	土師器	皿	1区	I12	攪乱	5/12	10.0	－	2.0	にぶい橙	
291	184-05	土師器	皿	1区	K13	攪乱	2/12	9.8	－	1.4	橙	
292	184-03	土師器	皿	1区	I13	攪乱	4/12	5.8	－	1.2	橙	油煙付着
293	176-03	土師器	皿	1区	K12	包含層	2/12	11.0	－	1.4	橙	
294	184-06	土師器	皿	1区	K13	攪乱	3/12	10.8	－	1.7	橙	油煙付着
295	107-07	土師器	皿	1区	G9	攪乱	6/12	10.8	－	1.9	橙	油煙付着
296	107-08	土師器	皿	1区	J13	攪乱	3/12	11.2	－	1.5	にぶい橙	油煙付着 取り上げ時「方形攪乱」
297	107-09	土師器	皿	1区	J13	攪乱	3/12	11.2	－	2.2	にぶい橙	油煙付着 取り上げ時「方形攪乱」
298	173-01	土師器	皿	1区	J9	攪乱	9/12	11.4	－	2.1	にぶい橙	油煙付着
299	175-06	土師器	焙烙	1区	H12	包含層	小片	－	－	－	にぶい橙	
300	175-07	土師器	焙烙	1区	K13	包含層	小片	－	－	－	橙	
301	177-04	土師器	焙烙	7区		包含層	1/12	36.0		－	にぶい橙	
302	102-02	土師器	焙烙	1区	K13	攪乱	1/12	37.0	－	－	橙	
303	176-01	瓦質土器	焙烙	1区		包含層	口縁部1/12	36.0	－	－	暗灰	帯孔2
304	190-05	土製品	鳥笛		J12・K13	攪乱	完形	長6.9	幅2.4	高3.6	灰白	
305	175-05	土器	焼塩壺（蓋）	1区	F14	包含層	10/12	7.5	－	2.0	にぶい橙	布目
306	144-05	土器	焼塩壺（蓋）	1区	I13	攪乱	7/12	7.0	－	1.9	にぶい橙	摩滅著しい
307	144-06	土器	焼塩壺	1区	I13	攪乱	完形	5.7	5.2	7.9	にぶい橙	

遺物番号	実測番号	種類（産地・系統）	器種	調査区	グリッド	遺構層位	部位 残存度	法量（cm）			色調（外面）	特記事項
								口径	底径	器高		
808	201-05	縄文　染付（肥前）	碗	1区	I13	撹乱	6/12	9.9	3.6	5.0	暗緑灰	
809	193-01	縄文　染付（肥前）	碗	1区	I13	撹乱	11/12	7.7	2.6	3.7	灰白	色絵
810	178-01	縄文　染付（肥前）	碗	1区	K8,11	包含層	4/12	11.0	4.1	5.8	白	
811	202-03	縄文　染付（肥前）	碗	1区	G14	包含層	5/12	11.3	－	－	灰白	蛇跡ガ
812	193-02	縄文　染付（肥前）	猪口	1区	I13	撹乱	底部6/12	－	6.2	－	白	見込みに五弁花 船の目回転高台
813	178-08	縄文　染付（肥前）	鉢（蓋）	1区	K13	撹乱	3/12	12.4	－	－	白	
814	179-07	縄文　染付（肥前）	鉢（蓋）	6区		重機掘削	完形	8.1	－	3.0	白	
815	179-08	縄文　染付（肥前）	鉢	1区		重機掘削	口縁部3/12	10.6	－	－	灰白	蛇付の鉢
816	145-06	縄文　染付（肥前）	香炉	1区	K12	撹乱	口縁部2/12 底部12/12	12.4	4.0	5.7	明緑灰	二足付 転ヤ上げ時「方形撹乱」
817	178-09	縄文　染付（肥前）	小杯	1区	K13	撹乱	7/12	6.2	2.5	3.9	白	
818	202-01	縄文　染付（肥前）	皿	1区	H14	包含層	6/12	－	－	1.6	白	口紅 平面花卉形
819	202-02	縄文　染付（肥前）	皿	1区	G14	包含層	1/12	30.0	19.0	6.6	明緑灰	
820	194-05	陶器（瓶ア・丸底）	碗	1区	I12	撹乱	3/12	11.0	4.4	6.9	灰黄	鉄釉 肥前皮袋焼陶器
821	191-03	陶器（瓶ア・丸底）	碗	1区	H12	撹乱	口縁部1/12 底部12/12	11.5	4.6	7.9	灰白	灰釉
822	191-02	陶器（瓶ア・丸底）	碗	1区	H12	撹乱	底部12/12	－	6.0	－	明緑灰	灰釉 高台内ち鉄釉
823	184-08	陶器（瓶ア・丸底）	碗	1区	E・L11	段下げ	口縁部6/12	11.2	－	－	暗オリーブ	鉄釉
824	144-03	陶器（瓶ア・丸底）	片口鉢	1区		重機掘削	7/12	10.9	5.0	6.4	黒褐	鉄釉
825	178-04	陶器（京都・信楽）	合子（蓋）	1区	I13	撹乱	5/12	4.4	－	1.3	灰白	灰釉
826	178-05	陶器（京都・信楽）	合子	1区	K13	包含層	3/12	4.3	4.6	1.2	灰黄	灰釉
827	178-03	陶器（京都・信楽）	合子（蓋）	1区	I13	撹乱	完形	7.0	－	1.3	灰白	灰釉
828	179-04	陶器（京都・信楽）	合子	1区		包含層	9/12	6.8	7.0	3.0	灰白	灰釉
829	196-02	陶器（京都・信楽）	碗	6区		重機掘削	底部6/12	－	3.0	－	灰白	灰釉、雲霧
830	178-06	陶器（瓶ア・丸底）	皿	1区	K13	撹乱	4/12	12.2	5.1	2.9	にぶい黄橙	梅文皿、灰釉
831	144-02	陶器（瓶ア・丸底）	皿	1区	F14	包含層	口縁部8/12 底部12/12	12.3	7.0	2.6	オリーブ黒	灰々皿 見込みに目跡
832	178-07	縄文　唐草（肥前）	香炉	1区	K13	撹乱	4/12	－	7.8	－	明オリーブ灰	船の目回転高台
833	179-05	陶器（瓶ア・丸底）	瓶型	1区		包含層	4/12	底10.7	－	4.4	灰白	灰釉、鉄釉
834	183-04	陶器（瓶ア・丸底）	皿	1区	K13	撹乱	完形	12.5	6.6	3.5	灰白	輪禿皿、灰釉
835	144-04	陶器（瓶ア・丸底）	皿	1区	I13	撹乱	10/12	12.6	5.3	3.7	灰黄	型付
836	177-03	陶器	皿	5区	N5	整地土	3/12	8.2	－	1.9	灰黄褐	他誠、底部糸切痕
837	179-08	陶器（瓶ア・丸底）	灯明皿	6区		重機掘削	6/12	10.3	4.1	2.3	灰白	灰釉
838	101-08	陶器（瓶ア・丸底）	灯明皿	1区		包含層	完形	10.8	5.4	2.3	褐	鉄釉
839	145-07	陶器（瓶ア・丸底）	壺蓋	1区	I,12	撹乱	口縁部6/12 底部12/12	7.1	4.5	4.6	灰黄	灰釉 転ヤ上げ時「方形撹乱」
840	178-02	陶器（京都・信楽）	土瓶（蓋）	1区	I,12	撹乱	6/12	10.0	－	－	灰白	灰釉 転ヤ上げ時「方形撹乱」
841	175-02	陶器（京都・信楽）	鍋（蓋）	1区	K12・13	撹乱	9/12	14.7	－	2.8	灰白	灰釉 転ヤ上げ時「撹乱北」
842	175-03	陶器（瓶ア・丸底）	鍋（蓋）	1区	K12・13	撹乱	7/12	17.8	－	5.2	にぶい黄	灰釉
843	102-04	陶器（京都・信楽）	鍋	7区		撹乱	口縁部7/12 底部8/12	17.4	6.5	10.6	浅黄	灰釉
844	107-01	陶器（瓶ア・丸底）	水壺	1区	I13	撹乱	10/12	22.7	9.1	5.9	浅黄	灰釉、見込みに目跡 刻印高台
845	183-03	陶器（瓶ア・丸底）	皿	1区	I13	撹乱	10/12	21.5	9.9	3.0	にぶい橙	灰釉、鉄釉（吹釉）
846	119-01	陶器（瓶ア・丸底）	水壺	1区	G14	包含層	口縁部2/12 底部3/12	33.6	22.0	18.3	オリーブ	灰釉、鉄釉
847	200-01	陶器（瓶ア・丸底）	水壺	1区	I,12	撹乱	口縁部2/12 底部3/12	33.0	24.8	16.5	オリーブ	灰釉、鉄釉 転ヤ上げ時「方形撹乱」
848	195-02	陶器（瓶ア・丸底）	擂鉢	1区	J12 K12・13	撹乱	口縁部6/12	40.0	－	－	にぶい赤褐	鉄釉、押印文「大」 転ヤ上げ時「撹乱北」
849	191-01	陶器（信楽）	四耳壺	1区	K13	撹乱	口縁～胴部4/12	11.6	－	－	オリーブ褐	灰石黄、鉄釉 粘土に長石含む
850	144-01	陶器（瓶ア・丸底）	徳利	1区	F14	包含層	口縁部12/12 底部5/12	2.8	6.7	22.7	灰白	赤い斑点 墨号不明

遺物番号	実測番号	種類（産地・系統）	器種	調査区	グリッド	遺構 層位	部位 残存度	法量（cm）			色調（外面）	特記事項
								口径	底径	器高		
851	187-04	磁器（瓦質）	筒形容器	1区	K12	攪乱	完形	5.0	4.6	9.6	灰白	経測陶器「略902」取り上げ№「方形攪乱」
852	187-05	磁器（瓦質）	筒形容器	1区		攪乱	口径完形	5.2	4.7	9.6	灰白	経測陶器「略901」
853	186-04	瓦	軒丸瓦	1区	F14	包含層	瓦当小片	－	－	厚2.2	灰	
854	186-02	瓦	軒丸瓦	1区		表採・撹乱	瓦当小片	－	－	厚1.0	灰	
855	186-03	瓦	軒桟瓦	1区		表採・撹乱	瓦当小片	－	－	厚1.9	暗灰	
856	143-01	瓦	軒桟瓦	1区	I13	攪乱	瓦当小片	－	－	厚2.2	灰	被熱
857	143-04	瓦	軒桟瓦	1区		攪乱	瓦当小片	－	－	厚2.6	暗灰	
858	186-01	瓦	軒桟瓦	1区		表採・撹乱	瓦当小片	－	－	厚2.0	暗灰	
859	143-02	瓦	軒桟瓦	1区	J12・K13	攪乱	瓦当小片	－	－	厚2.2	暗灰	
860	143-03	瓦	軒桟瓦	1区		攪乱	瓦当小片	－	－	厚1.2	橙	被熱
861	141-01	瓦	軒桟瓦	1区	G9	攪乱	1/2	－	－	厚1.8	灰	凍瓦
862	140-04	瓦	軒桟瓦	1区	I13	攪乱	瓦当小片	－	－	厚1.6	灰	
863	139-01	瓦	軒桟瓦	1区	G14	包含層	1/2	－	－	厚1.5	灰	
864	139-05	瓦	軒桟瓦	6区		包含層	瓦当小片	－	－	厚1.8	灰	
865	185-01	瓦	軒桟瓦	1区	K13	攪乱	瓦当小片	－	－	厚1.8	灰	
866	139-04	瓦	軒桟瓦	1区		表採・撹乱	瓦当小片	－	－	厚1.9	灰	
867	185-02	瓦	軒平瓦	1区		表採・撹乱	瓦当小片	－	－	厚2.7	灰	
868	142-03	瓦	軒平瓦	1区	H12	攪乱	瓦当小片	－	－	厚2.5	灰	
869	140-01	瓦	軒桟瓦	1区	G14 I13	包含層 攪乱	瓦当小片	－	－	厚1.5	にぶい橙	被熱
874	206-01	瓦	丸瓦	立会① NG地点		9層 にぶい黄橙色砂	小片	－	－	厚2.0	灰	摩滅著しい 薄くあり、部薄有羽
875	193-01	磁器　染付（貿易）	碗	立会③		腐土	10/12	7.5	3.7	5.7	明緑灰	染付青磁 見込み五弁花
876	193-02	磁器　染付（貿易）	碗	立会③		盛成土	5/12	15.0	5.8	6.3	明緑灰	
877	193-02	陶器（安南）	壺	立会① 2区		盛成土	口縁部小片	－	－	－	浅黄橙	赤物
878	192-04	陶器（瀬戸・美濃）	徳利	立会① 1区		盛成土	口縁部1/12	26.8	－	－	褐灰	緑釉
879	193-04	陶器（河濃焼）	花入	立会③		盛成土	底部12/12	－	7.6	－	浅黄	あるいは灰落とし、灰釉、鉄絵 印銘は小判印に「河濃」

②木製品

遺物番号	実測番号	器種	調査区	グリッド	遺構・層位	法量（cm）			樹種	木取り	特記事項（加工痕、継手等）
						長/径	幅/高	厚			
203	2025-01	杭（溝板）	1区	-	SE5400(NT)-2	104.5	14.5	-	マツ属 横維管束柔細	芯持丸木	先端：チョウナ
204	2026-01	杭（溝板）	1区	-	SE5400(NT)-1	111.4	14.2	-	〔1〕広葉・広・上 葉品・石製品	芯持丸木	先端：チョウナ
205	2027-01	杭（溝板）	1区	-	SE5400(NT)-3	115.7	14.8	-	マツ属 横維管束柔細	芯持丸木	先端：チョウナ
202	2024-01	杭（溝板）	1区	-	SE5400(NT)-4	107.2	16.3	-	マツ属 二葉松類	芯持丸木	先端：チョウナ
201	2023-01	杭（溝板）	1区	-	SE5400(NT)-1	106.3	16.3	-	マツ属 横維管束柔細	芯持丸木	先端：チョウナ
504	2009-01	井戸枠材（縦物）	1区	-	SE5470上段 No.6	41.9	20.0	3.3	ヒノキ	中合目	上面：ケズリ・内面下端チョウナ，側面：白カンナ
503	2010-01	井戸枠材（縦物）	1区	-	SE5470上段 No.5	44.5	16.0	1.6	ヒノキ	板目	上面：ケズリ，側面：白カンナ
508	2011-01	井戸枠材（縦物）	1区	-	SE5470下段	47.0	16.5	3.5	ヒノキ	板目	上面：ケズリ・下端チョウナ（縦食），側面：白カンナ・木肌各1
507	2019-01	井戸枠材（縦物）	1区	-	SE5470下段	49.2	15.9	3.6	ヒノキ	板目	上面：ケズリ・下端チョウナ（縦食），側面：白カンナ・木肌各1
506	2015-01	井戸枠材（縦物）	1区	-	SE5470下段	45.8	15.9	3.5	ヒノキ	板目	上面：ケズリ・下端チョウナ（縦食），側面：白カンナ・木肌各1
636	2008-01	井戸枠材（縦物）	1区	-	SE5476・5477上段1	48.0	16.7	2.5	ヒノキ	板目	上面：割肌・チョウナ・下端チョウナ，側面：白カンナ
639	2006-02	井戸枠材（縦物）	1区	-	SE5476・5477上段1	47.0	11.5	2.5	ヒノキ	板目	上面：割肌・チョウナ・下端チョウナ，側面：白カンナ
637	2007-01	井戸枠材（縦物）	1区	-	SE5476・5477上段1	46.6	9.4	2.2	ヒノキ	板目	上面：割肌・下端チョウナ・側面：白カンナ
641	2019-01	井戸枠材（縦物）	1区	-	SE5476・5477上段2	42.6	16.0	2.4	ヒノキ	板目	上面：割肌・ケズリ・下端チョウナ，側面：白カンナ
642	2020-01	井戸枠材（縦物）	1区	-	SE5476・5477上段2	42.0	9.9	2.0	ヒノキ	板目	上面：割肌・ケズリ・下端チョウナ，側面：白カンナ
640	2017-01	井戸枠材（縦物）	1区	-	SE5476・5477上段2	36.8	12.7	1.9	ヒノキ	板目	上面：割肌・下端チョウナ，側面：白カンナ
645	2014-01	井戸枠材（縦物）	1区	-	SE5476・5477下段1	74.7	12.1	2.0	ヒノキ	板目	上面：ケズリ，側面：白カンナ
644	2013-01	井戸枠材（縦物）	1区	-	SE5476・5477下段1	73.2	11.5	2.2	ヒノキ	柔軟目	上面：ケズリ，側面：白カンナ
643	2012-01	井戸枠材（縦物）	1区	-	SE5476・5477下段1	73.0	12.9	2.3	ヒノキ	板目	上面：ケズリ，側面：白カンナ
647	2022-01	井戸枠材（縦物）	1区	-	SE5476・5477下段2	70.4	6.0	1.2	ヒノキ	板目	上面：ケズリ，側面：白カンナ
646	2016-01	井戸枠材（縦物）	1区	-	SE5476・5477下段2	70.7	6.2	1.6	ヒノキ	板目	上面：ケズリ，側面：白カンナ
648	2018-02	井戸枠材（縦物）	1区	-	SE5476・5477下段2	70.7	5.5	1.7	ヒノキ	板目	上面：ケズリ，側面：白カンナ
650	2022-01	平鍬	1区	-	SE5476・5477	11段以上 残存18.9	18.9	1.1	スギ	-	柱手付き
630-2	2040-01	平鍬刃板	1区	-	SE5476・5477	36.8	5.4	1.1	スギ	板目	上面：ケズリ・木肌，側面：白カンナ 幅又は径22.8cm，残存18.8cm，最大18.3cm
630-3	2045-02	平鍬刃板	1区	-	SE5476・5477	19.9	5.6	1.1	スギ	板目	上面：ケズリ，側面：白カンナ
630-4	2046-01	平鍬刃板	1区	-	SE5476・5477	38.5	5.6	1.1	スギ	板目	上面：ケズリ，側面：白カンナ
630-1	2046-02	平鍬柱手	1区	-	SE5476・5477	19.9	5.1	1.9	スギ	割材	ケズリ，間伐，木口に木肌残4
649	2006-03	杭	1区	-	SE5476・5477	33.9	2.5	1.6	ヤエ属	割材	
774	2001-01	井戸枠材（縦物）	6区	-	SE5400Z	126.7	12.0	2.5	ヒノキ？	板目	上面：ノコギリ・ケズリ・下端チョウナ，側面：白カンナ
775	2002-01	井戸枠材（縦物）	6区	-	SE5400Z	129.0	12.9	2.5	ヒノキ	板目	上面：ノコギリ・ケズリ・下端チョウナ，側面：白カンナ
776	2003-01	井戸枠材（縦物）	6区	-	SE5400Z	128.0	11.5	2.5	ヒノキ	板目	上面：ノコギリ・ケズリ・下端チョウナ，側面：白カンナ
777	2004-01	井戸枠材（縦物）	6区	-	SE5400Z	126.3	11.0	2.5	ヒノキ？	板目	上面：ノコギリ・ケズリ・下端チョウナ，側面：白カンナ

③金属製品・その他

遺物番号	実測番号	種類	器種	調査区	グリッド	遺構・層位	法量（cm）			特記事項
							長/径	幅/高	厚	
71	1001-08	銅製品	鏡裏（変生過它）	1区	F15	SK5003	2.5	-	0.1	文鎮，4.4g
72	1002-09	銅製品	鏡裏（変生過它）	1区	F15	SK5003	2.5	-	0.1	3.9g
200	1001-01	銅製品	煙管	1区	J11	SK5005	現 1.0	-	-	火袋，3.6g
416	1001-03	銅製品	煙管	1区	I10	SK5015	0.8	1.0	-	雁口，6.9g
477	1001-05	鉄製品	釘	1区	H11	SK5040	5.9	-	1.1	鉄釘，3.7g
633	1001-04	鉄製品	釘	1区	J12	SK5073	4.0	-	0.6	7.4g
652	1001-07	銅製品	鐔部薬莢	1区	I13	SK5079	6.4	2.1	-	外面に刻印（No.6），35.72g 内面に刻印（19②）の鉄銹が残されていた
670	1001-06	銅製品	碑	1区	L11	包含層	5.5	2.2	0.4	1/3残存，16.6g
671	1001-02	銅製品	煙管	1区	J12・K13	撹乱	7.5	1.1	-	雁口，9.7g
672	1001-10	銅製品	鏡裏（変生過它）	1区	J12・K13	撹乱	2.3	-	0.1	1.9g
673	1001-11	銅製品	鏡裏（陶元過它）	立合区 6区	-	溝	2.3	-	0.1	2.6g

Ⅴ　自然科学分析

1．分析の種類と対象

自然科学分析は、次項（1）～（3）を実施した。分析委託先はパリノ・サーヴェイ株式会社、株式会社吉田生物研究所である。

（1）動物遺体（骨・貝）同定

江戸時代の遺構から出土した動物遺体を同定し、当時の食性や食物の流通に関する資料を得る。

なお、調査当時に近代攪乱と認識していた遺構の資料は分析委託の対象としなかったが、分析結果と対照するため、別途、貝の同定を行った（3節）。

（2）土壌分析（花粉・珪藻・植物珪酸体）

調査地は、国土地理院の地形分類図では浜堤にあたるとされるが、伝承では安濃川（塔世川）の旧流路を外堀に取り込んだとされている。

1区下層、基本層序Ⅴ層の土壌を対象として、基本層序Ⅳ層および近世遺構形成前の古環境を明らかにする。分析試料は、1区下層確認①4層、1区下層確認②7層から採取した（Ⅲ章）。

（3）木製品の樹種同定

樹種同定は、井戸枠（結物）や土蔵基礎地業の捨杭などを対象とし、木材利用に関する資料を得た。

井戸枠や捨杭は、事前の肉眼観察で樹種に差がみられないと判断されたため、井戸枠は1個体中の約3割、捨杭は残存度や杭設置位置を勘案して全体の約5割を分析に供した。

保存処理を実施した木製品は、株式会社吉田生物研究所に樹種同定を委託した（4節）。　（櫻井）

2．分析結果報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

（1）試料

試料は、種類別にして骨・貝試料27点、井戸枠材・杭試料47点、土壌試料が2点であり、各試料の種類に応じて骨・貝同定、樹種同定、微化石分析（花粉・珪藻・植物珪酸体）を実施する。

各試料をまとめた分析試料一覧を第8～10表に、写真は写真図版37～46に示す。

なお、一部試料に関しては採取地点の他に、試料番号や仮番の記載による整理がなされており、今回提出する報告書の体裁は基本的に試料No.を優先して報告書をまとめる。

（2）分析方法

①骨・貝同定

骨・貝両試料共に肉眼および実体顕微鏡下において観察し、形態的特徴から種・部位を特定する。同定した貝に関しては最小個体数、総重量を算出し、完形の二枚貝に関しては左殻長、殻高を計測する。なお、同定に関しては、奥谷（2001）、松井（2008）を参考にする。

②樹種同定

材は、剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の切片を作成する。ガムクロラールで封入、光学顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察する。材組織の特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

③花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛，比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉（1973）、中村（1980）、三好ほか（2011）等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種

類間の区別が困難なものを示す。

④珪藻分析

湿重約5gをビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4～5回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸600倍または1000倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数した。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200個体が産出した後は、示準種等の重要な種類の見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努める。

珪藻の同定と種の生態性については、Horst Lange-Bertalot et al.(2000)、Hustedt(1930,1937-1938,1959,1961-1966)、Krammer and Lange-Bertalot(1985,1986,1988,1990,1991)、Desikachary(1987)などを参考にする。群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の3適応性についても生態分類し表に示した。塩分に対する適応性とは、淡水中の塩類濃度の違いにより区分したもので、ある程度の塩分が含まれた方がよく生育する種類は好塩性種とし、少量の塩分が含まれていても生育できるものを不定性種、塩分が存在する水中では生育できないものを

第8表　骨・貝同定対象試料一覧

試料	種類	グリッド	遺構・層位
1	貝	K9	SK51051
2	貝	K9	SK51051
3	骨	K9	SK51051
4	骨	K9	SK51051
5	骨	K9	SK51051
6	貝	J11	SK51005
7	貝	J11	SK51005
8	骨	J11	SK51005
9	骨	J11	SK51005
10	貝	H11	SK51002
11	骨	H11	SK51002
12	貝	H11	SK51002
13	貝	F15	SK51003
14	貝	F15	SK51003
15	貝	F15	SK51003上層
16	貝	H11	SK51040
17	貝・骨	H11	SK51040
18	貝	G4	SK53001
19	貝	H9	SK51041
20	貝・骨	H9	SK51041
21	貝	G10	SK51050
22	貝・骨	G11	SK51033
23	骨	H11・12	SK51049
24	骨		SK51031
25	骨	N12	SK51031
26	骨	L9	SK51053
27	骨	I10	SK51044

第9表　樹種同定対象試料一覧

試料	遺物番号	種類	遺構・層位
1	584	井戸枠材（結物）	**SE51070上段No14**
2	585	井戸枠材（結物）	**SE51070上段No15**
3	588	井戸枠材（結物）	**SE51070下段**
4	587	井戸枠材（結物）	**SE51070下段**
5	586	井戸枠材（結物）	**SE51070下段**
6	638	井戸枠材（結物）	**SE51076・51077上段1**
7	639	井戸枠材（結物）	SE51076・51077上段1
8	637	井戸枠材（結物）	SE51076・51077上段1
9	641	井戸枠材（結物）	SE51076・51077上段2
10	642	井戸枠材（結物）	SE51076・51077上段2
11	640	井戸枠材（結物）	SE51076・51077上段2
12	645	井戸枠材（結物）	SE51076・51077下段1
13	644	井戸枠材（結物）	SE51076・51077下段1
14	643	井戸枠材（結物）	SE51076・51077下段1
15	647	井戸枠材（結物）	SE51076・51077下段2
16	646	井戸枠材（結物）	SE51076・51077下段2
17	648	井戸枠材（結物）	SE51076・51077下段2
18	649	杭	SE51076・51077
19	774	井戸枠材（結物）	SE54002
20	775	井戸枠材（結物）	SE54002
21	776	井戸枠材（結物）	SE54002
22	777	井戸枠材（結物）	SE54002
23	201	杭（撥杭）	SD51004西P7-1
24	203	杭（撥杭）	SD51004西P2-2
25	204	杭（撥杭）	SD51004西P3-1
26	205	杭（撥杭）	SD51004西P4-3
27		杭（撥杭）	SD51004東P1-3
28		杭（撥杭）	SD51004東P5-1
29		杭（撥杭）	SD51004北P3-2
30		杭（撥杭）	SD51004南P1
31		杭（撥杭）	SD51004南P3-1
32		杭（撥杭）	SD51004東P2-1
33		杭（撥杭）	SD51004南P7-4
34		杭（撥杭）	SD51004南P1-1
35		杭（撥杭）	SD51004南P4-1
36		杭（撥杭）	SD51004北P5-2
37		杭（撥杭）	SD51004南P2-1
38		杭（撥杭）	SD51004東P4-2
39		杭（撥杭）	SD51004南P5-1
40		杭（撥杭）	SD51004北P2-1
41		杭（撥杭）	SD51004北P4-2
42		杭（撥杭）	SD51004西P8-1
43		杭（撥杭）	SD51004東P3-2
44		杭（撥杭）	SD51004西P6-3
45		杭（撥杭）	SD51004西P5-2
46		杭（撥杭）	SD51004北P1-2
47		杭（撥杭）	上野城跡（第13次）Pit3

第10表　微化石分析対象試料一覧

試料	種類	遺構・層位	備考
1	土壌	1区下層確認1-4層　南東隅から3m　H=0.68m	粘砂（泥質）
2	土壌	1区下層確認2-7層	シルト質砂

嫌塩性種として区分している。これは、主に水域の化学的な特性を知る手がかりとなるが、単に塩類濃度が高いか低いかといったことが分かるだけでなく、塩類濃度が高い水域というのは概して閉鎖水域である場合が多いことから、景観を推定する上でも重要な要素である。

pH に対する適応性とは、アルカリ性の水域に特徴的に認められる種群を好アルカリ性種、逆に酸性水域に生育する種群を好酸性種、中性の水域に生育する種を不定性種としている。これも、単に水の酸性・アルカリ性のいずれかがわかるだけでなく、酸性の場合は湿地であることが多いなど、間接的には水域の状況を考察する上で必要不可欠である。

流水に対する適応性とは、流れのある水域の基物（岩石・大型の藻類・水生植物など）に付着生育する種群であり、特に常時、流れのあるような水域でなければ生育出来ない種群を好流水性種、逆に流れのない水域に生育する種群を好止水性種として区分している。流水不定は、どちらにでも生育できる可能性もあるが、それらの大半は止水域に多い種群である。なお、好流水性種と流水不定性種の多くは付着性種であるが、好止水性種には水塊中を浮遊生活する浮遊性種も存在する。浮遊性種は、池沼あるいは湖沼の環境を指標する。

なお、淡水生種の中には、水中から出て陸域の乾いた環境下でも生育する種群が存在し、これらを陸生珪藻と呼んで、水中で生育する種群と区分している。陸生珪藻は、陸域の乾いた環境を指標することから、古環境を推定する上で極めて重要な種群である。

⑤植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重 2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤 (2010) の分類を参考に同定し、計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、乾土 1g あたりの植物珪酸体含量（同定した数を乾土 1g あたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100 個 /g 未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は 10 の位で丸め（100 単位にする）、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、各分類群の植物珪酸体含量を図示する。

（3）結果

①骨・貝同定

検出動物分類群一覧を第 11 表に、試料番号順かつ種類別（貝類・骨・それ以外）にまとめたものを第 12 ～ 14 表に示す。貝類の最小個体数・重量計測結果、二枚貝の計測結果は第 15 ～ 17 表に示す。また、計測した二枚貝殻長のうち、遺構・層位 SK51002・SK51003・SK51005・SK51051 のアカガイ・ヤマトシジミ・アサリ・ハマグリの左右殻についてはヒストグラムを作成し第 54 図に示す。

以下、各遺構別に検出された骨・貝試料の結果を順に示す。

・ＳＫ 51002

貝類は、サザエ、種不明腹足綱、アカガイ、アカガイ？、シオフキ、ヤマトシジミ、カガミガイ、カガミガイ？、ハマグリ、ハマグリ？、アサリ、マルスダレガイ科、種不明二枚貝破片が検出される。このうち、最も多く検出されたのはハマグリであり、マルスダレガイ科、種不明二枚貝破片の多くはハマグリの貝破片に由来するものと思われる。

魚類は、タラ科、アジ科？、ブリ属、ブリ属？、マダイ、タイ科、サバ属、メバル亜科、メバル亜科？、ソウダカツオ属、コチ科、カレイ科？、魚類が検出される。一部の魚骨部位破片は切断の痕跡が確認された。

鳥類は、種不明の骨破片がわずかに検出される。

・ＳＫ 51003

貝類は、サザエ、種不明腹足綱、アカガイ、アカガイ？、ヤマトシジミ、ハマグリ、ハマグリ？、種不明二枚貝破片、貝類が検出される。このうち、アカガイとハマグリが比較的多く検出される。

・ＳＫ 51003 上層

貝類は、サザエ、アカガイ？、フネガイ科、ヤマトシジミ、ハマグリ、種不明二枚貝破片が検出されるが、この遺構・層位においては検出された貝類はわずかである。

・ＳＫ 51005

貝類は、ウミニナ、サザエ、サザエ？、アカガイ？、シオフキ、ヤマトシジミ、カガミガイ、アサリ、ハマグリ、ハマグリ？、オキシジミ、マルスダレガイ科、種不明二枚貝破片、貝類が検出される。このうち、ハマグリが最も多く、次点でアサリが多い。

魚類は、ニシン科？、タラ科、タラ科？、ボラ、ボラ？、カマス属、スズキ属、スズキ属？、マアジ、アジ科、ブリ属、ブリ属？、マダイ、チダイ属？、タイ科、タイ科？、ベラ科、サバ属、サバ科、サバ科？、ソウダカツオ属カツオ、カツオ / ソウダカツオ属、カツオ？、ハゼ科、メバル亜科、メバル亜科？、フサカサゴ科？、コチ科、コチ科？、ヒラメ、カレイ科、カレイ科？、大型魚類、魚類が検出される。

鳥類は、スズメ目、鳥類？、哺乳類は、ネズミ科、小型獣類、哺乳類の骨が検出されるが、貝類・魚類と比較して検出量は少ない。

第 11 表　検出動物分類群一覧

腹足綱　Class Vetigastropoda
古腹足目　Order Vetigastropoda
ミミガイ科　Family Haliotidae
アワビ類 *Haliotidae*
サザエ科　Family Turbnidae
サザエ *Turbo cornutus*
中腹足目　Order Mesogastropoda
ウミニナ科　Family Batilariidae
ウミニナ *Batillaria multiformis*
二枚貝綱　Class　Bivalvia
フネガイ目　Order Arcoida
フネガイ科　Family　Arcidae
アカガイ *Sepharca broughtonii*
マルスダレガイ目　Order Veneroida
バカガイ科 Family Corbiculdae
シオフキ *Mactra veneriforms*
シジミ科 Family Corbiculdae
ヤマトシジミ *Gelonia japonica*
マルスダレガイ科　Family Veneridae
カガミガイ *Phacosoma japonicum*
アサリ *Ruditapes philippinarum*
ハマグリ *Meretrix lusoria*
オキシジミ *Cyclina sinensis*
脊椎動物門　Phylim Vertebrata
硬骨魚綱　Clss Osteichthyes
ニシン目　Order Clipeiformes
ニシン科 Family Clupeidae
属種不明 Gen. et. sp. indet.
ダツ目 Order Beloniformes
サヨリ科 Family Hemiramphidae
サヨリ属 Genus *Trachurus*
タラ目　Order Gadiforms
タラ科 Family Gadidae
属種不明 Gen. et. sp. indet.
スズキ目　Order Perciformes
ボラ科 Family Mugilidae
ボラ *Mugil cephalus*
カマス科 Family Sphyraenidae
カマス属 Genus *Sphyraena*
スズキ科 Family Pecichthyidae
スズキ属 Genus *Lateolabrax*
アジ科 Family Carangidae
マアジ *Trachurus japonicus*
ブリ属 Genus *Seriola*
タイ科 Family Sparidae
マダイ *Pagrus major*
クロダイ属 Genus *Acanthopagrus*
チダイ *Evynnis japonica*
スズキ目　Order Perciformes
ベラ科 Family Labridae
属種不明 Gen. et. sp. indet.
サバ科 Family Scombridae
サバ属 Genus *Scomber*
カツオ *Katsuwonus pelamis*
ソウダカツオ属 Genus *auxis*
ハゼ科 Family Gobiidae
属種不明 Gen. et. sp. indet.
カサゴ目　Order Scorpaeniformes
フサカサゴ科　Family Scorpaenidae
メバル亜科 Subfamily Sebastinae
コチ科 Family Platycephalidae
属種不明 Gen. et. sp. indet.
カレイ目　Order Pleuronectiformes
ヒラメ科 Family Paralichthyidae
ヒラメ *Paralichthys olivaceus*
カレイ科 Family Pleuronectidae
属種不明 Gen. et. sp. indet.
爬虫綱 Clss Reptilia
カメ目 Order Testudinata
スッポン科 Family Trionychidae
スッポン *Pelodiscus sinensis*
鳥綱 Clss Aves
スズメ目 Passeriformes
不明 Fam. et. sp. indet.
キジ目　Order Galliformes
キジ科 Family Phasianidae
ニワトリ *Gallus gallus domesticus*
哺乳綱 Clss Mammalia
齧歯目 Order Rodentia
ネズミ科 Family Muridae
属種不明 Gen. et. sp. indet.
食肉目 Order Carnivora
イヌ科 Family Canidae
キツネ *Fox*

第 12 表　貝類同定結果①

試料	グリッド	遺構・層位	種類	部位	左 右	状態等	数量	重量(g)	備考
1	K9	SK51051	アワビ	殻		破片	7	58.18	
			アワビ?	殻		破片	-	178.95	
			サザエ	殻		破片	4	76.47	
			サザエ?	殻		破片	-	258.52	
			腹足綱	殻		破片	-	169.6	種類不明
			アカガイ	殻	左	略完	4	72.89	計測
				殻	左	破片	6	105.83	
				殻	右	略完	8	257.88	計測
			アカガイ	殻	右	破片	8	101.76	
				殻		破片	3	54.63	殻頂部なし
			アカガイ?	殻	左	破片	4	4.83	殻頂部のみ残存
				殻	右	破片	6	8.37	殻頂部のみ残存
				殻		破片	-	234.85	
			フネガイ科	殻		破片	-	3325.67	
			ヤマトシジミ	殻	左	略完	12	5.42	計測
				殻	左	破片	23	7.01	
				殻	右	略完	11	4.91	計測
				殻	右	破片	31	5.83	
			ハマグリ	殻	左	破片	14	68.52	
				殻	右	破片	14	17.56	
			ハマグリ?	殻	左	破片	17	6.18	
				殻	右	破片	11	3.79	
				殻		破片	-	13.21	
			二枚貝綱	殻		破片	-	139.66	
			貝類	殻		破片	-	170.96	種類不明
			残渣				-	66.55	
2	K9	SK51051	アワビ	殻		破片	3	22.74	
			アワビ?	殻		破片	-	34.56	
			サザエ	殻		破片	2	41.56	
			サザエ?	殻		破片	-	37.28	
			ウミニナ	殻		略完	1	1.39	
			腹足綱	殻		破片	-	39.72	種類不明
			アカガイ	殻	左	略完	11	281.32	計測
				殻	左	破片	5	111.82	
				殻	右	略完	11	304.24	計測
				殻	右	破片	4	63.42	
				殻		破片	1	19.24	殻頂部なし
			アカガイ?	殻	左	破片	4	8.55	殻頂部のみ残存
				殻	右	破片	5	12.77	殻頂部のみ残存
				殻		破片	-	1527.18	
			シオフキ	殻	右	破片	1	2.56	
			ヤマトシジミ	殻	左	略完	77	43.86	計測
				殻	左	破片	118	32.04	
				殻	右	略完	64	34.01	計測
				殻	右	破片	142	34.59	
				殻		破片	4	3.42	殻頂部なし
			アサリ	殻	左	破片	4	2.4	
				殻	右	破片	6	3.24	
			ハマグリ	殻	右	破片	138	243.27	
				殻	左	破片	131	228.71	
				殻	左	略完	2	5.33	計測
				殻	右	略完	1	2.75	計測
			ハマグリ?	殻	右	破片	42	23.06	
				殻	左	破片	14	7.29	
				殻		破片	-	81.52	
			マルスダレガイ科	殻	左	破片	48	14.75	
				殻	右	破片	40	11.39	
			二枚貝綱	殻		破片	-	527.49	
			貝類	殻		破片	-	119.66	種類不明
			残渣				-	42.51	
6	J11	SK51005	ウミニナ	殻		略完	1	1.05	
			サザエ	殻		破片	4	45.35	
			サザエ?	殻		破片	10	16.81	
			アカガイ?	殻		破片	-	32.73	
			シオフキ	殻	左	破片	3	2	
				殻	右	破片	3	2.46	
			ヤマトシジミ	殻	左	略完	47	23.03	計測
				殻	左	破片	2	0.71	幼貝
				殻	左	破片	18	4.06	
				殻	右	略完	1	0.74	幼貝、計測
				殻	右	破片	1	0.23	幼貝
				殻	右	略完	40	20.82	計測
				殻	右	破片	17	5.3	

第 12 表　貝類同定結果②

試料	グリッド	遺構・層位	種類	部位	左 右	状態等	数量	重量(g)	備考
6	J11	SK51005	カガミガイ	殻	右	破片	1	5.52	
			アサリ	殻	左 右	略完	1	10.7	合貝、計測
				殻	左	略完	23	28.93	計測
				殻	右	略完	31	37.23	計測
				殻	右	破片	162	119.22	
				殻	左	破片	184	122.17	
			ハマグリ	殻	左	略完	34	294.25	計測
				殻	左	破片	392	920.18	
				殻	右	略完	21	124.89	計測
				殻	右	破片	373	904.91	
			ハマグリ?	殻	左	破片	20	11.37	
				殻	右	破片	14	8.09	
				殻		破片	−	142.53	
			オキシジミ	殻	右	略完	1	2.81	計測
			マルスダレガイ科	殻	左	破片	171	62.57	
				殻	右	破片	139	50.81	
			二枚貝綱	殻		破片	−	827.32	
			貝類	殻		破片	−	51.1	種類不明
			残渣				−	30.86	
7	J11	SK51005	サザエ	殻		略完	1	194.34	有棘型
				殻		破片	1	31.93	
			サザエ?	殻		破片	−	12.77	
			ハマグリ	殻	左	略完	1	2.61	計測
				殻	左	破片	1	6.64	
				殻	右	破片	1	4.28	
			二枚貝綱	殻		破片	−	1.11	
10	H11	SK51002	サザエ	蓋		略完	1	13.25	
			腹足綱	殻		破片	−	11.36	種類不明
			アカガイ	殻	左	略完	2	48.6	計測
				殻	右	略完	3	99.61	計測
			アカガイ?	殻	左	破片	3	17.27	
				殻	右	破片	1	2.3	
				殻		破片	−	23.41	
			シオフキ	殻	左	略完	2	6.37	計測
				殻	左	破片	3	4.06	
			ヤマトシジミ	殻	左	略完	1	1.18	幼貝、計測
				殻	左	略完	10	8.67	計測
				殻	左	破片	6	2.27	
				殻	右	略完	14	10.5	計測
				殻	右	破片	1	0.41	
			カガミガイ	殻	左	破片	2	3.07	
				殻	右	破片	1	4.89	
			カガミガイ?	殻		破片	−	29.41	
			ハマグリ	殻	左	略完	13	99.47	計測
				殻	左	破片	402	688.26	
				殻	右	略完	13	77.73	計測
				殻	右	破片	435	800.06	
10	H11	SK51002	ハマグリ?	殻	左	破片	49	20.48	
				殻	右	破片	55	19.05	
				殻		破片	−	99.44	
			アサリ	殻	左	略完	5	8.79	計測
				殻	左	破片	14	8.91	
				殻	右	略完	2	3.4	計測
				殻	右	破片	8	5.38	
			マルスダレガイ科	殻	左	破片	24	6.65	
				殻	右	破片	11	2.46	
			二枚貝綱	殻		破片	−	447.11	
			貝類	殻		破片	−	32.76	種類不明
			残渣				−	10.99	
12	H11	SK51002	ハマグリ	殻	左	略完	1	7.83	計測
				殻	右	破片	3	10.97	
			ハマグリ?	殻		破片	−	2.65	
13	F15	SK51003	サザエ	殻		破片	4	98.95	有棘型 1
				蓋		略完	1	7.93	
			アカガイ	殻	左	略完	9	209.6	計測
				殻	左	破片	3	46.79	
				殻	右	略完	5	121.61	計測
				殻	右	破片	1	19.92	
				殻		破片	6	98.78	殻頂部なし
			アカガイ?	殻	右	破片	1	3.29	
				殻		破片	−	48.17	
			ヤマトシジミ	殻	左	破片	1	0.25	
				殻	右	略完	4	2.01	計測

第 12 表　貝類同定結果③

試料	グリッド	遺構・層位	種類	部位	左 右	状態等	数量	重量(g)	備考
13	F15	SK51003		殻	左	略完	3	2.32	計測
			ハマグリ	殻	左	略完	10	72.51	計測
				殻	右	略完	6	47.35	計測
				殻	右	破片	15	89.27	
				殻	左	破片	11	47.67	
			ハマグリ?	殻		破片	−	6.16	
			二枚貝綱	殻		破片	−	4.99	
			貝類	殻		破片	−	2.77	種類不明
14	F15	SK51003	サザエ	殻		破片	1	14.52	
			アカガイ?	殻	左	破片	2	4.23	
				殻		破片	−	190.76	
			腹足綱	殻		破片	−	13.36	種類不明
			ヤマトシジミ	殻	左	略完	4	2.06	計測
				殻	左	破片	2	0.49	
				殻	右	略完	7	4.48	計測
				殻	右	破片	2	0.97	
			ハマグリ	殻	左	破片	16	57.98	
				殻	右	略完	3	18.03	計測
				殻	右	破片	20	75.45	
				殻		破片	3	12.47	
			ハマグリ?	殻		破片	−	33.48	
			二枚貝綱	殻		破片	−	13.99	
15	F15	SK51003上層	サザエ	殻		破片	1	78.69	有縫型
			アカガイ?	殻		破片	−	20.56	
			フネガイ科	殻		破片	−	13.58	
			ヤマトシジミ	殻	右	略完	1	0.25	計測
			ハマグリ	殻	左	略完	1	7.33	計測
				殻	左	破片	4	18.62	
				殻	右	略完	1	11.24	計測
				殻	右	破片	1	4.76	
			二枚貝綱	殻		破片	−	1.38	
16	H11	SK51040	サザエ	蓋		略完	1	7.81	
			アカガイ	殻	左	略完	6	267.07	計測
				殻	右	略完	4	157.18	計測
				殻	右	破片	1	42.41	
				殻		破片	1	33.37	殻頂部なし
			アカガイ?	殻		破片	−	18.41	
			ヤマトシジミ	殻		破片	4	1.32	
				殻	右	略完	6	3.11	計測
				殻	左	破片	11	3.19	
				殻	左	略完	7	4.53	計測
				殻	右	破片	20	7.26	
			ハマグリ	殻	左	破片	8	34.01	
				殻	右	破片	10	41.51	
				殻	右	略完	1	8.42	計測
				殻		破片	1	14.14	殻頂部なし
			ハマグリ?	殻		破片	−	39.34	
			アサリ	殻	右	破片	1	0.21	
				殻	左	破片	1	0.87	
			残滓				−	5.54	
18	G4	SK53001	サザエ?	殻		破片	−	190.07	
			フネガイ科	殻		破片	−	13.62	
			ヤマトシジミ	殻	左	破片	1	0.14	
				殻	右	略完	1	0.25	計測
			二枚貝綱	殻		破片	−	3.64	
19	H9	SK51041	サザエ	殻		破片	5	119.74	
			サザエ?	殻		破片	−	3.54	
			アカガイ?	殻		破片	−	23.67	
			ハマグリ	殻	左	破片	6	18.71	
				殻	右	破片	7	18.98	
			ハマグリ?	殻		破片		15.81	
			貝類	殻		破片	−	1.3	種類不明
20	H9	SK51041	腹足綱	殻		破片	1		
21	G10	SK51050	サザエ	殻		破片	3	30.09	
			アカガイ	殻	右	破片	1	20.57	
			アカガイ?	殻		破片	−	109.26	
			ヤマトシジミ	殻	左	略完	2	0.81	計測
				殻	左	破片	2	1.77	
				殻	右	破片	1	0.81	
			ハマグリ	殻	左	破片	4	4.84	
				殻	右	破片	4	4.09	
			ハマグリ?	殻		破片	−	15.75	
			貝類	殻		破片	−	3.64	種類不明

第 12 表　貝類同定結果④

試料	グリッド	遺構・層位	種類	部位	左 右	状態等	数量	重量(g)	備考
21	G10	SK51050	残滓				-	1.17	
22	G11	SK51033	サザエ	蓋		破片	1		
			腹足綱	殻		破片	3		

第 13 表　骨同定結果①

試料	グリッド	遺構・層位	種類	部位	左 右	状態等	数量	備考
1	K9	SK51051	魚類	鱗		破片	4	0.03g
2	K9	SK51051	サヨリ属	腹椎		破片	1	
			魚類	鰭条(軟条)		破片	2	
				鱗		破片	12	
3	K9	SK51051	カマス属	尾椎		破片	1	
			スズキ属	腹椎		破片	1	
			アジ科	尾椎		破片	1	
			チダイ?	角骨	右	破片	1	切断
			タイ科	尾椎		破片	1	
			カツオ?	尾椎		破片	1	切断
			メバル亜科	角舌骨	右	破片	1	
			コチ科	角骨	右	破片	1	
			カレイ科	腹椎		破片	4	
				尾椎		破片	1	
			大型魚類	鱗		破片	19	
			魚類	口蓋骨	右	破片	1	
				上舌骨	右	破片	1	
				基底後頭骨		破片	1	
				近位担鰭骨		破片	1	
				鰭条(棘条)		破片	2	
				鰭条(軟条)		破片	1	切断
						破片	23	
				鰭棘等		破片	22	
				不明		破片	2	切断
						破片	23	
				腹椎		破片	1	
				尾椎		破片	2	
				椎骨		破片	1	
				鱗		破片	86	
			鳥類	脛足根骨	左	遠位端破片	1	切断
			残滓				-	1.21g
4	K9	SK51051	ニシン科	尾椎		破片	1	
			タラ科	前上顎骨	右	破片	1	
			マダイ	前上顎骨	右	破片	1	切断
			タイ科?	血管棘?		破片	1	
			コチ科	主上顎骨	右	破片	1	
			カレイ科	尾椎		破片	2	
			大型魚類	鱗		破片	8	
			魚類	腹椎		破片	1	
				鰭条(棘条)		破片	3	
				鰭条(軟条)		破片	8	
				鰭棘等		破片	11	
						破片	1	焼骨
				鱗		破片	74	
				不明		破片	18	
			キジ科	手根中手骨	左	遠位端	1	
			鳥類	四肢骨		破片	1	
			骨	不明		破片	1	
			残滓				-	0.13g
5	K9	SK51051	キツネ	第1尾椎		破片	1	
6	J11	SK51005	ボラ	主鰓蓋骨	右	破片	1	
				腹椎		破片	1	
			サバ科	主上顎骨	左	破片	1	
			サバ科?	腹椎		破片	1	
			カレイ科	腹椎		破片	1	
			カレイ科?	椎骨		破片	1	
			魚類	腹椎		破片	1	
				尾椎		破片	1	
				尾椎		破片	1	焼骨
				下尾骨		破片	1	切断
				尾舌骨		破片	1	
				近位担鰭骨		破片	1	
				鰭条(棘条)		破片	1	
				鰭棘等		破片	2	
				鱗		破片	18	
				不明		破片	7	

第 13 表　骨同定結果②

試料	グリッド	遺構・層位	種類	部位	左 右	状態等	数量	備考
8	J11	SK51005	ニシン科?	尾椎		破片	1	
			タラ科	前上顎骨	左	破片	1	
				尾椎		破片	2	
			タラ科?	尾椎		破片	1	切断
			ボラ	方骨	右	破片	1	
				腹椎		破片	1	
			カマス属	尾椎		破片	1	
			スズキ属	前上顎骨	右	破片	1	小型
				角骨	左	破片	1	小型
					右	破片	1	小型
				第1椎骨		破片	1	
				腹椎		破片	3	
				尾椎		破片	2	
			スズキ属?	角骨	左	破片	1	
				尾椎		破片	1	大型
			マアジ	前上顎骨	左	破片	1	
				方骨	右	破片	1	切断
			アジ科	腹椎		破片	1	
			ブリ属	前上顎骨	右	破片	1	
				第2椎骨		略完	1	
				腹椎		破片	2	
				尾椎		破片	3	
			ブリ属?	歯骨	右	破片	1	
				腹椎		破片	1	幼骨
			マダイ	主上顎骨	左	破片	1	
				前上顎骨	左	破片	1	
				角骨	右	破片	1	
				方骨	左	破片	1	
				舌顎骨	右	破片	1	
			タイ科	主上顎骨	左	破片	1	
				腹椎		破片	3	
				尾椎		破片	20	
				基舷骨	右	破片	1	
			タイ科?	主上顎骨	右	破片	1	
				舌顎骨	右	破片	1	切断
				擬鎖骨	左	破片	1	
			ベラ科	方骨	左	破片	1	
			サバ属	角骨	右	破片	1	
				後側頭骨	左	破片	1	
			サバ科?	尾椎		破片	1	
			ソウダカツオ属	腹椎		破片	1	
			カツオ	尾椎		破片	1	
			カツオ/ソウダカツオ属	尾舷椎前椎体		破片	1	
			カツオ?	尾椎		破片	1	
			フサカサゴ科?	歯骨	右	破片	1	
8	J11	SK51005	メバル亜科	主上顎骨	左	破片	1	
					右	略完	1	
					右	破片	2	
				前上顎骨	右	破片	3	
				歯骨	左	略完	1	最大長 24.78mm 高さ 40.25mm
					左	破片	2	高さ 30.2mm 小型
					右	破片	1	高さ 37.0mm 小型
				角舌骨	右	破片	1	
				上舌骨	右	略完	1	
				角骨	左	略完	2	
					左	破片	1	
				方骨	左	略完	1	
					右	略完	1	
				舌顎骨	左	略完	2	
					左	破片	2	
					右	略完	1	
				擬鎖骨	左	破片	1	
				後側頭骨	左	略完	1	
				第1椎骨		略完	1	
				腹椎		破片	18	
				尾椎		破片	10	
			メバル亜科?	主上顎骨	左	破片	1	
				歯骨	左	破片	1	
				舌顎骨	左	破片	1	
				前鰓蓋骨	左	破片	1	
				擬鎖骨	左	破片	1	
					右	破片	1	
				上擬鎖骨	右	略完	1	

第 13 表　骨同定結果③

試料	グリッド	遺構・層位	種類	部位	左 右	状態等	数量	備考
8	J11	SK51005	メバル亜科?	腹椎		破片	1	
			コチ科	前上顎骨	右	破片	1	
				歯骨	左	略完	1	最大長 48.9mm
					右	略完	2	最大長 30mm
					右	破片	1	
				角骨	左	略完	2	
					左	破片	1	
				方骨	左	略完	1	
				主鰓蓋骨	左	破片	1	
				第1椎骨		略完	1	
				腹椎		破片	4	
						破片	1	焼骨
				尾椎		破片	8	
			ヒラメ	方骨	左	破片	1	
			カレイ科	主上顎骨	左	破片	1	
				歯骨	右	略完	1	
				角骨	右	破片	2	
				腹椎		破片	6	
				尾椎		破片	19	
				第1血管開口		破片	1	
			カレイ科?	腹椎		破片	1	
			大型魚類	肩甲骨	左	略完	1	
				終尾椎		破片	1	
				椎骨		破片	2	
				不明		破片	1	
			魚類	副蝶形骨		破片	3	
				鰓骨		破片	2	
						破片	1	半裁
				口蓋骨	左	破片	2	
					右	破片	2	
				主上顎骨	左	破片	1	
					右	破片	1	切断
				前上顎骨	右	破片	1	
				歯骨	右	破片	1	
				角舌	左	破片	1	
					右	破片	1	
8	J11	SK51005	魚類	上舌骨	左	破片	1	
				角骨	右	破片	1	
					右	破片	1	焼骨
				基底後頭骨		破片	3	
				舌顎骨	右	破片	1	
				方骨	左	破片	1	
				前鰓蓋骨	左	破片	1	
				肩甲骨	左	破片	1	
				腹椎		破片	4	切断
						破片	14	
				尾椎		破片	18	
						破片	2	焼骨
				椎骨		破片	6	
						破片	3	焼骨
				近位担鰭骨		破片	18	
						破片	2	切断
				担鰭骨		破片	1	切断
				鰭条(棘条)		破片	13	
						破片	1	焼骨
				鰭条(軟条)		破片	24	
				鰭棘等		破片	86	
				鱗		破片	21	
				不明		破片	1	切断
				不明		破片	−11.65g	
			鳥類?	不明		破片	1	
			ネズミ科	上腕骨	左	略完	1	近位端未化骨外れ
			小型獣類	尾椎		破片	1	
			骨	不明		破片	4	焼骨
			残滓				−0.29g	
9	J11	SK51005	タラ科	尾椎		破片	1	
			ボラ	角骨	左	破片	1	
				主鰓蓋骨	右	破片	1	
				腹椎		破片	1	
				尾椎		破片	1	
			ボラ?	尾椎		破片	2	
			ブリ属	歯骨	左	破片	1	高さ 3.84cm
				方骨	右	破片	1	CM

第 13 表　骨同定結果④

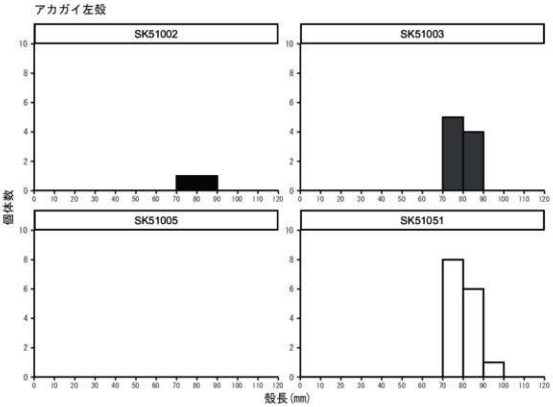
試料	グリッド	遺構・層位	種類	部位	左 右	状態等	数量	備考
9	J11	SK51005	ブリ属	第1椎骨		破片	1	
				腹椎		破片	1	
				尾椎		破片	1	
			ブリ属?	前鰓蓋骨	左	破片	1	
			マダイ	主鰓蓋骨	右	破片	1	高さ 38.9mm
			チダイ属?	角骨	右	破片	1	
			タイ科	尾椎		破片	2	
				第1臀鰭棘		破片	1	
			タイ科?	尾椎		破片	1	
			ハゼ科	歯骨	右	破片	1	
			メバル亜科	主上顎骨	右	破片	1	
				前上顎骨	右	破片	1	
				歯骨	右	略完	1	最大長 19.2mm
				上舌骨	左	破片	1	
				前鰓蓋骨	左	破片	1	
					右	破片	1	切断
				腹椎		破片	4	
				尾椎		破片	6	
			メバル亜科?	舌顎骨	右	破片	2	
				尾椎		破片	1	
			コチ科	方骨	左	略完	1	
				前鰓蓋骨	左	破片	1	
				腹椎		破片	3	
				尾椎		破片	1	
			コチ科?	尾椎		破片	1	
9	J11	SK51005	カレイ科	第1椎骨		略完	1	
				腹椎		破片	2	
				尾椎		破片	3	
			魚類	歯牙		破片	1	
				基底後頭骨		破片	2	
				腹椎		略完	1	
						破片	1	
				尾椎		破片	1	
						破片	1	棘骨
				椎骨		破片	3	
				担鰭骨		破片	5	
				鰭条(鞘条)		破片	6	
				鰭条(軟条)		破片	8	
				臀鰭棘		破片	1	切断
				鰭棘等		破片	18	
				鱗		破片	13	
				不明		破片	1	切断
						破片	57	
			スズメ目	足根中足骨	右	略完	1	
			哺乳類	不明		破片	1	
			残渣				~0.04g	
11	H11	SK51002	タラ科	尾椎		破片	4	
			アジ科?	方骨	左	破片	1	切断
			ブリ属	尾椎		破片	1	
			ブリ属?	尾椎		破片	1	
			マダイ	前上顎骨	左	破片	1	
				方骨	右	破片	1	
			タイ科	角舌骨	左	破片	1	
				腹椎		破片	1	大型
				腹椎		破片	1	
				尾椎		破片	6	
			サバ属	腹椎		破片	1	
				腹椎		破片	1	棘骨
			メバル亜科	前上顎骨	左	破片	1	
			メバル亜科?	尾椎		破片	2	
			ソウダカツオ属	尾椎		破片	1	
			コチ科	角骨	左	破片	1	
				尾椎		破片	3	
			カレイ科?	腹椎		破片	1	
				尾椎		破片	1	
			魚類	歯骨	左	破片	1	
				腹椎		破片	1	切断
				腹椎		破片	7	
				尾椎		破片	4	
				尾椎		破片	1	棘骨
				担鰭骨~鰭条		破片	1	
				近位担鰭骨		破片	1	

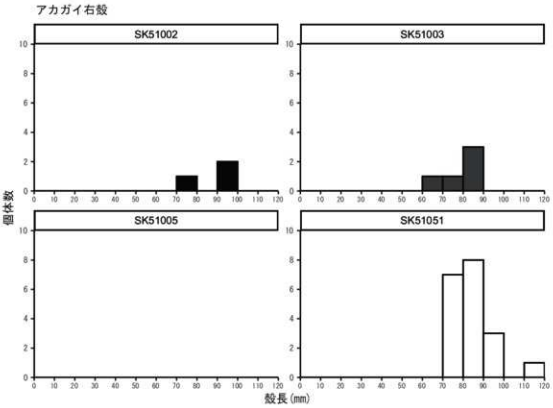
第 13 表　骨同定結果⑤

試料	グリッド	遺構・層位	種類	部位	左 右	状態等	数量	備考
11	H11	SK51002	魚類	鰭条(棘条)		破片	6	
				鰭条(軟条)		破片	1	
				鰭棘等		破片	21	
				鰭棘等		破片	1	
				不明		破片	19	
				鱗		破片	2	
			鳥類	上腕骨?		両端欠	1	
				大指末節骨		破片	1	
				不明		破片	1	
				不明		破片	1	CM
			骨	不明		破片	3	
				不明		破片	1	焼骨
			残渣				~	2.56g
17	H11	SK51040	コチ科	歯骨	右	略完	1	高さ 5.81cm
			魚類	腹椎		破片	1	
20	H9	SK51041	魚類	不明		破片	6	
			スッポン	頂骨板		破片	1+	
				肋骨板		破片	2	
			大型魚類	腹椎		破片	1	
			骨	不明		破片	4	
21	G10	SK51050	カレイ科	尾椎		破片	1	
			鳥獣類	頭蓋骨		破片	1	
22	G11	SK51033	クロダイ属	前上顎骨	右	破片	1	
			カレイ科	第1血管間棘		破片	1	
			魚類	血管間棘		破片	1	
				鰭棘等		破片	2	
				不明		破片	2	
			礫				~	0.03g
23	H11・12	SK51049	ヒラメ	尾椎		破片	1	大型
24		SK51031	ニワトリ	脛足根骨	左	略完	1	最大長 105mm
25	N12	SK51031	クロダイ属?	角舌骨	左	略完	1	
			鳥類	脛足根骨	左	近位端	1	
26	L9	SK51053	鳥類	脛足根骨		両端欠	1	
27	I10	SK51044	ネズミ科	大腿骨	右	遠位端欠	1	
			魚類	鰭棘等		破片	4	
				不明		破片	1	

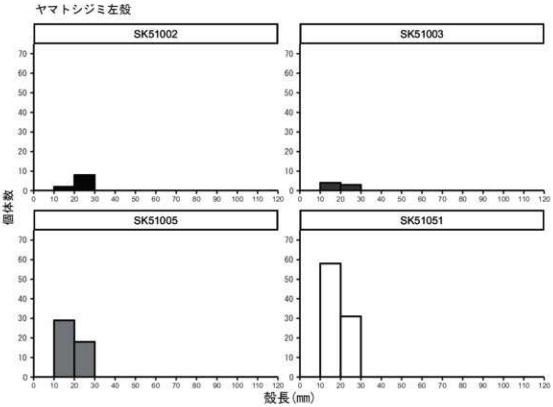
第 14 表　骨・貝同定結果（その他混入遺物）

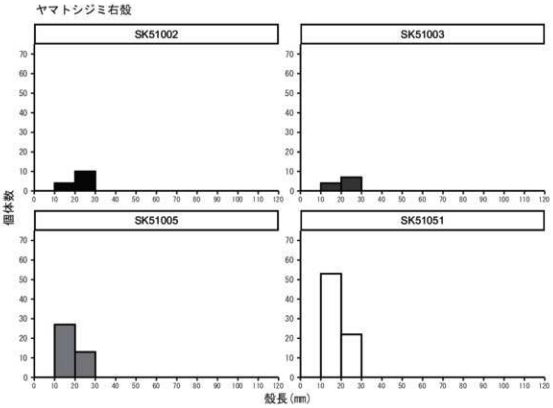
試料	グリッド	遺構・層位	種類	状態等	数量	重量(g)	備考
1	K9	SK51051	炭化物	破片	10+	0.24	
			陶器	破片	2	19.34	
			土器	破片	4	1.59	
			礫		~	54.87	
2	K9	SK51051	炭化物	破片	24	0.81	
3	K9	SK51051	骨角器	破片	1	0.91	長45.25mm 幅7.62mm 穿孔2.06mm 削痕有
			植物遺体	破片	~	0.02	
8	J11	SK51005	炭化物	破片	~	0.17	
			木材		~	0.02	
			植物遺体	破片	~	0.01	現生
			土器	破片	~	1.67	
			金属(鉄)	破片	~	0.91	
			礫・粘土塊		~	6.31	
9	J11	SK51005	土器	破片	1		
			礫		~	0.72	
14	F15	SK51003	土器	破片	3	5.53	
16	H11	SK51040	土器	破片	4	5.63	
21	G10	SK51050	土器	破片	1	4.69	



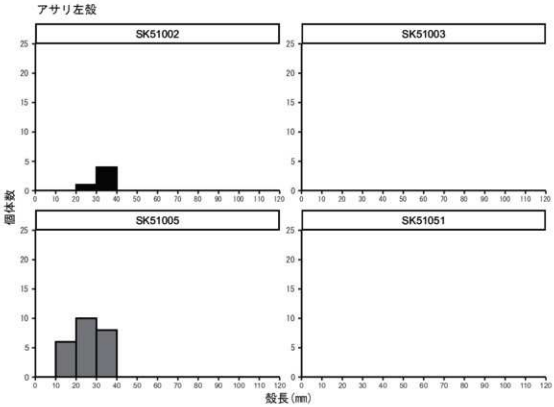


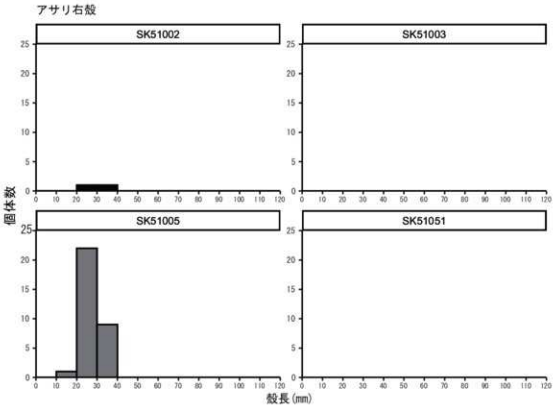
第 54 図　二枚貝殻長分布①



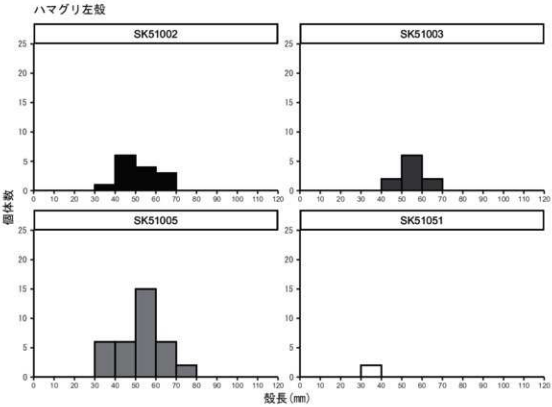


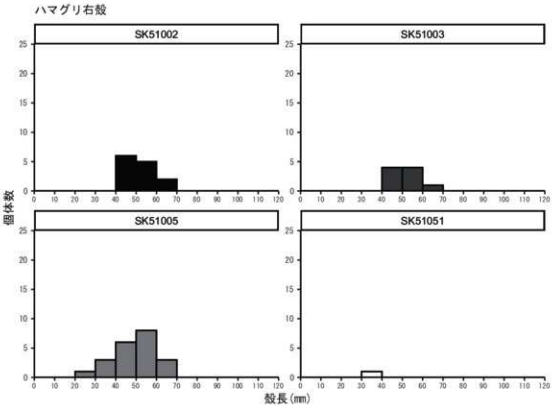
第 54 図　二枚貝殻長分布②





第 54 図　二枚貝殻長分布③





第 54 図　二枚貝殻長分布④

第 15 表　遺構・層位別貝類最小個体数

種類	SK51002 L	SK51002 R	SK51002 MINI※1	SK51002 破片	SK51003 L	SK51003 R	SK51003 MINI※1	SK51003 破片	SK51003上層 L	SK51003上層 R	SK51003上層 MINI※1	SK51003上層 破片
アワビ												
サザエ			**1**					+				+
ウミニナ												
シオフキ	**5**		**5**									
アカガイ	2	3	3		12	6	12					
アカガイ?	**3**	**1**	**3**		**2**	**1**	**2**					
フネガイ科												
ヤマトシジミ	**17**	**15**	**17**		**10**	**13**	**13**			**1**	**1**	
カガミガイ	2	1	2									
アサリ	**19**	**10**	**19**									
ハマグリ	416	448	448		37	44	44		5	2	5	
ハマグリ?	**49**	**55**	**55**									
マルスダレガイ科	24	11	24									
オキシジミ												

種類	SK51005 L	SK51005 R	SK51005 MINI※1	SK51005 破片	SK51040 L	SK51040 R	SK51040 MINI※1	SK51040 破片	SK51041 L	SK51041 R	SK51041 MINI※1	SK51041 破片
アワビ												
サザエ				+				+				+
ウミニナ			1									
シオフキ	**3**	**3**	**3**									
アカガイ					6	5	6					
アカガイ?												
フネガイ科												
ヤマトシジミ	**67**	**59**	**67**		**18**	**26**	**26**					
カガミガイ		1	1									
アサリ	**208**	**194**	**208**		**1**	**1**	**1**					
ハマグリ	428	395	428		8	11	11		6	7	7	
ハマグリ?	**20**	**14**	**20**									
マルスダレガイ科	171	139	171									
オキシジミ		**1**	**1**									

種類	SK51050 L	SK51050 R	SK51050 MINI※1	SK51050 破片	SK51051 L	SK51051 R	SK51051 MINI※1	SK51051 破片	SK53001 L	SK53001 R	SK53001 MINI※1	SK53001 破片
アワビ								+				
サザエ				+				+				
ウミニナ							1					
シオフキ						**1**	**1**					
アカガイ		1	1		26	31	31					
アカガイ?					**8**	**11**	**11**					
フネガイ科								+				
ヤマトシジミ	**4**	**1**	**4**		**230**	**248**	**248**		**1**	**1**	**1**	
カガミガイ												
アサリ					**4**	**6**	**6**					
ハマグリ	4	4	4		147	153	153					
ハマグリ?					**31**	**53**	**53**					
マルスダレガイ科					48	40	48					
オキシジミ												

※1殻頂部が現存しているものをカウントした。
※2破片欄の+はカウントしていないが、多数の破片が検出されていることを示す。

第 16 表　遺構・層位別貝類総重量

（単位：g）

種類	SK51002	SK51003	SK51003上層	SK51005	SK51040	SK51041	SK51050	SK51051	SK53001
ウミニナ				**1.50**					
アワビ								58.18	
アワビ?								**178.95**	
サザエ	13.25	121.40	78.69	271.62	7.81	119.74	3.90	76.47	
サザエ?				**29.58**		**3.54**		**258.52**	**19.70**
復元値	11.36	13.36							
シオフキ	**1.43**			**4.46**				**2.56**	
アカガイ	148.21	496.70			5.30		2.57	72.89	
アカガイ?	**42.98**	**246.45**	**2.56**	**32.73**	**18.41**	**23.67**	**19.26**	**4.83**	
フネガイ科			13.58					3325.67	13.62
ヤマトシジミ	**23.30**	**12.58**	**0.25**	**54.89**	**38.82**		**3.39**	**5.42**	**0.39**
カガミガイ	7.96			5.52					
アサリ	**26.48**			**317.55**	**1.80**			**2.40**	
ハマグリ	1684.32	421.73	41.95	2257.76	98.80	37.69	8.93	68.52	
ハマグリ?	**141.62**	**39.64**		**161.99**	**39.34**	**15.81**	**15.75**	**6.18**	
マルスダレガイ科	9.11			113.38				14.75	
オキシジミ				**2.81**					
カガミガイ?	29.41								
二枚貝綱	**447.11**	**18.98**	**1.38**	**828.43**				**667.15**	**3.64**
貝類	32.76	2.77		51.10		1.30	3.64	29.62	

第 17 表　二枚貝計測結果一覧①

グリッド	遺構・層位	種類	左 右	殻長	殻高
K9	SK51051	アカガイ	左	73.11	56.83
		アカガイ	左	78.42	58.38
		アカガイ	左	76.58	56.21
		アカガイ	左	80.32	64.69
		アカガイ	右	76.29	59.92
		アカガイ	右	78.53	63.76
		アカガイ	右	78.01	66.8
		アカガイ	右	80.51	63.6
		アカガイ	右	77.32	63.65
		アカガイ	右	81.82	64.04
		アカガイ	右	88.32	75.16
		アカガイ	右	119.31	96.91
		ヤマトシジミ	左	23.79	22.31
		ヤマトシジミ	左	17.44	15.62
		ヤマトシジミ	左	13.07	11.39
		ヤマトシジミ	左	15.19	13.53
		ヤマトシジミ	左	16.06	14.14
		ヤマトシジミ	左	19.99	15.87
		ヤマトシジミ	左	19.23	17.24
		ヤマトシジミ	左	15.98	13.16
		ヤマトシジミ	左	17065	16.39
		ヤマトシジミ	左	20.25	18.45
		ヤマトシジミ	左	12.84	11.52
		ヤマトシジミ	左	19.97	18.06
		ヤマトシジミ	右	17.51	14.99
		ヤマトシジミ	右	15.99	12.75
		ヤマトシジミ	右	17.74	14.7
		ヤマトシジミ	右	18.45	16.01
		ヤマトシジミ	右	18.48	16.3
		ヤマトシジミ	右	18.54	16.43
		ヤマトシジミ	右	23.11	20.9
		ヤマトシジミ	右	18.97	17.5
		ヤマトシジミ	右	19.98	16.8
		ヤマトシジミ	右	15.49	13.32
		ヤマトシジミ	右	21.12	18.87
K9	SK51051	アカガイ	左	79.33	59.13
		アカガイ	左	76.04	60.48
		アカガイ	左	78.49	66.79
		アカガイ	左	75.55	59.41
		アカガイ	左	83.81	64.85
		アカガイ	左	87.63	66.29
		アカガイ	左	91.77	73.2
		アカガイ	左	83.81	63.31
		アカガイ	左	78.03	62.09
		アカガイ	左	81.87	67.37
		アカガイ	左	83.05	65.7
		アカガイ	右	81.88	66.3
		アカガイ	右	88.06	72.25
		アカガイ	右	91.11	69.92
		アカガイ	右	79.44	67.15
		アカガイ	右	76.01	65.24
		アカガイ	右	84.27	67.04
		アカガイ	右	81.33	63.77
		アカガイ	右	92.07	68.85
		アカガイ	右	91.06	74.55
		アカガイ	右	83.85	66.83
		アカガイ	右	72.57	60.69
		ヤマトシジミ	左	26.92	25.1
		ヤマトシジミ	左	26.2	24.01
		ヤマトシジミ	左	21.75	20.4
		ヤマトシジミ	左	18.94	15.42
		ヤマトシジミ	左	25.15	22.06
		ヤマトシジミ	左	17.24	15.94
		ヤマトシジミ	左	21.96	20.7
		ヤマトシジミ	左	28.12	25.98
		ヤマトシジミ	左	21.4	20.75
		ヤマトシジミ	左	16.3	14.89
		ヤマトシジミ	左	20.28	17.65
		ヤマトシジミ	左	20.15	17.45
		ヤマトシジミ	左	20.97	18.56
		ヤマトシジミ	左	23.3	21.29
		ヤマトシジミ	左	20.45	18.8
		ヤマトシジミ	左	21.16	19.17
		ヤマトシジミ	左	19.07	15.12
		ヤマトシジミ	左	22.93	21.59
		ヤマトシジミ	左	17.82	16.51
		ヤマトシジミ	左	20.47	18.72
		ヤマトシジミ	左	23.42	20.32
		ヤマトシジミ	左	17.62	15.77
		ヤマトシジミ	左	15.8	14.59
		ヤマトシジミ	左	18.13	15.77

グリッド	遺構・層位	種類	左 右	殻長	殻高
K9	SK51051	ヤマトシジミ	左	17.82	15.95
		ヤマトシジミ	左	20.32	18.02
		ヤマトシジミ	左	21.62	18.54
		ヤマトシジミ	左	20.16	19.44
K9	SK51051	ヤマトシジミ	左	20.66	17.14
		ヤマトシジミ	左	17.81	15.35
		ヤマトシジミ	左	15.72	13.09
		ヤマトシジミ	左	17.01	15.55
		ヤマトシジミ	左	25.42	21.67
		ヤマトシジミ	左	15.4	14.33
		ヤマトシジミ	左	25.59	23.5
		ヤマトシジミ	左	26.25	24.03
		ヤマトシジミ	左	18.93	17.03
		ヤマトシジミ	左	18.41	16.79
		ヤマトシジミ	左	15.25	13.06
		ヤマトシジミ	左	13.81	12.5
		ヤマトシジミ	左	15.29	13.18
		ヤマトシジミ	左	14.92	12.8
		ヤマトシジミ	左	15.84	13.58
		ヤマトシジミ	左	17.89	14.72
		ヤマトシジミ	左	22.09	19.54
		ヤマトシジミ	左	18.44	15.52
		ヤマトシジミ	左	14.22	11.84
		ヤマトシジミ	左	18.74	16.44
		ヤマトシジミ	左	22.18	19.4
		ヤマトシジミ	左	20.81	18.38
		ヤマトシジミ	左	17.27	15.26
		ヤマトシジミ	左	13.83	11.65
		ヤマトシジミ	左	22.34	19.36
		ヤマトシジミ	左	19.67	17.65
		ヤマトシジミ	左	16.54	15.75
		ヤマトシジミ	左	13.98	12.21
		ヤマトシジミ	左	12.59	10.82
		ヤマトシジミ	左	21.41	18.87
		ヤマトシジミ	左	19.56	17.75
		ヤマトシジミ	左	19.46	16.85
		ヤマトシジミ	左	15.77	13.16
		ヤマトシジミ	左	13.71	12.29
		ヤマトシジミ	左	15.84	14.2
		ヤマトシジミ	左	16.11	14.47
		ヤマトシジミ	左	20.85	18.97
		ヤマトシジミ	左	15.44	14.21
		ヤマトシジミ	左	12.51	10.54
		ヤマトシジミ	左	19.37	16.77
		ヤマトシジミ	左	15.54	13.72
		ヤマトシジミ	左	17.64	15.27
		ヤマトシジミ	左	17.78	16.93
		ヤマトシジミ	左	16.55	14.36
		ヤマトシジミ	左	13.22	11.91
		ヤマトシジミ	左	14.93	13.59
		ヤマトシジミ	左	18.84	16.55
		ヤマトシジミ	左	16.73	14.41
		ヤマトシジミ	左	15.77	14.2
		ヤマトシジミ	右	18.48	17.6
		ヤマトシジミ	右	19.83	17.72
		ヤマトシジミ	右	22.54	19.2
		ヤマトシジミ	右	20.47	19.3
		ヤマトシジミ	右	20.68	18.1
		ヤマトシジミ	右	14.22	13.23
		ヤマトシジミ	右	12.46	11.34
		ヤマトシジミ	右	12.28	10.43
		ヤマトシジミ	右	13.88	12.01
		ヤマトシジミ	右	23.17	21.44
		ヤマトシジミ	右	14.02	12.37
		ヤマトシジミ	右	15.71	14.1
		ヤマトシジミ	右	26.92	24.18
		ヤマトシジミ	右	19.93	18.68
		ヤマトシジミ	右	18.2	15.62
		ヤマトシジミ	右	15.85	13.62
		ヤマトシジミ	右	16.49	14.67
		ヤマトシジミ	右	19.95	18.13
		ヤマトシジミ	右	20.74	18.18
		ヤマトシジミ	右	23.64	22.2
		ヤマトシジミ	右	22.62	18.75
		ヤマトシジミ	右	22.15	19.55
		ヤマトシジミ	右	19.21	17.03
		ヤマトシジミ	右	23.69	21.68
		ヤマトシジミ	右	16.91	15.13
		ヤマトシジミ	右	16.66	14.29
		ヤマトシジミ	右	15.61	13.97
		ヤマトシジミ	右	19.07	16.91

第 17 表　二枚貝計測結果一覧②

グリッド	遺構・層位	種類	左 右	殻長	殻高
K9	SK51051	ヤマトシジミ	右	22.04	20.55
		ヤマトシジミ	右	21.68	18.98
		ヤマトシジミ	右	13.39	12.34
		ヤマトシジミ	右	15.6	13.99
		ヤマトシジミ	右	19.97	17.27
		ヤマトシジミ	右	15.87	13.9
		ヤマトシジミ	右	18.17	16.53
		ヤマトシジミ	右	17.01	15.3
K9	SK51051	ヤマトシジミ	右	17.58	16.47
		ヤマトシジミ	右	22.24	20.63
		ヤマトシジミ	右	15.12	14.53
		ヤマトシジミ	右	17.12	15.22
		ヤマトシジミ	右	19.45	17.54
		ヤマトシジミ	右	20.62	18.31
		ヤマトシジミ	右	13.61	12.08
		ヤマトシジミ	右	16.52	14.81
		ヤマトシジミ	右	15.14	13.92
		ヤマトシジミ	右	21.76	19.46
		ヤマトシジミ	右	12.47	11.01
		ヤマトシジミ	右	13.94	12.08
		ヤマトシジミ	右	16.05	14.63
		ヤマトシジミ	右	17.43	15.27
		ヤマトシジミ	右	15.09	13.61
		ヤマトシジミ	右	15.83	14.22
		ヤマトシジミ	右	18.36	17.29
		ヤマトシジミ	右	23.16	20.99
		ヤマトシジミ	右	12.42	11.53
		ヤマトシジミ	右	18.28	16.03
		ヤマトシジミ	右	21.22	18.75
		ヤマトシジミ	右	16.54	14.37
		ヤマトシジミ	右	20.76	18.85
		ヤマトシジミ	右	24.21	20.73
		ヤマトシジミ	右	21.96	18.44
		ヤマトシジミ	右	17.62	15.27
		ヤマトシジミ	右	16.72	15.81
		ヤマトシジミ	右	16.54	14.4
		ハマグリ	左	36.23	30.19
		ハマグリ	左	34.68	29.07
		ハマグリ	右	36.78	31.85
J11	SK51005	ヤマトシジミ	左	15.51	13.16
		ヤマトシジミ	左	15.53	14.27
		ヤマトシジミ	左	16.2	14.11
		ヤマトシジミ	左	15.83	12.89
		ヤマトシジミ	左	16.62	13.29
		ヤマトシジミ	左	16.11	14.22
		ヤマトシジミ	左	17.71	15.81
		ヤマトシジミ	左	15.87	14.44
		ヤマトシジミ	左	18.05	16.04
		ヤマトシジミ	左	19.68	17.65
		ヤマトシジミ	左	19.35	17.28
		ヤマトシジミ	左	19.52	17.15
		ヤマトシジミ	左	19.44	17.61
		ヤマトシジミ	左	20.39	16.6
		ヤマトシジミ	左	19.13	16.35
		ヤマトシジミ	左	22.54	19.59
		ヤマトシジミ	左	21.91	18.59
		ヤマトシジミ	左	18.77	15.99
		ヤマトシジミ	左	19.38	16.11
		ヤマトシジミ	左	17.19	15.93
		ヤマトシジミ	左	19.27	17.52
		ヤマトシジミ	左	18.41	16.05
		ヤマトシジミ	左	20.72	17.28
		ヤマトシジミ	左	19.28	17.12
		ヤマトシジミ	左	21.95	20.02
		ヤマトシジミ	左	21.44	18.36
		ヤマトシジミ	左	20.29	17.28
		ヤマトシジミ	左	20.71	18.25
		ヤマトシジミ	左	16.71	15.8
		ヤマトシジミ	左	19.58	16.94
		ヤマトシジミ	左	20.33	17.43
		ヤマトシジミ	左	18.08	15.4
		ヤマトシジミ	左	20.42	17.55
		ヤマトシジミ	左	15.19	12.92
		ヤマトシジミ	左	19.83	18.06
		ヤマトシジミ	左	21.02	19.03
		ヤマトシジミ	左	23.81	20.73
		ヤマトシジミ	左	19.64	16.88
		ヤマトシジミ	左	17.53	15.34
		ヤマトシジミ	左	17.14	15.7
		ヤマトシジミ	左	14.64	12.49
		ヤマトシジミ	左	22.65	21.06

グリッド	遺構・層位	種類	左 右	殻長	殻高
J11	SK51005	ヤマトシジミ	左	21.41	18.32
		ヤマトシジミ	左	20.21	18.65
		ヤマトシジミ	左	22.49	19.51
		ヤマトシジミ	左	21.11	18.49
		ヤマトシジミ	左	23.73	22.57
		ヤマトシジミ 焼	右	22.11	18.26
		ヤマトシジミ	右	15.76	14
		ヤマトシジミ	右	15.74	13.88
		ヤマトシジミ	右	15.98	13.68
		ヤマトシジミ	右	16.66	14.64
		ヤマトシジミ	右	17.81	15.23
		ヤマトシジミ	右	18.84	15.61
J11	SK51005	ヤマトシジミ	右	18.64	15.91
		ヤマトシジミ	右	17.74	15.74
		ヤマトシジミ	右	18.67	16.03
		ヤマトシジミ	右	17.71	14.69
		ヤマトシジミ	右	17.84	15.94
		ヤマトシジミ	右	18.89	16.97
		ヤマトシジミ	右	19.67	15.99
		ヤマトシジミ	右	17.78	15.41
		ヤマトシジミ	右	20.05	18.02
		ヤマトシジミ	右	20.17	17.24
		ヤマトシジミ	右	18.94	16.18
		ヤマトシジミ	右	18.74	15.5
		ヤマトシジミ	右	19.08	17.2
		ヤマトシジミ	右	21.31	18.53
		ヤマトシジミ	右	19.86	17.76
		ヤマトシジミ	右	18.85	16.33
		ヤマトシジミ	右	19.79	17.23
		ヤマトシジミ	右	18.43	15.17
		ヤマトシジミ	右	19.42	16.7
		ヤマトシジミ	右	20.44	17.11
		ヤマトシジミ	右	21.76	18.17
		ヤマトシジミ	右	19.46	16.77
		ヤマトシジミ	右	19.13	16.75
		ヤマトシジミ	右	18.37	15.47
		ヤマトシジミ	右	19.65	16.73
		ヤマトシジミ	右	21.41	18.95
		ヤマトシジミ	右	21.94	19.65
		ヤマトシジミ	右	20.00	18.61
		ヤマトシジミ	右	18.23	16.27
		ヤマトシジミ	右	20.72	18.97
		ヤマトシジミ	右	22.83	20.72
		ヤマトシジミ	右	22.29	20.82
		ヤマトシジミ	右	23.39	20.63
		ヤマトシジミ	右	27.32	25.99
		アサリ	左 右	39.19	31.46
		アサリ	左	18.02	15.63
		アサリ	左	18.22	14.66
		アサリ	左	18.01	15.57
		アサリ	左	17.83	16.3
		アサリ	左	21.34	17.72
		アサリ	左	24.91	19.65
		アサリ	左	26.79	20.18
		アサリ	左	22.22	17.53
		アサリ	左	19.52	15.44
		アサリ	左	19.58	15.17
		アサリ	左	21.17	18.69
		アサリ	左	26.93	22.2
		アサリ	左	25.09	20.18
		アサリ	左	31.5	25.94
		アサリ	左	31.35	26.31
		アサリ	左	27.27	24.2
		アサリ	左	30.49	24.69
		アサリ	左	25.77	21.45
		アサリ	左	29.06	23.56
		アサリ	左	32.11	25.22
		アサリ	左	30.56	24.57
		アサリ	左	30.53	24.75
		アサリ	左	32.23	26.44
		アサリ	右	21.73	16.77
		アサリ	右	22.83	17.86
		アサリ	右	21.83	15.63
		アサリ	右	24.1	17.78
		アサリ	右	23.31	18.49
		アサリ	右	20.07	14.38
		アサリ	右	19.8	15.33
		アサリ	右	22.23	18.18
		アサリ	右	22.07	16.89
		アサリ	右	21.21	16.79
		アサリ	右	21.85	16.99

第 17 表　二枚貝計測結果一覧③

グリッド	遺構・層位	種類	左 右	殻長	殻高
J11	SK51005	アサリ	右	24.78	18.18
		アサリ	右	25.52	18.99
		アサリ	右	24.86	19.03
		アサリ	右	27.04	20.28
		アサリ	右	26.88	20.7
		アサリ	右	28.41	20.18
		アサリ	右	29.48	22.26
		アサリ	右	30.51	23.46
		アサリ	右	30.03	24.64
		アサリ	右	27.63	21.91
		アサリ	右	31.87	24.86
		アサリ	右	25.87	20.13
		アサリ	右	28.3	21.28
		アサリ	右	30.52	24.22
		アサリ	右	33.62	24.99
		アサリ	右	31.2	22.6
J11	SK51005	アサリ	右	28.73	21.76
		アサリ	右	30.8	24.8
		アサリ	右	26.65	20.23
		アサリ	右	31.5	22.57
		ハマグリ	左	30.52	27.25
		ハマグリ	左	46.09	39.08
		ハマグリ	左	51.31	42.05
		ハマグリ	左	47.92	38.96
		ハマグリ	左	37.42	28.7
		ハマグリ	左	42.02	35.22
		ハマグリ	左	35.62	30.2
		ハマグリ	左	34.44	27.44
		ハマグリ	左	38.53	31.5
		ハマグリ	左	51.35	42.71
		ハマグリ	左	43.91	35.65
		ハマグリ	左	43.6	36.35
		ハマグリ	左	50.82	40.16
		ハマグリ	左	51.75	40.07
		ハマグリ	左	47.82	38.33
		ハマグリ	左	50.03	42.12
		ハマグリ	左	53.12	42.73
		ハマグリ	左	58.03	47.99
		ハマグリ	左	57.23	46.56
		ハマグリ	左	63.47	51.21
		ハマグリ	左	61.16	50.6
		ハマグリ	左	54.07	43.67
		ハマグリ	左	52.89	42.22
		ハマグリ	左	55.28	43.94
		ハマグリ	左	59.25	47.79
		ハマグリ	左	50.75	42.7
		ハマグリ	左	64.27	50.2
		ハマグリ	左	60.44	49.27
		ハマグリ	左	52.77	43.13
		ハマグリ	左	51.23	41.24
		ハマグリ	左	61.57	47.44
		ハマグリ	左	74.45	59.02
		ハマグリ	左	63.65	51.57
		ハマグリ	左	76.06	59.97
		ハマグリ	右	30.68	27.24
		ハマグリ	右	26.45	22.85
		ハマグリ	右	36.57	32.54
		ハマグリ	右	45.63	36.4
		ハマグリ	右	50.43	40.51
		ハマグリ	右	52.53	41
		ハマグリ	右	42.09	34.35
		ハマグリ	右	37.77	31.56
		ハマグリ	右	40.33	34.66
		ハマグリ	右	43.98	34.99
		ハマグリ	右	48.32	38.63
		ハマグリ	右	47.02	38.29
		ハマグリ	右	51.98	41.17
		ハマグリ	右	51.57	42.23
		ハマグリ	右	53.27	41.75
		ハマグリ	右	51.61	42.98
		ハマグリ	右	55.82	43.37
		ハマグリ	右	60.69	49.25
		ハマグリ	右	61.08	48.7
		ハマグリ	右	61.19	47.65
		ハマグリ	右	53.17	42.37
		オキシジミ	右	36.48	38.32
J11	SK51005	ハマグリ	左	37.81	30.64
H11	SK51002	シオフキ	左	40.31	36.9
		シオフキ	左	39.99	34.99
		アカガイ	左	83.85	68.84
		アカガイ	左	78.79	60.27

グリッド	遺構・層位	種類	左 右	殻長	殻高
H11	SK51002	アカガイ	右	97.28	76.94
		アカガイ	右	93.64	69.39
		アカガイ	右	75.13	62.88
		ヤマトシジミ 焼	左	22.24	19.66
		ヤマトシジミ	左	14.95	13
		ヤマトシジミ	左	22.43	19.85
		ヤマトシジミ	左	20.04	19.38
		ヤマトシジミ	左	24.77	21.66
		ヤマトシジミ	左	25.67	24
		ヤマトシジミ	左	21.83	20.85
		ヤマトシジミ	左	20.82	19.61
		ヤマトシジミ	左	19.82	16.65
		ヤマトシジミ	左	27.38	26.07
		ヤマトシジミ	左	20.51	18.57
		ヤマトシジミ	右	12.36	10.34
		ヤマトシジミ	右	12.75	11.41
		ヤマトシジミ	右	21.02	19.78
		ヤマトシジミ	右	24.21	21.17
		ヤマトシジミ	右	23.95	21.71
		ヤマトシジミ	右	21.1	19.7
H11	SK51002	ヤマトシジミ	右	16.67	15.55
		ヤマトシジミ	右	25.33	22.61
		ヤマトシジミ	右	22.88	19.99
		ヤマトシジミ	右	22.09	19.85
		ヤマトシジミ	右	19.54	18.17
		ヤマトシジミ	右	22.99	21.11
		ヤマトシジミ	右	27.75	24.77
		ヤマトシジミ	右	23.85	21.08
		ハマグリ	左	43.95	37.41
		ハマグリ	左	37.33	32.05
		ハマグリ	左	47.6	39.54
		ハマグリ	左	48.32	37.18
		ハマグリ	左	63.31	50.92
		ハマグリ	左	65.92	52.11
		ハマグリ	左	67.01	53.61
		ハマグリ	左	46.9	39.82
		ハマグリ	左	48.24	40.27
		ハマグリ	左	46.97	38.1
		ハマグリ	左	52.81	41.6
		ハマグリ	左	54.61	42.76
		ハマグリ	左	55.69	44.21
		ハマグリ	右	59.28	48.52
		ハマグリ	右	63.36	47.36
		ハマグリ	右	42.39	34.08
		ハマグリ	右	46.61	35.09
		ハマグリ	右	42.96	35.66
		ハマグリ	右	49.35	38.4
		ハマグリ	右	46.44	35.63
		ハマグリ	右	50.79	40.9
		ハマグリ	右	63.86	49.42
		ハマグリ	右	47.91	38.14
		ハマグリ	右	52.35	41.58
		ハマグリ	右	58.57	45.81
		ハマグリ	右	55.73	45.88
		アサリ	左	23.42	19.8
		アサリ	左	31.62	25.41
		アサリ	左	36.71	28.95
		アサリ	左	33.87	27.99
		アサリ	左	31.74	25.67
		アサリ	右	24.32	20.04
		アサリ	右	36.06	26.93
H11	SK51002	ハマグリ	左	53.61	43.43
F15	SK51003	アカガイ	左	86.44	65.65
		アカガイ	左	76.87	58.36
		アカガイ	左	74.6	58.48
		アカガイ	左	75.95	60.44
		アカガイ	左	83.52	66.3
		アカガイ	左	77.6	59.82
		アカガイ	左	77.62	61.37
		アカガイ	左	82.24	67.38
		アカガイ	左	80.29	60.45
		アカガイ	右	68.91	50.85
		アカガイ	右	79.28	64.13
		アカガイ	右	80.64	60.78
		アカガイ	右	87.65	63.72
		アカガイ	右	89.76	68.25
		ヤマトシジミ	左	24.91	22.2
		ヤマトシジミ	左	22.11	18.75
		ヤマトシジミ	左	19.91	17.36
		ヤマトシジミ	右	14.39	12.99
		ヤマトシジミ	右	18.16	16.12

第 17 表　二枚貝計測結果一覧④

グリッド	遺構・層位	種類	左 右	殻長	殻高
F15	SK51003	ヤマトシジミ	右	19.23	16.57
		ヤマトシジミ	右	22.08	19.73
		ハマグリ	左	40.67	34.83
		ハマグリ	左	48.85	41.72
		ハマグリ	左	51.11	41.98
		ハマグリ	左	60.67	46.53
		ハマグリ	左	59.32	47.37
		ハマグリ	左	63.78	48.99
		ハマグリ	左	53.27	43.49
		ハマグリ	左	51.68	41.68
		ハマグリ	左	55.99	43.97
		ハマグリ	左	59.08	46.35
		ハマグリ	右	48.42	41.14
		ハマグリ	右	54.15	43.16
		ハマグリ	右	47.88	40.66
		ハマグリ	右	54.39	41.92
		ハマグリ	右	59.46	45.93
		ハマグリ	右	60.15	47.71
F15	SK51003	ヤマトシジミ	左	17.39	14.33
		ヤマトシジミ	左	18.59	16.11
		ヤマトシジミ	左	19.34	16.55
		ヤマトシジミ	左	23.16	19.36
		ヤマトシジミ	右	21.65	19.34
		ヤマトシジミ	右	22.9	20.05
F15	SK51003	ヤマトシジミ	右	21.27	17.67
		ヤマトシジミ	右	20.24	16.75
		ヤマトシジミ	右	15.76	14.44
		ヤマトシジミ	右	20.55	18.44
		ヤマトシジミ	右	22.22	18.96
		ハマグリ	右	47.55	38.79
		ハマグリ	右	49.44	40.41
		ハマグリ	右	55.54	45.42
H11	SK51040	アカガイ	左	97.53	84.87
		アカガイ	左	96.15	74.98
		アカガイ	左	91.64	72.14
		アカガイ	左	103.63	82.78
		アカガイ	左	88.83	74.95
		アカガイ	左	102.93	82.14
		アカガイ	右	86.01	69.58
		アカガイ	右	92.14	71.25
		アカガイ	右	94.72	80.02
		アカガイ	右	96.99	79.77
		ヤマトシジミ	右	23.72	19.4
		ヤマトシジミ	右	18.94	16.19
		ヤマトシジミ	右	18.43	16.71
		ヤマトシジミ	右	22.63	21.12
		ヤマトシジミ	右	24.63	21.74
		ヤマトシジミ	右	15.3	13.47
		ヤマトシジミ	左	23.72	20.12
		ヤマトシジミ	左	23.75	21.56
		ヤマトシジミ	左	14.92	12.83
		ヤマトシジミ	左	25.59	23.61
		ヤマトシジミ	左	19.84	18.28
		ヤマトシジミ	左	18.37	17.79
		ヤマトシジミ	左	21.31	19.68
		ハマグリ	右	51.02	42.88
G10	SK51050	ヤマトシジミ	左	18.22	15.68
		ヤマトシジミ	左	21.59	19.39
F15	SK51003 上層	ヤマトシジミ	右	14.85	13.31
		ハマグリ	左	52.02	41.49
		ハマグリ	右	62.08	49.87
G4	SK53001	ヤマトシジミ	右	14.86	13.09

・ＳＫ 51031

魚類は、クロダイ属？のみが、鳥類は、ニワトリ、鳥類の骨がわずかに検出される。

・ＳＫ 51033

貝類は、サザエ、腹足綱がわずかに検出される。魚類は、クロダイ属、カレイ科、魚類が検出される。

・ＳＫ 51040

貝類は、サザエ、アカガイ、アカガイ？、ヤマトシジミ、ハマグリ、ハマグリ？、アサリが検出されるが、全体的な検出量は比較的少ない。

魚類は、コチ科、魚類がわずかに検出される。

・ＳＫ 51041

貝類は、サザエ、サザエ？、腹足綱、アカガイ？、ハマグリ、ハマグリ？、貝類が検出されるが、全体的な検出量は比較的少ない。

魚類は、大型魚類の腹椎と、種不明破片がわずかに検出され、スッポンの頂骨板と肋骨板が検出される。

・ＳＫ 51044

魚類は、種不明破片がわずかに検出され、哺乳類は、ネズミ科の大腿骨破片が１点検出される。

・ＳＫ 51049

魚類は、ヒラメの尾椎１点が検出される。

・ＳＫ 51050

貝類は、サザエ、アカガイ、アカガイ？、ヤマトシジミ、ハマグリ、ハマグリ？、貝類が検出されるが、全体的な検出量は比較的少ない。

魚類は、カレイ科の尾椎が１点検出され、鳥獣類の頭蓋骨破片が１点検出される。

・ＳＫ 51051

貝類は、アワビ、アワビ？、サザエ、サザエ？、腹足綱、アカガイ、アカガイ？、フネガイ科、ヤマトシジミ、ハマグリ、ハマグリ？、種不明二枚貝破片、貝類、残渣、ウミニナ、シオフキ、アサリ、マルスダレガイ科が検出される。数量で見るとハマグリ、ヤマトシジミが多いが、殻頂部が破損したアカガイに由来すると思われる破片が多量に検出されている。

魚類は、ニシン科、サヨリ属、タラ科、カマス属、スズキ属、アジ科、マダイ、チダイ？、タイ科、タイ科？、カツオ？、メバル亜科、コチ科、カレイ科、大型魚類、魚類が検出される。

鳥類は、キジ科、鳥類の骨が検出され、哺乳類は、キツネの第１頚椎の破片が検出される。

・ＳＫ 51053

鳥類は、種不明の脛足根骨が１点検出される。

・ＳＫ 53001

貝類は、サザエ？、フネガイ科、ヤマトシジミ、種不明二枚貝破片が検出されるが、全体的な検出量は比較的少ない。

②樹種同定

結果を第18表に示す。同定の結果、木材は、針葉樹3種（モミ属、マツ属複維管束亜属、ヒノキ）である。試料の中にはあて材（偏心成長した木材）があり、これらの組織は正常材とは異なるため「?」を付した。以下に検出された種類の解剖学的特徴を述べる。

・モミ属（Abies） マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は粗く、垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で1分野に1～4個。放射組織は単列、1～20細胞高。

・マツ属複維管束亜属（Pinus subgen. Diploxylon）マツ科

軸方向組織をみると、仮道管の早材部から晩材部への移行はやや緩やかで、垂直樹脂道が晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道と、樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

・ヒノキ（Chamaecyparis obtusa（Sieb. et Zucc.）Endlcher） ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかへやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認

第18表　樹種同定結果

試料	遺物番号	種類	遺構・層位	樹種
1	584	井戸枠材（結物）	SE1070上段No14	ヒノキ
2	585	井戸枠材（結物）	SE1070上段No15	ヒノキ
3	588	井戸枠材（結物）	SE1070下段	ヒノキ
4	587	井戸枠材（結物）	SE1070下段	ヒノキ
5	586	井戸枠材（結物）	SE1070下段	ヒノキ
6	638	井戸枠材（結物）	SE1076・S1077上段1	ヒノキ
7	639	井戸枠材（結物）	SE1076・S1077上段1	ヒノキ
8	637	井戸枠材（結物）	SE1076・S1077上段1	ヒノキ
9	641	井戸枠材（結物）	SE1076・S1077上段2	ヒノキ
10	642	井戸枠材（結物）	SE1076・S1077上段2	ヒノキ
11	640	井戸枠材（結物）	SE1076・S1077上段2	ヒノキ
12	645	井戸枠材（結物）	SE1076・S1077下段1	ヒノキ
13	644	井戸枠材（結物）	SE1076・S1077下段1	ヒノキ
14	643	井戸枠材（結物）	SE1076・S1077下段1	ヒノキ
15	647	井戸枠材（結物）	SE1076・S1077下段2	ヒノキ
16	646	井戸枠材（結物）	SE1076・S1077下段2	ヒノキ
17	648	井戸枠材（結物）	SE1076・S1077下段2	ヒノキ
18	649	杭	SE1076・S1077	モミ属
19	774	井戸枠材（結物）	SE4002	ヒノキ?
20	775	井戸枠材（結物）	SE4002	ヒノキ
21	776	井戸枠材（結物）	SE4002	ヒノキ
22	777	井戸枠材（結物）	SE4002	ヒノキ?
23	201	杭（曲杭）	SB5004西P7-1	マツ属複維管束亜属
24	203	杭（曲杭）	SB5004西P2-2	マツ属複維管束亜属
25	204	杭（曲杭）	SB5004西P3-1	マツ属複維管束亜属
26	205	杭（曲杭）	SB5004西P4-3	マツ属複維管束亜属
27		杭（曲杭）	SB5004東P1-3	マツ属複維管束亜属
28		杭（曲杭）	SB5004東P6-1	マツ属複維管束亜属
29		杭（曲杭）	SB5004北P3-2	マツ属複維管束亜属
30		杭（曲杭）	SB5004南P1	マツ属複維管束亜属
31		杭（曲杭）	SB5004南P3-1	マツ属複維管束亜属
32		杭（曲杭）	SB5004東P2-1	マツ属複維管束亜属
33		杭（曲杭）	SB5004西P7-4	マツ属複維管束亜属
34		杭（曲杭）	SB5004南P1-1	マツ属複維管束亜属
35		杭（曲杭）	SB5004南P4-1	マツ属複維管束亜属
36		杭（曲杭）	SB5004北P5-2	マツ属複維管束亜属
37		杭（曲杭）	SB5004南P2-1	マツ属複維管束亜属
38		杭（曲杭）	SB5004東P4-2	マツ属複維管束亜属
39		杭（曲杭）	SB5004南P5-1	マツ属複維管束亜属
40		杭（曲杭）	SB5004北P2-1	マツ属複維管束亜属
41		杭（曲杭）	SB5004北P4-2	マツ属複維管束亜属
42		杭（曲杭）	SB5004西P6-1	マツ属複維管束亜属
43		杭（曲杭）	SB5004東P3-2	マツ属複維管束亜属
44		杭（曲杭）	SB5004西P6-3	マツ属複維管束亜属
45		杭（曲杭）	SB5004西P5-2	マツ属複維管束亜属?
46		杭（曲杭）	SB5004北P1-2	マツ属複維管束亜属
47		杭（曲杭）	上層遺構（第1区Pit1）	マツ属複維管束亜属

第19表　花粉分析結果

種　類	1区 下層 確認1 試料1	確認2 試料2
木本花粉		
モミ属	8	－
ツガ属	2	－
マツ属	4	－
スギ属	2	－
クルミ属	1	－
カバノキ属	1	－
ブナ属	1	1
コナラ属コナラ亜属	9	1
コナラ属アカガシ亜属	21	－
クリ属	－	1
エノキ属―ムクノキ属	1	－
イボタノキ属	1	－
草本花粉		
イネ科	30	－
サナエタデ節―ウナギツカミ節	3	－
セリ科	1	－
ヨモギ属	6	－
キク亜科	1	－
タンポポ亜科	1	－
不明花粉		
不明花粉	5	1
シダ類胞子		
ヒカゲノカズラ属	3	－
イノモトソウ属	6	－
他のシダ類胞子	79	－
合　計		
木本花粉	51	3
草本花粉	42	0
不明花粉	5	1
シダ類胞子	88	0
合計（不明を除く）	181	3

められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1－3個。放射組織は単列、1－15細胞高。

③花粉分析

結果を第19表に示す。いずれの試料からも花粉化石の検出が少なく、定量分析を行うだけの個体数は得られなかった。検出された花粉化石の保存状態は、花粉外膜が破損あるいは溶解しているなど全体的に悪く、分析残渣も少ない。

試料1では、少ないながらも花粉化石の種類数が多く、木本花粉ではコナラ属アカガシ亜属が最も多く産出する。その他ではモミ属、ツガ属、マツ属、スギ属、コナラ属コナラ亜属などを伴う。草本花粉ではイネ科が最も多く、サナエタデ節―ウナギツカミ節、ヨモギ属などが認められる。

試料2では、花粉化石がほとんど検出されず、わずかにブナ属、コナラ亜属、クリ属などの木本花粉が確認されたのみである。

④珪藻分析

分析結果を第20表に示す。試料1、2いずれの試料も産出数は少なかった。保存状態は、普通である。以下、試料ごとに結果を記す。

第20表　珪藻分析結果

種　　類	生態性			環境指標種	I区 下層	
	塩分	pH	流水		確認1 試料1	確認2 試料2
Rhopalodia spp.	Ogh-Meh	unk	unk		1	
Amphora ovalis var. *affinis* (Kuetz.) Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	1	－
Amphora spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	－
Caloneis aerophila Bock	Ogh-ind	al-il	ind	RA	2	－
Cymbella tumida (Breb. ex Kuetz.) Van Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	－	1
Cymbella turgidula Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,T	－	3
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	1
Encyonema silesiacum (Bleisch in Rabenh.) D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	T	－	5
Eunotia pectinalis (Dillwyn) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O,T	－	1
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk		2	－
Fragilaria spp.	Ogh-unk	unk	unk		1	1
Gomphonema clevei Fricke	Ogh-ind	al-bi	r-ph	T	1	－
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	O,U	2	－
Gomphonema olivaceum (Lyngb.) Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	2	－
Gyrosigma acuminatum (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind		4	－
Navicula viridula (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	－	1
Pinnularia divergens W.Smith	Ogh-hob	ac-il	l-ph	O	－	1
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	－	1
Pinnularia viridis (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	－	1
海水生種					0	0
海水～汽水生種					0	0
汽水生種					0	0
淡水～汽水生種					1	0
淡水生種					18	16
珪藻化石総数					19	16

凡例

塩分:塩分濃度に対する適応性
- Euh　:海水生種
- Euh-Meh:海水生種-汽水生種
- Meh　:汽水生種
- Ogh-Meh:淡水生種-汽水生種
- Ogh-hil:貧塩好塩性種
- Ogh-ind:貧塩不定性種
- Ogh-hob:貧塩嫌塩性種
- Ogh-unk:貧塩不明種

pH:水素イオン濃度に対する適応性
- al-bi:真アルカリ性種
- al-il:好アルカリ性種
- ind　:pH不定性種
- ac-il:好酸性種
- ac-bi:真酸性種
- unk　:pH不明種

流水:流水に対する適応性
- l-bi:真止水性種
- l-ph:好止水性種
- ind :流水不定性種
- r-ph:好流水性種
- r-bi:真流水性種
- unk :流水不明種

環境指標種
- A:外洋指標種　B:内湾指標種　C1:海水藻場指標種　C2:汽水藻場指標種
- D1:海水砂質干潟指標種　D2:汽水砂質干潟指標種
- E1:海水泥質干潟指標種　E2:汽水泥質干潟指標種　F:淡水底生種群(以上は小杉,1988)
- G:淡水浮遊生種群　H:河口浮遊性種群　J:上流性河川指標種　K:中～下流性河川指標種
- L:最下流性河川指標種群　M:湖沼浮遊性種　N:湖沼沼沢湿地指標種　O:沼沢湿地付着生種
- P:高層湿原指標種群　Q:陸域指標種群(以上は安藤,1990)
- S:好汚濁性種　U:広適応性種　T:好清水性種(以上はAsai and Watanabe,1995)
- R:陸生珪藻(RA:A群, RB:B群, RI:未区分、伊藤・堀内,1991)

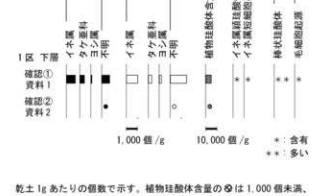
試料１からは、19 個体産出した。保存状態は、壊れた殻が多く不良である。産出した分類群は、淡水生種を主として、淡水～汽水生種を伴う種群で構成される。産出した種は、淡水生種で流水性種の Gomphonema clevei、流水不定性種の Gyrosigma acuminatum 等である。

第 21 表　植物珪酸体含量

（個/g）

分類群	1区 下層 確認1 試料1	確認2 試料2
イネ科葉部短細胞珪酸体		
イネ属	800	－
タケ亜科	400	－
ヨシ属	100	－
不明	700	<100
イネ科葉身機動細胞珪酸体		
イネ属	1,000	－
タケ亜科	300	－
ヨシ属	200	－
不明	1,500	<100
合　計		
イネ科葉部短細胞珪酸体	2,000	<100
イネ科葉身機動細胞珪酸体	3,000	<100
植物珪酸体含量	5,000	<100
珪化組織片		
イネ属穎珪酸体	＊	－
イネ属短細胞列	＊	－
イネ科起源（その他）		
棒状珪酸体	＊＊	－
毛細胞起源	＊	－

含量は、10の位で丸めている（100単位にする）
合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている
<100：100個/g未満
－：未検出，＊：含有，＊＊：多い



乾土 1g あたりの個数で示す。植物珪酸体含量の⊗は 1,000 個未満、他の●○は 100 個未満を定性的に示す。

第 55 図　植物珪酸体含量

試料２からは、16 個体産出した。保存状態は、壊れた殻が多く不良である。産出した分類群は、淡水生種のみで構成される。産出した種は、淡水生種で流水性種の Cymbella turgidula、流水不定性種の Encyonema silesiacum 等である。

⑤植物珪酸体分析

結果を第 21 表、第 55 図に示す。試料１からは概ね保存状態の良い植物珪酸体が検出される。ただし、植物珪酸体含量や検出される分類群数は少ない。この中では、栽培植物であるイネ属の産出が目立ち、葉部に形成される短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体と共に、珪化組織片として穎珪酸体や短細胞列も見られる。次いでタケ亜科が多く、ヨシ属なども見られる。

一方、試料２からは保存状態が悪いものが僅かに認められるに過ぎない。この中では、分類が明確にならない不明が見られる程度である。

（4）考察

①骨・貝同定

本分析で確認された種類は貝類・魚類を主体的とし、微量ではあるが爬虫類、鳥類、哺乳類の骨が検出された。

貝類は内湾砂底性のハマグリやアサリ、汽水性のヤマトシジミ、内湾泥底性のアカガイ、僅かではあるが外海岩礁性のサザエやアワビ類の破片が含まれる。被熱した貝類は僅かであるため調理に伴うものか否かは不明である。また松坂城下町遺跡（第１～９次報告書（森川（編）ほか，2021）の伊勢湾沿岸の主な貝出土例と比較するとアカニシやマガキが検出されていないという特徴を示す。

遺構別の最小個体数結果をみると、ハマグリ、ヤマトシジミ、アサリが多い。これらの種を遺構別に観ると、ＳＫ 51002 ではハマグリが、ＳＫ 51005 ではハマグリ、アサリが、ＳＫ 51051 でヤマトシジミが多い。

また殻長・殻高の計測結果やヒストグラムをみると、各貝種ばらつきが少なく極端に小さいものや大きいものがみられない。個体の大きさを基準とした選択的な採取、流通の可能性が考えられる。

魚類については、温暖な海域に生息する魚類（サヨリ科、ボラ科、カマス科、スズキ科、アジ科、タ

イ科、ベラ科、サバ科、フサカサゴ科、コチ科、ヒラメ科、カレイ科等）が多く検出される。一方でタラ科など寒冷な海域に生息する魚類も一定量検出される。

爬虫類についてはＳＫ51041からスッポンが確認され、食用とされた可能性がある。

鳥類、哺乳類については種類が不明なものが大半であるが、スズメ目、キジ科、ニワトリ、ネズミ、キツネが確認された。これらについては食用にしたものか、遺構内に混入したものか不明である。

以上のように本分析では特に貝類・魚類について当時の動物質食料の情報が多く得られた。貝類についてはハマグリ、ヤマトシジミ、アサリといった沿岸部で採取される種類が主体の組成が確認された。魚類については、多様な組成を示し、外洋に棲息するカツオや、寒冷な外洋に棲息するタラ科も確認され、食料の流通に関わる情報として有用なものと考えられる。

②樹種同定

出土した器種のうち、井戸枠は全てヒノキであった。ヒノキは、暖かい地域の山地に生育する常緑高木で、木材は木理が通直で割裂性と耐水性が高く、加工も容易な良材である。また、巨木になるため、太くまっすぐな材が得やすい。このことから、建築材、施設材、器具材として多用される。出土木製品用材データベース（伊東・山田,2012）をみると、井戸材にヒノキを用いる例は全国的に多い。耐水性がよく、大型の部材が得やすいことから、用材として適しているためと思われる。県内の近世遺跡では、桑名城下町遺跡等で、ヒノキの木材が多く用いられている（植田,2002）。また、幕藩体制が確立した近世においては、資源の枯渇を防ぐために有用材の保護や植林を積極的に行っていたと考えられており(Totman,1989)、ヒノキの木材は都市部を中心に多く流通していたと思われる。

杭はほとんどがマツ属複維管束亜属である。マツ属複維管束亜属は痩地でも生育が可能で、植生破壊が進んだ場所に先駆的に侵入して二次林を構成する。また、成長が早く、樹形も美しいことから植林されることも多い。このように、人里近くでは身近な樹木である。木材は強度があり、油分が多く水湿に強いため、建築材や土木材として利用されることが多い。モミ属は土地条件が悪い場所でも生育可能である。材は針葉樹材の中ではやや軽軟で切削やその他加工は容易であり、割裂性も大きい。用途は主に建築材、建具材、家具・器具材、土木材、薪炭材などである。マツは油分が多く水湿に強いため、土木材としても適しており、多用されたと思われる。

以上のように本分析調査では、井戸枠材はヒノキ、杭はマツ属複維管束亜属を中心とした同定結果が得られた。用途に応じた木材の利用を示す結果といえる。

③花粉分析

１区下層より採取された試料２では、花粉化石はほとんど検出されず、古植生推定のための定量解析を行うことができなかった。花粉化石・シダ類胞子の産出状況が悪い場合、元々取り込まれる花粉量が少なかった、あるいは、取り込まれた花粉が消失した、という２つの可能性があげられる。試料２は砂混じりの粘土質シルトであるが、後述する試料１と比較するとより砂質である。また、一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている（中村,1967、徳永・山内,1971、三宅・中越,1998など）。わずかに検出される花粉化石の保存状態が悪いことも考慮すると、堆積時に花粉化石が取り込まれにくかったこと、取り込まれた花粉が経年変化により分解・消失したことの、両方であった可能性が高い。なお、わずかにブナ属、コナラ属コナラ亜属、クリ属などの木本類が確認された。本地点は安濃川と岩田川に挟まれた三角州に立地することから、検出された種類はこれらの河川の集水域に分布していた可能性がある。一方、試料１では、試料２と比較すると検出される花粉化石の種類数、個体数が多くなる。それでも定量解析を行うまでの個体数は得られなかった。得られた種類について見ると、木本類では常緑広葉樹のコナラ属アカガシ亜属が多く、モミ属、ツガ属、マツ属、スギ属などの針葉樹、コナラ亜属などの落葉広葉樹が認められる。アカガシ亜属は暖温帯性常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の主要構成要素であり、モミ属、ツガ属、スギ属などの温帯針葉樹とと

もに本地域の低地や微高地などに一般的である。コナラ亜属は里山林などにも見られるが、河川沿いなどにも生育し、クルミ属、エノキ属―ムクノキ属なども河川沿いに生育する種を含む。マツ属は二次林や植林として江戸時代には全国的に増加していることが知られており、ブナ属はより標高の高い場所に生育する。よって、これらの木本類は、安濃川や岩田川などの周辺河川沿い、集水域の低地部や微高地、調査地点西側に広がる山地部など、広域の植生を反映している可能性がある。草本類ではイネ科が最も多く、サナエタデ節―ウナギツカミ節、ヨモギ属などが認められる。これらは開けた明るい場所に生育する「人里植物」を多く含む分類群であることから、屋敷内やその周囲の草地などに生育していた可能性がある。

④珪藻分析

試料１および試料２は、産出した種に多少の差異はあるものの、ほぼ同様の傾向を示す。

試料１および試料２から産出した種の生態性について述べると、流水性種の Cymbella turgidula は中～下流性河川指標種群（安藤，1990）と呼ばれ、河川沿いの河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形がみられる部分に集中して出現するとされる。Gomphonema clevei は、河川に優占的に出現する着床種とされる（Hustedt,1938）。淡水生種で流水不定性種の Gyrosigma acuminatum は、淡水生で塩分不定、好アルカリ性、流水不定とされるが、淡水では淀んだ止水域や汽水域からも見出される種である。流水不定性種の Encyonema silesiacum は、沼沢地から湿地等の水域に広く生育する種である。

本２試料は、珪藻化石の産出数が少ないため、珪藻化石の生態性や群集の生育特性による、詳細な検討を行うことは差し控えたいが、若干の考察を行うと次のように考えられる。

本２試料からは、流水不定性種が多いものの、好止水性種、流水不明種および陸生珪藻を伴うほか、低率ながら好流水性種も認められ、分類群の生態性にはばらつきがある。これは、明らかに混合群集である。

淡水生種群の混合群集とは、基本的に生育環境を異にする種群で構成され、また、検出種数が多い群集とされ（堆積物中からの産出率は低い割に構成種数は多い）、流れ込み等による二次化石種群を多く含む群集とされる（堀内ほか，1996）。混合群集は、一般には低地部の氾濫堆積物などの一過性堆積物で認められる場合が多いが、この場合は検出率が低い傾向にある。他方、一過性ではなく定常的に堆積物が供給されるような場所の場合、例えば河口付近や湿地等において同様な環境が長期間続いた場合も混合群集が認められるが、この場合は長い間に徐々に堆積して行く中で珪藻の生産が繰り返し行われること、堆積物の表層部付近での自然の攪乱が行われること、多少の流れ込みもあることなどから検出率はやや高い傾向にある。いずれにしても、混合群集の場合は珪藻の群集のみならず堆積層の観察も含めた慎重な解析が必要となる。

本２試料の場合は、堆積物中の絶対量自体が少ないことから、低地部における氾濫堆積物などの一過性の堆積物で認められるタイプである。低地の氾濫堆積物等は、水域に定着するとは限らず、むしろ水域外が多い。その場合、好気的な環境であるために、珪藻殻の分解が促進され、堆積物中に残る個体も珪酸沈着の厚いものに限られるため、絶対量は下がる。分析試料の堆積環境も、低地部における好気的な状況下にあった可能性が考えられる。

⑤植物珪酸体

１区下層の試料のうち、試料１ではイネ属の産出が目立ち、葉部に形成される短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体と共に、珪化組織片として穎珪酸体や短細胞列も見られた。この産状を見る限り、試料１地点付近が形成された頃にはイネ属の植物体の存在がうかがえる。イネ属は、稲作地での生育により土壌中に植物珪酸体や珪化組織片が混入するが、コメの収穫後の植物体が生活資材に利用されることも多い。試料１でのイネ属の存在については現段階では理由が明確にならないが、今後さらに調査地点の遺構の分布や微地形など発掘調査所見を含めて検討することが望まれる。

この他の分類群にはタケ亜科やヨシ属なども見られ、これらイネ科の生育も想定される。ヨシ属は湿潤な場所に生育する種類であることから、調査地の周辺に水の影響があったことがうかがえる。ただし、

草地に生育するススキ属やその仲間（チガヤなど）は認められず、今回の結果を見る限り、その生育の有無を判断することは難しい。

一方、試料２では保存状態が悪いものが僅かに認められるに過ぎなかった。

以上、③から⑤において堆積環境および周辺植生、植物利用について述べた。

珪藻分析の「混合群集を示す組成」、「絶対量自体が少ない」という結果から、本試料が採取された堆積物は低地の微高地など、好気的環境に堆積した、一過性の氾濫堆積物の可能性があることを示した。花粉分析では検出された量が少ないが、これは上述の堆積環境に起因するものと考えられる。木本類は広域な植生を反映している可能性が高い。また、マツ属は遺跡の時代性とも矛盾しない結果といえる。草本類は「人里」植物を多く含み、屋敷および周辺の植生を示していると考えられる。

植物珪酸体分析では湿潤な場所に生育するヨシ属が検出され、調査地周辺における低地の植生を示すものと考えられる。植物利用の面では少量のイネ属が検出されているが、調査地周辺から混入したものと考えられ、遺跡周辺において稲作が営まれていた可能性を示す結果といえる。また、試料２では植物珪酸体がほとんど確認されなかった。上述の堆積環境に起因する可能性があるが、試料採取地点や堆積物の層序などの発掘調査所見を含め検討する必要がある。

（田中義文・金井慎司・谷藤明智・馬場健司・井上智仁・東澤翔　パリノ・サーヴェイ株式会社）

引用文献

安藤一男，1990，淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42，73-88p.

Asai, K. and Watanabe, T.，1995，Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom，10，35 － 47．林　昭三，1991，日本産木材顕微鏡写真集，京都大学木質科学研究所．

Desikachary, T. V.，1987，Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation，1-13，Plates，401-621p.

林　昭三，1991，日本産木材顕微鏡写真集，京都大学木質科学研究所

堀内誠示・高橋　敦・橋本真紀夫，1996，珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について－混合群集の認定と堆積環境の解釈－．日本文化財科学会，第13回大会研究発表要旨集，62p.

Hustedt, F.，1930，Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz, under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 1, 920p.

Hustedt, F.，1937-1938，Systematische unt okologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. Ⅰ～Ⅲ．Arch. Hydrobiol. Suppl.，15，131-809p，1-155p，274-349p.

Hustedt, F.，1959，Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2, 845p.

Hustedt,F.，1961-1966，Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres-gebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 3, 816p.

伊東隆夫，1995，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ．木材研究・資料，31，京都大学木質科学研究所，81-181p.

伊東隆夫，1996，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ．木材研究・資料，32，京都大学木質科学研究所．66-176p.

伊東隆夫，1997，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ．木材研究・資料，33，京都大学木質科学研究所，83-201p.

伊東隆夫，1998，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ．木材研究・資料，34，京都大学木質科学研究所，30-166p.

伊東隆夫，1999，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ．木材研究・資料，35，京都大学木質科学研究所，47-216p.

伊東隆夫・山田昌久（編），2012，木の考古学　出土木製品用材データベース，海青社，449p.

伊藤良永・堀内誠示，1991，陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．日本珪藻学誌，6，23-44p.

近藤錬三，2010，プラント・オパール図譜，北海道大学出版会，387p.

小杉正人，1988，珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，1-20p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1985, Naviculaceae. Bibliothyca Diatomologica, 9, 250p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1986, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2(1): 876p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1988, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(2): 596p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1990, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(3): 576p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1991, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2(4): 437p.

Lange-Bertalot, H., Witowski, A., and Metzeltin, D., 2000, ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA Annotated diatom micrographs. Diatom Flora of Marine Coasts. 1, 925p.

松井章，2008，動物考古学．京都大学学術出版会．

三宅　尚・中越信和，1998，森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態．植生史研究，6，15-30p.

三好教夫・藤木利之・木村裕子，2011，日本産花粉図鑑，北海道大学出版会，824p.

森川常厚（編）・櫻井拓馬・水谷侃司・渡辺和仁，2021，松坂城下町遺跡（第１～９次）発掘調査報告，三重県埋蔵文化財センター，365-382p

中村純，1967，花粉分析，古今書院，232p.

中村純，1980，日本産花粉の標徴Ⅰ・Ⅱ（図版）．大阪市立自然史博物館収蔵資料目録　第12，13，91p.

奥谷喬司，2001，日本近海産貝類図鑑，東海大学出版会．

Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E.（編），2006，針葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト．伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘（日本語版監修），海青社，70p.［Richter H. G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P. E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］.

島地　謙・伊東隆夫，1982，図説木材組織．地球社，176p.

島倉巳三郎，1973，日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録　第５集，60p.

徳永重元・山内輝子，1971，花粉・胞子．化石の研究法，共立出版株式会社，50-73p.

Totman C., 1989, The Green Archipelago: Forestry in Pre-Industrial Japan. University of California Press, 320p.

植田弥生，2002，Ⅳ面墓出土木製品の樹種同定．桑名城下町遺跡発掘調査報告書　萱町93（法盛寺）地点，桑名市教育委員会，46-56p.

Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E.（編），1998，広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト．伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修），海青社，122p.［Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.

３．貝同定結果（補遺）

（１）試料

試料は、調査当時に近代の攪乱としていた遺構から出土した貝類であるが、１区 FG14 グリッド付近で出土したものは、陶磁器の様相から江戸時代の遺物の可能性がある。このため、遺構単位で種を特定し、前述の分析結果と照応することとした。

（２）分析方法

肉眼で観察し、形態的特徴から種・部位を特定する。試料の性格上、同定した貝の最小個体数や総重量は算出しなかった。同定は、中野環が行った。

なお、同定に関しては、奥谷編（2017）、日本付着生物学会編（2017）を参考にした。

（３）結果

同定結果を第22表に示す。

F14 グリッド包含層ではサザエ、ハマグリ、ヤマトシジミ、ＳＫ 51003 およびＳＫ 51083 からサザエ、メガイアワビ、アサリ、ハマグリを検出した。メガイアワビは数個体で、大きいものは殻長 151 ㎜＋α、殻幅 133 ㎜＋α であった。G14 グリッドの SK51006 からアカニシ、サザエ、アサリを検出した。アカニシは１個体のみで、厚質で小型（殻長 71 ㎜＋α、殻幅 53 ㎜＋α）であった。アサリおよびハマグリは数点と少なかった。113 グリッドの SK51079 では、サザエの軸唇部分４個体分、アワビ類、ハマグリを

数点検出した。K12 グリッド攪乱からはサザエ、ボウシュウボラ（殻長 133 mm＋α、殻幅 74 mm＋α）、クロアワビ、アワビ類、サルボウ、カガミガイ、ハマグリ属の一種、マガキ、シオフキ、イタヤガイ右殻（殻長 87 mm、殻高 79 mm）を検出した。イタヤガイは後縁付近に穴が開けられビスが通されていた。マガキは約 40 個体で、最大個体は殻長 55 mm、殻幅 35 mmであった。多くの個体では、マガキの右殻に形成される檜皮葺状の殻皮層は侵蝕されて不明瞭であった。殻長 30 mm程の小型個体の中には、左殻の一部で基質に固着した個体を確認したが、基質に付着する左殻の付着面は湾曲し、基質に全面で固着していた個体が多くみられた。固着部分に基質表面の形状痕が認識できる個体、他の貝殻が付着する個体、サンカクフジツボを抱き込むように成長した個体などを確認した。

（4）考察

貝類はハマグリ、アサリ、シオフキ、カガミガイなどの内湾の砂泥底に生息する種、汽水域に生息するヤマトシジミを僅かに含んでいた。一方で外海の岩礁域に生息するサザエ、メガイアワビ、クロアワビ、ボウシュウボラなども個体数は少ないが含まれるという特徴を示す。アカニシは内湾の干潟、マガキは塩分濃度の低い河口域に生息するが、外海に面した地域にも生息する。K12 グリッドの攪乱から検出した多くのマガキは、殻表の檜皮状の葉片が発達せず浸蝕されていること、外洋の影響を受ける海域に生息するサンカクフジツボを抱き込むように成長した個体がみられたことから、熊野灘沿岸地域の内湾や河口域などで潮位変化の影響を受けやすい潮間帯に生息していた個体の可能性が考えられる。また、マガキは左殻頂部で固着することが多いが、広い基質に定着すると低平となり左殻全面で固着することが知られる（稲葉，2003）。本分析で確認した個体の多くで、左殻の付着面が湾曲していること、固着面に他の貝の剥離片が付着していたことから、複数の個体が積み重なるように生息している個体や、凹凸のある岩礁ではなく転石など表面が滑らかな基質に固着していた個体など、比較的採取しやすい個体を選択的に採取した可能性が考えられる。今後、食料の調達地域や採取方法を検討する上で有用な情報と言える。（中野）

第 22 表　貝類同定結果（補遺）

グリッド	遺構・層位	種名	備考
F14	SK51003・SK51083	サザエ メガイアワビ アサリ ハマグリ	
G14	SK51006 上層	アカニシ サザエ アサリ	
I13	SK51079	サザエ アワビ ハマグリ	
K12	攪乱	サザエ（殻・蓋） ボウシュウボラ クロアワビ メガイアワビ? サルボウ カガミガイ ハマグリ? マガキ シオフキ イタヤガイ	イタヤガイはビス痕あり（貝杓子）
F14	包含層	サザエ ハマグリ ヤマトシジミ	

引用文献

稲葉明彦，2003．世界のカキ（1）総論．西宮市貝類館研究報告 2，西宮市貝類館．

奥谷喬司編著，2017．日本近海産貝類図鑑　第二版，東海大学出版部．

日本付着生物学会編，2017．新・付着生物研究法　－主要な付着生物の種類査定－，厚星社厚生閣．

4．木製品の樹種同定（補遺）

（株）吉田生物研究所

（1）試料

試料は津城跡（第 5 次）から出土した木製品 3 点である。

（2）観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。遺物 650（器種：桶側板）は側板 10 枚のうち、指定された 3 枚の樹種同定を行った。なお遺物の状態により、採取可能箇所が極めて少なかった為、

650-4 は木口の採取が出来なかった。

（3）結果

樹種同定結果の表（第 23 表）と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1）マツ科マツ属［二葉松類］（Pinus sp.）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。大型の垂直樹脂道が細胞間隙としてみられる。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔は窓型である。上下両端の放射仮道管内は内腔に向かって鋸歯状に著しくかつ不規則に突出している。板目では放射組織は単列で１～ 15 細胞高のものと、水平樹脂道を含んだ紡錘形のものがある。マツ属［二葉松類］はクロマツ、アカマツがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。

2）スギ科スギ属スギ（Cryptomeria japonica D.Don）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で１分野に１～３個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

（汐見真（株）吉田生物研究所）

第 23 表　樹種同定結果（補遺）

遺物番号	名称	樹種
650-1	手桶把手	スギ科スギ属スギ
650-2	手桶側板	スギ科スギ属スギ
650-3		スギ科スギ属スギ
650-4		スギ科スギ属スギ
202	杭（捨杭）	マツ科マツ属［二葉松類］

引用文献

林　昭三，1991，日本産木材顕微鏡写真集，京都大学木質科学研究所．

伊東隆夫，1999，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ，京都大学木質科学研究所．

島地　謙・伊東隆夫，1988，日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣出版．

北村四郎・村田　源，1979，原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ，保育社．

奈良国立文化財研究所，1985，奈良国立文化財研究所　史料第 27 冊　木器集成図録　近畿古代篇．

奈良国立文化財研究所，1993，奈良国立文化財研究所　史料第 36 冊　木器集成図録　近畿原始篇．

Ⅵ 総 括

1．遺跡形成過程と古環境

（1）津城跡の立地と地形環境

調査の結果、近世遺構の基盤である基本層序Ⅳ層が津城修築時の整地層であり、基本層序Ⅴ層以下が自然堆積であると判断した。5次1区における土壌の分析結果から、Ⅴ層は低地の微高地（自然堤防など）に流入した堆積物の可能性が示唆され、基盤層が浜堤であることを示唆する植物珪酸体も検出されなかった（Ⅴ章）。また、建設工事のボーリングデータからも、浜堤の存在を積極的に支持するようなデータは得られていない（Ⅲ章）。こうした所見は、津城の北外堀が、安濃川の流路（分流）を改修したとする伝承（「洞津遺聞」）とも調和的である。

下層の土層観察を実施した場所は限られており、今後も下層確認による旧地形の検討は必須である。

（2）津城築城前の遺物

5次調査では、中世以前の遺構は検出されなかったが、近世の遺構などから弥生時代終末期から古墳時代の土師器・須恵器、古代の土師器、中世の山茶碗、中国銭などが出土した。これまであまり注目されていないが、過去の調査でも古墳時代の土師器等が出土しており、城内の丸之内本町遺跡は弥生時代の遺物散布地である。弥生時代から古代の遺跡が津城跡の範囲内に存在した可能性は高い。Ⅱ章でみたように、藤潟北側の浜堤や自然堤防上には、弥生時代から古代の集落が複数存在したと考えられる。

この他に、16世紀後半代の常滑甕（877）や瀬戸美濃大窯4～登窯第1小期の擂鉢（878）、基本層序Ⅳ層下で出土した瓦（874）など、高虎修築前の津城（安濃津城）に関わる、あるいはその可能性がある遺物の出土も、注目すべき成果である。

2．津城跡の遺構と変遷

（1）津城の北外堀と土塁

5次調査では、津城跡復元図の外堀付近に調査が及んだが、外堀の位置を確定することはできなかった。樋田清砂氏の復元図（第5図、9頁）では、工事立会①－3・4区、工事立会③は外堀内にあたるが、明治の地形図では、堀はやや北寄りにある（第59図）。工事立会⑥では近世の整地層（基本層序Ⅳ層）が良好に残っており、外堀は工事立会⑥よりもやや北側に位置すると考えられる（Ⅲ章）。

絵図によると、堀沿いに土塁や道が存在したが、調査区内で土塁や道の痕跡は確認できなかった。

（2）ＳＤ54001 地業の位置づけ

1区ＳＤ54001は箱溝状の布地業と捨杭で、江戸遺跡の事例から、土蔵造の基礎地業と考えられる[1]。

ＳＤ54001布地業は、長辺約11.5ｍ、短辺約6.0ｍで、18世紀後葉から19世紀前葉が土蔵建築年代の上限となろう。捨杭は1.3～1.5ｍ間隔（平均1.35ｍ）で配置されるが、この捨杭の配置と上屋の柱配置がよく対応する例として、松坂城下の旧長谷川家住宅西蔵[2]を挙げておく（第56図）。同西蔵は、桁行4間（9.0ｍ）、梁行2間（4.5ｍ）で、半間（約1.13ｍ）ごとに柱を配置した桟瓦葺切妻造の土蔵である（第56図）。ＳＤ51004は、これよりもわずかに柱間寸法が長い、桁行4間、梁行2間の切妻造の土蔵と推測され、桁・梁行の比も一致する。

捨杭は残存長約2.0ｍ、直径11～16㎝（年輪数22～47年、平均32年）の樹皮付きのマツ属で、Ｎ値が10以上となる深さ（Ⅲ章ボーリングデータ）まで打ち込まれていた。県内では、上野城下町遺跡に土坑状の基礎地業の捨杭の例があり[3]、今回比較対象として捨杭の樹種を同定したところ、これもマツ属であった（Ⅴ章）。

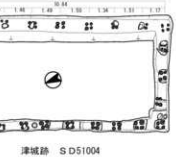
マツ属は水湿に強く、江戸遺跡でも捨杭などの土木材に多用される[4]。また成長が早く遺跡周辺の丘陵の二次林や海岸に分布するため、比較的容易に入手できる樹種であるが、樹齢の割に捨杭の木理は真っ直ぐであることから、植林によって得られた木材の可能性があろう。

ＳＤ54001は津城跡では数少ない建物関連の遺構であるとともに、当時の土木技術や森林資源の利用を考えるうえで重要である。

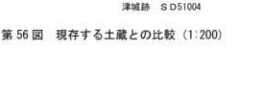
（3）穴蔵が存在した可能性

１区ＳＫ51078は、一辺5.1ｍの大型方形土坑である。他の土坑とは様相が異なり、塵芥処理坑のように遺物が大量に出土することもなかった。当初は近代の攪乱と認識していたため、土層や出土遺物の記録がなく、推測の域を出ないが、江戸遺跡の例から穴蔵の可能性を考えておきたい。

穴蔵は火災時に家財を退避させる地下施設で、江戸では明暦大火（1657年）後、特に18世紀以降、多用され、水が染み出るような低地でも木組みを設けて築かれた。伊勢商人の長谷川家や三井家など江戸日本橋の木綿商も建物の内外に多数の穴蔵を有しており、三井本店では土蔵に接して一辺２間～２間半（約3.6～4.5ｍ）の穴蔵が複数設置されていた。江戸低地の穴蔵は、針葉樹の側板・底板・天井板や梁を釘や鎹で固定し、水漏れ防止のため目地に槇肌や石粉が詰められた。「守貞漫稿」は江戸と京坂の差を記し、京坂は切石で作るという[33]。



旧長谷川家住宅西蔵　梁間断面図



旧長谷川家住宅西蔵　桁行断面図

津城跡　ＳＤ51004

第56図　現存する土蔵との比較（1:200）

旧伊勢国では、松坂城下の旧長谷川家住宅内蔵（享保20年（1735）～江戸時代後期の造営）内にあった長辺９尺、短辺６尺、深さ７尺の「穴倉」を、明治34年（1901）に埋めたという（「永覚帳」）[34]。穴蔵が伊勢商人の国元で、土蔵と併用されていたことは重要で、江戸の技術が移転された可能性は高い。

ＳＫ51078は、側板等を抜き取って破却された穴蔵の可能性があり、今後の津城跡や旧伊勢国内の類例増加を待ちたい。

（4）水琴窟と井戸

水琴窟　１区ＳＫ51001、ＳＫ51029は常滑赤物の甕を用いた水琴窟とみられ、ＳＫ51067も蹲踞の可能性がある。付近は坪庭や露地（茶庭）であったことが判明する。水琴窟は文化・文政頃から普及したとされ、津城跡でも19世紀前半の例が確認された。

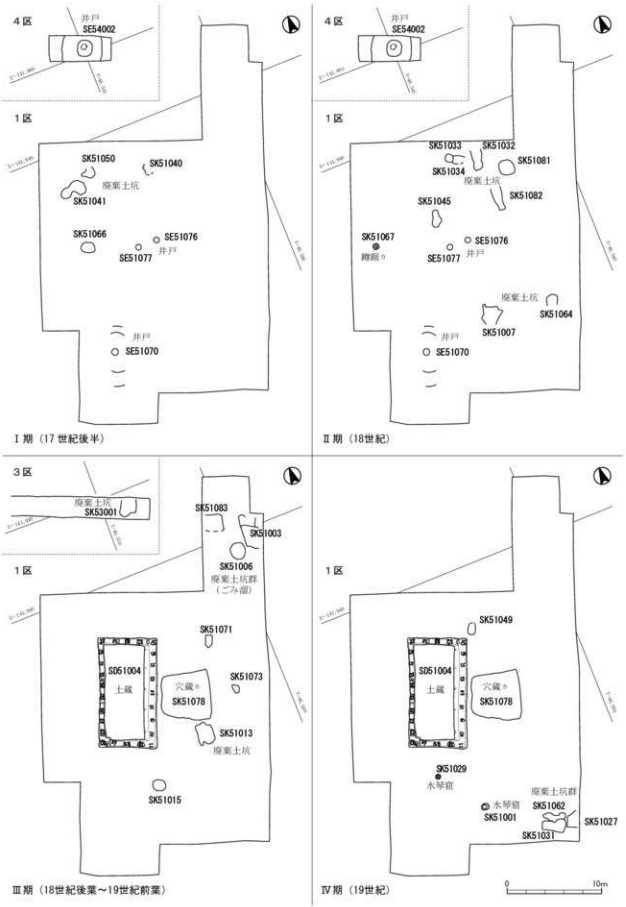
井戸　今回確認された井戸は、いずれも結物を二段程度積み上げるもので、中世以来存続する、低地の軟弱地盤に適した井戸形式が採用されていた。容器の桶を転用したものは確認できず、井戸枠用の結筒を二段以上組み合わせ、地上に陶製井戸枠を据えたとみられる。なお、近世の上水道に関する遺構は確認できなかった。堀に囲まれた城内では、上水は井戸に頼る必要があったと考えられる。

（5）屋敷地内の遺構配置と変遷

当地は、貞享４（1687）～元禄16年（1703）の間に居住者が変わっているが、高虎入城後、江戸時代を通じて屋敷地の地割自体は変わらない。近世の遺構は、出土遺物や切り合い関係をもとに、大きく４期に分けて遺構の変遷を示す（第57図）。なお、屋敷地内は内堀側を表側、外堀側を裏側として扱う。

Ⅰ期（17世紀後半）　４区ＳＥ54002、１区北西の小土坑のほか、遺構の切り合いから、ＳＥ51070、ＳＥ51076・51077もこの時期に遡る可能性がある。17世紀代に構築され、18世紀まで使用された井戸が、屋敷地の裏側に配置されたとみられる。

津城が修築された慶長期から、城絵図のある寛永期頃の遺構は検出されていない。また寛文２年（1662）の大火に関わる焼土層や被熱した遺物など



第 57 図　遺構の変遷（1:400）

も確認できなかった。しかしながら、17 世紀後半に井戸の掘削がなされている点は注意を要する。貞享4（1687）～元禄 16 年（1703）の屋敷替えに伴い、屋敷の改修や再編が行われた可能性があろう。

Ⅱ期（18 世紀） この時期の遺構は、比較的短期間に埋没した、ＳＫ 51081 などの小規模な塵芥の廃棄土坑である。Ⅰ期の井戸は、井戸上層出土遺物から、引き続き機能していたと推測される。この時期は遺構の数、遺物の量とも比較的少ない。ＳＫ 51067 は 溝跡の下部構造ないし浸透桝で、付近は坪庭や露地であった可能性がある。

18 世紀初頭には宝永地震が発生したが、宝永地震の痕跡は不明である。

Ⅲ期（18 世紀後葉～ 19 世紀前葉） 土蔵の基礎地業ＳＤ 51004 や、１区北東の土坑群、３区ＳＫ 53001 などが主要な遺構で、屋敷地の北側（裏手）に土蔵が建つなど、今回の調査成果の中心をなす時期である。時期や性格が不詳であるが、ＳＫ 51078（穴蔵ヵ）は、遺構の切り合いからこの時期以降のものと仮定しておく。

この時期の遺構は遺物量が多く、土坑には陶磁器のほか大量の瓦が廃棄され、瓦葺き建物の改修や破却・更新などの普請が多かったことがうかがえる。

当該期の遺構の消長を考える上で、参考になるのが文政２年（1819）６月 12 日の大地震（伊勢・美濃・近江、Ｍ 7.25）である。この地震は、宝永地震以来の大地震といわれ、神戸城の高塀が倒壊、津城下では寒松院、八幡町や蔵町（大門）の町屋が傾くなど、伊勢国各地に甚大な被害をもたらした[7]。津城内の被害に関する史料は確認できていないが、この地震を契機に、屋敷地内で塵芥処理や土蔵の更新などの普請が盛んになされた可能性があろう。

Ⅳ期（19 世紀） １区の水琴窟（ＳＫ 51001、ＳＫ 51029）、１区南東の土坑群などがこの時期の遺構で、他にⅢ期の土蔵も引き続き存在したとみられる。遺構・遺物の量は比較的少ない。水琴窟の存在から、付近に坪庭や露地が配されたと考えられる。

なお、安政地震に関連する遺構は確認できない。

まとめ 各期を通じた屋敷地全体の遺構配置についてまとめると、屋敷地表側は情報が少ないが、根石のあるピット（５区）、竈ヵ（ＳＦ 57001）など住居に関わる遺構があり、裏側（１区）は土蔵、塵芥処理坑、水琴窟、井戸、穴蔵ヵなどがみられるが、便所（便槽）はない。屋敷裏側は露地（茶庭）や土蔵、ごみ溜などが配置されていたとみられる。

１区（藤堂伊織屋敷）を中心とした屋敷地裏側の遺構変遷は、Ⅲ期に大きな画期があり、井戸の廃絶や土蔵の普請、瓦の大量廃棄など、屋敷地内で建物等の再編が生じたと推測される。また、Ⅰ期の遺構の一部は、貞享４（1687）～元禄 16 年（1703）の屋敷替えに対応する可能性がある。

３．津城跡の遺物様相

（１）土器・陶磁器組成

土器は在地の南伊勢系・中北勢系土師器と瓦質土器、陶磁器は肥前、瀬戸・美濃、常滑を中心に、京都・信楽（伊賀含む）も一定量を占める。他に堺・明石、丹波、備前産が散見される。

５次調査では、18 世紀後葉から 19 世紀前葉の遺物が多い。当該期の遺物には、伊賀・信楽の鍋や土瓶が多く含まれるが、小片となると瀬戸・美濃系陶器との区別に迷うものが多い。また、京焼風陶器は産地を特定できないものが多数あり、今回は陶磁器の点数で組成比を提示することは控えた。代わりに、土器・陶磁器の様相と変遷の概略を述べる。

①17 世紀後半から 18 世紀前半 ＳＥ 54002、ＳＫ 51040、51041 などがある。土器は瓦質焙烙を含まない。肥前陶器は京焼風陶器碗・鉢・甕、内野山北窯Ⅰ、Ⅲ期の製品がある。磁器は肥前Ⅱ～Ⅳ期前半の碗・皿などで、くらわんか手の碗皿など粗製品は少ない印象を受ける。瀬戸・美濃系陶器は登窯第１～２段階の皿や天目茶碗、鉄絵鉢などがみられる。

②18 世紀後半から 19 世紀前葉 ＳＫ 51013、51071、53001 などが主体で、特にＳＫ 53001 出土遺物は瀬戸・美濃の磁器を含まない、18 世紀後葉から 19 世紀前葉の良好な資料である。他にＳＫ 51003、51006、51083 の一部が該当する。

土器は瓦質焙烙が新たに登場し、肥前系磁器は、Ⅳ期後半からⅤ期始めの筒形碗、小丸碗、広東碗や皿のほか、合子や段重がよくみられる。この時期に多い染付青磁はあまり出土していない。瀬戸・美濃

製品は、登窯第9小期以降の磁器端反碗や陶器染付を伴い、肥前磁器・常滑製品ともに植木鉢がみられるようになる。

また、18 世紀後半から新たに京都・信楽系陶器が組成に加わり、特に合子が多くみられる。伊賀・信楽の鍋類はこの頃から組成に加わり、19 世紀にかけて増加した。この他に、安東焼（古安東）や、「伊賀國」印銘の伊賀土瓶（藩御用品）が含まれる。

③19 世紀中葉　この時期の遺物は少ないが、磁器は瀬戸・美濃製品が主体となり、伊賀・信楽の土瓶や鍋類、灯火具などが目立つようになる。

まとめ　5次調査では、18 世紀後半から 19 世紀前葉段階において京都・信楽系陶器が多いという特徴がみられた。これは、松坂城下町遺跡の町人地と比べると顕著である。同じ藤堂藩の上野城跡（第15次）でも、絵付のある京焼風施釉小物が多くみられることから、藤堂藩上級家臣の屋敷地で、京焼系の陶器が特に好んで用いられたとみられる[8]。

器種構成では、陶器・磁器とも、段重や合子などの蓋物の多さが顕著である。肥前系磁器は赤絵、色絵、口縁のある皿・鉢・香炉など上手のものがあり、粗製品は少ない印象である。他に、丹波・備前系陶器、茶の湯にかかる抹茶碗や風炉、信楽の腰白献上茶壺などがあり、上級家臣にふさわしい道具立てを備えていたと評価することができよう。

さらに、藤堂藩御庭焼の安東焼や、「伊賀國」印銘の伊賀土瓶（藩御用品）を有している点は、藤堂藩上級家臣ならではの特色といえよう。

（2）軒桟瓦・軒平瓦の系譜

Ⅱ章でみたように、藩重臣の屋敷では、寛文大火後の 17 世紀後葉には瓦葺建物や高塀が存在したとみられ、ＳＥ 54002 掘方（17 世紀後半）にはやや古様の桟瓦が含まれていた。また、ＳＫ 51031 には被熱した瓦が含まれ、火災があった可能性もある。

Ⅲ章で軒桟瓦・軒平瓦の文様を分類したが、出土瓦の主体は東海系のＣ・Ｄ類で、名古屋城や清須城下町遺跡などに類例があり[9]、尾張・三河系（伊勢山田含む）の瓦と考えられる。Ｅ類は唐草文からＣ・Ｄ類の桝系とみられ、２次調査（内堀）でも同文の瓦が出土したことから、津城ないし津城下独特の文様と推測される。Ｆ類は、現在の南勢地域の民家でみることができ、伊勢山田および宮川周辺の瓦と考えられる。このように、津城跡の軒桟瓦・軒平瓦の多くは伊勢山田も含めた東海系の瓦工人によるものと評価できる。Ｅ類の瓦文様のモチーフ、例えば藤堂家の家紋（蔦紋）との関係や、瓦の年代的変遷は、今後さらに追求していく必要がある。

（3）瓦質焙烙と製作技術

既往の研究では、瓦質焙烙は旧津市とその周辺に分布が限られ、出現は 18 世紀に遡る可能性はあるが、概ね 19 世紀中葉に盛行するとされる[10]。

津城跡で出土した瓦質焙烙は、年代を絞り込めない遺構からの出土が多いが、ＳＫ 53001 は 18 世紀後半から 19 世紀前葉の遺物群である。また、17 世紀から 18 世紀代の遺構は瓦質焙烙を含まない。従って、18 世紀後葉から 19 世紀前葉のなかで瓦質焙烙が普及しはじめたとみられる。

瓦質焙烙の製作技術は、これまで詳しく検討されたことがないが、底部外面から鍔下半にかけて型の圧痕があり、離れ砂（雲母粉）が付着している（写真図版 26-709・721）。底部から鍔を外型で成形し、口縁部を付加して立ち上げ、離型後は底部外面にナデ、ケズリ調整を施さない。これらの特徴から、南伊勢系土師器や中北勢系土師器とは異なる技術系譜にあることを強調しておきたい。畿内の焙烙は、型作りで口縁部を内面に付すものがあり[11]、成形技術は畿内の焙烙に近いが、瓦質の焙烙は近隣諸国に

第 58 図　出土した安東焼と関連資料（1:4）

はない。当地の瓦質焙烙は、畿内の型作り成形と、瓦質土器の焼成技術、中北勢系土師器以来の羽釜形の形態を融合させたものといえ、今後、さらに詳しく技術の系譜を追求していく必要があろう。

（4）出土した安東焼の位置づけ

安東焼の碗 109 は、ろくろ碗と俗称される抹茶碗で、ロクロ成形跡を意匠に取り入れ、内面を白泥で化粧し、内外に強い光沢のある透明釉をかける。これは、櫛書体の「安東」印銘をもつものの、周知の安東焼の伝世品とは著しい違いがある。

安東焼は藤堂藩の御庭焼で、開窯年代は諸説あり、寛保（1741-1744）とも、安永から天明ともいう。窯跡を踏査した鈴木敏雄によると、最初の窯は津市大字長岡字小山田に開かれ（長岡窯）、藩主高豊の代、安永・天明・寛政（1772-1801）にかけて操業、古萬古の沼波弄山の弟子とも弟ともいう陶工瑞牙を招き、藤堂藩御用人の服部十左衛門が絵師となった。次の窯は津市大字観音寺（愛宕山西窯）に開かれ、文化・文政（1804-1831）の頃の活動と推定される。このころまでを「古安東」と称する。

愛宕山西窯廃絶後、岩田橋東南の馬場屋敷に窯は移され、天保 6 年（1835）には活動をみているが、十数年して廃窯された。この地が阿漕浦に近いことから、阿漕焼と称されるようになった[12]。

安東焼は、高知県高知市西弘小路遺跡（高知城内、上・中級武士の居住区）の出土例がある（第 58 図 C）。同遺跡では景徳鎮や鍋島皿、志野・織部など高級品が出土しており[13]、安東焼も諸国の数寄者が求める焼物の一つだったらしい。

安東焼は窯跡出土品がなく、作品の年代的変遷が不明である。伝世品は古萬古に倣った仙盞瓶や赤絵などの色絵に加え、轆轤が強く創作的な器形で南蛮風の焼締素地に直接盛絵の上絵付をするものが知られる。色彩は主に赤と緑で、紫、黄、コバルトなども使われる。印銘は、隷書・櫛書体で「安東」である。

一方で、鈴木敏雄「津付近ニ於ケル安東焼ノ里人談」（大正 12 年）[14] によれば、古安東の「其画ナキモノモ釉薬に宝石ヲ用ヒ焙化シテ流レテ條ヲナシ輝煌妍霊往々人目ヲ奪フモノアリ所ニテ條ノ三或ハ五七等奇数ヲナステ佳トシ其口ニヨリテ気象或ハ涙ナトゝ称シ之ヲ愛玩セリ」といい、釉の輝きや釉垂れを愛でる、別の一群があったことが判明する。碗 109 は、まさにこの特徴をもつ古安東といえよう。他に、ＳＫ 51040 出土の京焼風小碗 474、端反碗 475 も内外を白泥で化粧し、透明釉を厚く掛け、光沢と貫入が著しい。碗 109 と釉調や胎土がよく似ることから、古安東に関連するものと考えておきたい。これら装飾のない碗は、色絵素地の可能性もある。

古安東の祖である小向古萬古窯（三重郡朝日町）の発掘調査でも、伝世品にない京焼風小物の小碗（第 58 図 B）、筒形香炉、灯明皿のほか、鍋、土瓶などの雑器が出土しており、信楽の施釉小物生産の技術的影響があったとされる[15]。

なお、伊賀市丸柱の弥助窯でも碗 109 と同形態のろくろ碗が出土しており[16]（第 58 図 A）、古萬古・古安東ともに京都・信楽系陶器の生産に強い影響を受けたと推察される。

（5）動物遺体からみた食性

動物遺体は、貝類、魚類を主体とし、他に爬虫類、鳥類、哺乳類の骨が検出され、食用価値の高い多種多様な動物を食したことが判明した（Ⅴ章）。

貝類は最小個体数ではハマグリ、ヤマトシジミ、アサリが多く、重量ではアカガイが多い。他に岩礁性のサザエやアワビ類があり、松坂城下町遺跡[17]など伊勢湾沿岸の貝出土例と比べ、アカニシやマガキが少ない。貝は大きさのバラつきが小さく、選別して採取され流通した可能性が考えられる。

魚類は、武家が好むタイ科をはじめ、コチ科、ヒラメ科など温暖な海域に生息する魚類が多く検出されたが、外洋のカツオや、寒冷地のタラ科も確認され、食物の流通に関わる有用な情報を得た。

爬虫類はスッポン、鳥類、哺乳類は種類が不明なものが多いが、キジ科やニワトリがみられた。

なお、「中川藏人政擧日記」には釣り道楽の隠居の釣果や祝い鶴の品目、藩の兎狩りで食肉が家中に配られたこと、カステラ自作記など、食関連記事が豊富で[18]、調査成果との照合は今後の課題である。

4．津城廃城後の土地利用

発掘調査では、コバルト釉・型紙摺りの瀬戸・美濃磁器など、明治 20 年より前の近代遺物はほとん

ど出土しなかった。津城廃城後の本格的な土地利用は、明治26年の安濃津地方裁判所移転に始まるといえ、明治20年（1894）以降の瀬戸・美濃吹絵製品や、明治34年（1901）以降のマンガン釉常滑土管、明治時代の阿漕焼などがみられた。

廃城後、裁判所地内では、北外堀の土塁と土塁上の松が遺存していたが（第59図左上）、明治41年（1908）までに北外堀の大部分が埋め立てられた。工事立会①－4区で検出された石列は、明治の地形図の堀南辺に近い。その後、大正9年（1920）以降の地形図では、土塁が滅失し市街化している（第59図中央上）。土塁の推定位置にあたる5次2区は、調査区全体が攪乱されていたが、こうした廃城後の土地改変の動向とも整合的である。

裁判所の庁舎は敷地の中央に位置し、大正9年（1920）から昭和12年（1937）の地形図では、南東に2棟、北東に1棟、西に1棟の附属棟が確認できる（第59図）。5次1区は、敷地南東の附属棟が存在した場所である。裁判所敷地の東側外縁にあたる5次1区や工事立会⑥では、近代の土坑が多くみられ、敷地隅の空地にごみを廃棄したようである。

近代遺物の主体は昭和10年代の遺物で、統制陶器を含む瀬戸・美濃産陶磁器、硬質陶器の洋食器、ガラス瓶のほか、多種多様な生活用品がある。これらは安濃津地方裁判所・検事局の備品や消耗品と、職員官舎に伴う遺物とみられ、生活用品には、子ども茶碗や豆皿、玩具（ままごと道具）、小児用医薬品や歯ブラシなど、子どもに関わる遺物を多く含む。

当時の司法部職員録によると、着任した裁判所所長・判事・検事局検事正らが丸之内殿町の官舎に居住しており[19]、官吏と家族の生活ごみが、什器や備品などとともに廃棄されたと推測される。

津市街地は戦災で壊滅的被害を受けたため、建造物をはじめ戦前から戦中の物質文化の多くが失われた。出土した昭和初期の遺物群は、当時の世相や生活様式を知る上で貴重な資料であるといえよう。

なお、今回の調査で、昭和20年7月の津空襲の痕跡と確実視できるものはなかった。瓦礫等の多くは戦後の土地区画整理事業において、津城内堀埋め立てなど、外地で処理されたとみられる。

第59図　土地利用の変遷（地理院地図を元に「今昔マップ on the web」により作成）

5．調査のまとめと課題

調査の成果と今後の課題を挙げ、まとめとする。

（1）発掘調査の成果

- 調査地は低地の好気的環境（自然堤防など）に立地する可能性が高い。
- 高虎修築前の中近世遺物、弥生時代から古代の遺物が若干出土した。
- 当地で屋敷替えのあった 17 世紀後半から、19 世紀までの遺構・遺物がみられた。特に、18 世紀後葉から 19 世紀前葉の遺構・遺物が多い。
- 土蔵の基礎地業（布地業・捨杭）を確認した。梁行２間、桁行４間の切妻造の土蔵と推定される。
- 井戸や土蔵の基礎地業などに、低地に適した土木技術が採用されている。
- 水琴窟を備えた坪庭や露地があったとみられる。
- 津城の北外堀、土塁、道は確定できなかった。
- 陶磁器は、肥前系、瀬戸・美濃系のほか、京都・信楽系陶器が多くみられた。
- 藤堂藩や津を象徴する、安東焼（古安東）や「伊賀國」印銘の伊賀焼、明治時代の阿漕焼が出土した。
- 食用価値の高い、多種多様な動物残渣がみられた。
- 津城廃城後の土地利用に関する情報を得た。
- 昭和 10 年代の遺物が大量に出土した。

（2）今後の課題

- 津城北外堀位置の確定、土塁の構造把握
- 発掘調査成果と「中川藏人政舉日記」との照合
- 江戸藤堂屋敷出土遺物との比較

（櫻井）

註

（1）古泉弘「江戸沖積地における土蔵基礎」『徳川幕府と巨大都市江戸』東京堂出版、2003 年。

（2）松阪市教育委員会『田長谷川家住宅調査報告書』2014 年。

（3）三重県埋蔵文化財センター『上野城跡第 13 次（藤堂新七郎屋敷跡）発掘調査報告』2014 年。

（4）鈴木伸哉・能城修一「東京都中央区日本橋一丁目遺跡出土木材からみた江戸の町屋における土木・建築用材の変遷とその背景」『植生史研究』16-2、植生史研究会、2008 年。

（5）小沢詠美子『災害都市江戸と地下室』吉川弘文館、1998 年。

（6）註２前掲。

（7）石橋克彦「1819 年文政近江地震の全資料の表」『歴史地震』第 26 号、歴史地震研究会、2011 年 / 津市役所『津市史』第２巻、1960 年。

（8）三重県埋蔵文化財センター『松坂城下町遺跡（第１～９次）発掘調査報告』2021 年 /『上野城跡（第 15 次）発掘調査報告』2023 年。

（9）山崎信二「近世愛知の瓦」『近世瓦の研究』奈良文化財研究所、2008 年。

（10）本堂弘之「津市周辺出土の瓦質焙烙について」『研究紀要』第８号、三重県埋蔵文化財センター、1999 年。

（11）難波洋三「市坂の土器作り」『京都大学構内遺跡調査研究年報　1986 年度』京都大学埋蔵文化財研究センター、1989 年。

（12）鈴木敏雄『安東窯及び阿漕窯』（阿漕窯開窯百年展）、1958 年 / 井上喜久男「伊勢のやきもの　萬古焼の世界」『岡田文化財団所蔵萬古焼コレクション』岡田文化財団、1999 年。

（13）高知市教育委員会『西弘小路遺跡』2010 年。安東焼は黄灰色の胎土、ロクロ成形、灰釉、平底の底部のみで器種は不明（鉢や土瓶・銚子か）。印銘は小判枠内に楷書体の「安東」である。安東焼が出土した土坑ＳＫ７は 19 世紀中葉の遺構とされるが、肥前磁器は広東碗があり、能茶山焼などの国焼も八字形碗や四方幡文など 18 世紀後葉から 19 世紀前葉の肥前磁器写しが多い。安東焼は古安東の可能性が高いと考える。

（14）鈴木敏雄『三重県陶窯見聞録』三重県郷土資料刊行会、1971 年。

（15）朝日町「古萬古窯跡」『新修朝日町史　資料編１』2019 年。

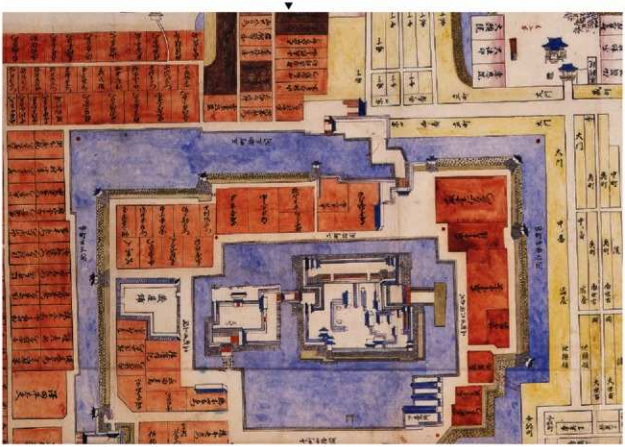
（16）金子智子・前川嘉宏・竹内英昭「阿山町丸柱所在の弥助窯跡について」『研究紀要』第８号、三重県埋蔵文化財センター、1999 年。

（17）註８前掲。報告書中で、伊勢湾沿岸の主な貝出土例をまとめており、併せて参照されたい。

（18）藤堂藩史研究会『中川藏人政舉日記』（謄写版）/ 藪本治子「うさぎ［兎］」『続　三重の味　千彩万彩』みえ食文化研究会、2015 年。

（19）法曹会編『司法部職員録　昭和 19 年１月１日現在』1944 年。

津絵図（享保期津城下図）　※左上が北、矢印先が調査地

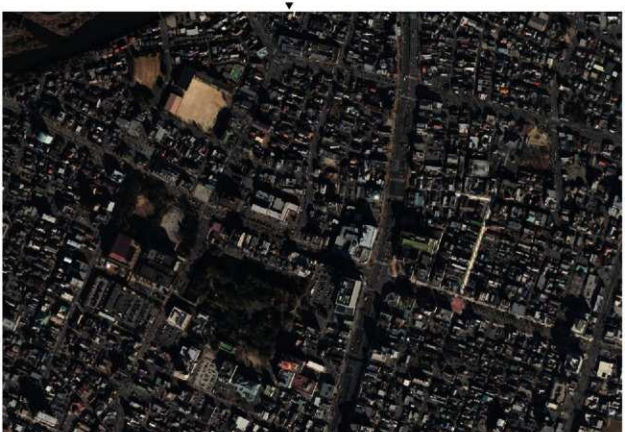


津城下図（寛永期写）　※左上が北

津城下図（嘉永期写）　※左上が北

伊勢国安濃郡津旧城郭　※左上が北

空中写真（1947 年 9 月米軍撮影、裁判所再建後）　※上が北



空中写真（県・市町共有デジタル地図空中写真　平成 29 年度撮影）　※上が北

調査前風景（既存庁舎解体後、南東から）

１区　表土掘削状況（南西から）

1区全景（北東から）

同（南西から）

１区東壁土層（ＳＫ51084 付近、西から）

ＳＫ51003・51006・51083 付近（西から）

ＳＤ51004 検出状況（西から）

ＳＤ51004 北辺土層断面（東から）

ＳＤ51004 南辺土層断面（東から）

ＳＤ51004 完掘状況（北から）

同（北東から）

ＳＤ51004 北辺完掘状況（西から）

ＳＤ51004 南辺完掘状況（東から）

ＳＤ51004 西辺完掘状況（北から）

ＳＤ51004 北西隅土層断面（東から）

ＳＤ51004 底面捨杭検出状況

ＳＤ51004 北 P3 捨杭検出状況（北から）

ＳＤ51004 北 P4 捨杭検出状況（北から）

ＳＤ51004 南 P3 捨杭検出状況（南から）

ＳＤ51004 南 P4 捨杭検出状況（南から）

ＳＤ51004 西 P5 捨杭検出状況（西から）

ＳＤ51004 西 P7 捨杭検出状況（西から）

ＳＤ51004 西 P8 捨杭検出状況（西から）

ＳＤ51004 捨杭検出状況

ＳＫ51029 土層断面（南から）

ＳＫ51001（南から）

ＳＫ51028 土層断面（南から）

ＳＫ51067（北から）

ＳＫ51059 土層断面（南から）

ＳＺ51058 土器出土状況（西から）

ＳＫ51065 土層断面（南から）

ＳＫ51006 遺物出土状況（西から）

下層確認１全景（東から）

ＳＥ51070 井戸枠検出状況

下層確認２土壌サンプル採取位置（７層）

下層確認３全景（南東から）

下層確認３西壁土層（東から、写真は合成）

同（東から、写真は合成）

２区全景（南西から）

３区全景（東から）

ＳＫ53001（西から）

ＳＤ53002（南から）

４区全景（北東から）

ＳＥ54002 井戸枠検出状況（南東から）

5区全景（北から）

6区全景（南西から）

ＳＤ54003 土層断面（北から）

６区遺構検出状況（北東から）

５区ピット根石検出状況（北から）

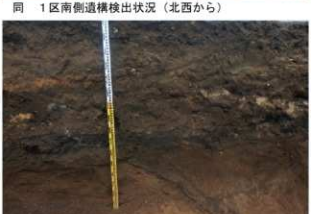
ＳＥ56001 土層断面（西から）

７区全景（北から）

工事立会①　２区遺構検出状況（北西から）

同　３区遺構検出状況（南から）

同　１区南側遺構検出状況（北西から）



同　３区東壁　落ち込み付近土層（西から）

同　４区遺構検出状況（東から）

工事立会⑥　No1 土層（下半が基本層序Ⅳ層、南から）

同　No1 土層（下半が基本層序Ⅳ層、北から）

同　No1 土層（下位が基本層序Ⅴ層、西から）

同　No1 作業風景（西から）

同　No2 作業風景（北から）

1

2

44
38
28
19
23
24
17
13
12
11
9
8
7

2 底部

51

52

63

64

69

73

81

68

94

96

99

102

103

100

104

105

101

106

108

109

109 底面

128

133

165

130

134

140

131

138

170

92

160

163

164

132

142

143

141

213

214

236

240

251

273

239

243

273 底面

245

244

242 印銘

242

同上

293

331

335

313

332

335 印痕

314

334

398

322

347

400

372

373

399

394 叩き

396 叩き

397 ハケ

336

337

341

342

345

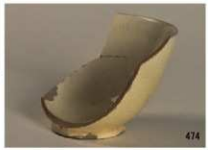
397

463

470

516

467


474

475

519

543
552
544
545
546
553
548
549
550
554
551
547

523

525

531

603

605

558

559

606

653

578

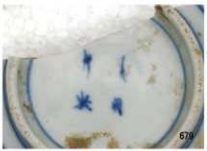
607

659

579

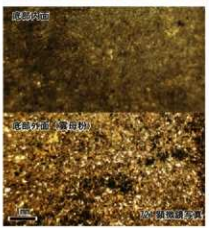
612

619


670

615

709 底部外面（型圧痕）



700

704

705

709

715

721

748

702

710

714

716

753

761

763

807

767

816

772

773

831

838

842

821

822

879

874

843

839

879 印銘

874 凹面

853

868

849

863

865

861

859

868

869

860

416

871

71

71 裏

72

872

200

633

477

870

873

652

652 刻印

649

650-1

650

ＳＤ51004 捨杭

201

202

203

204

205

203 枝付近

204 枝付近

205 枝付近

201 先端

202 先端

204 先端

203 先端

205 先端

格杭取り上げ直後

格杭取り上げ直後

格杭の写真

774

776

587

584

641

643

646

639

643 加工痕

777 加工痕

775 加工痕

776 加工痕

777 側面加工痕

646 下端

584 下端

587 側面・木釘

639 下端

同上（内面加工痕）

586 側面・木釘

587 上端

ガラス瓶（酒類・清涼飲料水・牛乳）

ガラス瓶（医薬品）

ガラス瓶（海苔「磯志"まん」）

ガラス瓶（インク）

851

851 裏印

852

852 裏印

陶器代用品容器

急須「検事局」

内上

統制陶器碗
「瀬816」

碗（釉下彩）

子ども茶碗
（戦闘機と日章旗）

同上　裏印

統制陶器碗「瀬729」

歯ブラシ

東洋陶器製硬質陶器　裏印「TTK KOKURA」

緑色二重圏線文小皿

子ども用豆皿

碁石

ままごと道具（擂鉢）

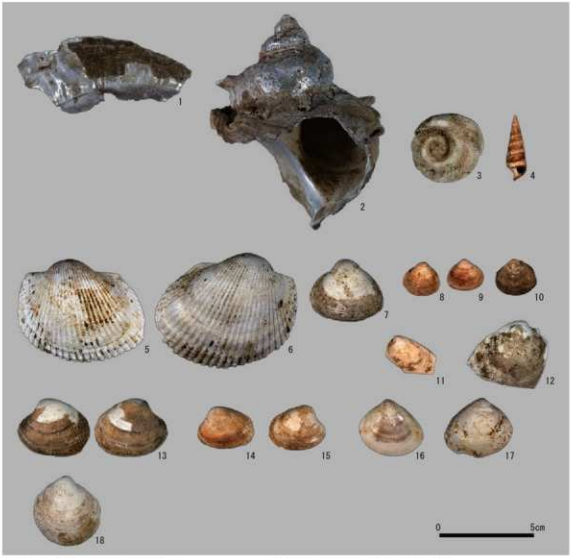
ままごと道具（茶碗）

同上

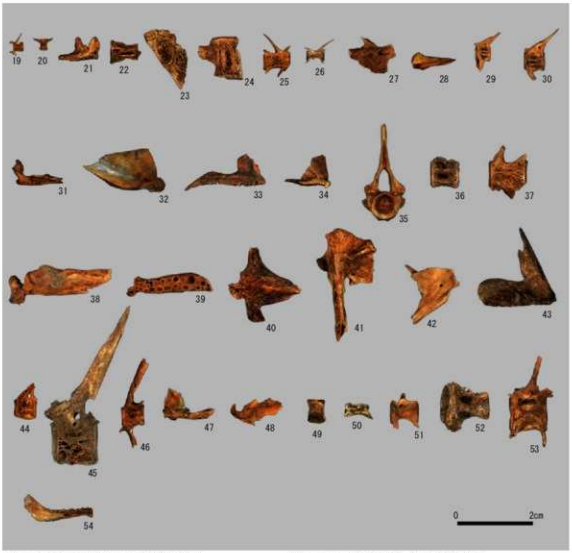
同上

ままごと道具（バナナ）

ままごと道具



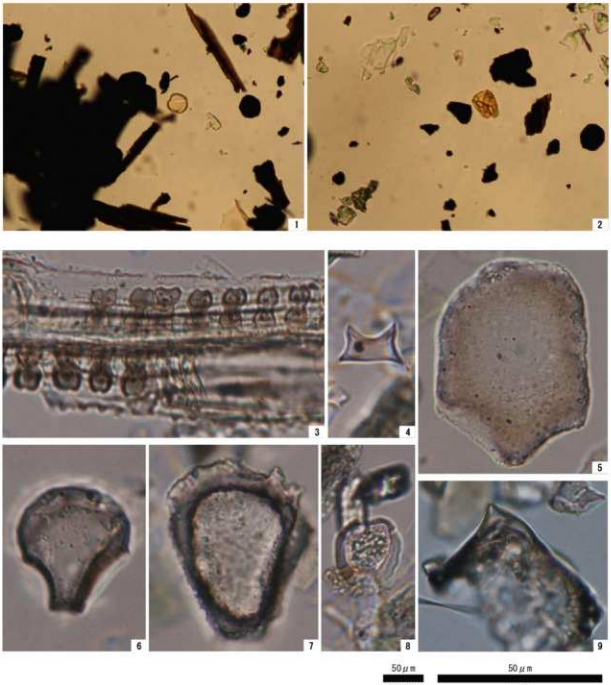
1. アワビ殻(試料1 1区 K9 SK51051)
2. サザエ殻(試料7 1区 J11 SK51005)
3. サザエ蓋(試料10 1区 H11 SK51002)
4. ウミニナ殻(試料2 1区 K9 SK51051)
5. アカガイ左殻(試料1 1区 K9 SK51051)
6. アカガイ右殻(試料1 1区 K9 SK51051)
7. シオフキ左殻(試料10 1区 H11 SK51002)
8. ヤマトシジミ左殻(試料1 1区 K9 SK51051)
9. ヤマトシジミ右殻(試料6 1区 J11 SK51005)
10. ヤマトシジミ(焼)左殻(試料10 1区 H11 SK51002)
11. カガミガイ左殻(試料10 1区 H11 SK51002)
12. カガミガイ右殻(試料10 1区 H11 SK51002)
13. アサリ左殻(試料6 1区 J11 SK51005)
14. アサリ左殻(試料6 1区 J11 SK51005)
15. アサリ右殻(試料6 1区 J11 SK51005)
16. ハマグリ左殻(試料2 1区 K9 SK51051)
17. ハマグリ右殻(試料2 1区 K9 SK51051)
18. オキシジミ右殻(試料6 1区 J11 SK51005)



19. ニシン科尾椎（試料4 1区 K9 SK51051）
20. サヨリ属腹椎（試料2 1区 K9 SK51051）
21. タラ科右前上顎骨（試料4 1区 K9 SK51051）
22. タラ科尾椎（試料9 1区 J11 SK51005）
23. ボラ右主鰓蓋骨（試料9 1区 J11 SK51005）
24. ボラ腹椎（試料9 1区 J11 SK51005）
25. ボラ尾椎（試料9 1区 J11 SK51005）
26. カマス属尾椎（試料3 1区 K9 SK51051）
27. スズキ属左角骨（試料8 1区 J11 SK51005）
28. スズキ属右角骨（試料8 1区 J11 SK51005）
29. スズキ属腹椎（試料3 1区 K9 SK51051）
30. スズキ属尾椎（試料8 1区 J11 SK51005）
31. マアジ左前上顎骨（試料8 1区 J11 SK51005）
32. マアジ右方骨（試料8 1区 J11 SK51005）
33. ブリ属右前上顎骨（試料8 1区 J11 SK51005）
34. ブリ属右方骨（試料9 1区 J11 SK51005）
35. ブリ属第2椎骨（試料8 1区 J11 SK51005）
36. ブリ属腹椎（試料9 1区 J11 SK51005）
37. ブリ属尾椎（試料9 1区 J11 SK51005）
38. マダイ左主上顎骨（試料8 1区 J11 SK51005）
39. マダイ左前上顎骨（試料8 1区 J11 SK51005）
40. マダイ右角骨（試料8 1区 J11 SK51005）
41. マダイ右舌顎骨（試料8 1区 J11 SK51005）
42. マダイ右主鰓蓋骨（試料9 1区 J11 SK51005）
43. クロダイ属右前上顎骨（試料22 1区 G11 SK51033）
44. タイ科腹椎（試料8 1区 J11 SK51005）
45. タイ科腹椎（試料11 1区 H11 SK51002）
46. タイ科尾椎（試料3 1区 K9 SK51051）
47. ベラ科左方骨（試料8 1区 J11 SK51005）
48. サバ属右角骨（試料8 1区 J11 SK51005）
49. サバ属腹椎（試料11 1区 H11 SK51002）
50. サバ属腹椎（焼）（試料11 1区 H11 SK51002）
51. ソウダカツオ属腹椎（試料8 1区 J11 SK51005）
52. ソウダカツオ属尾椎（試料11 1区 H11 SK51002）
53. カツオ尾椎（試料8 1区 J11 SK51005）
54. ハゼ科右歯骨（試料9 1区 J11 SK51005）

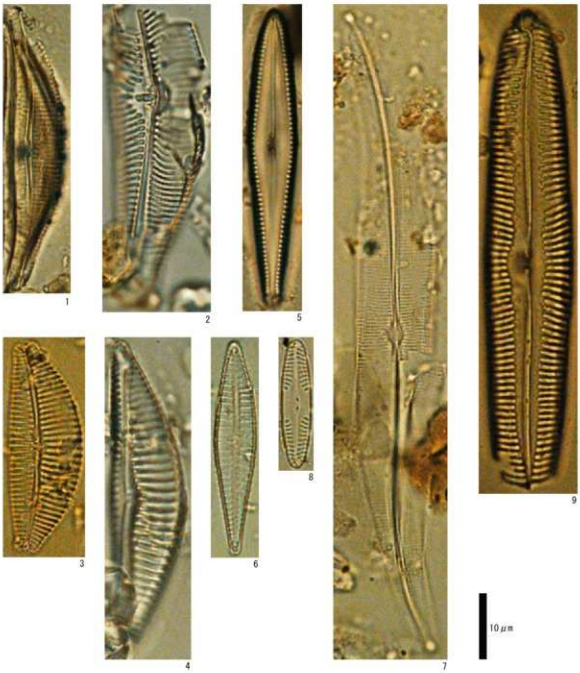
55. メバル亜科左主上顎骨(試料8 1区 J11 SK51005)
56. メバル亜科右前上顎骨(試料9 1区 J11 SK51005)
57. メバル亜科左歯骨(試料8 1区 J11 SK51005)
58. メバル亜科右歯骨(試料9 1区 J11 SK51005)
59. メバル亜科右上舌骨(試料8 1区 J11 SK51005)
60. メバル亜科左角骨(試料8 1区 J11 SK51005)
61. メバル亜科左擬鎖骨(試料8 1区 J11 SK51005)
62. メバル亜科第1椎骨(試料8 1区 J11 SK51005)
63. メバル亜科腹椎(試料9 1区 J11 SK51005)
64. メバル亜科尾椎(試料9 1区 J11 SK51005)
65. コチ科左歯骨(試料8 1区 J11 SK51005)
66. コチ科右歯骨(試料8 1区 J11 SK51005)
67. コチ科左前鰓蓋骨(試料9 1区 J11 SK51005)
68. コチ科第1椎骨(試料8 1区 J11 SK51005)
69. コチ科腹椎(試料9 1区 J11 SK51005)
70. コチ科腹椎(焼)(試料8 1区 J11 SK51005)
71. コチ科尾椎(試料9 1区 J11 SK51005)
72. ヒラメ左方骨(試料8 1区 J11 SK51005)
73. ヒラメ尾椎(試料23 1区 H11・12 SK51049)
74. カレイ科左主上顎骨(試料8 1区 J11 SK51005)
75. カレイ科右歯骨(試料8 1区 J11 SK51005)
76. カレイ科右角骨(試料8 1区 J11 SK51005)
77. カレイ科第1椎骨(試料9 1区 J11 SK51005)
78. カレイ科腹椎(試料3 1区 K9 SK51051)
79. カレイ科尾椎(試料3 1区 K9 SK51051)
80. カレイ科第1血管間棘(試料8 1区 J11 SK51005)
81. 大型魚類左肩甲骨(試料8 1区 J11 SK51005)
82. 大型魚類腹椎(試料20 1区 H9 SK51041)

83. スッポン頂骨板(試料20 1区 H9 SK51041)
84. スッポン肋骨板(試料20 1区 H9 SK51041)
85. スズメ目右足根中足骨(試料9 1区 J11 SK51005)
86. キジ科左手根中手骨(試料4 1区 K9 SK51051)
87. ニワトリ左脛足根骨(試料24 1区 N12 SK51031)
88. 鳥類左脛足根骨(試料3 1区 K9 SK51051)
89. 鳥類左脛足根骨(試料25 1区 L9 SK51031)
90. 鳥類大指末節骨(試料11 1区 H11 SK51002)
91. ネズミ科右大腿骨(試料27 1区 SK51044)
92. ネズミ科左上腕骨(試料8 1区 J11 SK51005)
93. キツネ第1頸椎(試料5 1区 K9 SK51051)
94. 骨角器(試料3 1区 K9 SK51051)



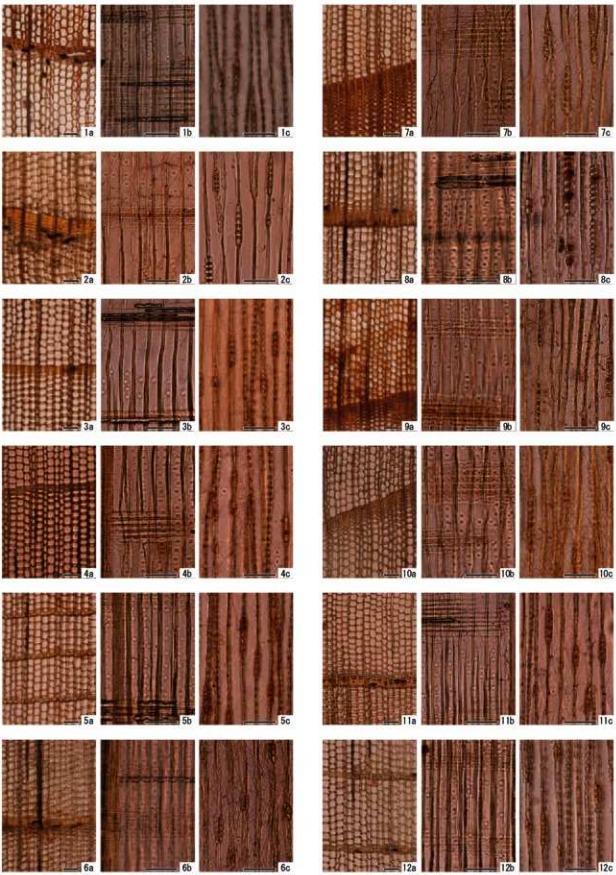
1. 花粉分析プレパラート内の状況(試料1 1区下層確認1)
2. 花粉分析プレパラート内の状況(試料2 1区下層確認2)
3. イネ属短細胞列(試料1 1区下層確認1)
4. タケ亜科短細胞珪酸体(試料1 1区下層確認1)
5. ヨシ属機動細胞珪酸体(試料1 1区下層確認1)
6. イネ属機動細胞珪酸体(試料1 1区下層確認1)
7. タケ亜科機動細胞珪酸体(試料1 1区下層確認1)
8. ヨシ属短細胞珪酸体(試料1 1区下層確認1)
9. イネ属穎珪酸体(試料1 1区下層確認1)

写真図版42（珪藻化石）



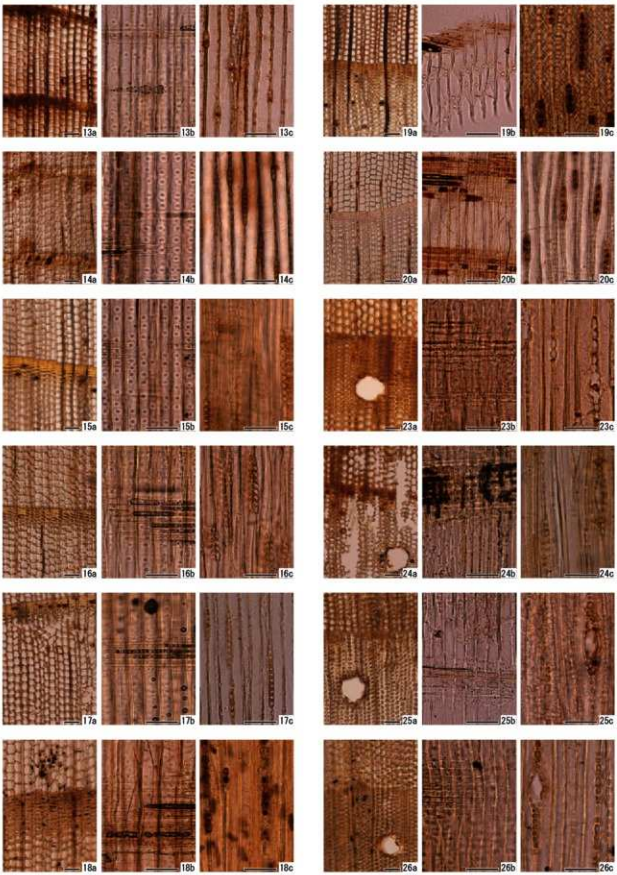
1. *Amphora ovalis* var. *affinis* (Kuetz.) Van Heurck（試料1 I区下層確認1）
2. *Cymbella tumida* (Breb. ex Kuetz.) Van Heurck（試料2 I区下層確認2）
3. *Cymbella turgidula* Grunow（試料2 I区下層確認2）
4. *Encyonema silesiacum* (Bleisch in Rabenh.) D.G.Mann（試料2 I区下層確認2）
5. *Gomphonema clevei* Fricke（試料1 I区下層確認1）
6. *Gomphonema gracile* Ehrenberg（試料1 I区下層確認1）
7. *Gyrosigma acuminatum* (Kuetz.) Rabenhorst（試料1 I区下層確認1）
8. *Pinnularia subcapitata* Gregory（試料2 I区下層確認2）
9. *Pinnularia viridis* (Nitz.) Ehrenberg（試料2 I区下層確認2）

写真図版43（樹種同定①）

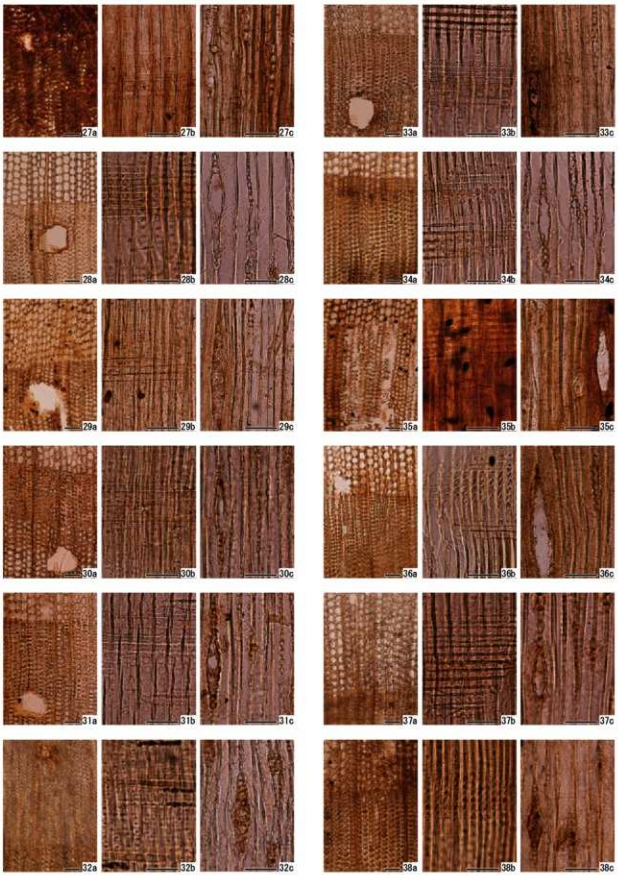


a:木口　b:柾目　c:板目　スケールは100μm

写真図版44 （樹種同定②）

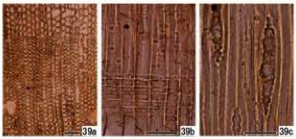


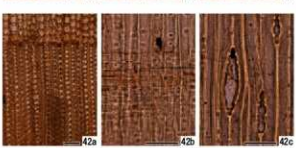
a：木口　b：柾目　c：板目　スケールは100μm

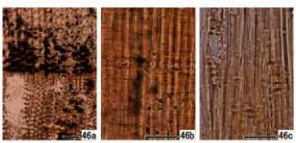


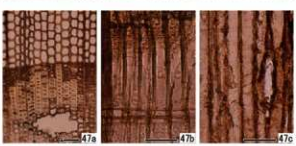
a：木口　b：柾目　c：板目　スケールは100μm

写真図版46（樹種同定④）

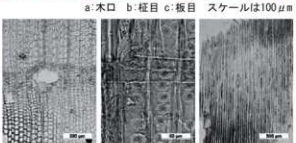


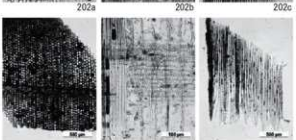


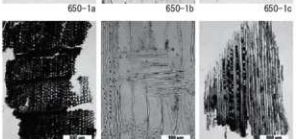




a:木口　b:柾目 c:板目　スケールは100μm







a:木口　b:柾目 c:板目

報　告　書　抄　録

ふりがな	つじょうあと（だいごじ）はっくつちょうさほうこく
書　名	津城跡（第５次）発掘調査報告
副 書 名	
巻　次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	419
編 著 者 名	櫻井拓馬、中野環、土橋明梨紗
編 集 機 関	三重県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川５０３　℡0596－52－1732
発行年月日	2024（令和６）年３月22日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
つじょうあと 津城跡	みえけんつしちゅうおう 三重県津市中央	24201	a703	34度 43分 9秒	136度 30分 30秒	2022/5/10 ～ 2022/8/17	714㎡	津地家簡裁庁舎新営工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
津城跡	城館跡	江戸時代	土蔵の地業 水琴窟・井戸 土坑・溝	土器・陶磁器・瓦 木製品・金属製品 動物遺体	

要旨

津城は、藤堂藩（津藩）32万石の藤堂氏の居城として築かれた、三重県を代表する近世の平城である。永禄・天正年間に長野信良（織田信包）が築いた安濃津城を、慶長末期に藤堂高虎が修築した。調査地は二之丸北側で、老職など上級家臣の屋敷地にあたる。

調査の結果、17 世紀後半から 19 世紀までの近世遺構・遺物を検出した。特に、18 世紀後葉から19世紀前葉の遺構・遺物が多い。遺構は、土蔵の基礎地業（布地業・捨杭）、水琴窟、井戸、土坑などで、屋敷地の裏手に土蔵や坪庭・露地、ごみ溜などが配置されたとみられる。

遺物は陶磁器や瓦、動物遺体などで、陶磁器は肥前、瀬戸・美濃を主体とし、18 世紀後半以降は京都・信楽系陶器が多くみられた。この他に、腰白献上茶壷などの高級品や、藤堂藩を象徴する安東焼（古安東）、「伊賀國」印銘の伊賀焼（藩御用品）の出土が特筆される。動物遺体は貝類を中心に、食用価値の高い多種多様な動物の残滓がみられた。

近世遺構基盤層の下層調査や土壌分析から、調査地の地形環境に関する資料を得た。

津城廃城後は、明治時代の阿漕焼や、安濃津地方裁判所に関わる昭和10年代の遺物が大量に出土した。

三重県埋蔵文化財調査報告４１９

津城跡（第５次）発掘調査報告
～津市中央～

2024（令和６）年３月22日
編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印刷　ミフジ印刷